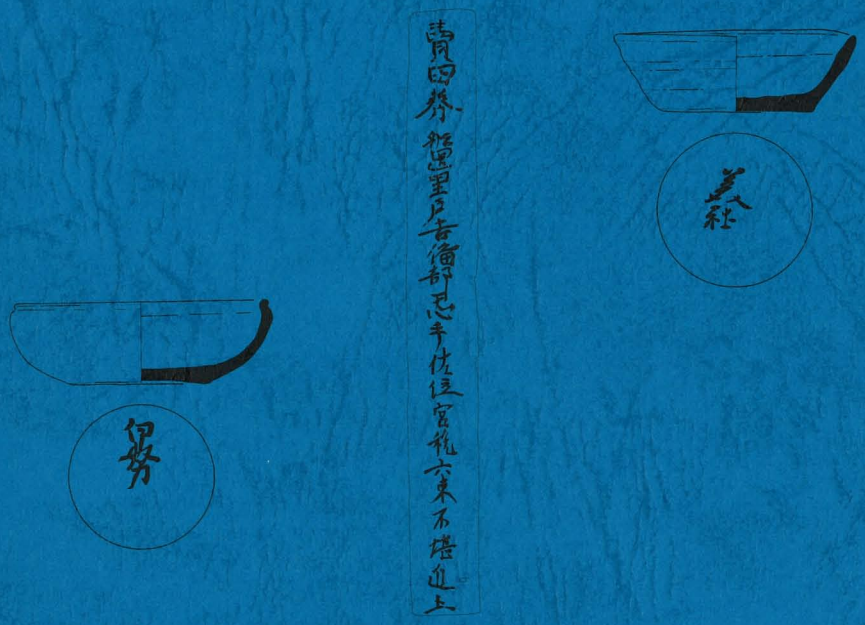
青木遺跡 II

（弥生～平安時代編）

国道431号道路改築事業（東林木バイパス）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

第２分冊（文字資料）



2006年３月

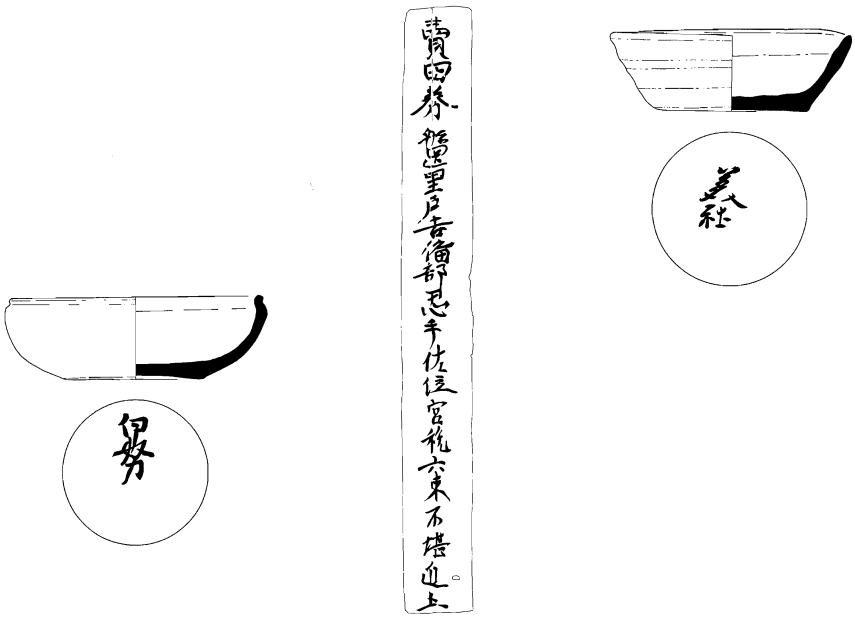
島根県教育委員会

青木遺跡 Ⅱ

（弥生～平安時代編）

国道431号道路改築事業（東林木バイパス）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

第２分冊（文字資料）



2006年３月

島根県教育委員会

本文目次

第７章　文字資料の出土状況と整理記録の方法
第１節　文字資料の出土状況……（松尾）……1
第２節　文字資料の整理過程……（松尾）……14
第３節　図化記録の方法……（松尾）……15
第８章　木　簡
第１節　木簡の概要……（松尾）……17
第２節　木簡の詳細……（平石）……121
第９章　墨書土器・刻書・ヘラ書き土器
第１節　墨書土器の概要……（松尾）……163
第２節　墨書土器の詳細……（平石）……289
第３節　墨書土器の分析……（平石･松尾）……306
第10章　漆紙文書・その他の文字資料
第１節　漆紙文書……（平石）……327
第２節　その他の文字資料……（松尾）……329
第11章　文字資料の総括
第１節　木簡からみた遺跡の機能……（平石）……333
第２節　墨書土器の様相とその機能……（平石）……353
第３節　出土文字資料から見た遺跡の性格……（平石）……365

第７章　文字資料の出土状況と整理・記録の方法

第１節　文字資料の出土状況

１．概　要

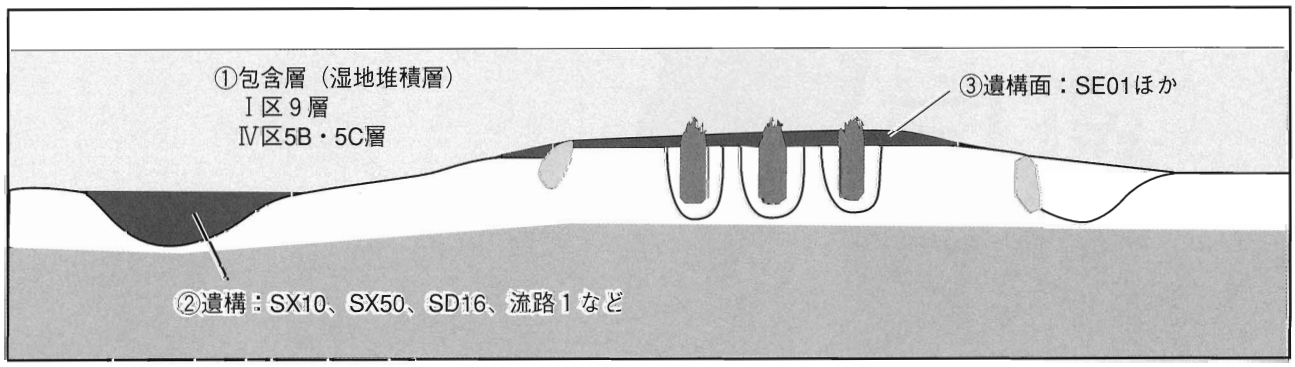
出土総数

当遺跡の文字資料出土総数は、木簡86点、墨書土器1105点、ヘラ書き・刻書土器４点、筆そろえ８点、漆紙文書２点である。このほか、円形曲物の底（蓋）板に文字あるいは記号が記されたものが５点ある。

出土状況の区分

文字資料の出土状況は、大きく３分することができる（第１図）。ひとつは①遺構面を被覆する包含層中からの出土。ふたつめは②遺構埋土からの出土で、建物など他の遺構群と時期的に併行するもの。最後に③遺構面の直上で検出されたものである。

このうち、①の包含層中から出土したものが大半を占める。②の遺構埋土出土のものはⅠ区SX01、SX10、SX50、SD16、Ⅳ区流路１などごくわずかである。③遺構面に伴うものはⅠ区SB04、SB05などで確認しているが、個々の資料が遺構の被覆土中のものか、遺構面に貼り付いていたものか、遺構基盤層中のものか厳密に区分されていないため、評価が難しい。またⅣ区SB02周辺などでも遺構面直上に貼り付いた状況で出土しているが、これは①の包含層最下面とみるべきもので、①と同一概念でとらえられる。したがって、文字資料の出土状況は①包含層中からの出土と、②遺構埋土出土のものに大別することができよう。

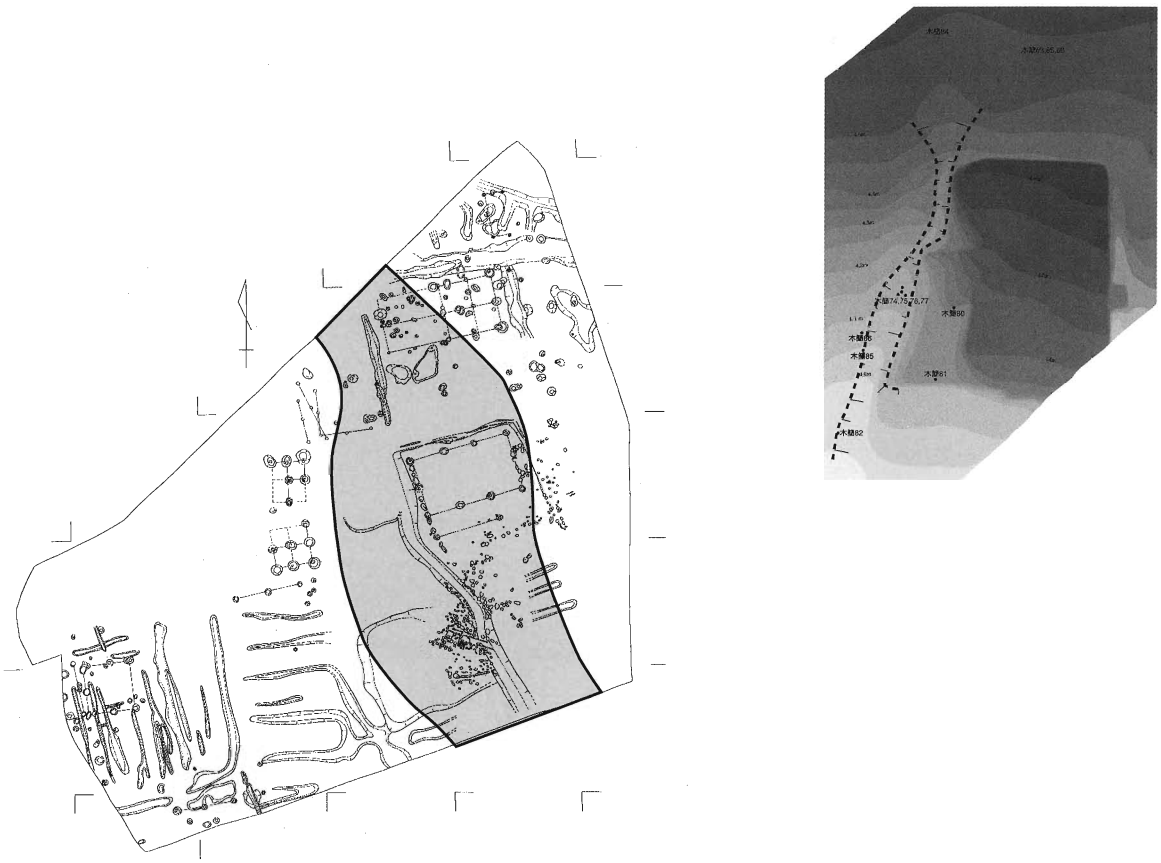


第１図　文字資料出土層位概念図

２．包含層と文字資料の堆積状況

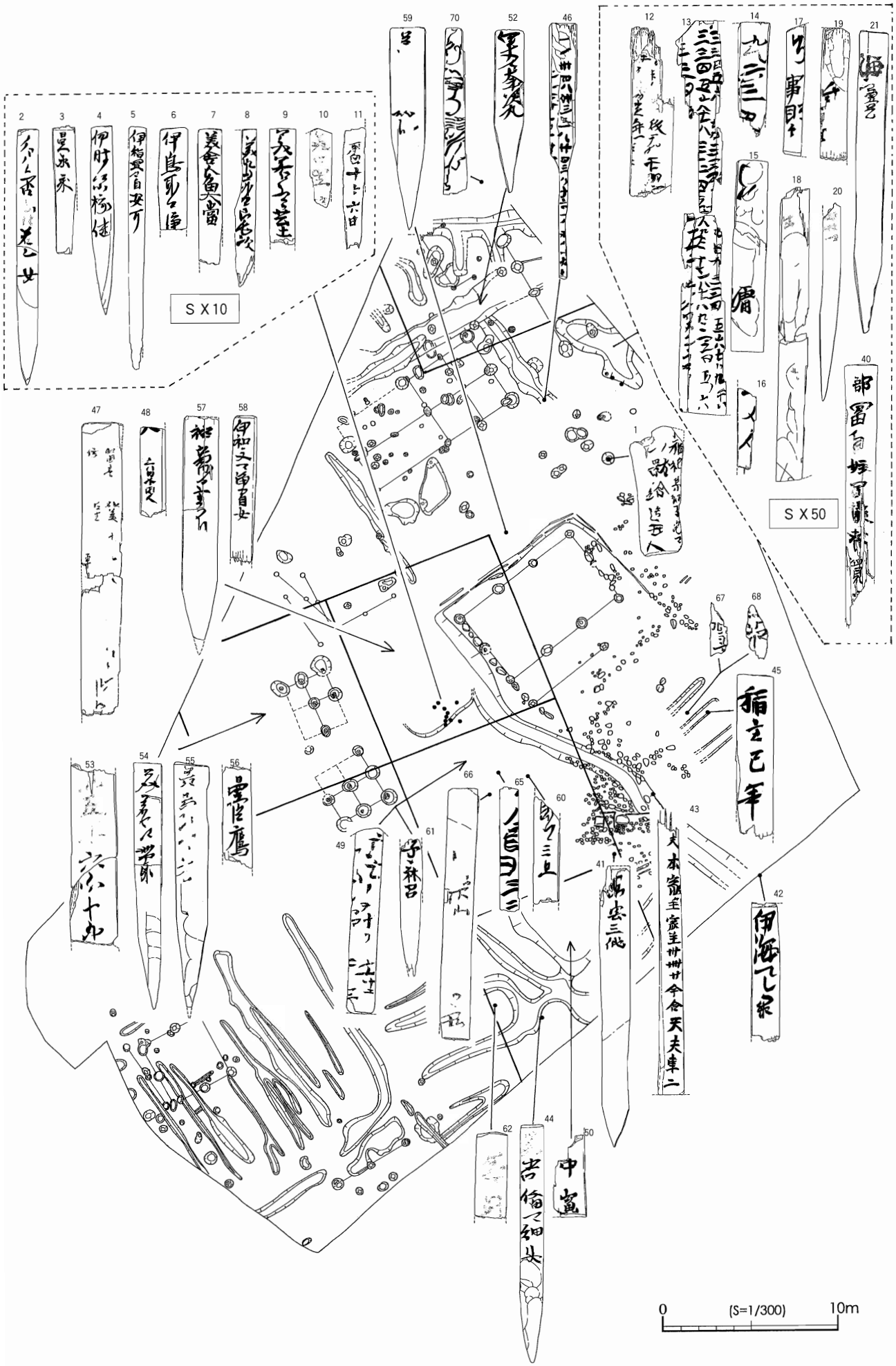
包含層とはⅠ区９層、Ⅳ区５B・５C層としたもので、この包含層には大量の土器をはじめ木製品など豊富な遺物が含まれている。アシなどの植物遺体を中心とした有機物を多量に含み、湿地環境下で堆積した土層である。遺構群は周辺環境の急変、すなわち流路の変化によって９世紀前葉には廃絶し、水成堆積物によって急速に被覆されていったとみられる。文字資料の多くはこの堆積物中に含まれており、その水平位置は遺構と直接関係ないことになる。すなわち、出土地点（調査区）より北側の、より高所にある地点から、二次的にもたらされたものと考えられる。

文字資料の出土密度は均一ではなく、調査区内でも疎密がみとめられる。集中する範囲は上流から水が流れた痕跡のある範囲と一致していることから、文字資料の多くが比較的短時間で、まとまって押し流されるように堆積したものと考えられる（第２図）。Ⅰ区で文字資料の集中が認められるのは、調査区の東寄りを南北に流れる溝SD16を中心とした一帯である。ここでは遺構面がやや粗い構造の砂礫によって直接被覆されており、ある程度の水量が突発的に流れ、短期間で堆積が進んだものとみられる。一方、Ⅳ区では調査区西寄りに南北に流れる流路が確認され、木簡、墨書土器ともに、この流路の範囲に集中して分布していた。また、木簡の多くはこの流路床面に貼り付くような位置にまとまって出土している。

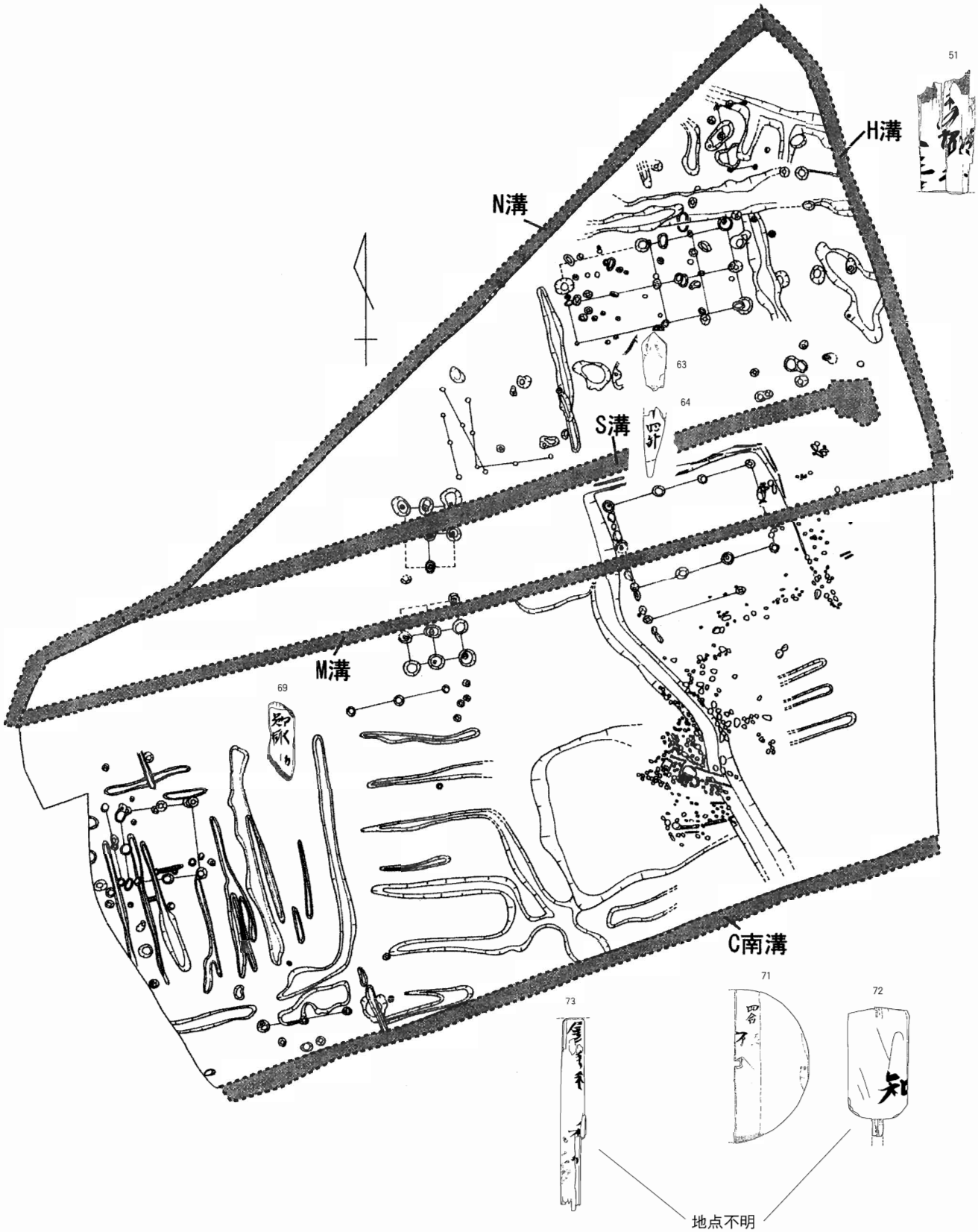


第２図　流路痕跡と文字資料の集中範囲

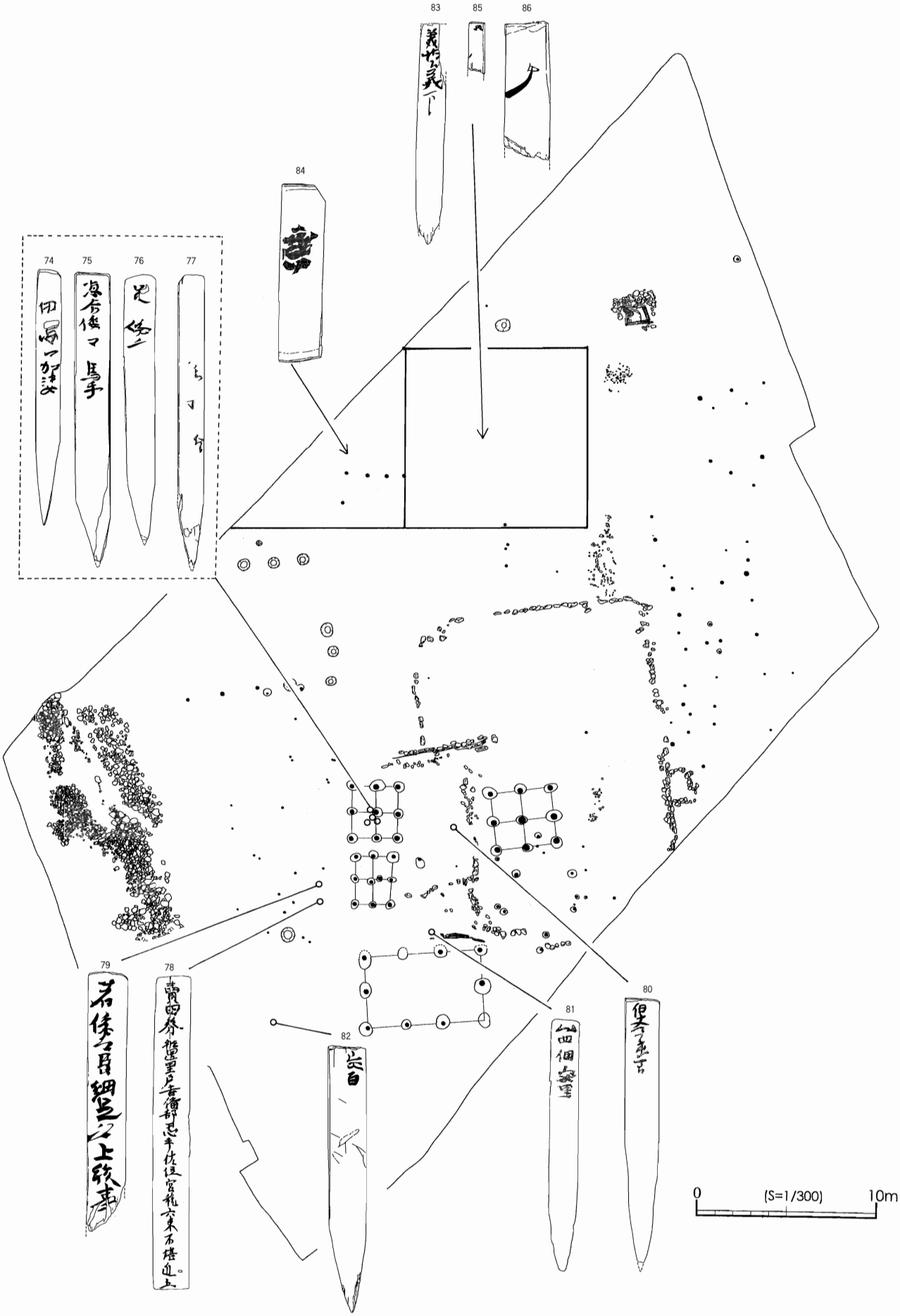
こうした状況から、包含層出土の文字資料の多くは上流側（北側）のある地点から強い水の動きに伴ってまとまってもたらされ、その後周辺が湿地化するのにあわせて埋没したものとみられる。木簡の多くは遺構面に近い、包含層中でも最下層にまとまっており、遺構が廃絶する直後、あるいは遺構廃絶の契機となった水の流れと同時にもたらされた可能性がある。包含層自体はかなりの厚みがあり、ある程度の時間をかけて堆積したもので、包含されていた土器にも８世紀後半～９世紀全般にわたるかなりの時期幅が認められる。墨書土器の多くは、廃絶直後の強い水流によって短期間にもたらされた可能性が高いが、その後も継続して墨書土器が移動し供給され続けるような環境であったことが想定される。



第３図　Ⅰ区木簡出土位置図（遺構・包含層）



第４図　Ⅰ区木簡出土位置図（排水溝）



第5図　Ⅳ区木簡出土位置図

３．Ⅰ区・木簡の出土状況

Ⅰ区の木簡

Ⅰ区からは１～73号木簡が出土。このうち１～46号は遺構に伴って取り上げられたもの、47～73号は包含層中より出土したものである。前者のうち、木簡の位置と遺構に有意な関係があり、埋没原位置を保つと認められるのはSX01、(SX10)、SX50、SD32で、溝遺構であるSD16、23、28は二次的な混入の可能性が高い。以下、木簡番号の順を追って出土状況を述べる。

SX01（１号木簡）

１号木簡は果実埋納土坑（SX01）から出土した。SX01については第13章54ページに詳述している。礎石建物SB05の北東約２ｍに単独で設けられた土坑で、モモ・スモモ・ナシの果実を土師器甕５個体に充填し、整然と埋納した祭祀遺構である。木簡は甕の下から出土しており、他の木片３個体（第３分冊写真図版24、59ページ）とともに土坑底に打ち込んだような状態であった。他の木片に墨書は無い。１号木簡および木片は土師器甕の固定・支持の機能も想定されるが、土の上に甕は直接置かれており支持が無くとも十分自立することが可能である。よって１号木簡は物理的な機能を持つものでなく、甕に付加する意図で甕を納める直前に土坑内に置かれたものと考えられる。

SX10（２～11号木簡）

SX10は付札木簡10個体が集中して出土した、浅いくぼみ状の遺構である。詳細は第13章60ページ。東西4.6ｍ、深さ20cmほどのくぼみで、２ｍ四方の範囲内に10点が集中して出土した。横櫛や木錘などの木製品もあわせて出土している。礎石建物SB05の西隣に位置しており、建物とSX10が時期的に併行するかどうかが問題であるが、結論としてどちらとも判断できない。①SB05と同時期に形成された廃棄土坑、②SD16を中心とする遺構廃絶時の流路によって他所からもたらされくぼみに集積したもの、という２つの可能性を残す。SX10は輪郭が不明瞭なくぼみであり、埋土はその上層、すなわち遺構面全体の被覆土と区別できない。よって②の可能性を否定できないが、形態や性格の類似した木簡10点が二次的にこれほど集中して集積するとは考えにくく、①の方がより蓋然性が高いと思われる。①とすれば、SX10にまとめて廃棄された付札木簡が流路によって削られ、下方のF15、G15グリッドに流出した可能性も考えられよう。

SX50（12～40号木簡）

SX50はⅠ区北東端近く、礎石建物SB04の東約５ｍの至近で検出した不整形の浅いくぼみ状遺構。詳細は第13章60ページ。２×６ｍ、深さ10cm程度。木製品の形代、下駄、檜扇、刳物、紡織具、建築材端材がともに出土している。端材や棒状製品が多く含まれ、焼痕があるものもある。廃棄土坑としての性格がみられる。SX01とこのSX50は確実に建物などの施設と同時期に形成された遺構である。木屑細片が埋土中に多く含まれていたため土壌を持ち帰り水洗したところ、木簡削り屑が多く含まれていた。23～39号が削り屑。

40号はSX50出土として管理していたが、出土後の整理過程における取り違えがあった危惧があり、推定SX50出土としておく。

SD16（41～43号木簡）

SD16はⅠ区中央東寄りを南北に流れる溝遺構で、図示できなかったが調査区を南北に横断するものである。41～44号は溝の埋土から出土した。ただし、SD16は遺構群が廃絶する際の一連の水成堆積物で埋没しており、溝上半が埋まったのは建物等の廃絶（直）後である。したがって、41～44号木簡は出土位置においてSD16ととりたてて有意な関係は無い。包含層出土としたものと概念的には同一である。

SD23(44号木簡)

畝間溝の可能性をもつ溝群２（第３分冊第13章67ページ）を構成する溝で、建物等が廃絶した後の10世紀頃の遺構と推定される。二次的な混入と判断される。

SD28（45号木簡）

SD23（44号木簡）と同じく、10世紀頃の畝間溝とみられる溝群２を構成する溝。二次的な混入と判断される。

SD32（46号木簡）

礎石建物SB04の東辺に沿って掘られた溝遺構。SB04との関係は明らかになっていないが、配置と方位からみて関連がある可能性が高い。区画溝、排水溝、屋根の構造によっては雨落溝などの機能が考えられよう。46号木簡はこの溝埋土中の出土であり、SB04と同時期に埋没した原位置を保つ可能性が高い。

包含層（47～50、52～62、65～70号木簡）

計21点は包含層からの出土である。前項で触れたように、包含層出土のものは水流によって移動した可能性が高く、出土地点は二次的な埋没位置である。第３図に各木簡の出土地点を示した。ドットで表示したのは調査時において地点を測量記録したもので、10ｍ四方のグリッドで取り上げたものについては→で出土グリッドを指し示している。両者の別に特別な意味はない。

前項でも述べたが、包含層出土木簡の多くは溝SD16を中心とした範囲に集中しており、遺構面廃絶に伴う水流堆積の範囲と重なる。これは墨書土器の分布とも共通する。包含層中の垂直分布については検討できていない。

排水溝（51、63、64、71～73号木簡）

N溝・H溝・S溝・M溝・C南溝などと呼称する排水溝から６点が出土した。排水溝は湧水の激しい調査区内の水を排出し、併せて土層観察を行う目的で調査区周囲に廻らせたもので、水混じりの土砂を荒掘りしているため層位や地点が全く認識できなかった。第４図に出土した各排水溝の範囲を図示している。各木簡はそれぞれアミ掛けした溝の範囲内から出土した。遺構等との関係については不明である。

４．Ⅳ区・木簡の出土状況

Ⅳ区の木簡

Ⅳ区からは74～86号木簡の計13点が出土。74～82号については、遺構面を被覆する包含層の最下面に貼り付くように出土した。遺構廃絶直後に埋没したものとみられる。83～86号は同包含層中のやや上位に浮いた状態で含まれていたものである。83～86号については厚い包含層をスコップで掘りほぐす作業中の出土であったため、平面位置を記録できていない。垂直位置からみて、遺構廃絶後一定の時間が経過してから出土位置に埋没したものと考えられる。

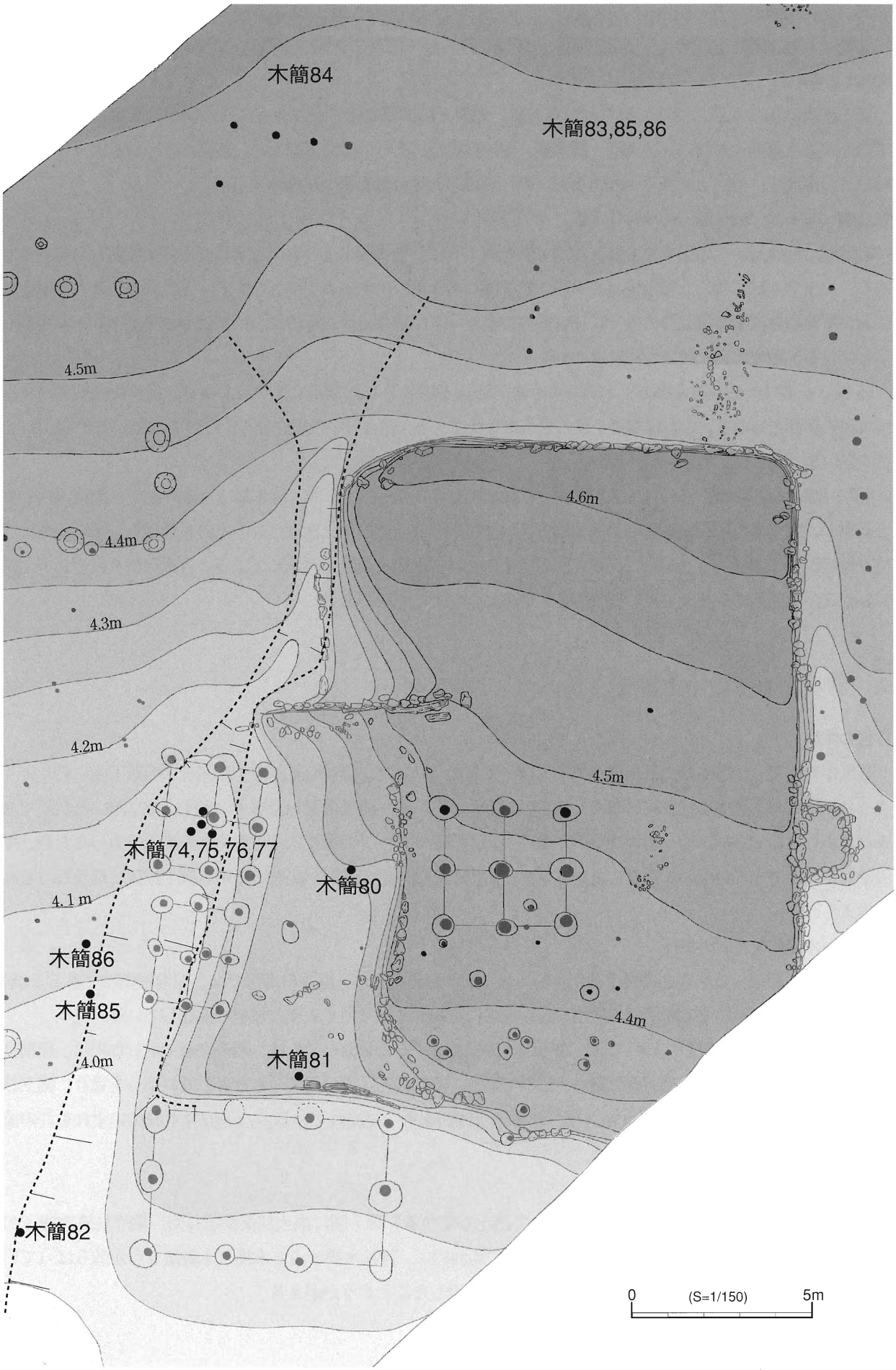
遺構面と木簡包含位置の関係

74～82号木簡は、遺構面を被覆する包含層の最下面から出土した。調査の過程では、湿地堆積物である５C層を完全に除去し、残存する遺構面を検出する作業時に遺構面に貼り付くような状態で確認している。

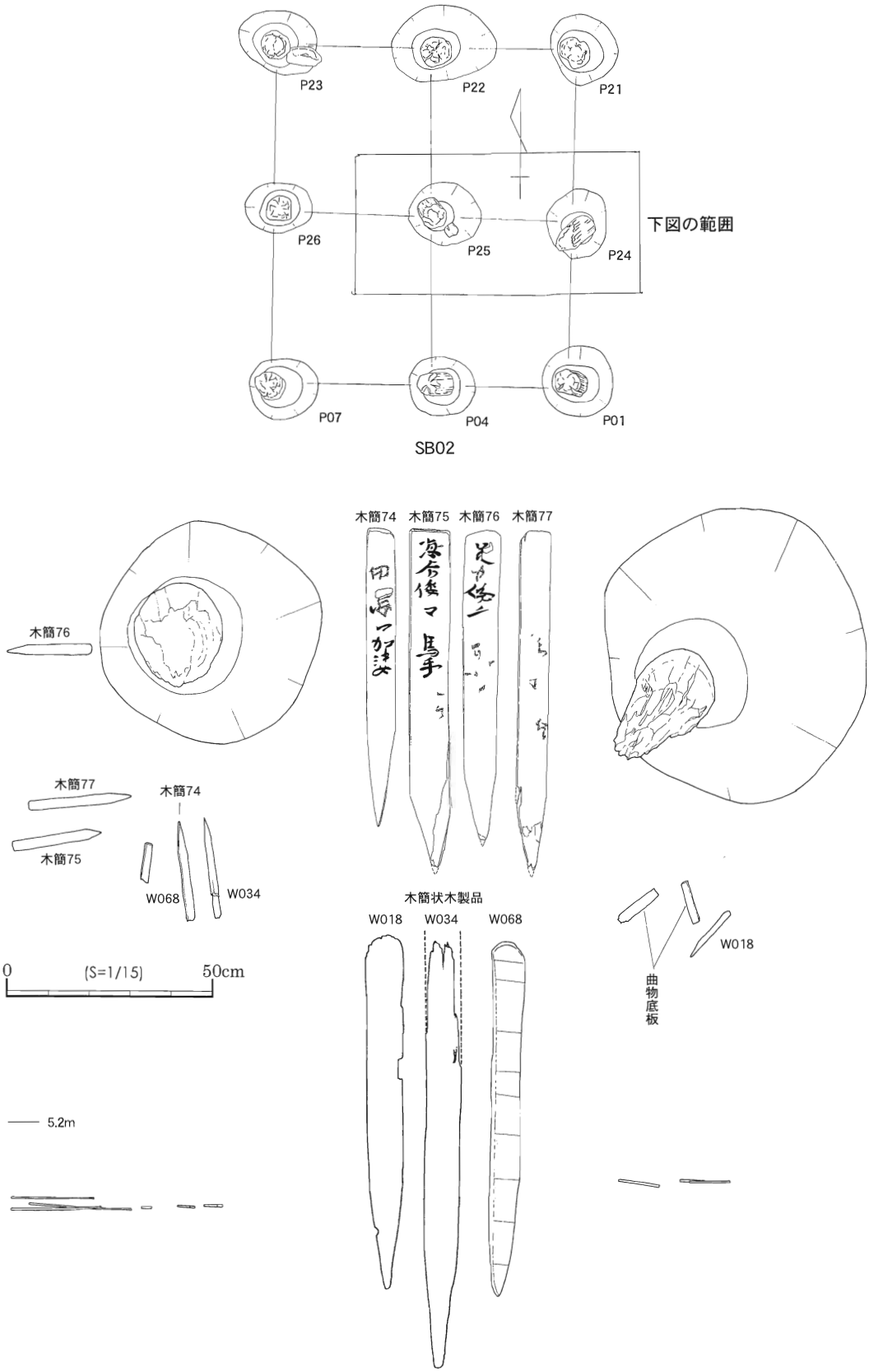
Ⅳ区の残存遺構面の高低差については、第６図に等高線で示したとおりである。図中破線で示したのは、遺構群が廃絶した際に水が流れて遺構面を削った痕跡である。方形貼石区画の西側のもともと低い部分を通り、掘立柱建物SB02・04に重なるように、北から南へわずかな傾斜をもって流れている。74～82号木簡はいずれもこの流路範囲（とその汀付近）から出土した。

SB02木簡溜まり

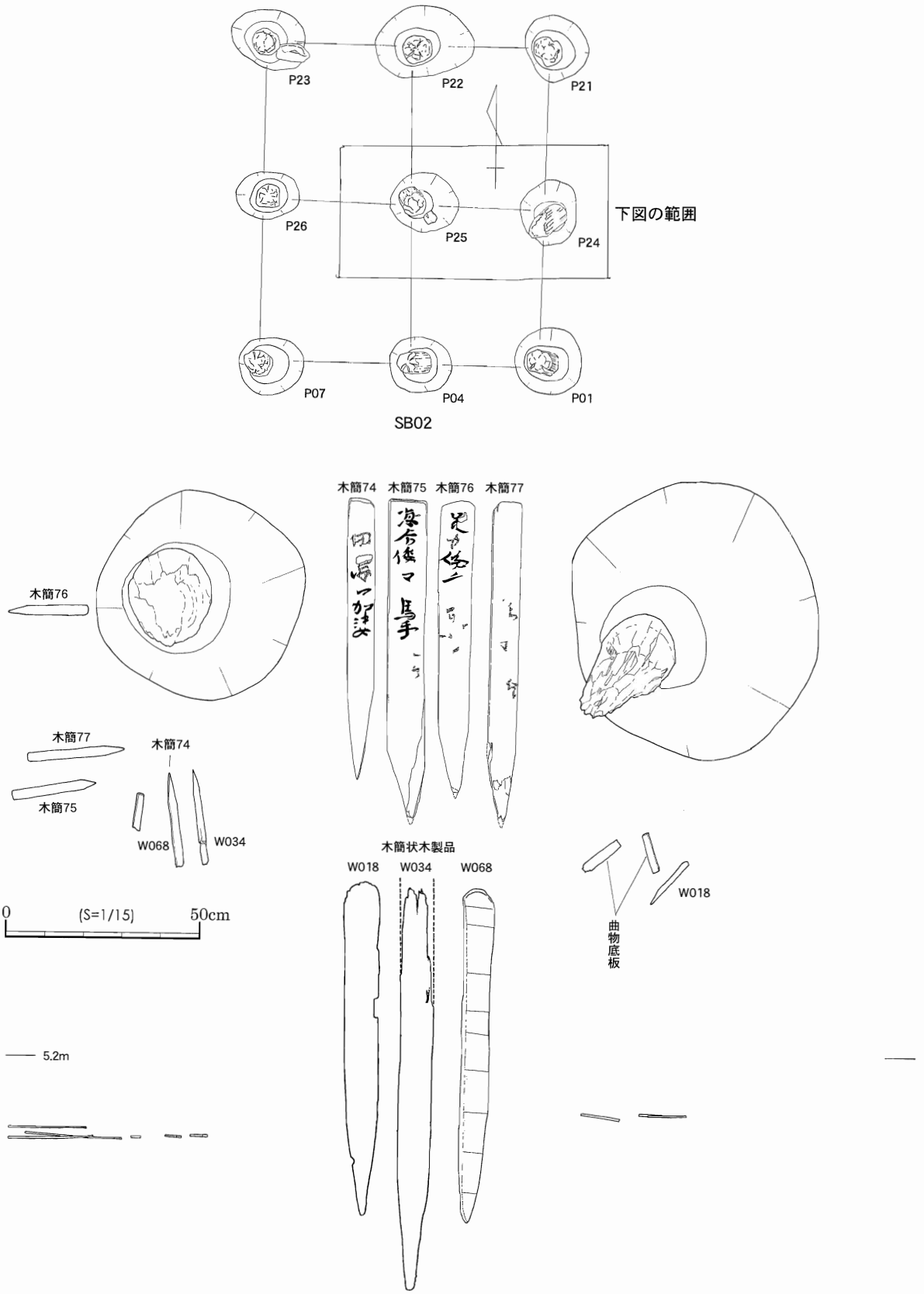
そのなかでも、74～77号木簡は特に集中して出土している。第７図に出土状況を示した。掘立柱建物SB02の中心柱であるP25とその東P24の周辺、1.5ｍほどの範囲内に、付札木簡４点と木簡状木製品３点が散らばっている。ほぼ水平に分布しており、同一時期に一括して埋没したことがうかがえる。



第６図　Ⅳ区・流路と木簡の出土位置

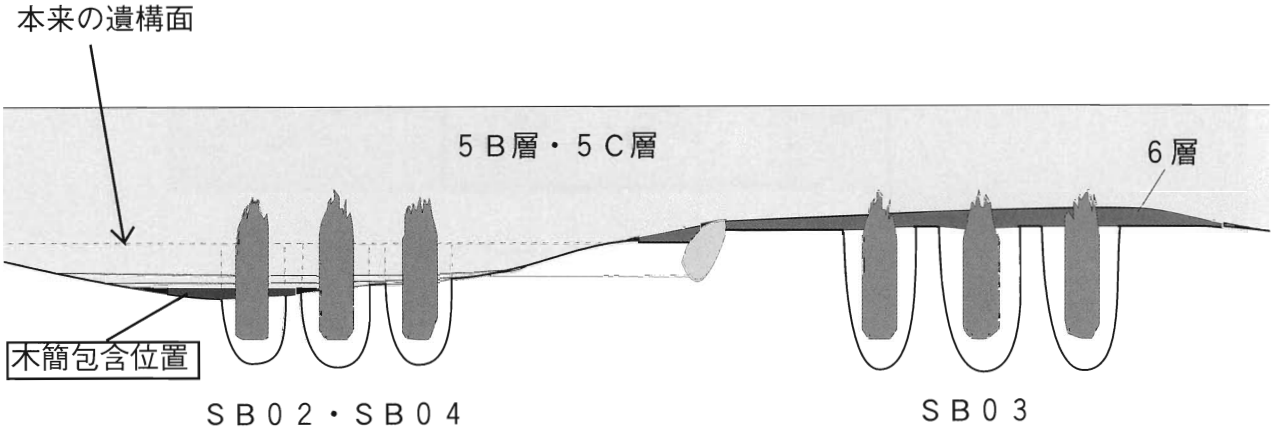


第７図　Ⅳ区・ＳＢ02木簡溜まり実測図



第７図　Ⅳ区・ＳＢ02木簡溜まり実測図

この木簡溜まりと、SB02など遺構との層位的関係を第８図に模式的に示した。遺構廃絶の契機となる自然流路の変化により、本来の遺構面は若干削り取られている。こうした建物周辺を削る新流路の形成が起きた以降に74～82号木簡が一括してSB02周辺より流路内に供給され、一部はそのまま流路底に埋没、一部はやや下方へ流れる、といった状況が想定できよう。SB02木簡溜まりは明確なまとまりで、それより流路上流側に木簡が見られないことからみると、木簡群はSB02の周辺から供給された可能性が最も高い。その契機としては、環境変化後に建物が解体されるなどの工作がくわわった時点と考えられる。



第８図　SB02木簡溜まりと遺構面の関係

５．墨書土器の出土状況

墨書土器の出土状況は、本節冒頭で述べたように、遺構に伴うものと包含層中のものに二分される。遺構・包含層それぞれの出土点数を、第96～101図（320ページ～）に掲載した。明確な遺構に伴うものは数少なく、Ⅰ区SX50、Ⅳ区流路１などに限られる。墨書土器がまとまって廃棄されたような遺構は無い。このほか、Ⅰ区SD16、SE01なども遺構関連として取り上げているが、実際は遺構面を被覆する包含層と同一堆積のものである可能性が高い。

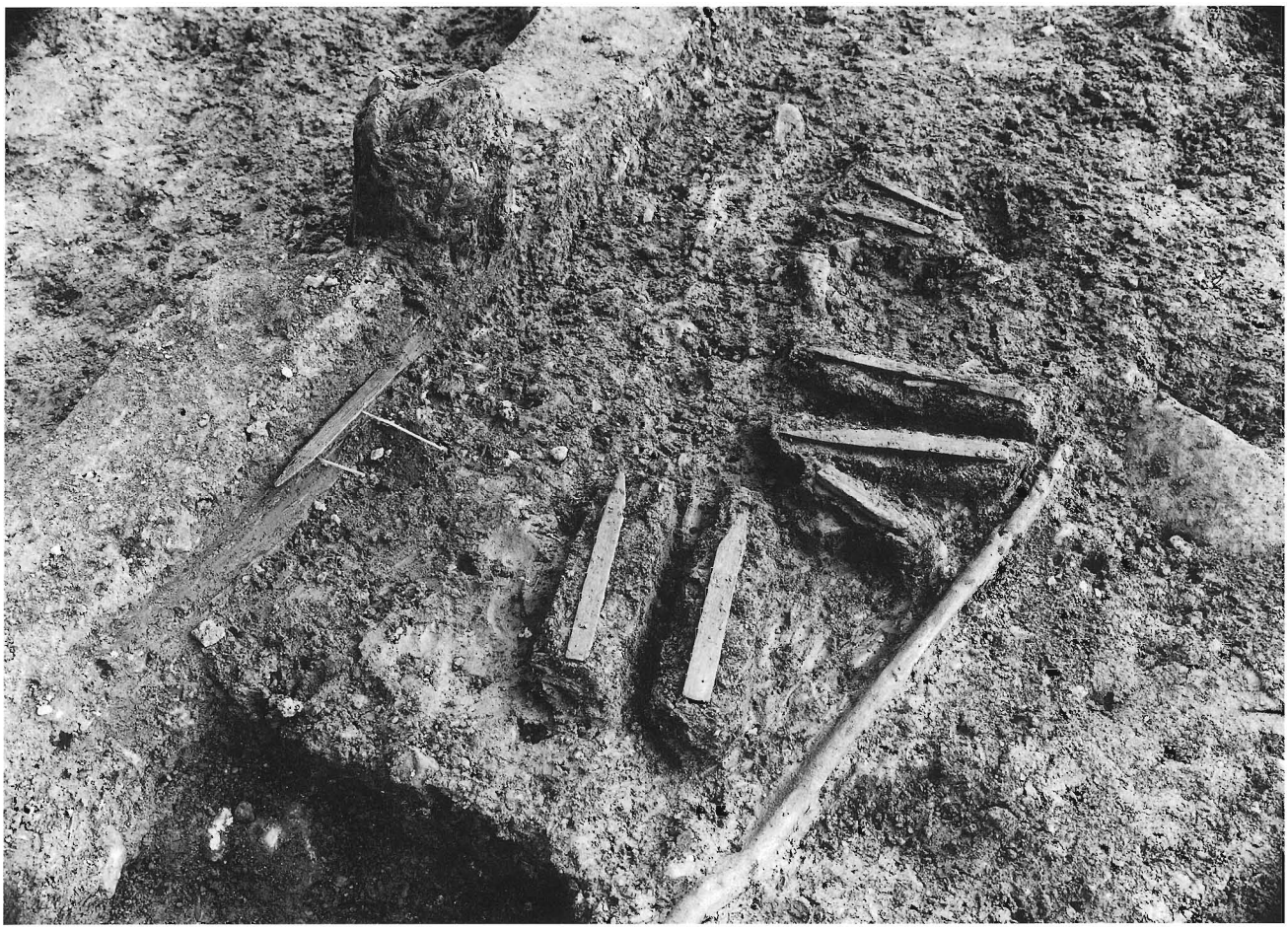
こうした遺構に伴う墨書土器の内容については、第９章第３節308ページで検討を加えている。結果として、Ⅰ区SX50や流路１など、土器の時期や字形に偏りが認められる一群が認められた。

遺構に伴う墨書土器は全体のごく一部で、大半は包含層中の出土である。10ｍ四方のグリッド単位で取り上げた。これらは包含層中でも垂直位置のばらつきをもって出土しており、遺構廃絶後の水成作用によって移動したものがあることを示す。ただし、第９章第３節311ページで検討したように、字形ごとの分布にまとまりが認められ、その分布が完全に無意味とは言えない。したがって、調査区内で出土した墨書土器は調査区内か、あるいは調査区のすぐ北側に供給源があると想定され、その廃棄のまとまりをある程度保ったままで移動・埋没したものと考えられる。

写真図版一　木簡の出土状況／Ⅳ区／78号・82号木簡

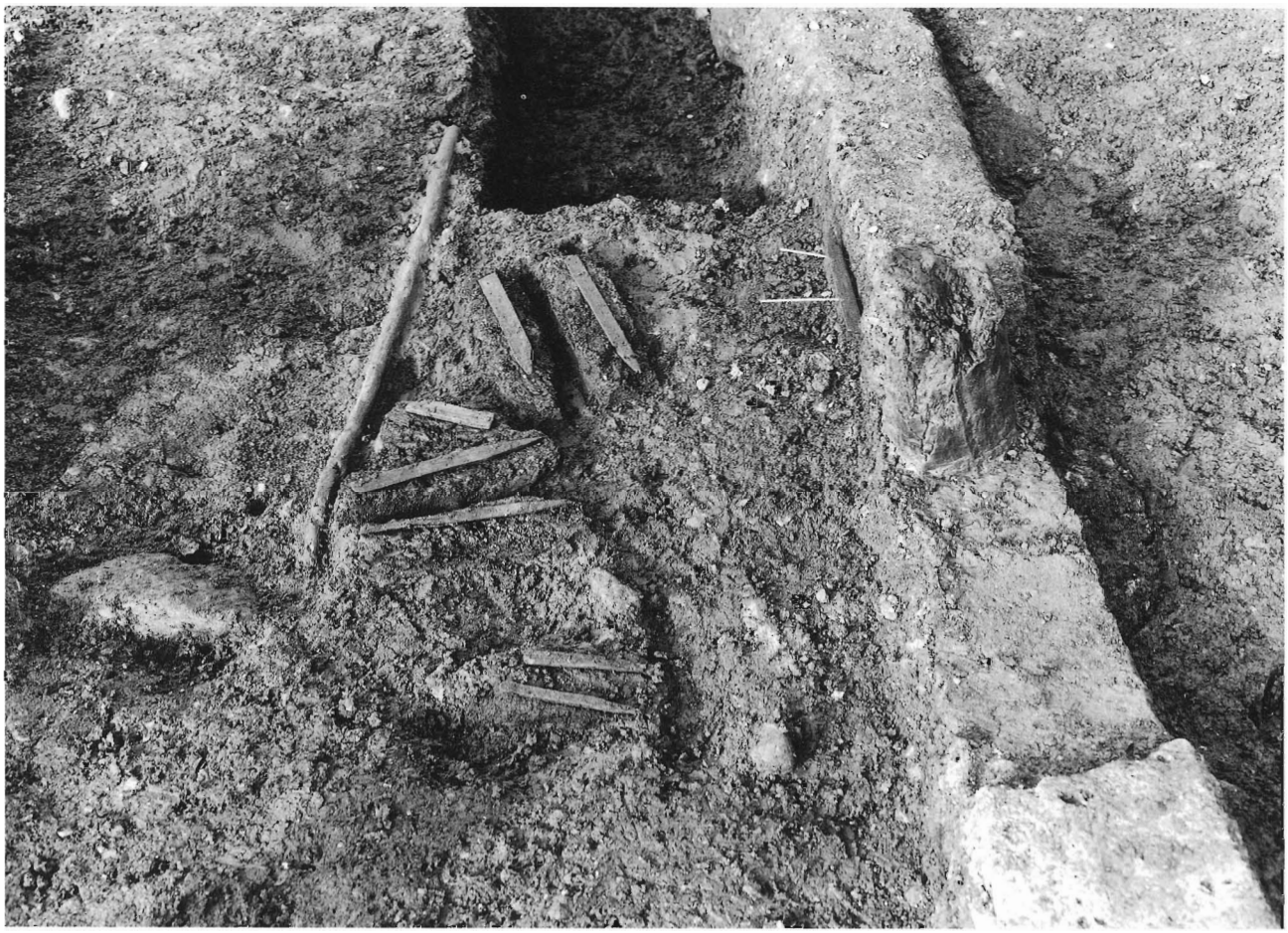
上左：78号木簡（西から、奥はＳＢ04）
上右：78号木簡（西から、裏面が上）
下：82号木簡

写真図版二　木簡の出土状況／Ⅳ区／SB02付近



上：南西から（柱材はＳＢ02）
下：南西から

写真図版三　木簡の出土状況／Ⅳ区／SB02付近



上：北西から
下：西から

第２節　文字資料の整理過程

出土点数の推移

文字資料全体のうち、出土直後に墨書の存在が確認され、その地点を個別に記録して取り上げることが可能であったのはごく一部であった。残りの大半は、出土時に文字資料であることを認識できず、その後の整理過程において判明したものである。こうした事情により、文字資料の出土点数は整理が進むにつれ大幅に変更を加えることとなった。以下、公表した出土点数の変化を、経過を追って示す。

現地調査の途中であった平成15(2003)年10月に最初の報道発表をおこなった際の集計では、墨書土器530点、木簡50点であった。調査が終了する同年12月には若干増加し墨書土器568点となっている。年度末にあたる平成16(2004)年3月の段階では未確認の墨書土器が多数あることが判明したため、概数として600点以上、と公表した。平成16年度には包含層から多量に出土した土器の水洗作業が進み、その過程で多くの墨書土器が判明した。平成16(2004)年12月の段階で墨書土器800点、木簡93点となる。木簡が増加したのは、持ち帰って整理していた木製品のなかに含まれていることが判明したり、SX50から土砂ごと持ち帰った木屑類の中から削片が多く含まれたりしていたことによる。

平成17年度の作業で全ての土器を改めて検討し、接合検討などをおこなうことで最終的に墨書土器1105点、木簡86点、漆紙文書2点、ヘラ書き・刻書土器４点、筆そろえ8点と確定した。木簡の総数が減少したのは、検討の結果数点が接合関係にあることが判明したためである。なお、円形曲物の底（蓋）板に文字あるいは記号が記されたものが５点ある。

墨書土器の整理過程

上記のとおり、墨書土器の出土点数は当初発表していた530点から最終的には倍以上となる1105点に増加しており、大半が整理過程で確認できたものである。墨書土器はほとんどが包含層に含まれ、それ以外の多量の土器と伴って出土している。よって、出土時に全ての破片について墨書の有無を確認することは難しく、残存比率がある程度高いものや、墨書が想定される部位、例えば坏皿の底部などの破片に限って、出土直後に原位置で水洗して墨書の有無を確認した。このように出土時に現地で墨書土器であることが判明したのは、Ⅰ区で935点中91点、Ⅳ区で170点中8点であり、全体ではわずか９％に満たない。これらについては出土地点を「Pno.」として固有番号をつけて測量図化し記録している。

残る９割強のものについては10m四方のグリッドごとに取り上げており、室内での水洗作業で判明している。この過程で墨書が判明したものについては、同時に取り上げられた同一グリッド、同一層のものの中で接合する破片が含まれる可能性が高いことから、優先的に接合検討を行った。全点の水洗が終了後、あらためて接合検討をおこなったが、総量が膨大であるため同時に検討できる資料に限界があり、基本的にグリッド単位で区切って接合検討している。当遺跡の出土状況を勘案すると、複数グリッドに同一個体が飛散して分布する可能性が十分考えられるが、グリッドを超えた接合検討は物理的に及ばないところであり、十分な検討が加えられたとは言えない。よって、当遺跡における墨書土器の残存度合いに関しては必ずしも廃棄時の状態を直接示すものでなく、本来はより接合できる可能性を残している。

接合検討が完了したものについては、次節の方法で図化・写真撮影をおこなった。

木簡の整理過程

木簡86点のうち、出土地点を測量記録したものが34点ある。これは出土時に木簡であることを認識していたもので、墨書土器に比べて注意しやすいことから高い割合で認識できている。それ以外のものについては木製品として取り上げたもののうち、水洗作業時に文字が確認されたものや、肉眼で墨痕が見えず赤外線画像で初めて確認されたものなどが含まれる。肉眼観察で墨痕の有無を断定するのはかなり不確実であり、木簡の可能性があるものは全点、赤外線画像下で文字の有無を確認した。

また木簡や木製品、植物遺体など有機遺物を多量に含んでいたSX50では、木片などを含む土砂を持ち帰っており、室内での水洗作業によって木簡削片が多く確認されている。

木簡の出土点数は一時90点を超えたが、出土状況の検討が進んだ結果新たに接合関係が判明したものがあり、最終的には86点となった。したがって旧稿などで報告した内容と若干の変更点がある。次章では最終的な確定版として報告をおこなった。

木簡は全点を糖アルコール法によって保存処理をおこなった。処理は２グループに分け、２カ年にわけて(株)京都科学に委託して実施した。うち１グループについては樹種鑑定もあわせておこなったが、他方のグループについてはおこなっていない。

第３節　図化・記録の方法

墨痕の不明瞭なものが多いため、赤外線画像での観察を重視した。赤外線画像は、印刷原稿に使用するための写真画像を撮影する方法と、実寸での図化をおこなうための２通りの方法をとった。以下にその概略を記す。

赤外線画像の撮影方法

報告書に掲載する赤外線写真を簡便に撮影するために、以下の方法をとった。基本的な機材としては、デジタルカメラと赤外線発生装置が必要である。まずデジタルカメラは一般に使用されている一眼レフタイプ（Nikon D70）を使用し、マクロレンズ（MF、単焦点50mm）を装着した。一般に市販されているデジタルカメラには可視光域での画像に画質低下をもたらす赤外領域の光線を遮断するため、CCD前に赤外カットフィルターが装着されているが、メーカー・機種によってその程度の差があり、一定程度の赤外線を透過する。テストの結果、上記機種が赤外線を十分に透過し記録することが可能であったため、特別な加工を施さずにそのまま使用した。撮影は完全暗室でおこなうため可視光領域の光線の影響はないが、暗室が作れない環境での撮影の場合はレンズに光吸収・赤外透過フィルター（IRフィルター）を装着し、可視光領域の光線を遮断して赤外画像を作り出している。

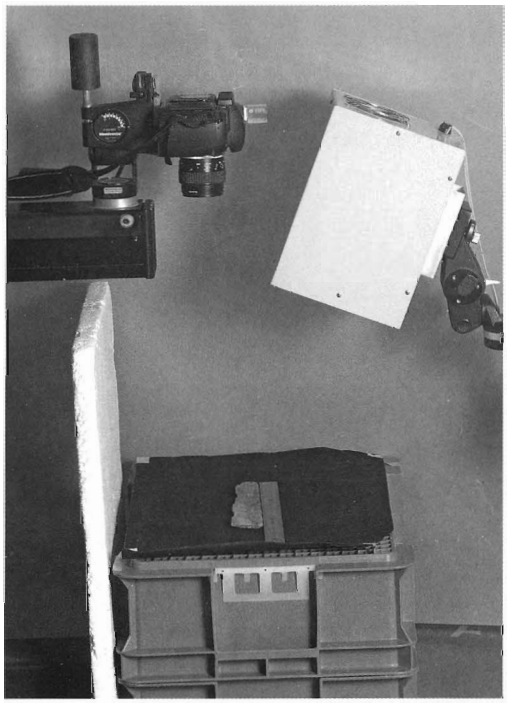


写真１　赤外線画像の撮影装置

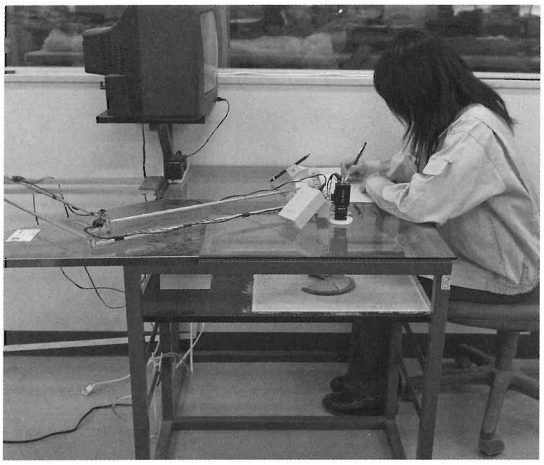
赤外線の発生装置としては、専用品（浜松ホトニクス社のC1385）を２台使用した。カメラ用三脚に固定して自由なアングルに調整可能なものである。文書や絵画の複写撮影を行う要領で、左右から２台が均等に照射するように位置と角度を調整し、表面の凹凸が作る影をなるべく消すように努めることで墨書きが強調された画像を得ることができた。光源は１台でも撮影可能であるが、その場合は照射位置をカメラとなるべく近づけて順光線になるよう配置しなければならない。その上でレフ板を用いて影や照射光量ムラを消す必要がある。

上記の機材で撮影する場合、おおむね露出は絞り値F5.6～8、感度ISO200で露光時間４～６秒ほどであった。ただし光源からの距離によって露出値は大きく異なる。ディスプレイでのプレビュー画像や、ヒストグラム表示を確認しながら、露光時間を変えることで適正露出を得た。ピント合焦位置は可視光と異なるため、電気スタンドなどで照らして可視光でいったんピントを合わせ、その後目分量でピントリングをずらす必要がある。接写のため被写界深度が極端に浅くピントはシビアなので、一度でピントが合うことはまず望めず、カメラディスプレイのプレビュー画像を毎回確認し、拡大機能などで細部のピントを見ながら少しずつピント位置をずらして撮影

し、最終的にはパソコンのビューワーで確認する、という流れをとった。

撮影した画像はAdobe社のレタッチソフト「PhotoShopCS」で処理をおこなった。元画像はsRGB形式のカラー画像であるが、最終的にはグレースケールに変換している。未処理の状態で十分墨書が観察できるものもあるが、大半はトーンカーブ、レベル調整を行い、コントラスト・明るさなどを変えて強調処理している。

以上の方法で撮影した画像はJPEG形式で保存し報告書への印刷原稿とした他、下記の実測図を作成する際に細部観察などで使用した。



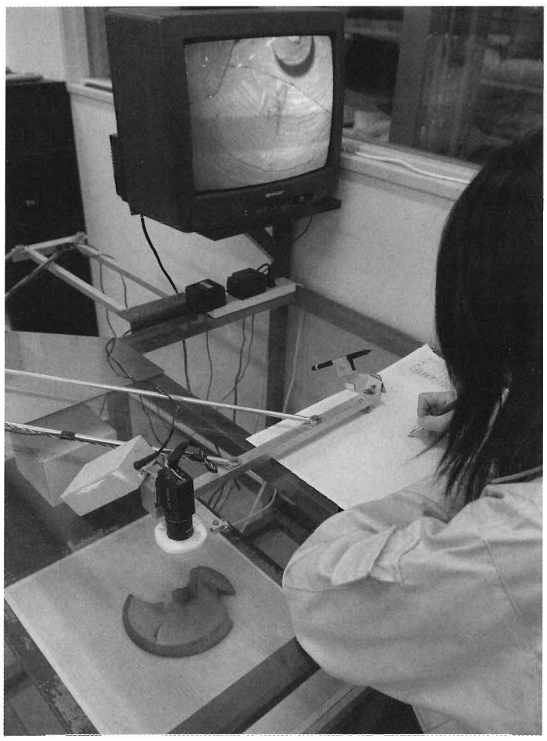


写真２・３　赤外線画像での図化装置

実測図の作成方法

実寸での作図をするために、以下の方法をとった。

資料の多くは墨痕が不明瞭で可視光では十分な観察ができない。そこで、赤外画像を簡便に図化できる方法を確立する必要があった。使用したのは、スカイサーベイ社の図化システム「埋文スコープ」である。これは手元の鉛筆とCCDカメラが連動する仕組みになっており、鉛筆を動かした距離分、モニター画像が移動する。モニターの中央にはマーカーがあり、計測したい点にマーカーを合わせて、モニター内でトレースするように鉛筆を動かすことで、手元に必要な線が描かれる。このシステムを使用することで、墨書の輪郭や木簡の形状など、不規則なラインを正確に図化することができる。

このシステムは基本的に可視光領域を対象としているため、赤外線画像を得るためにさらに工夫が必要である。埋文スコープに装着されているCCDカメラは、暗視用に赤外線カットフィルターがあらかじめ取り外されたものを使用する。作業位置は自然光の影響を常に受ける場所であるため、可視光をカットするため「光吸収・赤外透過フィルター（IRフィルター、FUJIFILM IR80)」をCCDカメラのレンズに装着できるよう自作し、赤外線のみをカメラが受像するようにする。赤外線を発生させる装置は、前記の大型の発生装置でも良いが、遺物の微細な部分に照射でき、光源位置を自在に変えられるように小型のものを自作した。使用したのは赤外投光器のキットとして市販されているもので、赤外発光ダイオード（三洋SLR931A）56個を基板に並べ、計500mWの出力をもつものである。発光部は1000円程度で市販されている。出力は弱いが、照射の位置、角度を自在に変えられるため、不明瞭な墨痕の観察にはたいへん有効であった。

実測図の確定・釈文と評価の検討

文字資料の実測図確定作業および釈文判読については、井上寛司氏（大阪工業大学教授）、加藤友康氏（東京大学史料編纂所教授）、佐藤信氏（東京大学文学部教授）、平川南氏（国立歴史民俗博物館館長）、山中敏史氏（奈良文化財研究所室長）、渡辺晃宏氏（奈良文化財研究所室長）の指導を受けて平石充（島根県古代文化センター主任研究員）がおこなった。個々の記載や評価、分析結果については、次章以降にそれぞれ掲載している。木簡は平石充が図化をおこない、平成17年12月16日に実施した検討会（指導者：佐藤信氏、平川南氏、渡辺晃宏氏）の結果を受けて釈文を確定した。

第８章　木　簡

第１節　木簡の概要

１．概　要

出土総数

当遺跡の古代木簡出土総数は86点である。付札木簡と類似形態であるが墨書されない木製品については、木簡状木製品として第15章第11節で扱っており、文字資料には加えていない。なおこれ以外に、中世の呪符木簡１点が出土している（ⅢB区SK03、第16章第164図477ページ）。

木簡に関する情報の記載位置

木簡の実測図・釈文・法量・型式と写真は本節後半の図版に木簡ごとにまとめて掲載している。特に釈文については、本文中および一覧表では文字の配列を正確に表現しにくいため、図版に掲載したものが確定したものである。出土グリッド・層位や樹種などの付帯情報は第２～６表の木簡観察表を参照していただきたい。また、個別の基礎情報（成形・調整など観察状況や、記載内容・木簡の性格）は、本章第２節「木簡の詳細」に文章記述した。木簡の出土位置と状況は第７章に整理している。

総括として、こうした木簡群の使用背景となる行為の内容や、それが出土する遺跡の機能について、第11章第１節で考察を加えた。

木簡の時期

年紀のある木簡としては、11号木簡（延暦10(791)年か）と78号木簡（天平8(736)年）がある。建物など遺構群の時期は８世紀後半～９世紀前葉であり、78号木簡については保管された期間が想定されるが、基本的に木簡は８世紀末～９世紀前葉にかけて廃棄され、遺構群の廃絶に際して埋没したものと判断される。後述する付札木簡では表記などからみて、この期間内で前後関係にある複数のグループが認められる。

木簡の特徴と用途

当遺跡で特徴的なまとまりを示す木簡群として、(固有名詞＋人名）を表記する付札木簡が21点出土している。この形態・法量や記載内容については第11章第1節で詳細な検討を加えた。結論として、律令国家の収取制度とは別の原理で、地域的には国郡郷里と別の枠組みによった在地共同体の執り行う祭祀的行事が背景にあり、これに際して集積された物品の”荷札”としての用途が考えられる。同木簡はいくつかのグループがそれぞれ別個の廃棄単位に帰属し、かつ日常的廃棄物と混在しないことから、こうした物資の集積、すなわち共同体成員が参集し飲食するような儀礼はある程度の期間内に複数度にわたって、非日常的な行事として執り行われたと想定される。具体的な祭祀行事の構造は儀制令春時祭田条にみえるようなものと共通し、「宍百」（82号木簡）などを饗食の物品とみれば農耕儀礼を根幹とした村落祭祀の姿がうかがえる。当遺跡から多量に出土した墨書土器の使用背景とも関連が深い。

上記木簡を除くと、記録木簡を中心とした一群が認められる。なかでも、礎石建物Ⅰ区SB04はそれに伴う溝や廃棄土坑、建物周辺から削り屑、封緘木簡状木製品を始め、多種の記録木簡が出土している。その内容から、この礎石建物が帳簿の作成・管理や文書のやりとりを含む文書事務をおこなう場でもあったことがうかがえ、それはある程度日常的で、かつ複数年にまたがる経年的事務を対象としたものであったことが看取される。具体的な管掌内容としては物品の管理や数量の検数、照合といった実務的なものが考えられる。

この他の注意される木簡としては、売田券木簡（78号木簡）がある。記載に関する諸要素については、次節の事実記載において詳細に検討を加えた。天平８(736)年の年紀があり、口分田賃租に関する紙の売買券のうち、整理のために必要事項を抽出した（あるいはその逆で紙の売券を作成する元となった）記録木簡と考えられる。出土状況からみて９世紀初頭までこの木簡は保管されている。賃租に関わる記録がそのように長期にわたって保

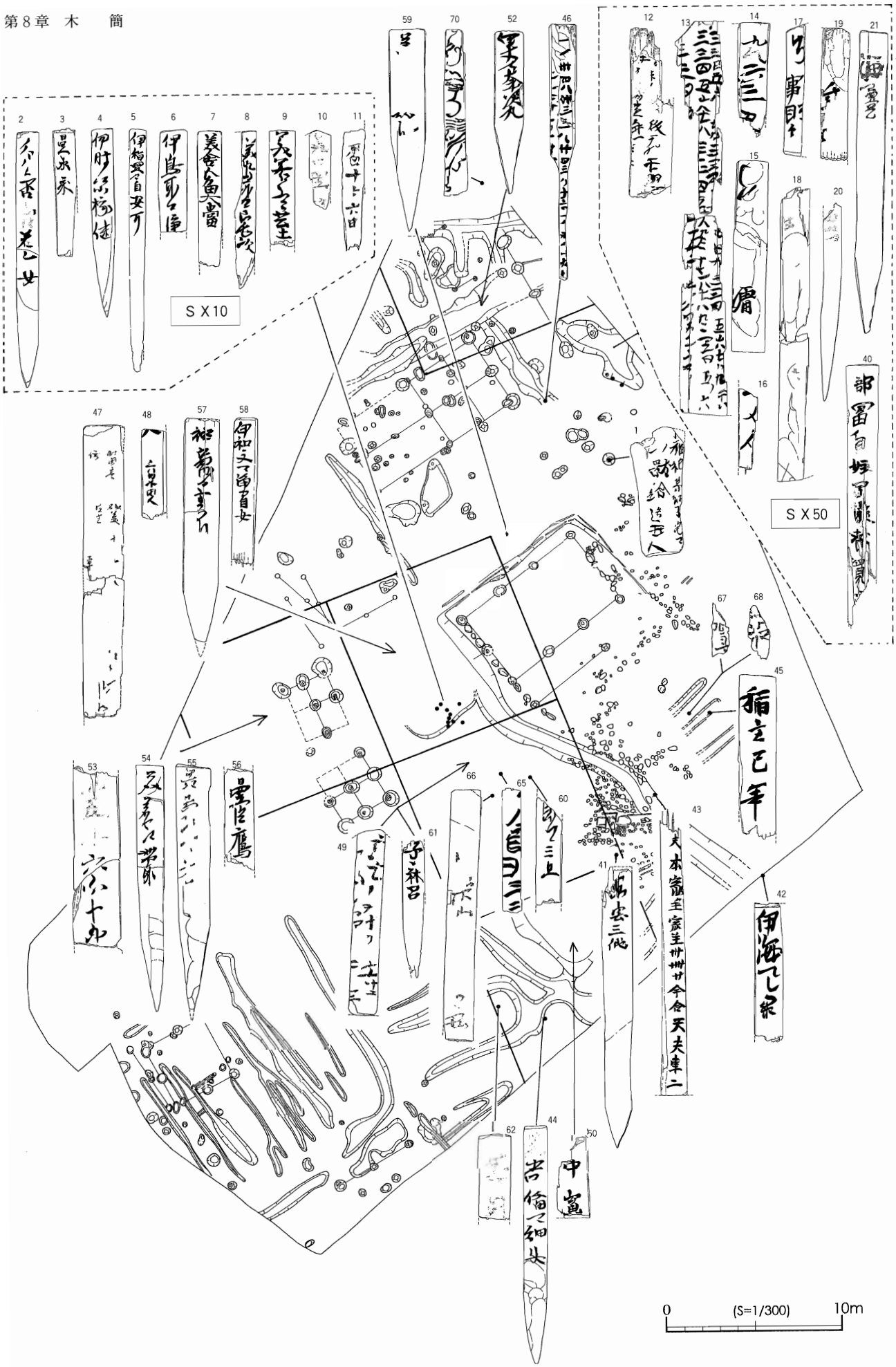
第1表　木簡概要表

調査区	出土区分／遺構名	遺構の内容／グリッド	木簡番号	種別・木簡の性格	備　　考
Ⅰ区	SX01	果実埋納土坑	1号		
	SX10	木簡が集中する窪み	2～10号	付札木簡	
			11号		延暦10(791)年か
	SX50	廃棄土坑(SB04に伴う)	12～14号	記録木簡	
			15～19号	習書木簡か・不明	
			20、21号	付札木簡	
			22号	不明	
			23～39号	削り屑、不明	
			40号	文書木簡	オモテ墨流出ミミズ腫れ状
	SD16	溝埋土	41、42号	付札木簡	
			43号	習書木簡	
	SD23	溝埋土	44号	付札木簡	
	SD28	溝埋土	45号	記録木簡か	
	SD32	溝埋土（SB04に伴う）	46号	九九一覧→封緘木簡(不使用)	
	包含層	E15	47、48号	記録・文書木簡	48号は歴名記載か
		F15	49号	記録木簡	
		G15	50号	不明	神祇祭祀の式日記載か
	排水溝	H溝	51号	記録木簡	
	包含層	C16	52号	付札木簡	
		E14	53～56号	付札木簡	53号は異形態
		E15	57、58号	付札木簡	
		E16	59号	付札木簡	
		F15	60、61号	付札木簡	
		G15	62号	付札木簡	
	排水溝	S溝	63号	付札木簡	
	不明		64号	付札木簡	数量記載あり
	包含層	F15	65、66号	不明	
		F16	67、68号	不明	
	排水溝	M溝	69号	不明	
		N溝	70号	不明（符籙・絵画か）	
		C南溝	71号		曲物底板に容量記載
	不明		72号	題籤軸木簡	
			73号	習書木簡か	
Ⅳ区	SB02木簡溜まり	ゆるやかな流路底	74～77号	付札木簡	
	包含層（遺構面直上）	C19	78号	売田券木簡	
			79号	文書・記録木簡	
		B20	80、81号	付札木簡	
		C19	82号	付札木簡	数量記載のみ
		Z20	83号	付札木簡	付札は2次的利用
	包含層（上層）	Z19	84号	不明	曲物底板に墨痕
	包含層（遺構面直上）		85、86号	不明	

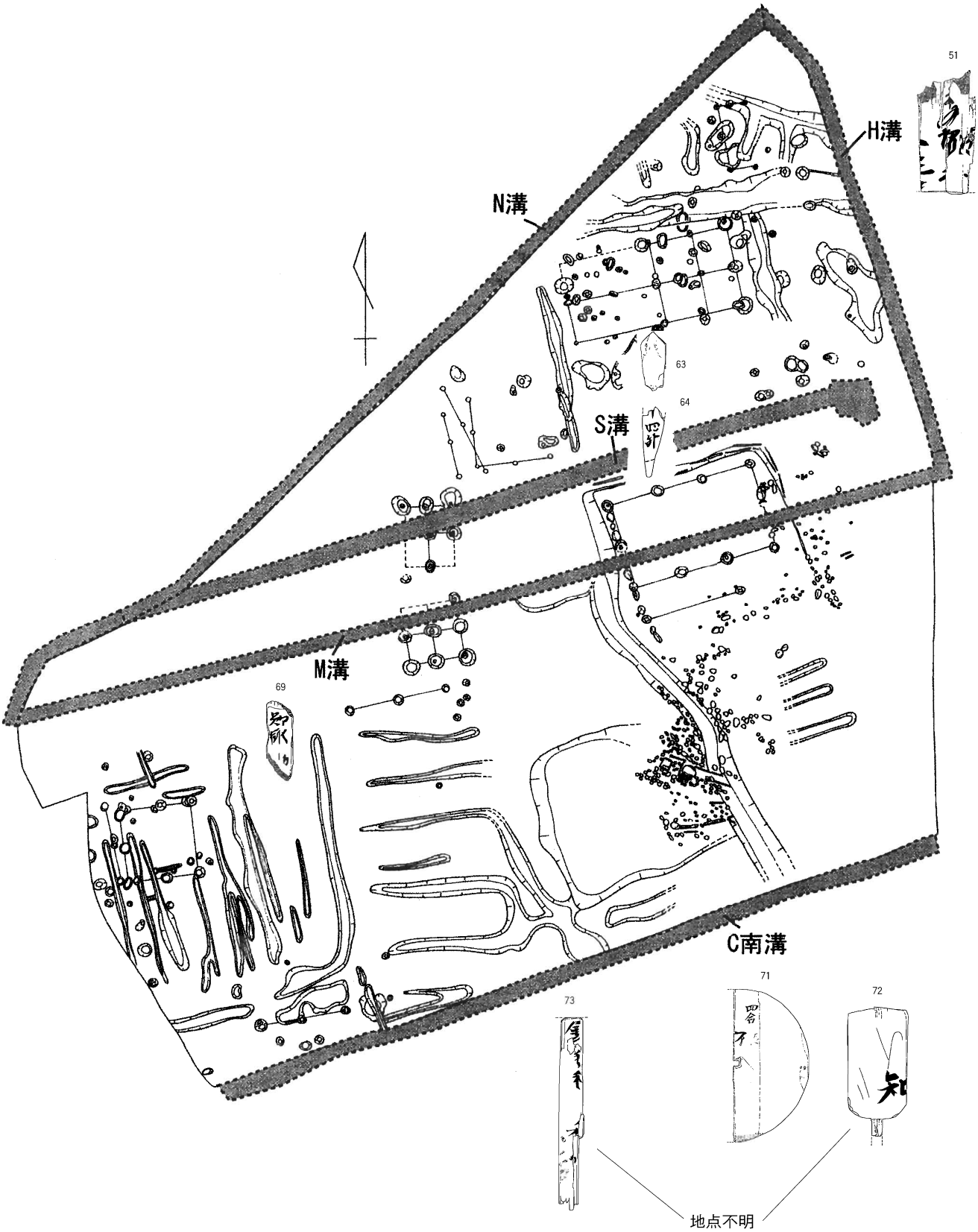
管されるのは異例であり、保管された場所と背景が問題となる。郡名や郷長の郷名が省略されている点からこの木簡が郡以下のレベルで機能したことがうかがえ、さらに買人に関する記載がないことからは保管者が買人側であり自明で記載不要であったと捉えるのが最も蓋然性が高い。一方「佐位宮」については、8世紀代に地域の一般的な神社を「〇〇宮」と表記することが考えにくく、仮に「宮」と表記されることがあったとしても遺構群とは時期的に重ならず、佐位宮＝神社（社殿）＝確認遺構、とは断言できない。別の理解として「宮」が皇族・王族の居所を示すとみれば、「〇〇宮税」は王臣家の私稲が当該地域に存在し税が運用されていたものと理解でき、「佐位宮」は橘諸兄の弟の佐為王を示す可能性が高い。なお、「佐位宮」が何を指すかにかかわらず、木簡について買人＝保管者＝「佐位宮税の代納者」という可能性も考慮しなければならない。

木簡からみた遺跡の機能

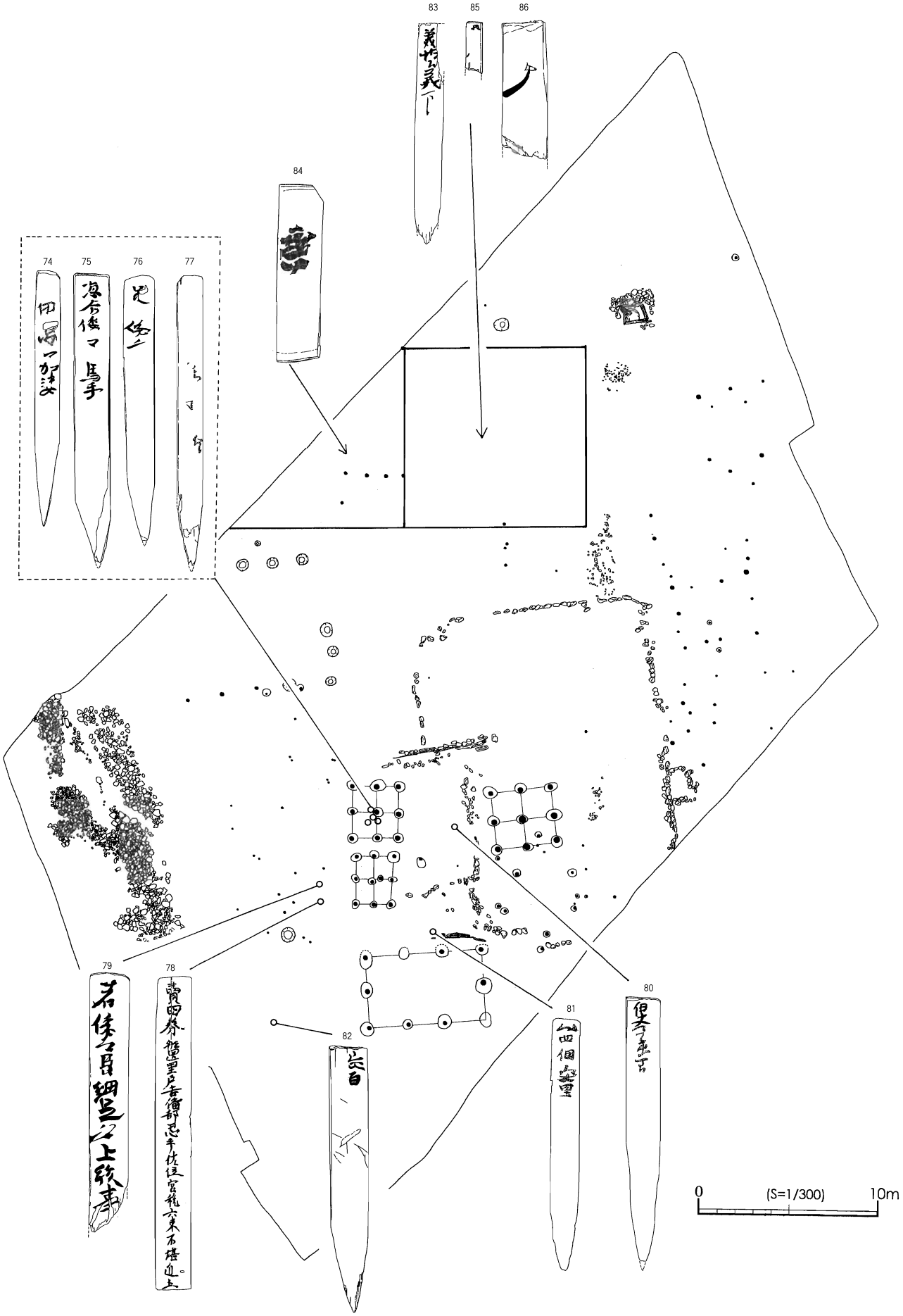
付札木簡群にみられる共同体祭祀に関わる物品の集積や、SB04周辺で確認された物品・数量の管理といった実務的文書事務をおこなう部署があるほか、Ⅳ区周辺では税（出挙）の管理や水田の管理に関わる機能が見て取れる。こうした木簡から読み取れる機能を負った主体は、一般に郡レベルの官衙施設と理解することが可能であろうが、一方では明確な根拠が無いのも事実である。当遺跡は調査区外にも広く展開することが確実であり、そうした箇所に官衙的性格をもつ施設が存在すると仮定すれば、調査区内で今回出土した木簡はそれらに帰属するものか、あるいは付随する施設のものと理解できよう。一方、出土した木簡に限定して考えれば、国郡郷制の枠組みとは別の次元としての性格が色濃く、郡衙関連施設（出先機関）がおこなう律令国家の原理にもとづいた収取機能を果たしたとは考えにくい。その場合、税（私出挙）や水田の管理能力を考慮すれば、地域共同体が自生的・自律的におこなっていた可能性は低く、そこに在地基盤を有し複数郷にまたがる影響力をもつ有力首長層の存在を考える必要があろう。今回の調査では木製品や金属製品にそうした階層の存在を示す資料があり、これを裏付けるものである。



第９図　Ⅰ区木簡出土位置図（遺構・包含層）



第10図　Ⅰ区木簡出土位置図（排水溝）



第11図　Ⅳ区木簡出土位置図

第2表　木簡観察表①

Ⅰ区

出土地点	木簡番号	釈文	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	型式	上端形状	上端調整	下端形状	下端調整	オモテ(A)面調整	ウラ(B)面調整	木取	種別	樹種	備考
SX01	1	□稲祀□□□宅マ 〔以ヵ〕〔玉ヵ〕 「□蔵総造□人」」	97	41	10	065									ヤマグワ	
SX10	2	「久戸否□□若乙女」	218	19	6	051	方頭	キリ・オリか	尖		カットグラス	未調整	板目	付札木簡	スギ	
	3	「日置永床	(108)	20	3	019	方頭	キリ・オリ	×		ケズリ	未調整	板目	付札木簡か	スギ	
	4	〔財ヵ〕 「伊□マ小椅綱」	159	20	4	051	方頭	簡易ケズリ	尖		ケズリ	未調整	板目	付札木簡	スギ	
	5	「伊稲置マ自安万」	201	14	4	051	方頭	簡易ケズリか	尖		不明	不明	柾目	付札木簡	スギ	
	6	「伊鳥取マ浄	(82)	24	3	019	方頭	キリ・オリ		(キリ・オリ)	ケズリ	ケズリ	柾目	付札木簡	スギ	下端は二次的な加工(キリ・オリ)
	7	「美舎人魚當	(111)	20	2	019	方頭	簡易ケズリ	×		ケズリ	不明	柾目	付札木簡	スギ	
	8	「美鳥取マ宅次	(130)	(18)	2	081	方頭	簡易ケズリ	×	キリ・オリ	ケズリ	ケズリか	柾目	付札木簡	ヒノキ	下端はV字状になっているが一次的なものか二次的なものか不明
	9	「美若和マ茎	(94)	20	3	019	方頭	簡易ケズリ	×		ケズリ	未調整	追柾目	付札木簡	ヒノキ	
	10	「美日置□	(65)	(18)	2	081	圭頭	平面ケズリ	×		不明	ケズリ	柾目	付札木簡	スギ	
	11	暦十十六日	(95)	(17)	3	081	×		×		ケズリ	不明	柾目		スギ	延暦10(791)年か
SX50	12	〔後ヵ〕 ・[　　]□□□□ [　　]去年一□□ 〔本ヵ〕 ・□□五人中廿	(195)	(49)	4	081	×		×		カットグラス	ケズリ	柾目	記録木簡		原形は大型の記録木簡か
	13	〔一ヵ〕　〔七ヵ〕 □一二三四五六 七九一二三四 [　]□□□九一二三四五六七八九[　] ・「 一二三四五六七八 一二三四五六九 三十一六七八九一二三四五六 」 〔五ヵ〕　〔六ヵ〕 一二三四□　□五六[　]四五□□□□□ 〔四ヵ〕〔七ヵ〕 五□□　一二三□五 六 □ 〔八ヵ〕 ・「 □七□七□九 [　] 五 六 七」 [　]	450	(55)	5	081	角落し	不明		簡易ケズリ	カットグラス	ケズリ	柾目	記録木簡		
	14	「九□一二三四□	(86)	(25)	3	081		キリ・オリ	×		ケズリ	カットグラス	柾目	記録木簡		
	15	〔備ヵ〕 ・「了(天地逆)□」 〔々ヵ〕 ・「□(天地逆ヵ)目□□」	146	26	3	011	方頭	平面ケズリ	方頭	キリ・オリ	ケズリ	ケズリ	柾目	習書か		
	16	〔人人ヵ〕 □□□	(61)	(15)	2	081	×		×		ケズリ	不明	柾目	習書か		

第3表 木簡観察表②

Ⅰ区

出土地点	木簡番号	釈文	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	型式	上端形状	上端調整	下端形状	下端調整	オモテ(A)面調整	ウラ(B)面調整	木取	種別	樹種	備考
	17	〔弓ヵ〕 □〔々ヵ〕 ・了 事 目 □ ・ □	(124)	(17)	2	081		平面ケズリ		平面ケズリ	ケズリ	ケズリ	柾目	習書か		上下端平行ケズリだが木簡時の加工が不明
	18	〔生ヵ〕 〔六ヵ〕 □ □」	(222)	(22)	3	081	×		不明		カットグラス	ケズリ	柾目			表裏面ともに刀子によるキリコミあり
	19	・「 □□ ・「「［ ］」(天地逆ヵ)	(117)	(24)	4	081		キリ・オリ	×		ケズリ	ケズリ	柾目			
	20	〔鳥 取 マヵ〕 □□□」	(151)	14	3	059	×		尖		ハギトリ	ハギトリ	柾目	付札木簡		
	21	「海 マ 豊 足」	230	22	6	051	方頭	簡易ケズリ	尖		ケズリ	ケズリ	柾目	付札木簡		「海」の上にも黒色の点があるが墨かどうか判断できず
SX50	22	□ □	(57)	(10)	3	081	×		×		不明	不明	柾目		スギ	
	23	□ 御 □	(33)	(21)		091							削片		スギ	
	24	□	(31)	(18)		091							削片		スギ	
	25	□□	(28)	(10)		091							削片		スギ	
	26	〔大ヵ〕 □□	(26)	(15)		091							削片		スギ	
	27	□□	(27)	(9)		091							削片		スギ	
	28	□□	(14)	(11)		091							削片		スギ	
	29	□□	(44)	(14)		091							削片		スギ	
	30	□□	(44)	(7)		091							削片		スギ	
	31	〔 ］	(147)	(10)	(1)	091							削片		スギ	
	32	□	(16)	(13)		091							削片		スギ	
	33	□	(9)	(16)		091							削片		スギ	
	34	□	(38)	(10)		091							削片		スギ	

第４表　木簡観察表③

Ⅰ区

出土地点	木簡番号	釈文	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	型式	上端形状	上端調整	下端形状	下端調整	オモテ(A)面調整	ウラ(B)面調整	木取	種別	樹種	備考
SX50	35	□	(27)	(18)		091							削片		スギ	
	36	□	(16)	(13)		091							削片		スギ	
	37	□	(25)	(10)		091							削片		スギ	
	38	□	(15)	(5)		091							削片		スギ	
	39	□	(12)	(13)		091							削片		スギ	
	40	・「部 冨 自 姪 冨 □ 者 買 □ ・「莫 其 故 者 天 宜 承 知 猷 目 今 □	(307)	38	3	019	方頭	平面ケズリ	×		不明	カットグラス	追柾目	文書木簡か		オモテ面墨流出ミミズ腫れ状。
SD16	41	「□ 宅 三 代」	216	26	3	051	方頭	キリ・オリか	尖	―	ケズリ	ケズリ	板目	付札木簡	スギ	
	42	「伊 海 マ 乙 米	(107)	(21)	4	019	方頭	キリ・オリ	×		ケズリ	未調整	板目	付札木簡	スギ	
	43	・□ 夫 本 家主 家 主 卅 冊 廾 亼 合 天 夫 車 二」 〔里ヵ〕　□ □ ・　自 里 □ 子 □　矣 矣　□　之　之」	(242)	(22)	3	081	×		頂	平面ケズリか	カットグラス	不明	柾目	習書木簡	スギ	
SD23	44	「美 古 備 マ 細 女」	183	18	4	051	方頭	平面ケズリ	尖		カットグラス	ケズリ	追柾目	付札木簡	スギ	
SD28	45	・「 稲 主 巳 年 ・「『古 二 主 祖　一』(天地逆)	(125)	28	2	019	方頭	キリ・オリ	×		カットグラス	カットグラス	板目	文書木簡	スギ	
SD32	46	・「一一卅四八卅三三八廾四三八十六一八□□□九十 [　　] [　　] ・「　　[　　] [　　]	(291)	32	7	041	方頭	不明	棒状	平面ケズリ	カットグラス	カットグラス	追柾目			九木簡転用の封緘木簡状木製品。
E15	47	〔田ヵ〕 □□主　磯美 [ ] [ ] 「□　[ ] □	(248)	(38)	7	019	方頭	平面ケズリか	×		カットグラス	不明	柾目	記録木簡	スギ	
	48	□　六 日 下 田 人	(69)	(20)	7	081	×		×		ケズリ	未調整	柾目	記録木簡		SX10の可能性もあり
F15	49	・「六 七 八 九 十 □ 十 一 十 二 [　　]	(159)	(25)	2	081	方頭	平面ケズリ		キリ・オリ	不明	不明	柾目	記録木簡	スギ	下端キリ・オリだが二次加工の可能性あり
G15	50	中　寅」	(63)	(26)	4	081	×		頂	平面ケズリ	ケズリ	ケズリか	柾目		スギ	葬式祭日か
H溝	51	□□ 〔伊 努ヵ〕 ・□ □ □ □ 」 □ □ □ 男　十 一 ・□ 十 七 」 □	(110)	(50)	7	081	×	(焼損)		キリ・オリ	カットグラス	カットグラス	板目	記録木簡		
C16	52	「伊 丈 マ 奈 次 丸」	123	23	4	051	方頭	キリ・オリか	尖		ケズリ	ケズリ	柾目	付札木簡		
E14	53	〔束ヵ〕 □ 五 束 六 束 十 束 <	(138)	35	6	039	×		×		ケズリ	ケズリ	板目	付札木簡か	ヒノキ	
	54	「美 若 和 マ 帯 取」	185	21	3	051	方頭	平面ケズリ	尖		カットグラス	未調整	柾目	付札木簡	スギ	
	55	〔鳥 取 マ ヵ〕 美 □ □ □ [　　]」	(186)	27	3	051	方頭	平面ケズリ	尖		ケズリ	未調整か	柾目	付札木簡		
	56	日 置 臣 鷹	(79)	21	3	081	×		×		ケズリ	未調整	柾目		スギ	
E15	57	「神 鳥 取 マ 主 万 呂」	(170)	27	4	051	方頭	キリ・オリ		キリ・オリ		ケズリ	板目	付札木簡		
	58	「伊 和 文 マ 浄 刀 自 女	(119)	20	6	019	方頭	平面・側面ケズリ		平面・側面ケズリ		ケズリ	柾目	付札木簡		

第5表 木簡観察表④

Ⅰ区

出土地点	木簡番号	釈文	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	型式	上端形状	上端調整	下端形状	下端調整	オモテ(A)面調整	ウラ(B)面調整	木取	種別	樹種	備考
E16	59	〔美ヵ〕 「□〔　　〕」	144	28	3	051	方頭	キリ・オリ	尖		不明	不明	柾目	付札木簡		
F15	60	〔財ヵ〕 □マ三上	(75)	20	1	081	×		×	×	不明	不明	柾目		モミ属	
	61	子麻呂」	(106)	17	3	059	×		尖		ケズリ	ケズリ	板目	付札木簡	ヒノキ	
G15	62	「生マ□	(65)	24	2	019	やや圭頭	平面ケズリ	×		ケズリ	不明	柾目	付札木簡	スギ	
S溝	63	〔美ヵ〕 「□□	(42)	(18)	2	019	圭頭	側面ケズリか	×		ケズリ	ケズリ	板目	付札木簡	スギ	
	64	〔斗ヵ〕 □四升一」	(52)	(16)	4	059	×		尖		ケズリ	ケズリ	板目	付札木簡	スギ	上端は二次的切断
F15	65	・□□□□ ・　□□□	(95)	(15)	2	081	×		×		ケズリ	ケズリ	柾目		スギ	
	66	「〔　　〕」	191	23	4	019	方頭	キリ・オリ	方頭	キリ・オリ	不明	不明	柾目		スギ	
F16	67	□□	(41)	(13)		091							削片		スギ	
	68	□□ □□□	(41)	(17)		091							削片		スギ	
M溝	69	〔御取ヵ〕 □□□	(55)	(19)	5	081	×		×		ケズリ	ケズリ	柾目			
N溝	70	(符籙・絵画ヵ)	(126)	(19)	4	081	×		×		カットグラス	ケズリ	柾目			符籙・絵画か
C南溝	71	〔五合ヵ〕 □□ 四合 「不」	180		7	061							柾目		スギ	径18cmの曲物底板
不明	72	・「知 ・「□	(102)	47	6	061	やや圭頭	平面・側面ケズリ	×		ケズリ	ケズリ	追柾目	題籤軸木簡		
	73	・「□□□　□□ 〔　　〕 ・「〔　　〕	(137)	(16)	4	081		平面・側面ケズリ	×		ケズリ	不明	板目	習書	カヤ	

第６表　木簡観察表⑤

Ⅳ区

出土地点	木簡番号	釈文	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	型式	上端形状	上端調整	下端形状	下端調整	オモテ(A)面調整	ウラ(B)面調整	木取	種別	樹種	備考
SB02 木簡溜まり	74	〔伊海ヵ〕 「□ □ マ加 津 女」	240	23	4	051	方頭	不明	尖		ケズリ	ケズリ	板目	付札木簡	スギ	
	75	〔海若ヵ〕〔マヵ〕 「□ □ 倭 □　馬 手」	(217)	26	4	051	方頭	不明	尖		ケズリ	ケズリ	板目	付札木簡	スギ	
	76	〔美ヵ〕 「□ □ 倭 □ [　]」	198	23	4	051	圭頭状	側面ケズリか	尖		ケズリ	ケズリ	柾目	付札木簡	スギ	
	77	「[　]」	(241)	21	4	051	方頭	キリ・オリ	尖		ケズリ	ケズリ	柾目	付札木簡	スギ	
C19	78	・「売田券 舩岡里戸吉備部忍手佐位宮税六束不堪進上」 〔口分ヵ〕　天平八年十二月十日[　] ・「仍□□舩越田一段進上〔郷ヵ〕　〔呂ヵ〕。」 □長若倭部臣□麻□[　]	352	42	4	011	方頭	平面ケズリ	方頭	平面ケズリ	カットグラス	ケズリ	板目	記録木簡か	ヒノキ	売田券木簡
	79	・「若 倭 マ 臣 細 足 以 上 税 事 ・「上 物 上 万 呂 等 當 月 新	(196)	28	3	019	方頭	平面ケズリ	×		不明	不明	柾目	文書木簡	ヒノキ	下端は二次的切断か
B20	80	「伊丈マ乙虫万呂」	(197)	28	3	051	方頭	キリ・オリ	尖		ケズリ	未調整	柾目	付札木簡	スギ	
	81	「□□□安里」	188	22	2	051	方頭	簡易ケズリ	尖		ケズリ	未調整か	柾目	付札木簡	スギ	
C19	82	「穴百」	200	30	5	051	方頭	キリ・オリ	尖		ケズリ	未調整	板目	付札木簡	スギ	
Z20	83	・「美□マ美万呂」 ・「「[　]」」	(162)	21	2	051	方頭	キリ・オリか	尖		不明	カットグラス	柾目	付札木簡	スギ	
Z19	84	□(墨痕)	(132)	(33)	5	061		キリ・オリ					柾目		スギ	曲物底板（内面）
Z20	85	〔廿ヵ〕 ・「　□ ・「□　□	(63)	20	3	019	方頭	平面ケズリ	×		不明	不明	柾目		スギ	
	86	『□』 □	(103)	(34)	7	019		平面ケズリ	×		ケズリ	ケズリ	柾目		スギ	

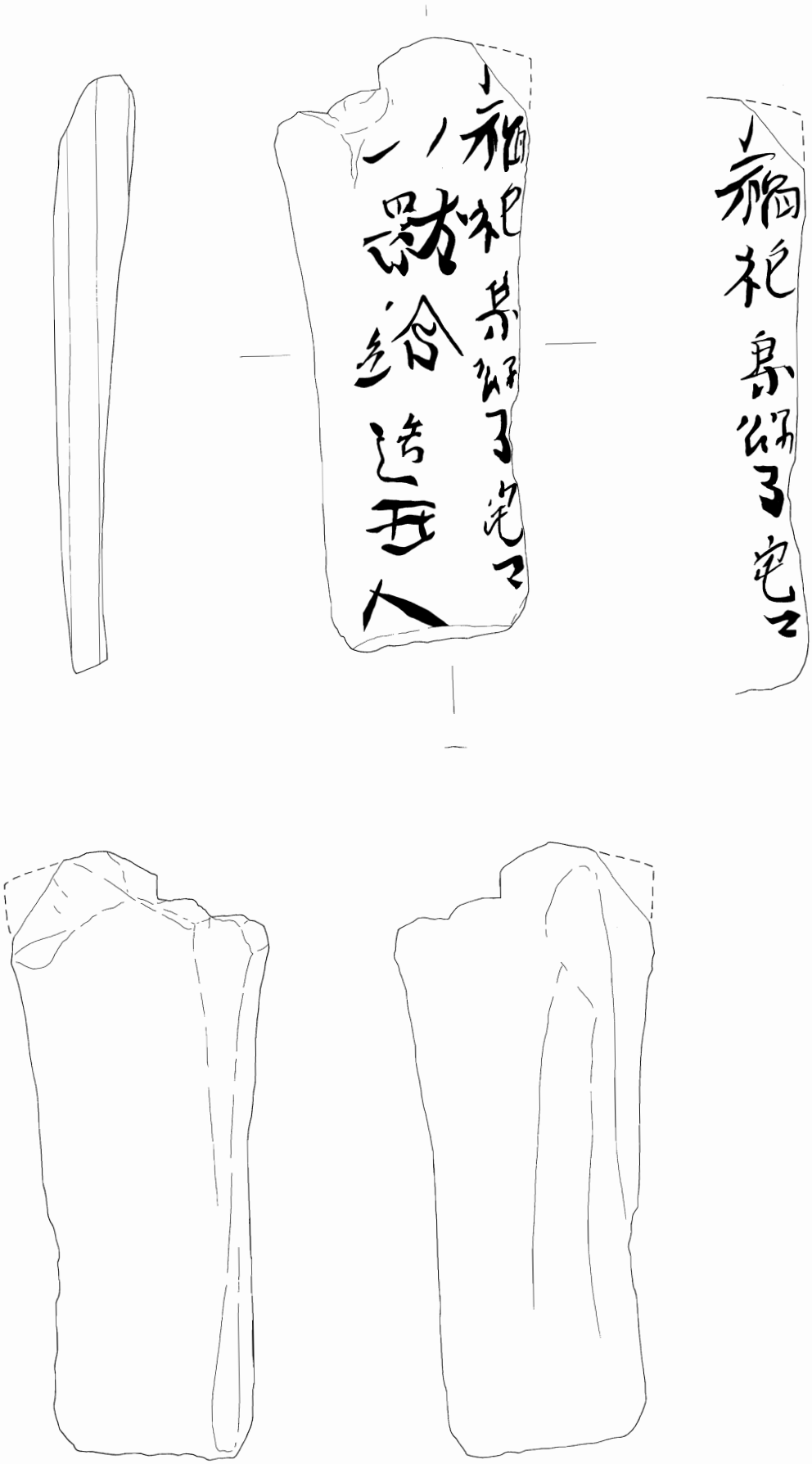
※「×」は欠損、「不明」は遺存するが保存状況が悪く判断できないもの。空白の項目は一部のみ遺存する事例。

一号木簡

□稲祀□□□宅マ
「〔以カ〕〔玉カ〕　」
□祓給造□人

97×41×10

065



一号木簡

二号木簡

「久戸人否□□若乙女」

218×19×6

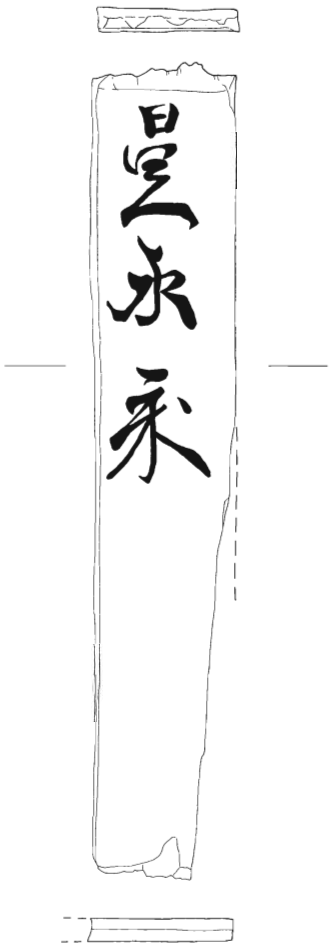
051

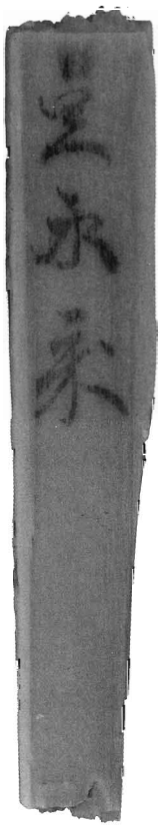
三号木簡

「日置永床

(108)
×
20
×
3

019





四号木簡

「伊□〔財カ〕マ小椅継」

159×20×4

051

五号木簡

「伊稲置マ自安万」

201×14×4

051

六号木簡

「伊鳥取マ浄

(82)×24×3

019

七号木簡

「美舍人魚當

(111)×20×2

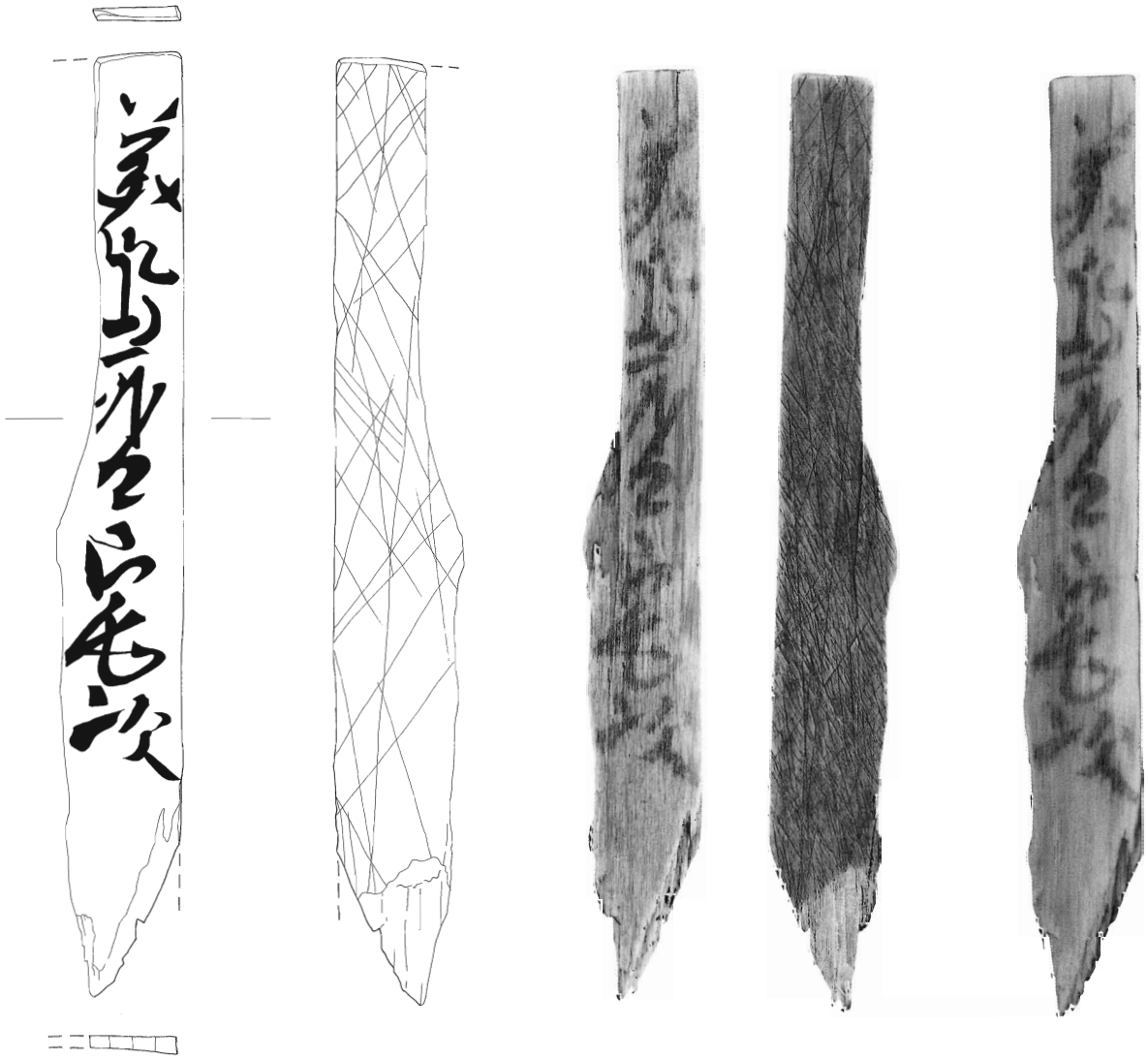
019

八号木簡

「美鳥取マ宅次

(130)
×
(18)
×
2

081



九号木簡

「美若和マ茎

(94)×20×3

019

一〇号木簡

「美日置□

(65)×(18)×2

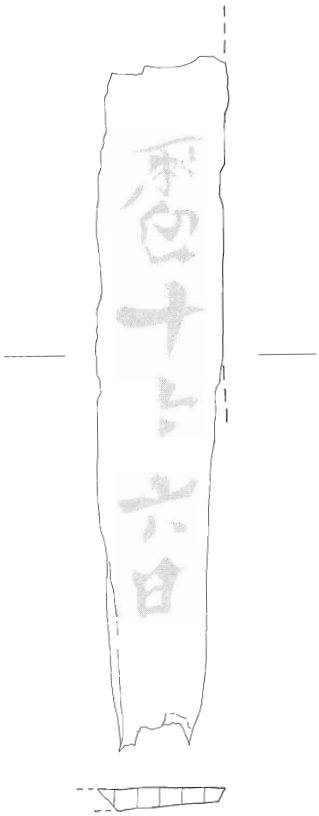
081

一一号木簡

暦十十六日

(95)×(17)×3

081



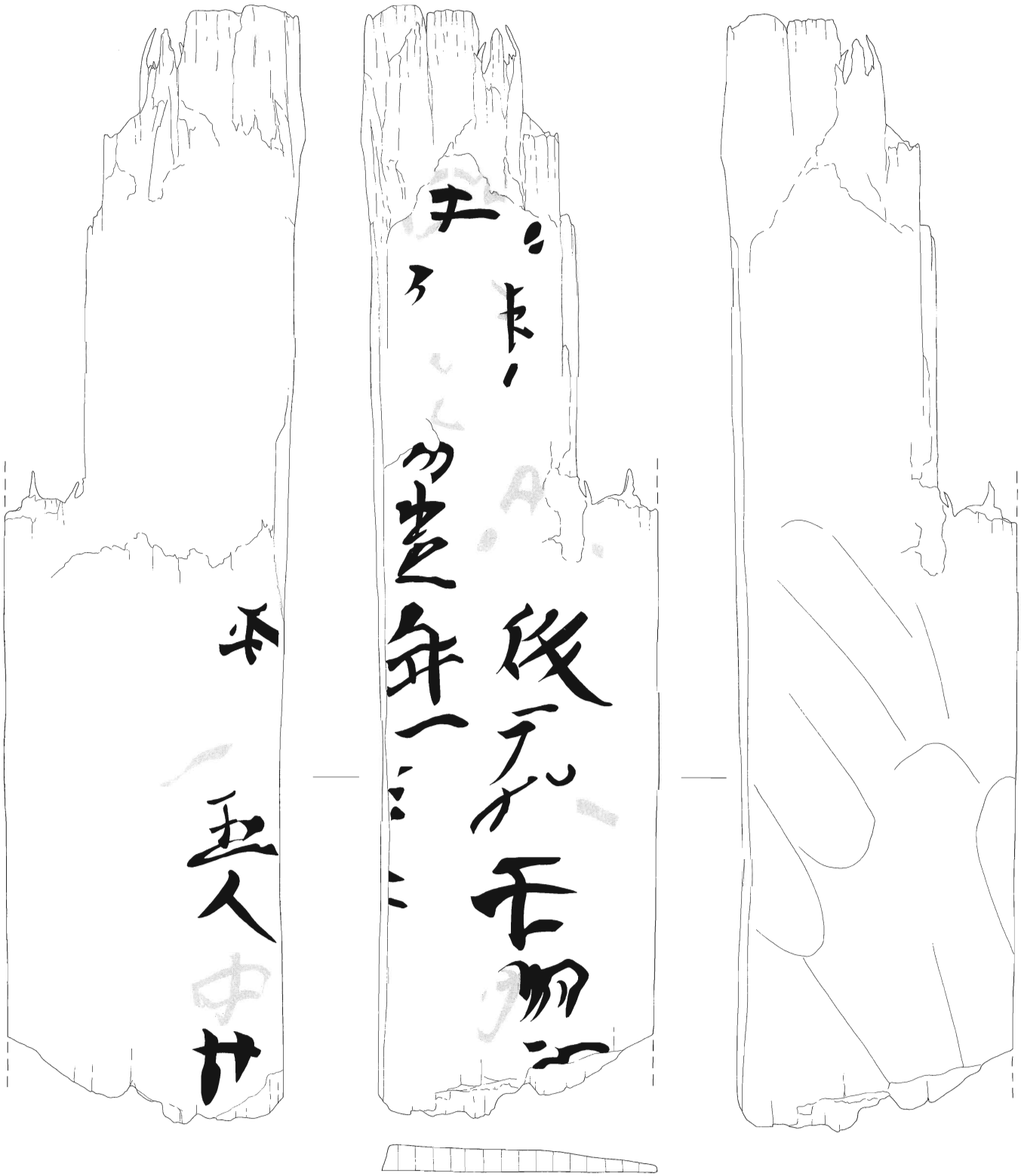
一二号木簡

・〔本カ〕□□五人中廿

・〔　　〕□□□□〔後カ〕
〔　　〕去年一□□

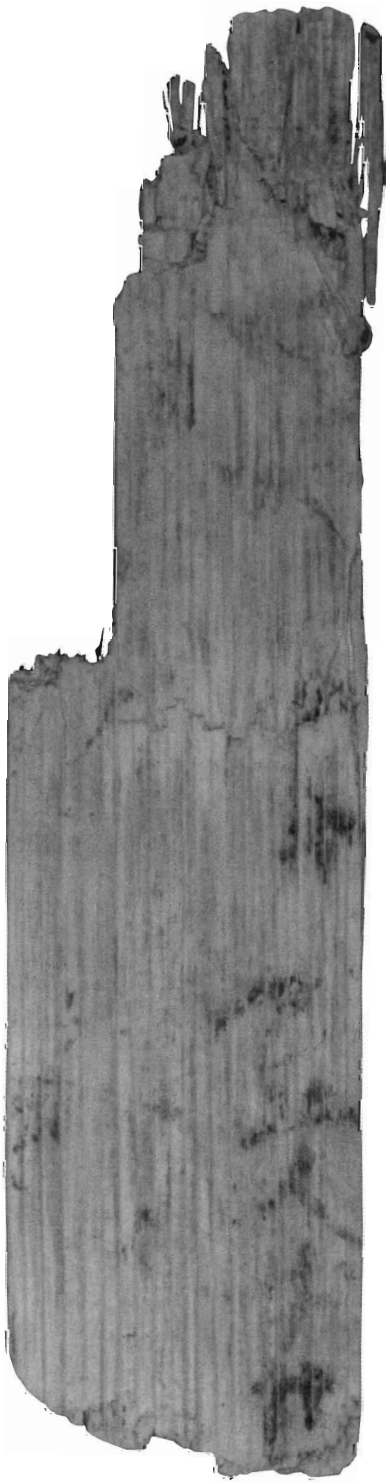
(195)×(49)×4

081



一二号木簡

一二号木簡



一三号木簡

□一二三四五六　七九一二三四〔一カ〕［　］□□□一二三四〔七カ〕　五六七八九［　］

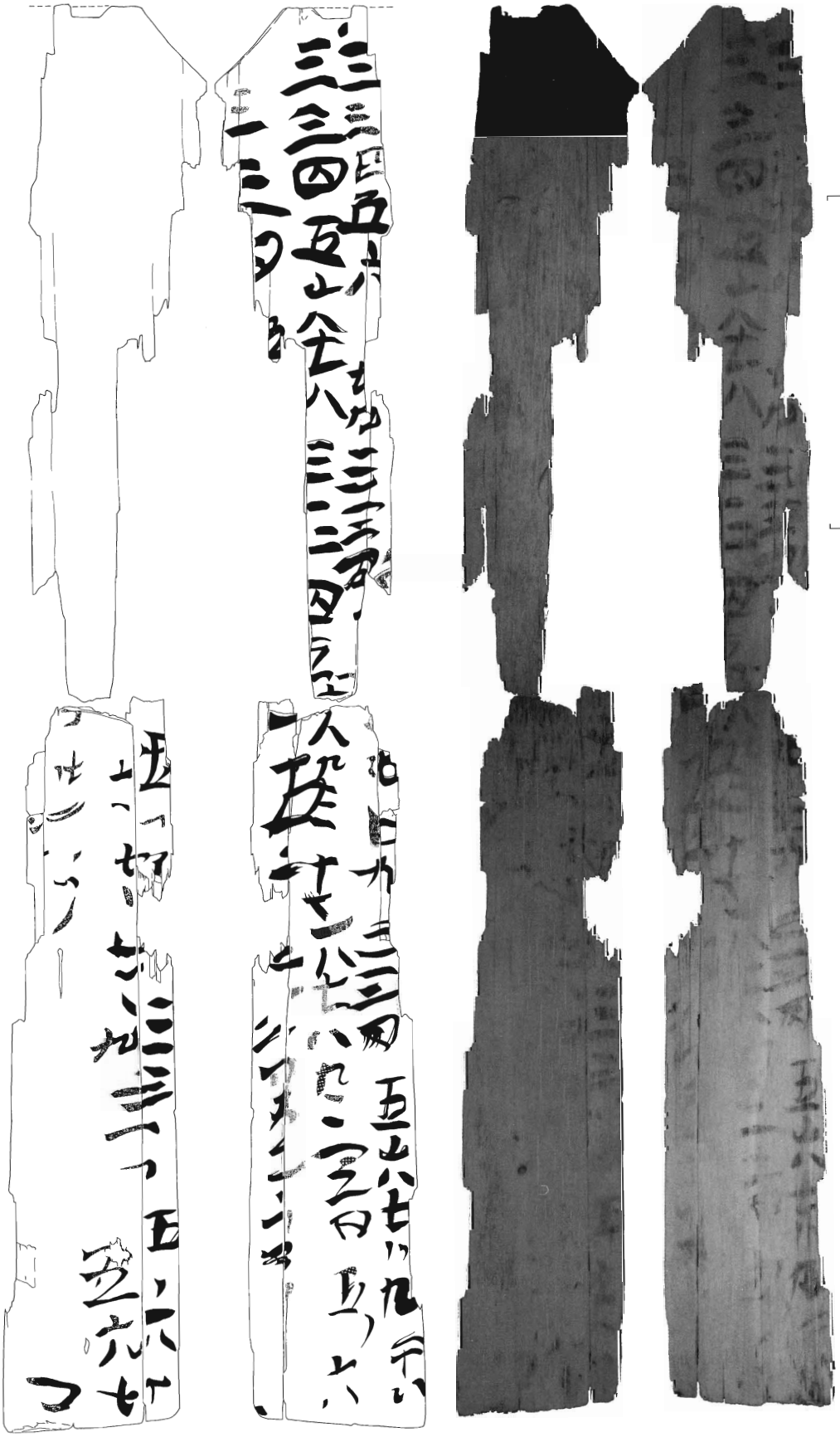
・「一二三四五六七八〔五カ〕一二三四五六九　三十一六七八九一二三四五六〔七カ〕　」

一二三四□　□五六［　］四五□□□□

・「

五□□

〔六カ〕□七□七□九〔八カ〕［　］一二三□〔四カ〕五六□〔七カ〕［　］五六七］



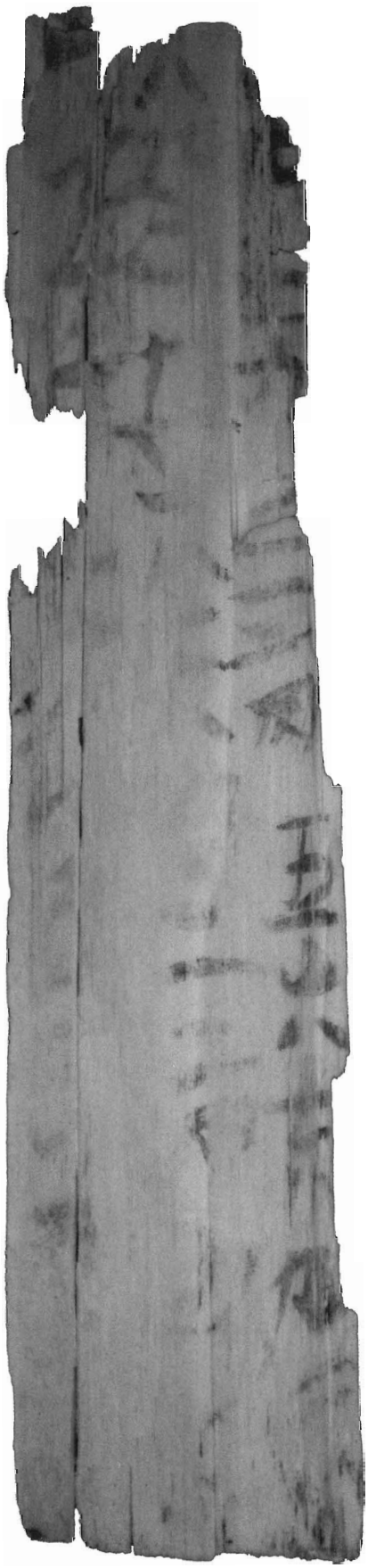
(S=1/2)
10cm
0

450
×
(55)
×
5

081

一三号木簡

一三号木簡



一三号木簡

一四号木簡

「九□一二三四□

(86)×(25)×3

081

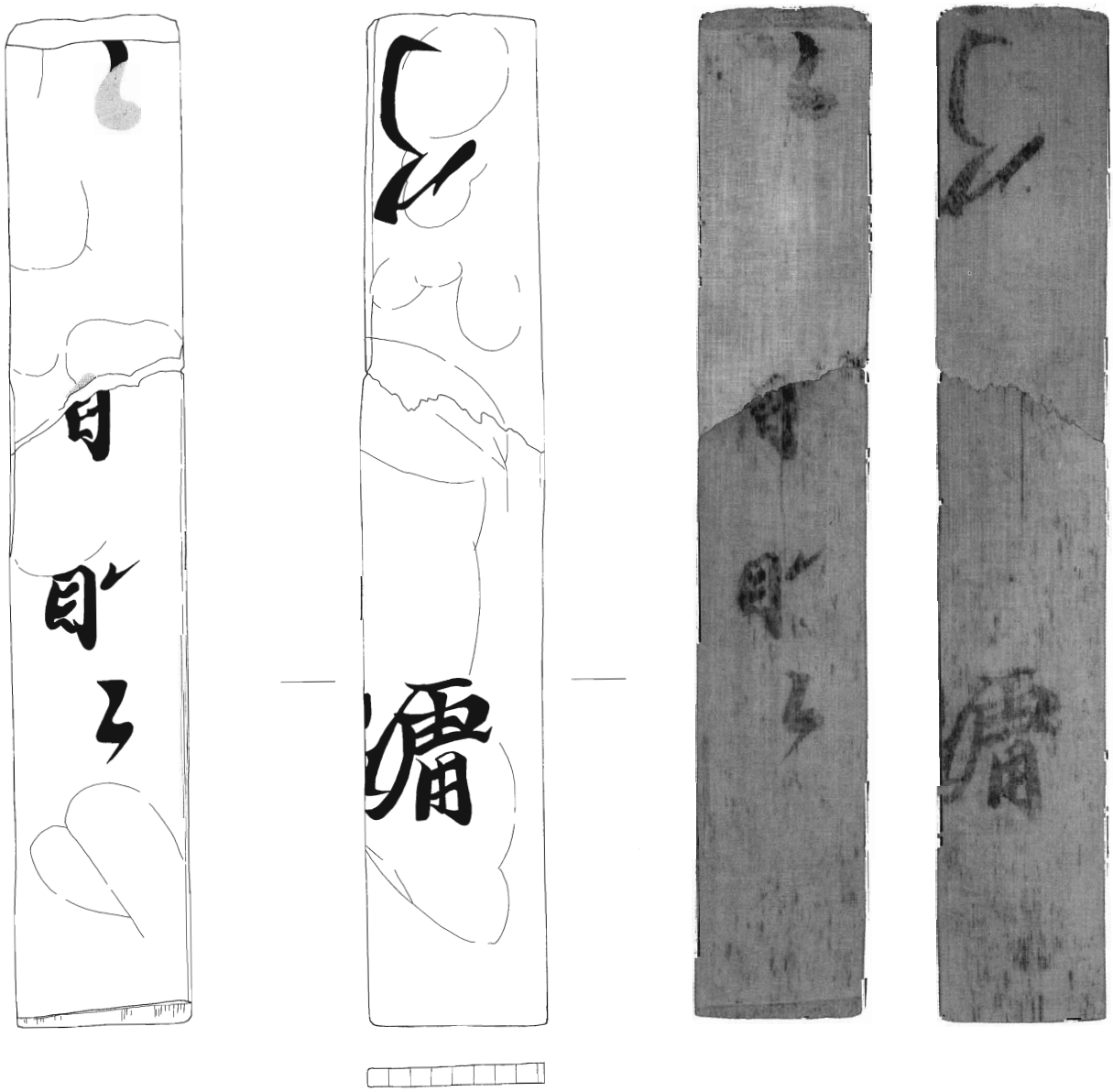
一五号木簡

・「丁」

・「□目□□〔々カ〕」

146×26×3

011

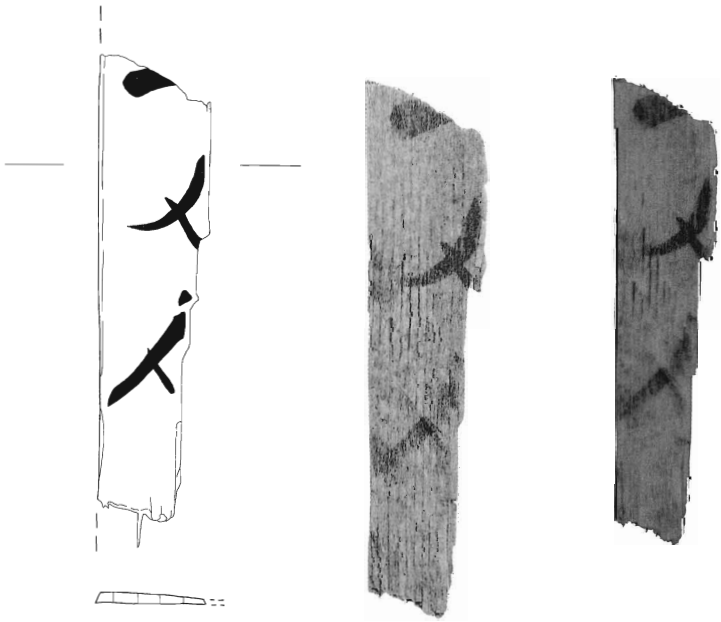


一六号木簡

□
□
□〔人人カ〕

(61)
×
(15)
×
2

081



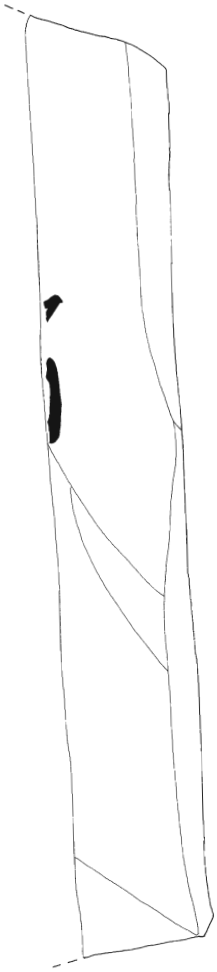
一七号木簡

・了
事目□〔弓カ〕
〔々カ〕□

・
□

(124)
×
(17)
×
2

081



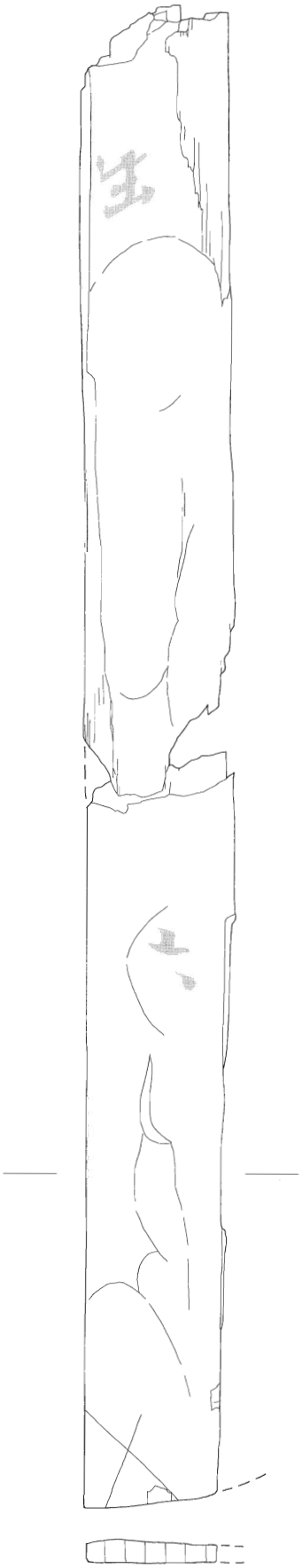
一八号木簡

□〔生カ〕

□〔六カ〕

(222)×22×3

081



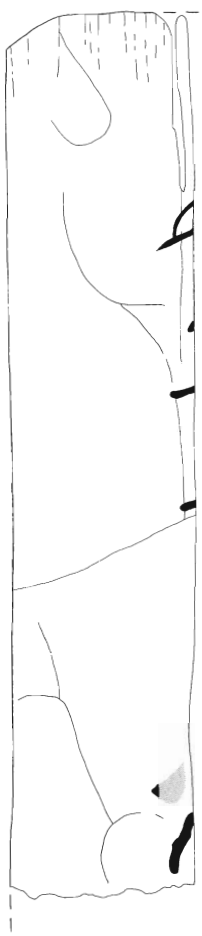
一九号木簡

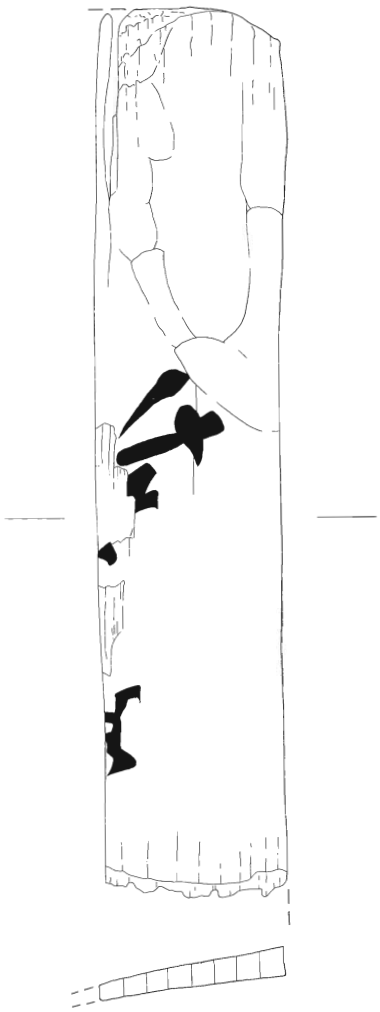
・「　　□□

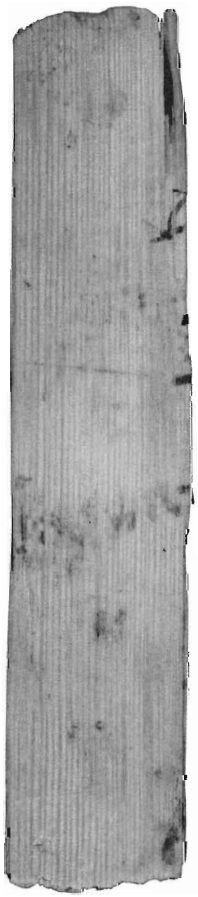
・「『〔　　〕(天地逆ヵ)』

(117)
×
(24)
×
4

081





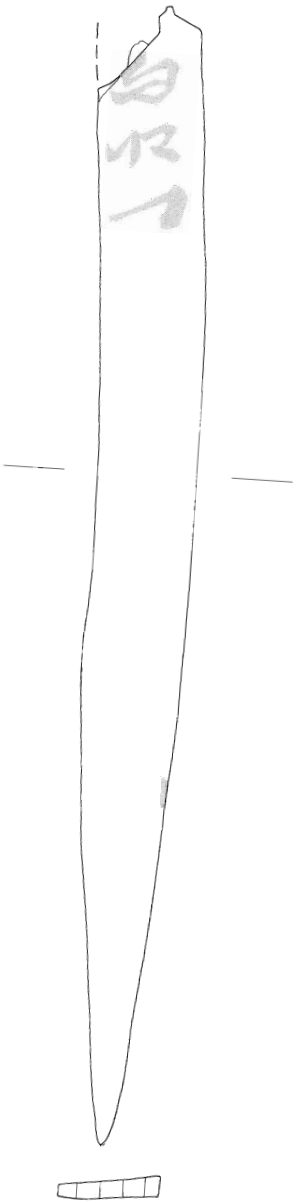


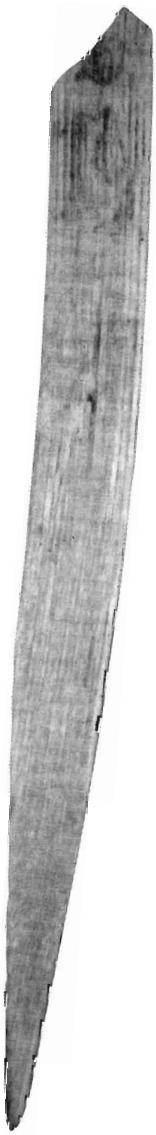
二〇号木簡

〔鳥取マカ〕
□□□

(151)×14×3

059



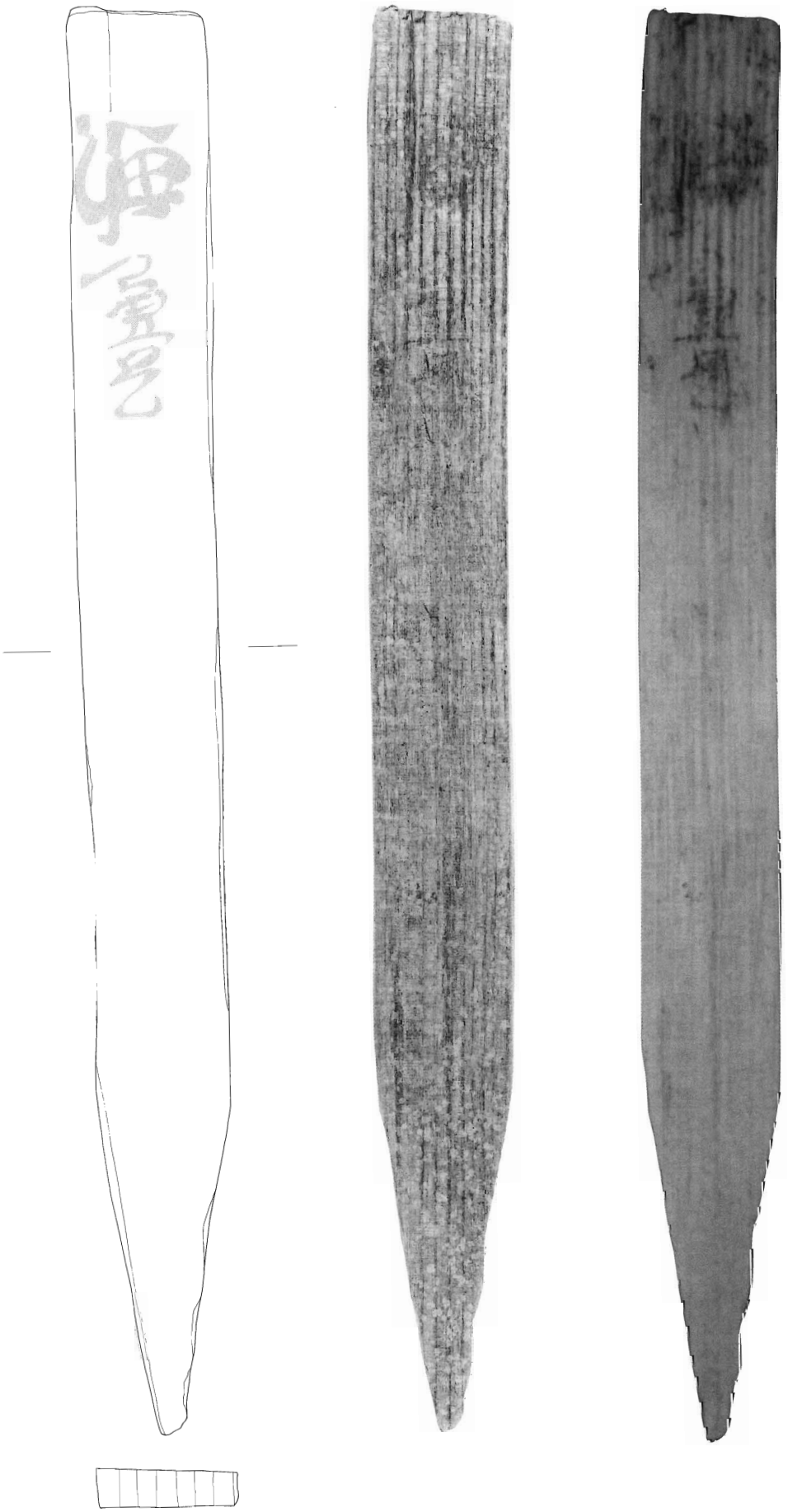


二一号木簡

「海マ豊足」

230×22×6

051



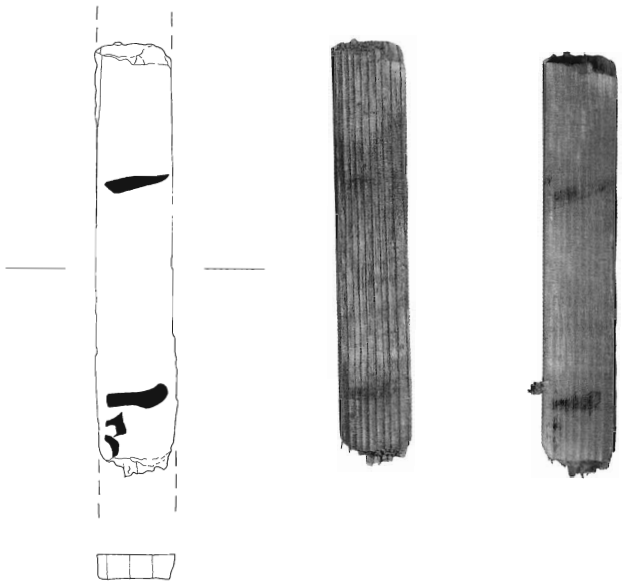
二二号木簡

□

□

(57)
×
(10)
×
3

081



二三号木簡

□御□

(33)×(21)

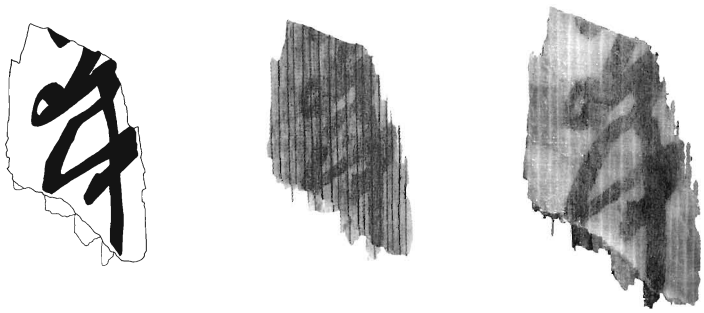
091

二四号木簡

□

(31)×(18)

091

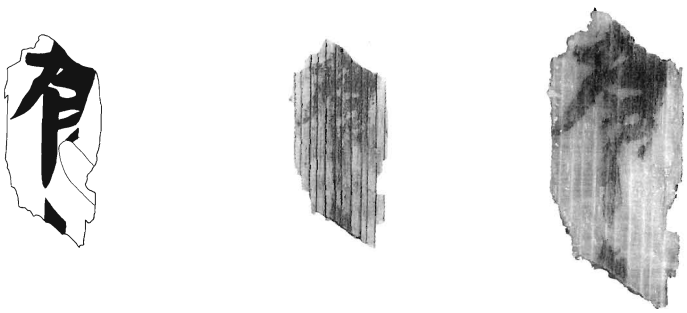


二五号木簡

□□

(28)×(10)

091



二六号木簡

□□〔大カ〕

(26)×(15)

091

二七号木簡

□
□

(27)
×
(9)

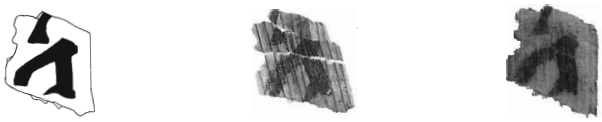
091

二八号木簡

□
□

(14)
×
(11)

091



二九号木簡

□
□

(44)
×
(14)

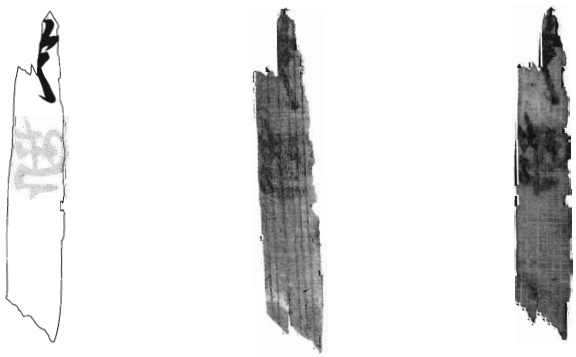
091

三〇号木簡

□
□

(44)
×
(7)

091



三一号木簡

［　　］

(147)
×
(10)
×
(1)

091

三二号木簡

□

(16)
×
(13)

091

三三号木簡

□

(9)
×
(16)

091

三四号木簡

□

(38)
×
(10)

091

三五号木簡

□

(27)
×
(18)

091

三六号木簡

□

(16)
×
(13)

091

三七号木簡

□

(25)
×
(10)

091

三八号木簡

□

(15)
×
(5)

091

三九号木簡

□

(12)
×
(13)

091

四〇号木簡

・「部冨自姪冨□者買□

・「莫其故者天宜承知畎目今□

(307)
×
38
×
3

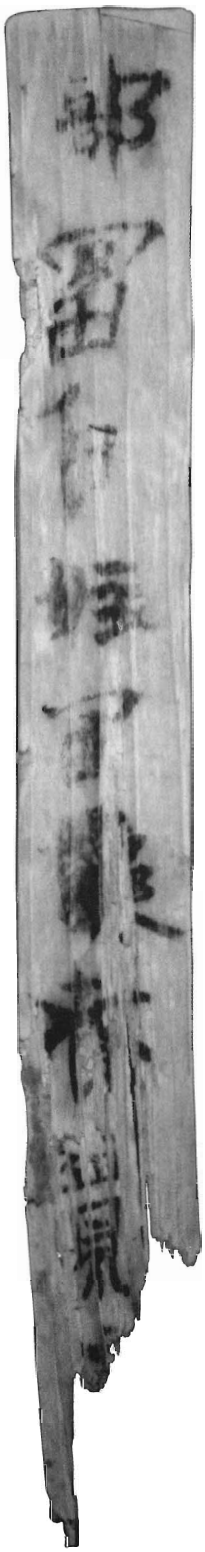
019

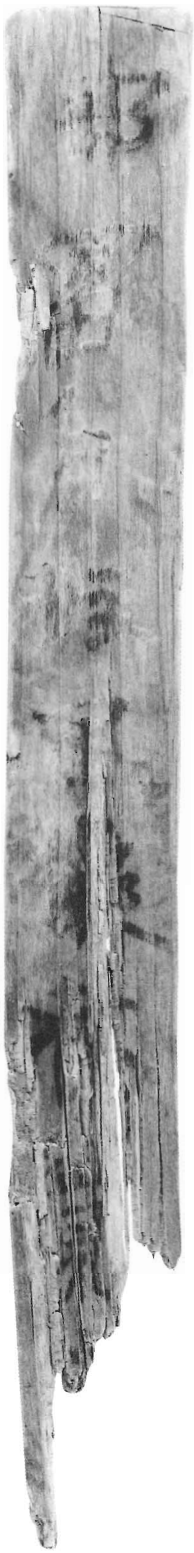
(S=2/3)
10cm
0

四〇号木簡

四〇号木簡

四〇号木簡





四〇号木簡

四一号木簡

「□宅三代」

216×26×3

051

四二号木簡

「伊海マ乙米

(107)×(21)×4

019

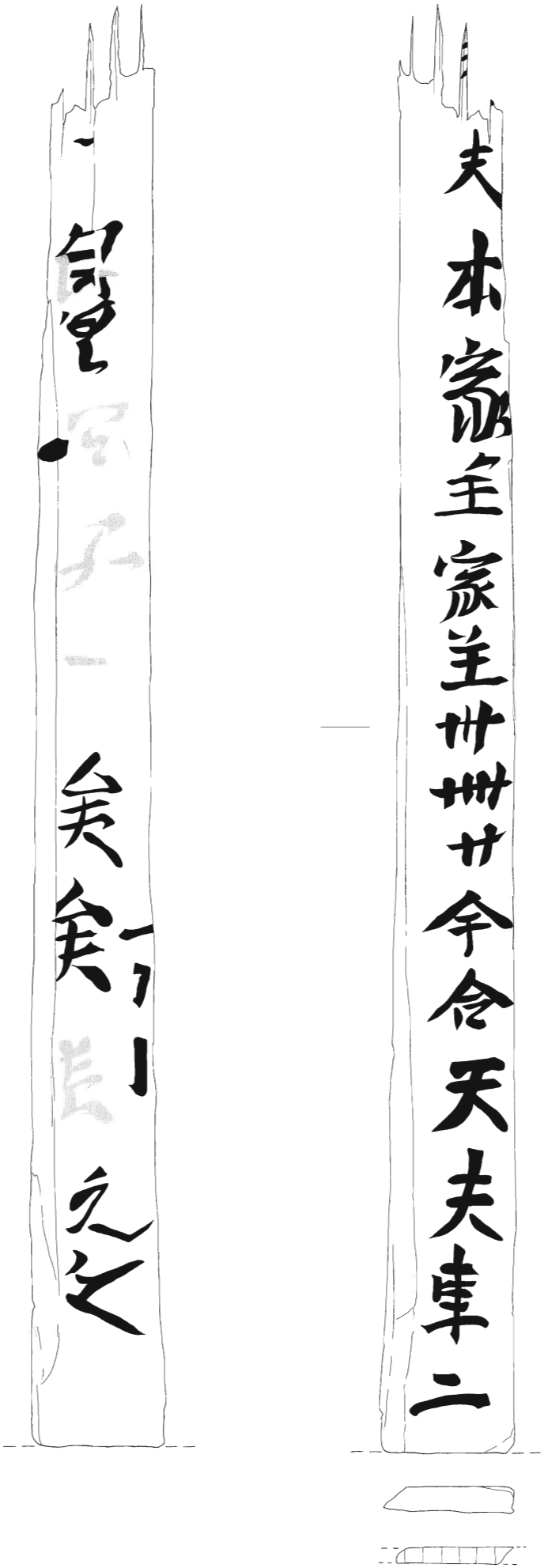
四三号木簡

・□夫本家主家主卅卌廿今合天夫車二」

・　自里□子□　矣矣□□　□　之　之」

(242)
×
(22)
×
3

081



四三号木簡

四四号木簡

183×18×4　051

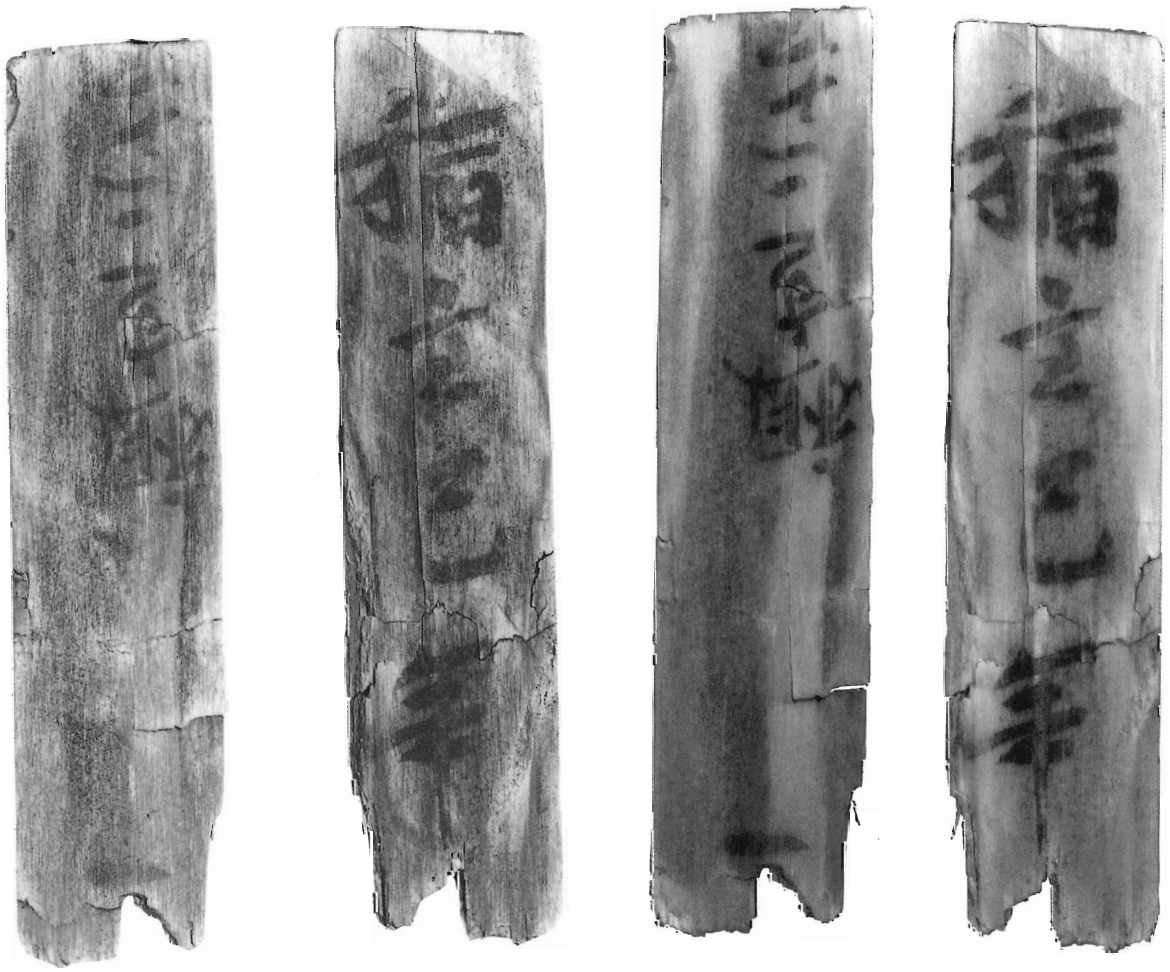
「美吉備マ細女」

四五号木簡

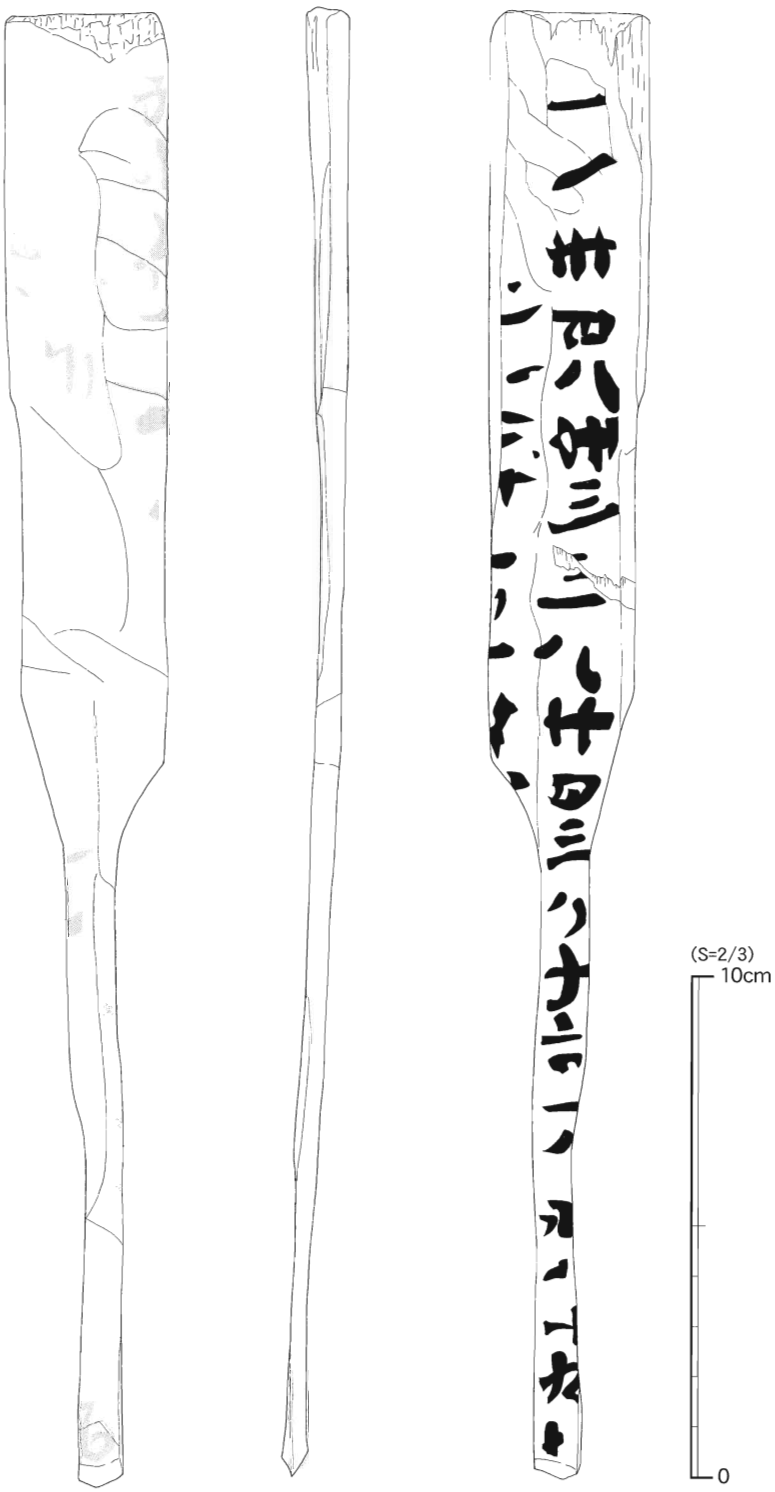
・「稲主巳年
・『稲主二古』

(125)×28×2
019

四五号木簡



四六号木簡

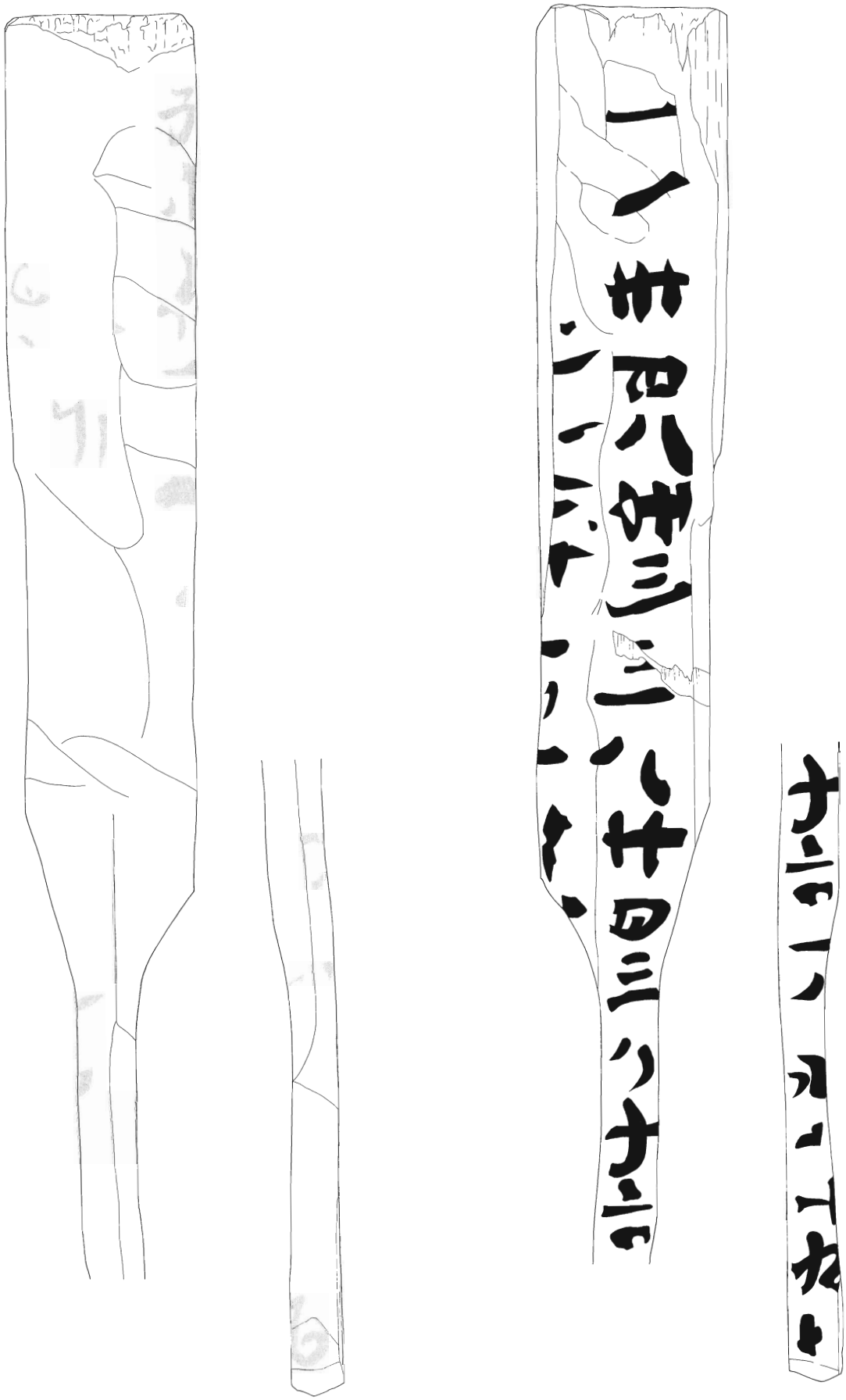


・「一一卅四八卅三三八廿四三八十六一八□□□九十」
　　［　　］
・「［　　］
　　［　　］
　　［　　］」

291
×
32
×
7

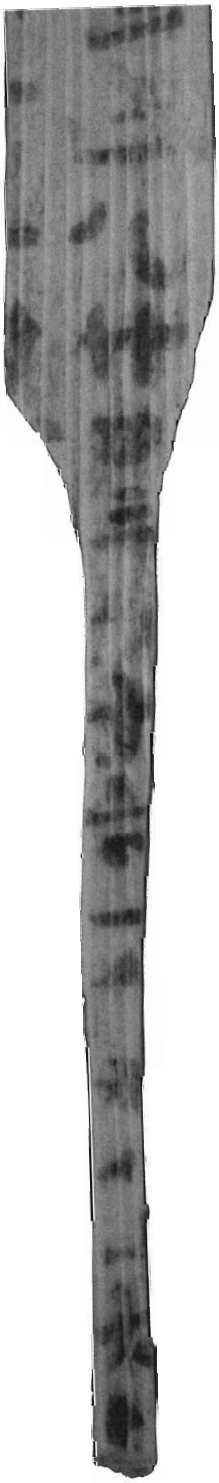
041

四六号木簡



四六号木簡

四六号木簡

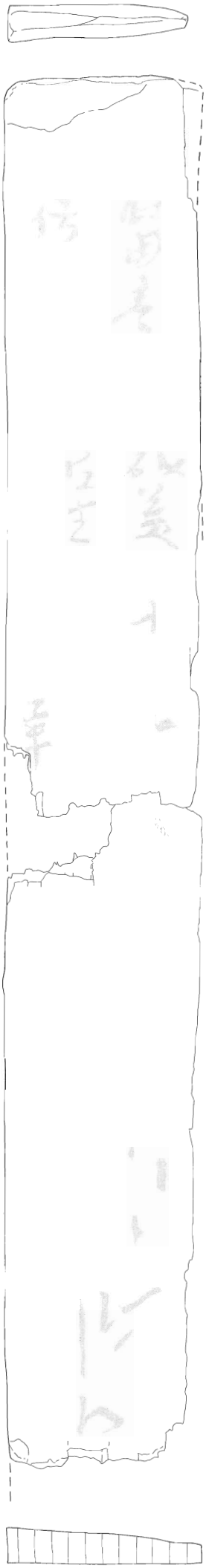


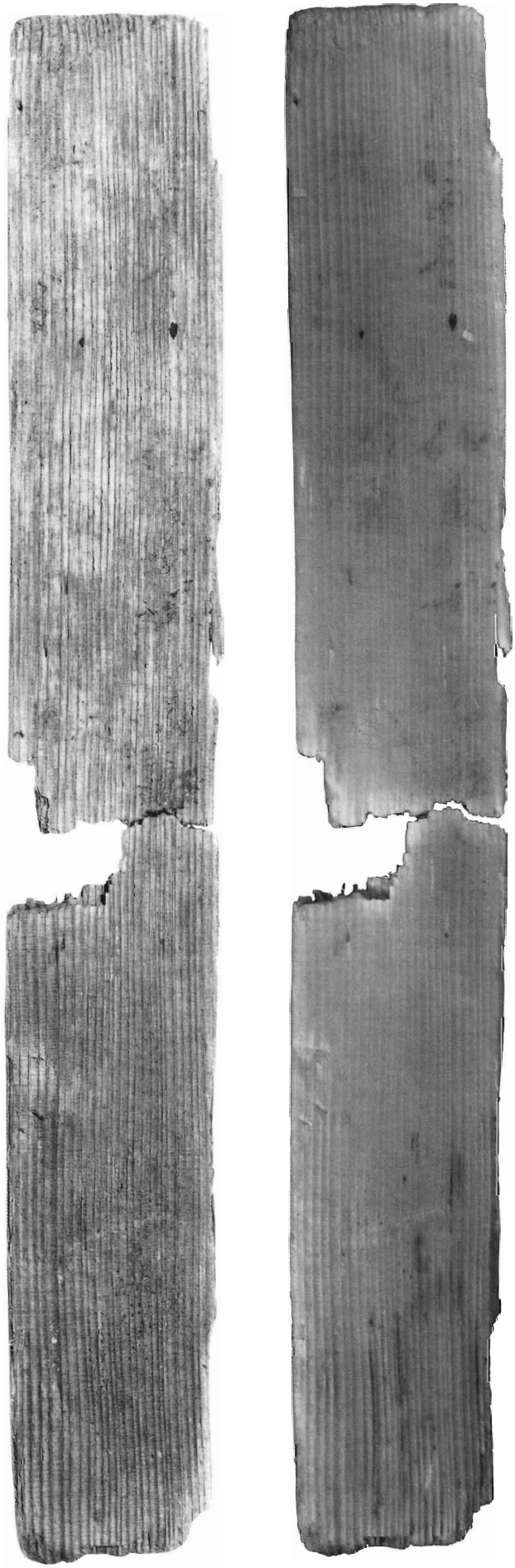
四七号木簡

「□□〔田カ〕主　磯美［　］
佐□□□［　］

(248)×(38)×7

019



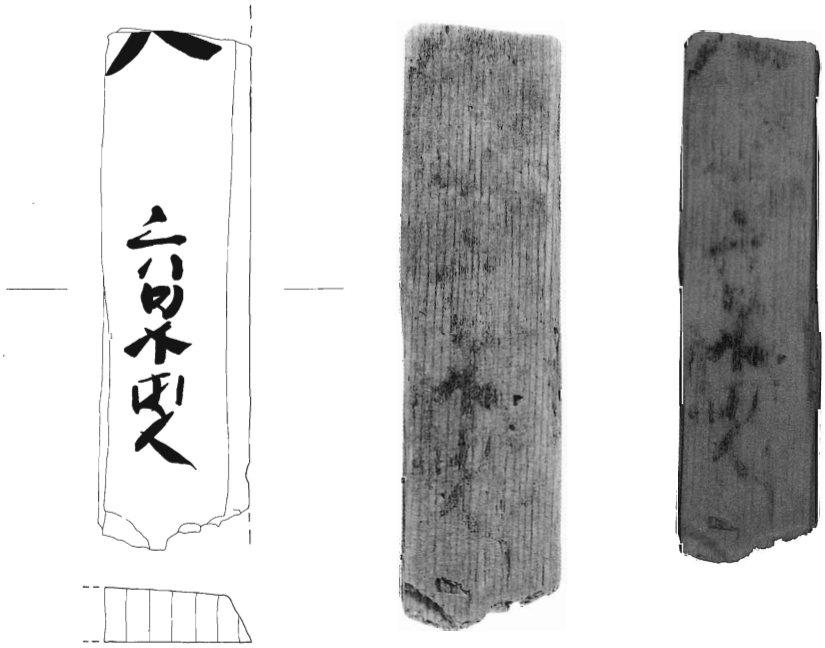


四八号木簡

□六日下田人

(69)×(20)×7

081



四九号木簡

「六七八九十□　十一十二」

「　」

(159)
×
(25)
×
2

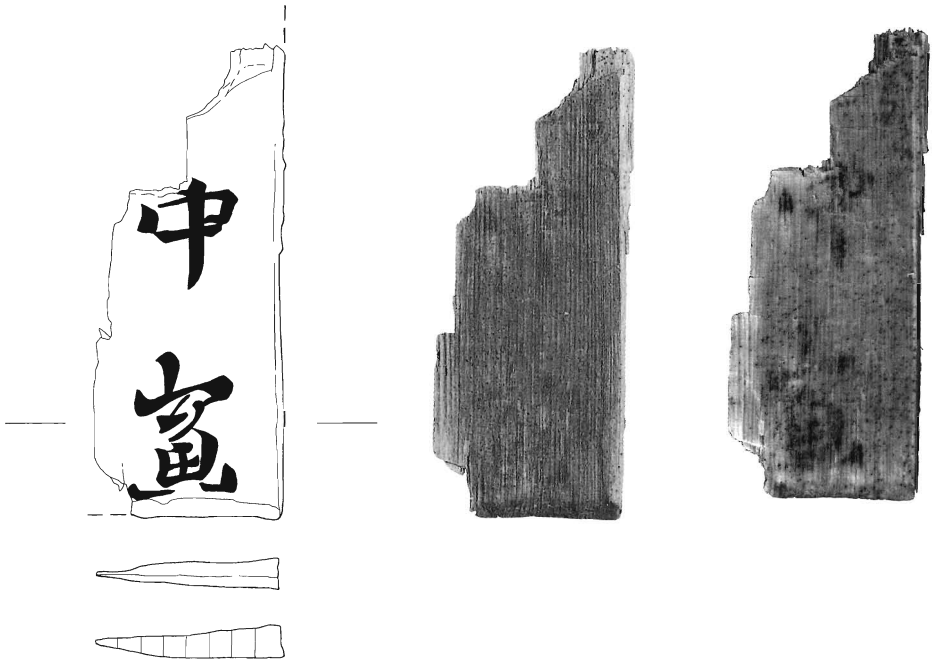
081

五〇号木簡

中
寅」

(63)
×
(26)
×
4

081



五一号木簡

□□
〔伊努カ〕
・□□□□
□□□□

男十一
・□十七
□

(110)
×
(50)
×
7

081

※アミは焼け

五一号木簡

五二号木簡

「伊丈マ奈次丸」

123
×
23
×
4

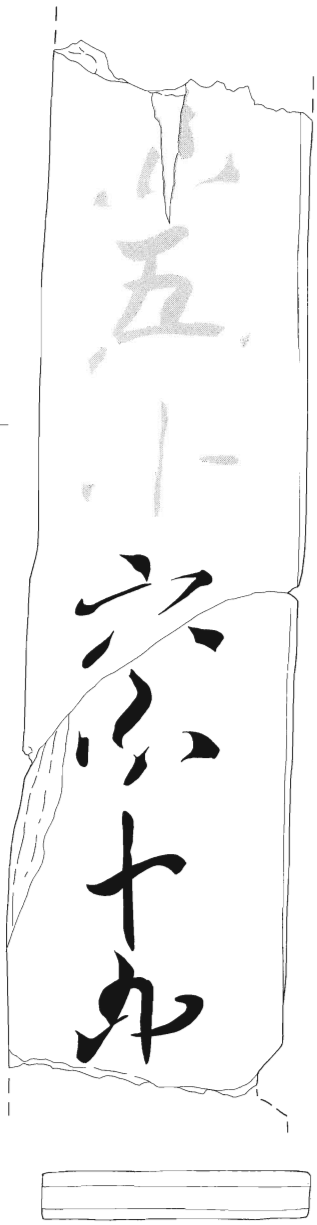
051

五三号木簡

□五〔束カ〕束六束十束く

(138)
×
35
×
6

039

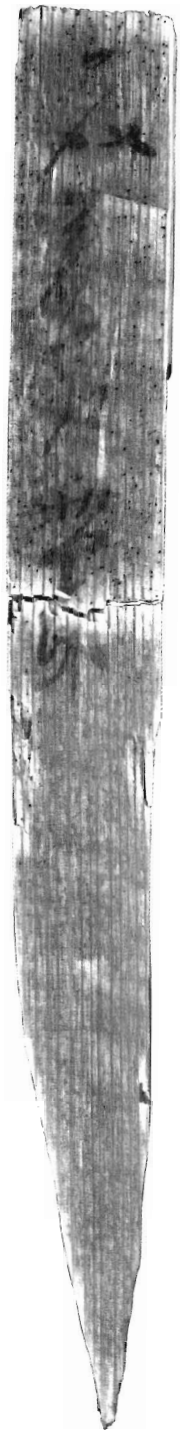


五四号木簡

「美若和マ帯取」

185×21×3

051



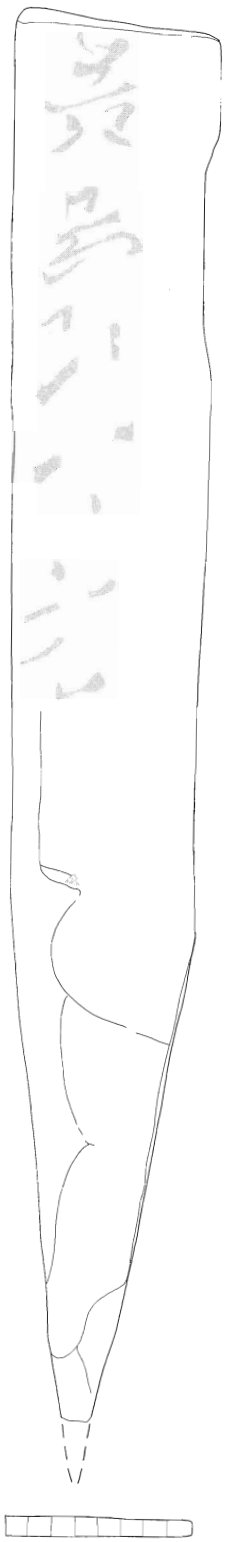
五五号木簡

〔鳥取マカ〕

「美□□□「　」」

(186)×27×3

051

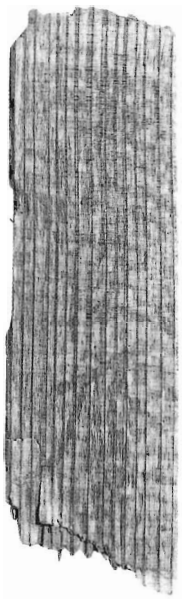


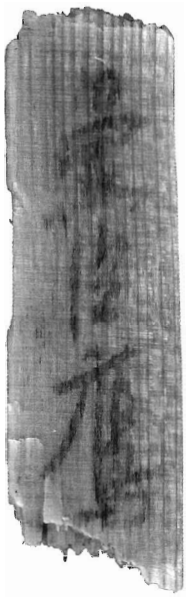
五六号木簡

日置臣鷹

(79)×21×3

081



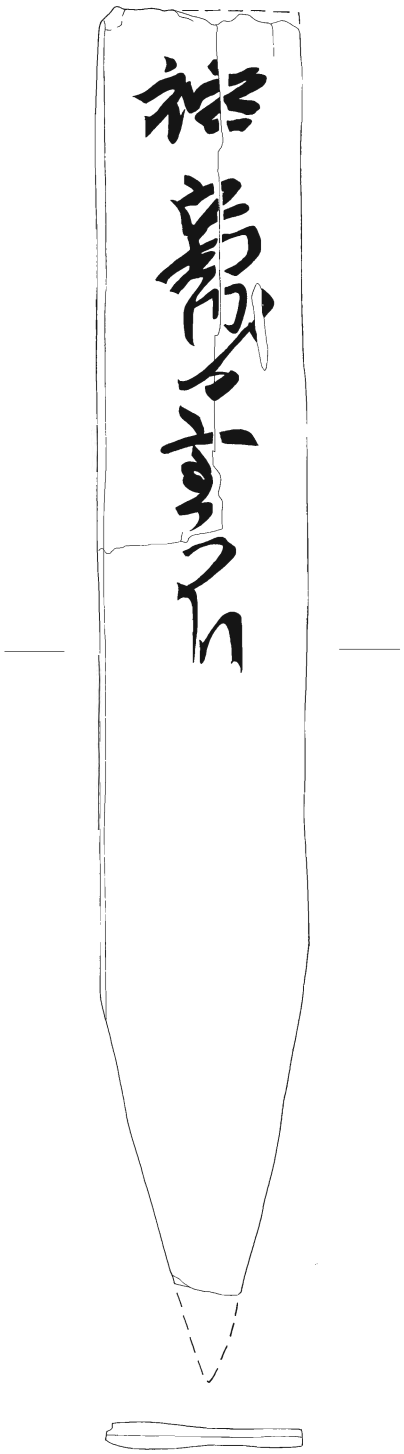


五七号木簡

「神鳥取マ主万呂」

(170)×27×4

051



五八号木簡

「伊和文マ浄刀自女
(119)×20×6
019

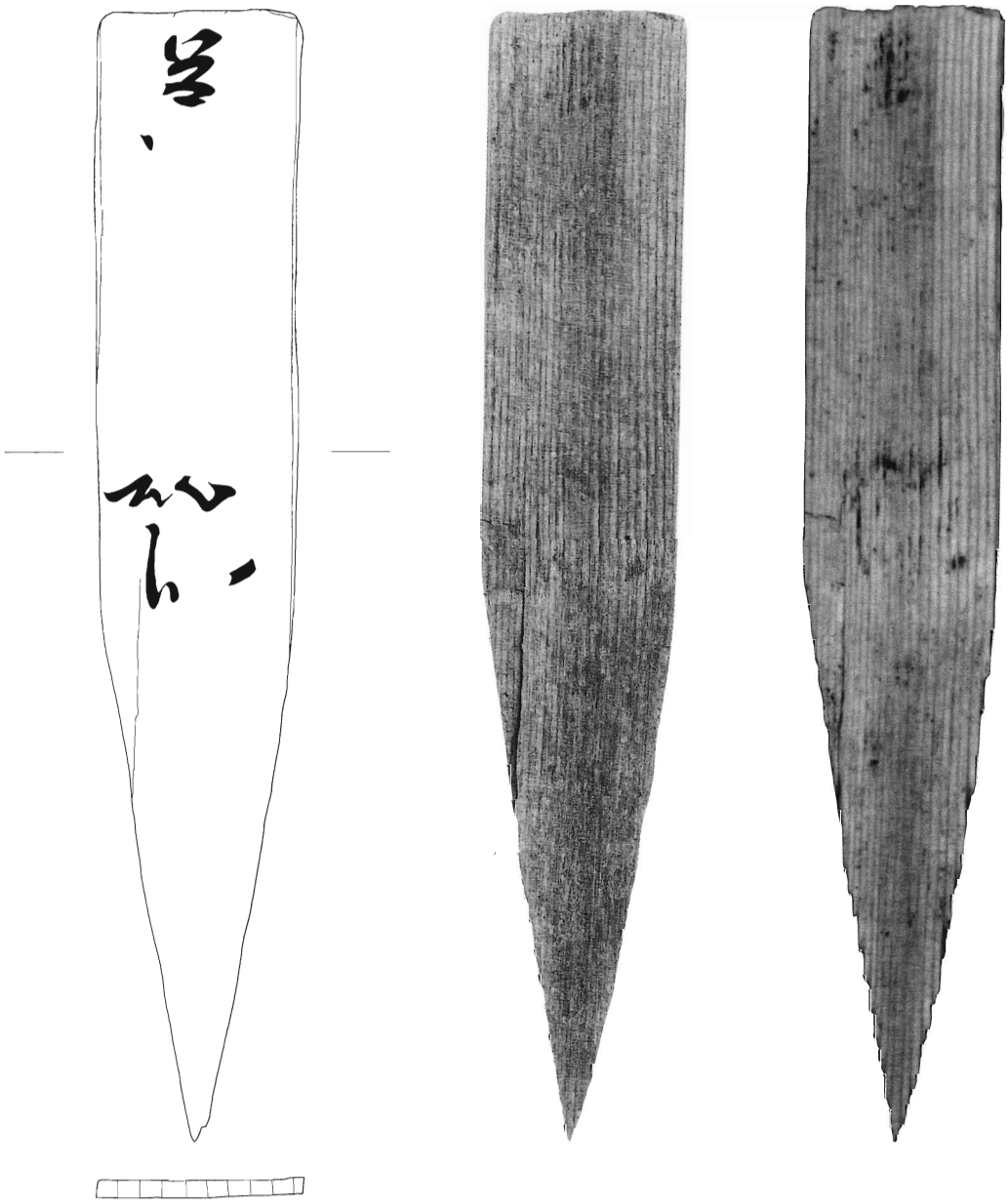
五九号木簡

144×28×3

051

〔美カ〕

［□［　］］

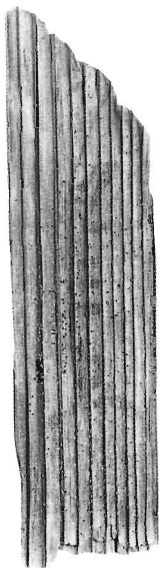


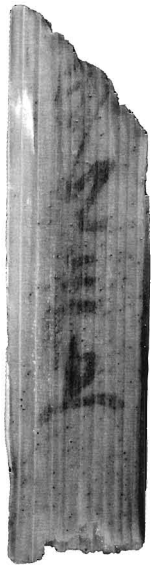
六〇号木簡

〔財カ〕
□マ三上

(75)×20×1

081



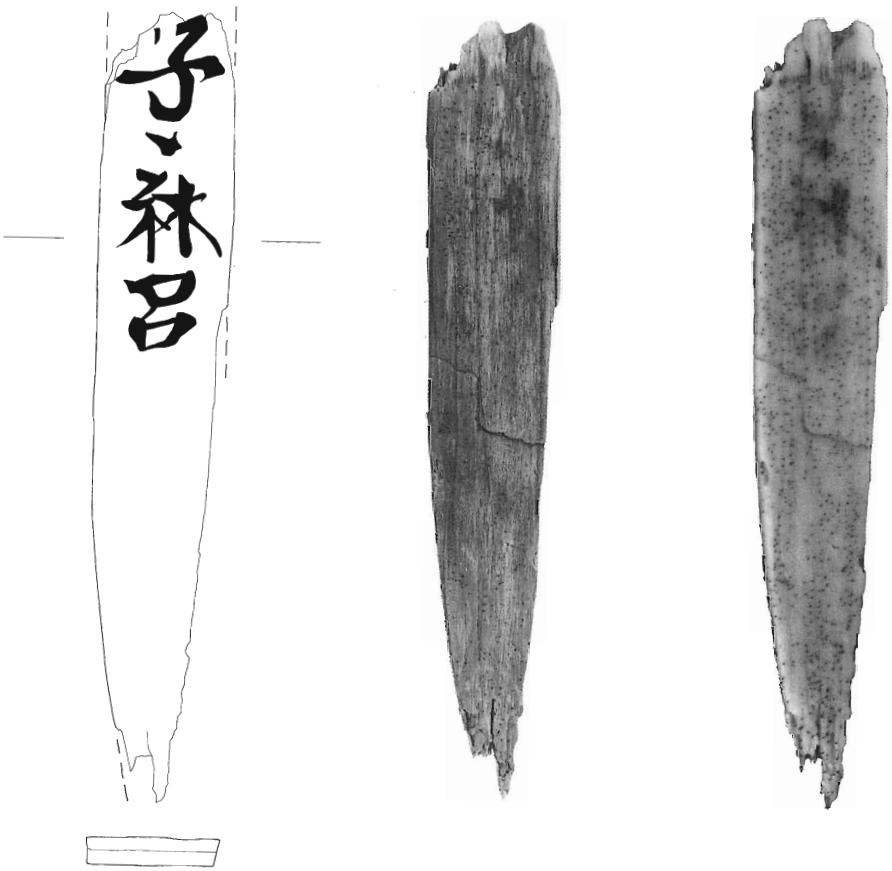


六一号木簡

「子麻呂」

(106)×17×3

059

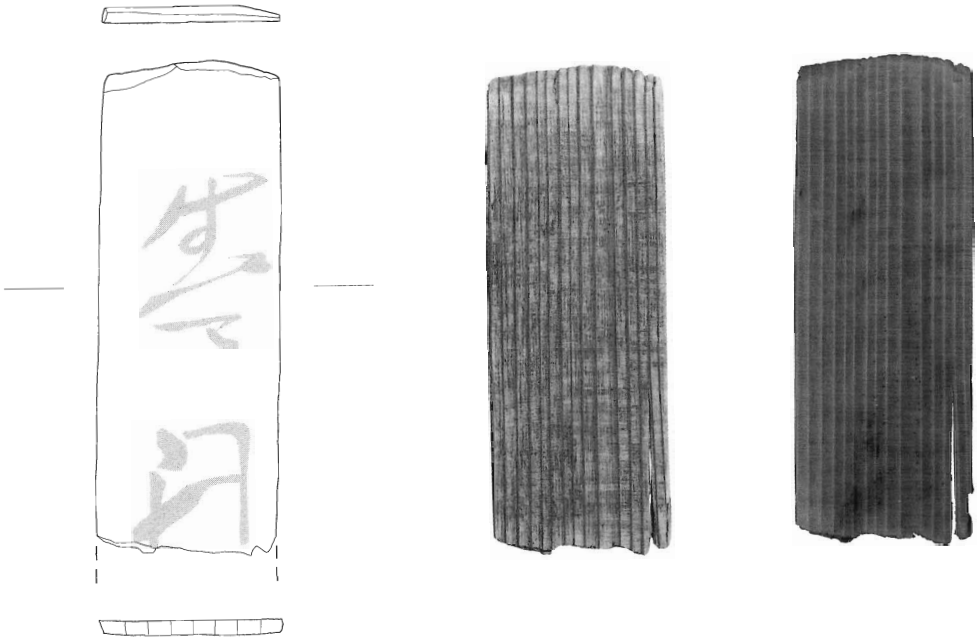


六二号木簡

「生マ□

(65)×24×2

019

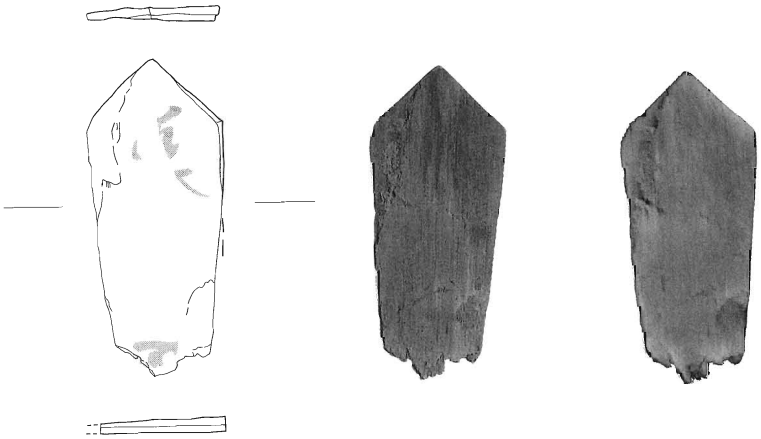


六三号木簡

「□□〔美カ〕

(42)×(18)×2

019

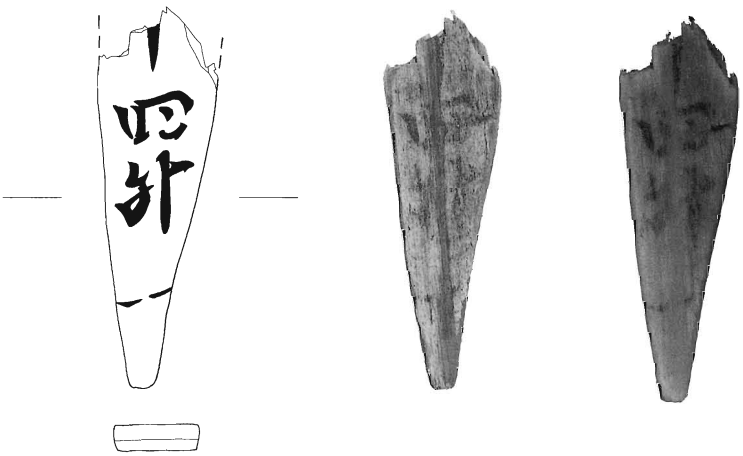


六四号木簡

□四升二〔斗カ〕」

(52)×(16)×4

059



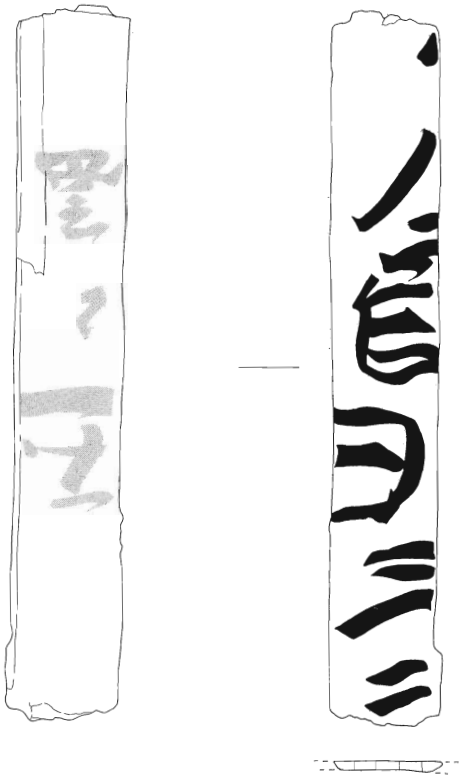
六五号木簡

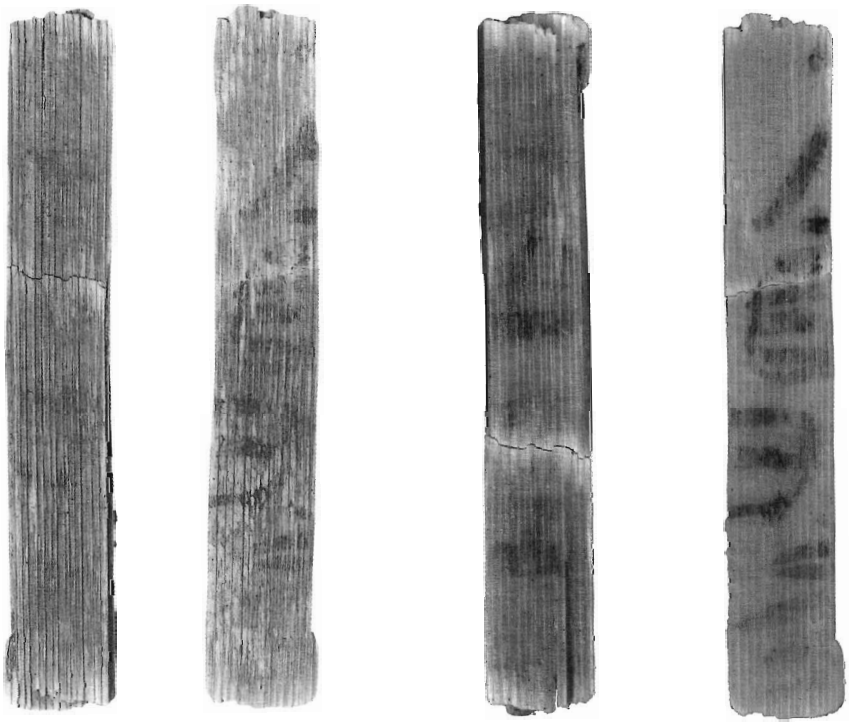
・□□□

・□□□□

(95)×(15)×2

081



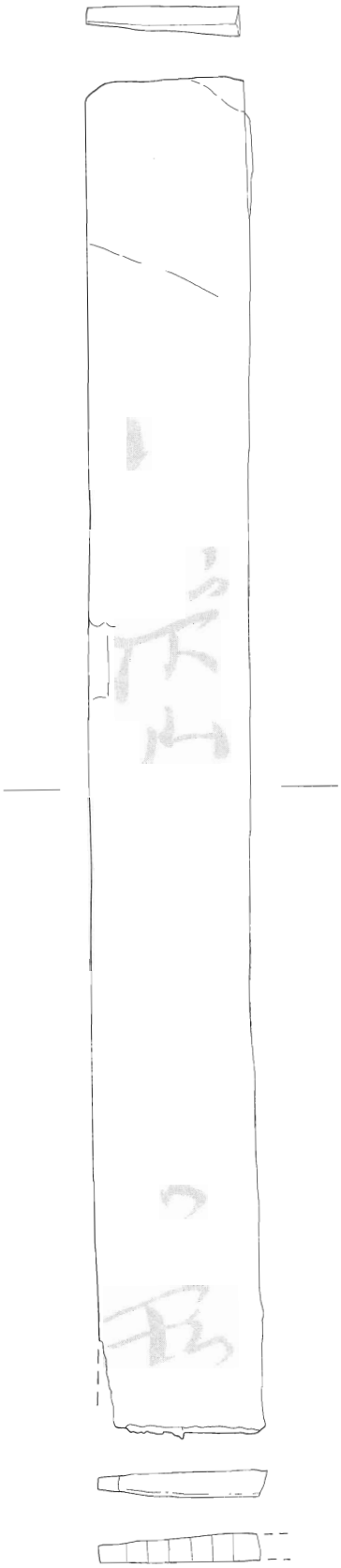


六六号木簡

「　　」

191×23×4

019

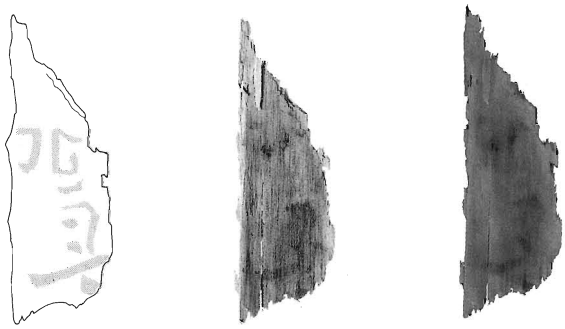


六七号木簡

□
□

(41)
×
(13)

091

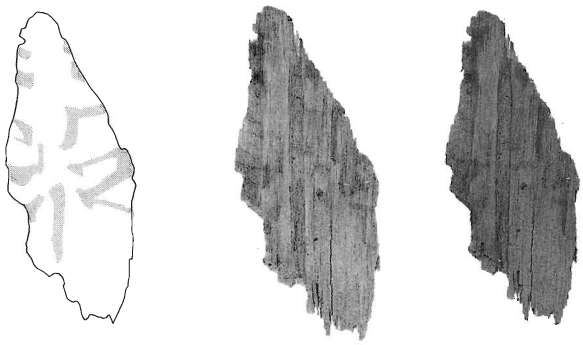


六八号木簡

□□
□□
□

(41)
×
(17)

091



六九号木簡

□□□〔御取カ〕

(55)×(19)×5

081

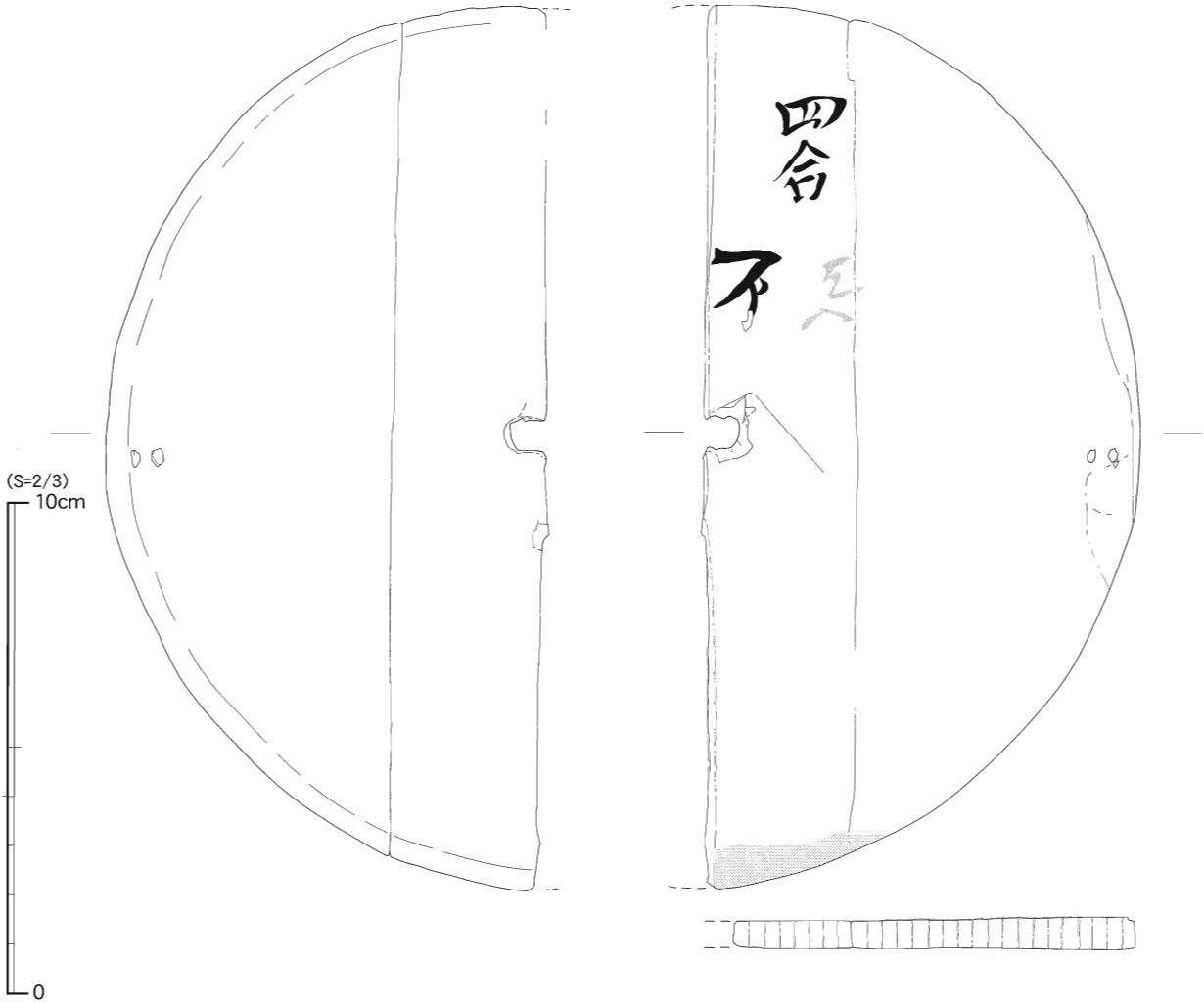
七〇号木簡

（符籙・絵画か）

(126)×(19)×4

081

七一号木簡

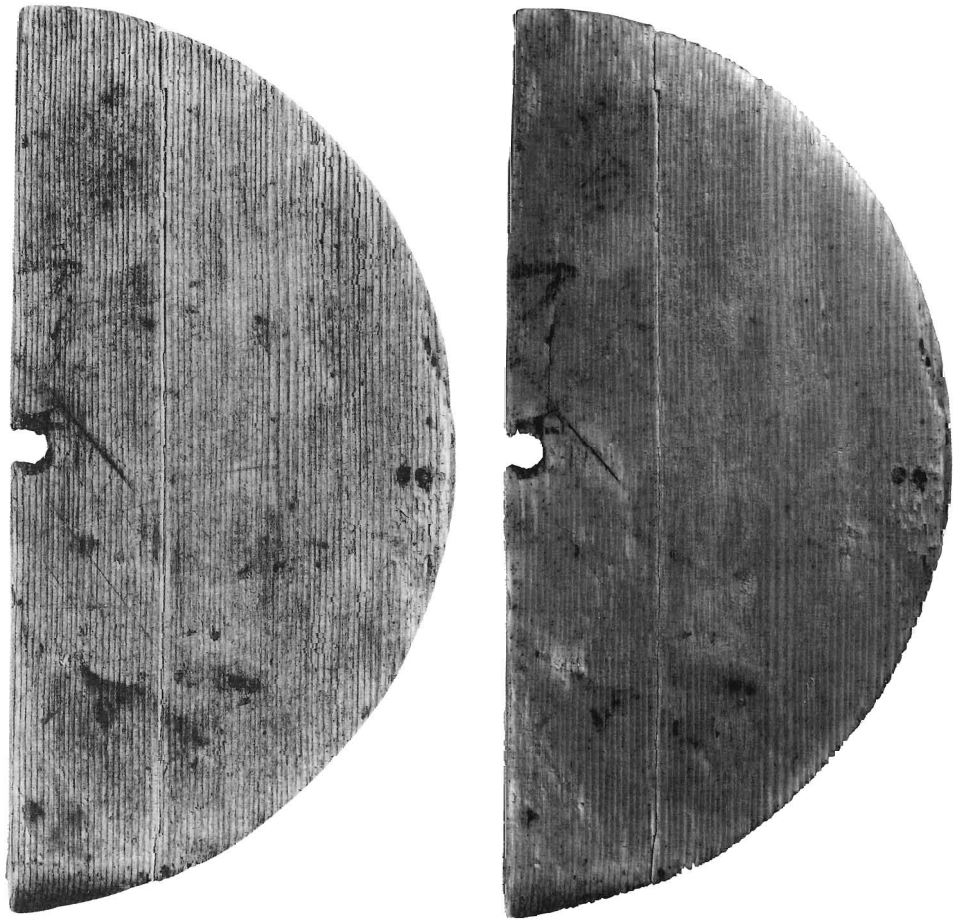


四合

『不』　〔五合カ〕□□

180×(89)×7

061

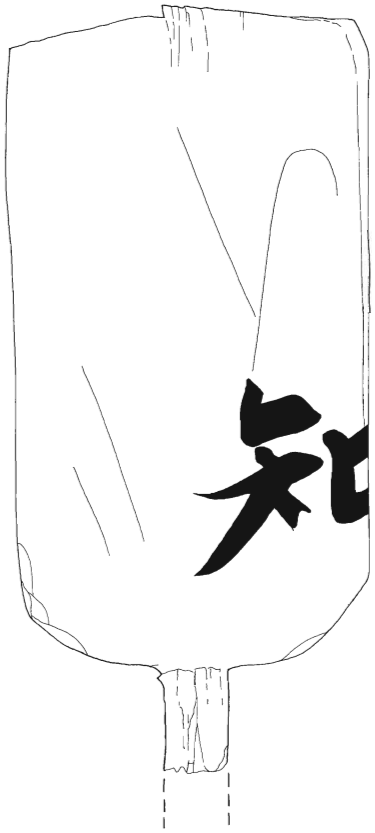


七二号木簡

(102)
×
47
×
6

061

・「□
・「□知

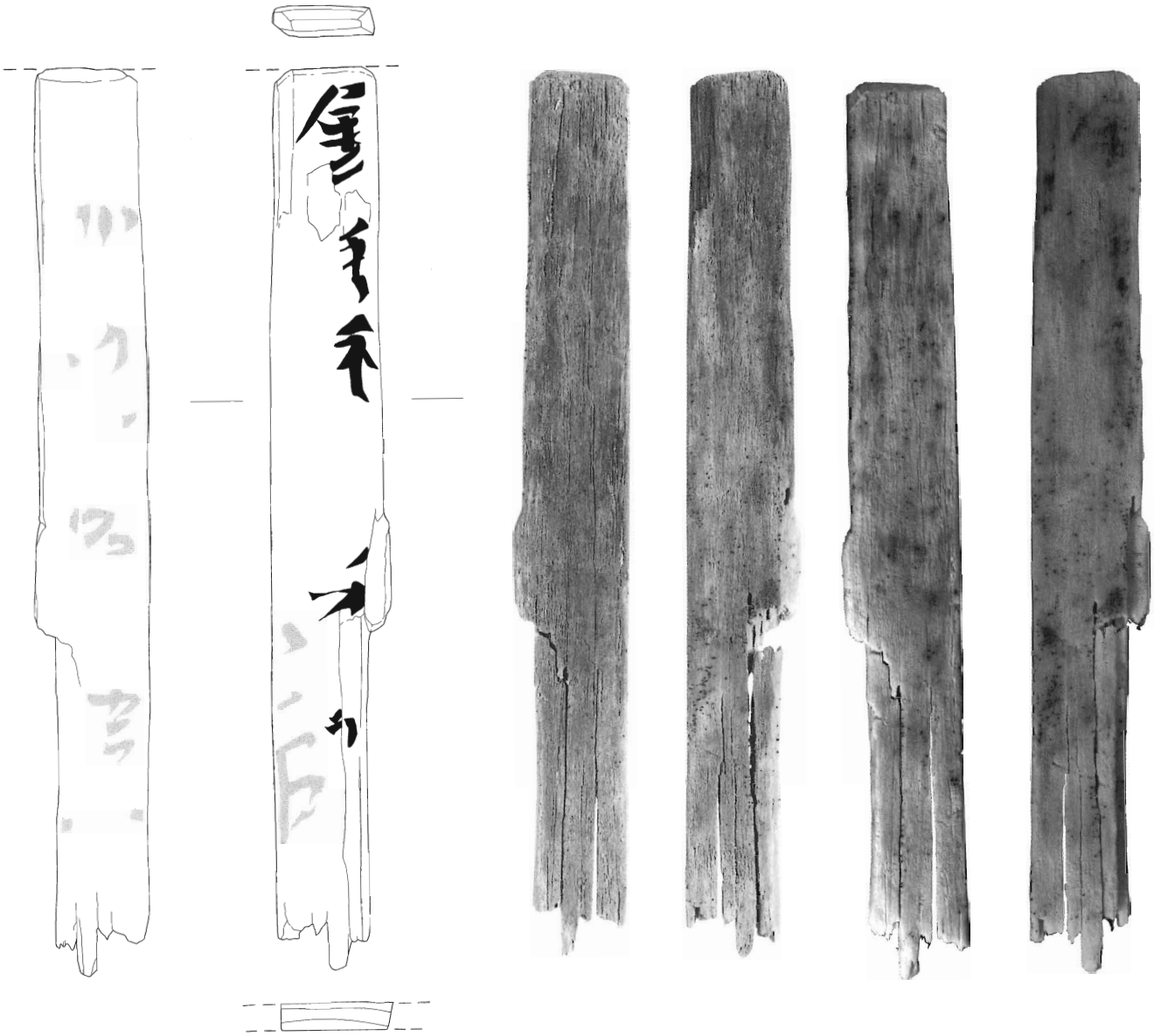


七三号木簡

・「□□□「□□」」
・「「　」」

(137)
×
(16)
×
4

081



七四号木簡

〔伊海カ〕
「□□マ加津女」

240
×
23
×
4

051

七五号木簡

「□□倭□〔海若カ〕〔マカ〕馬手」

(217)×26×4

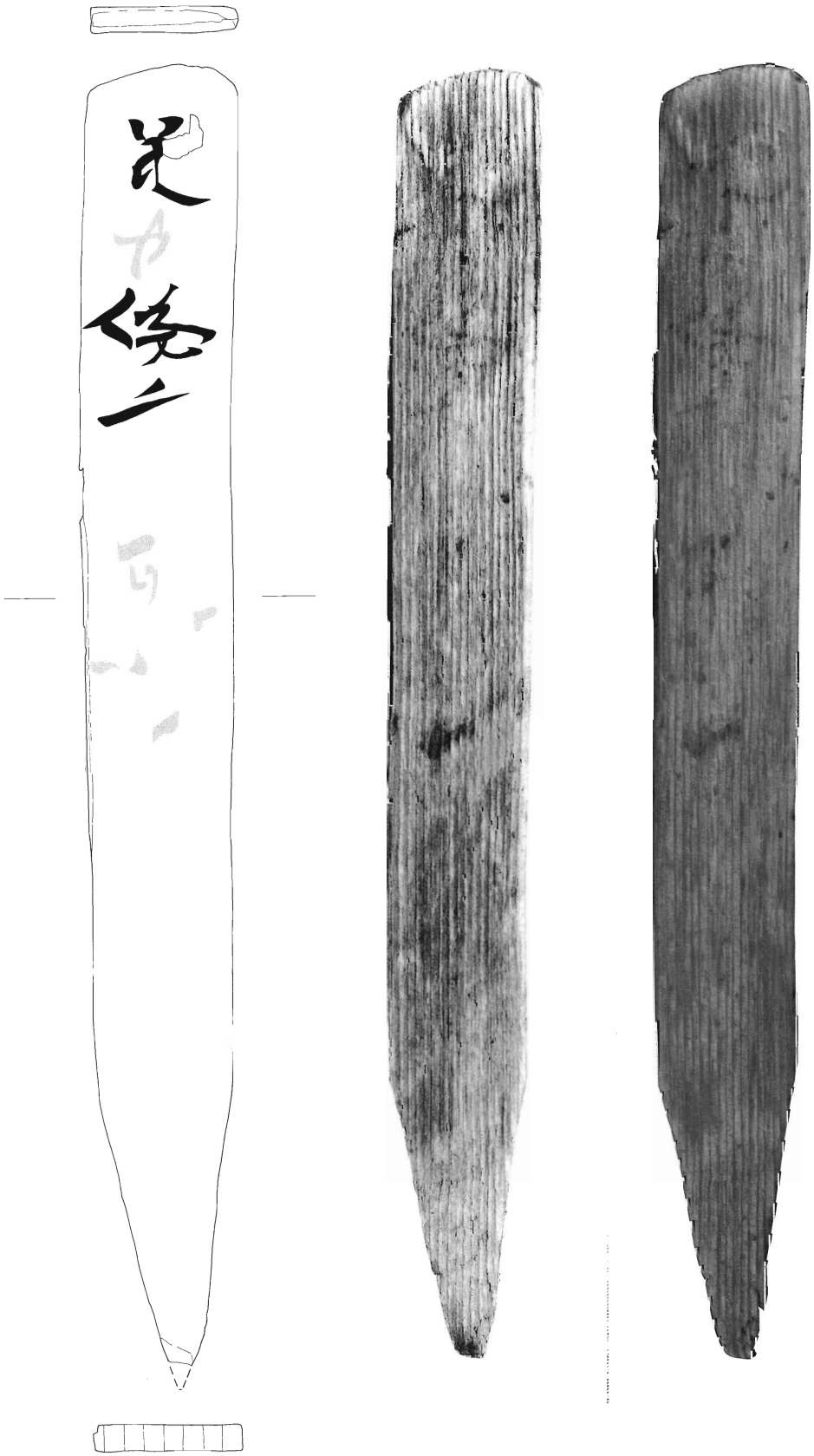
051

七六号木簡

「□□倭□□□」〔美カ〕

198×23×4

051

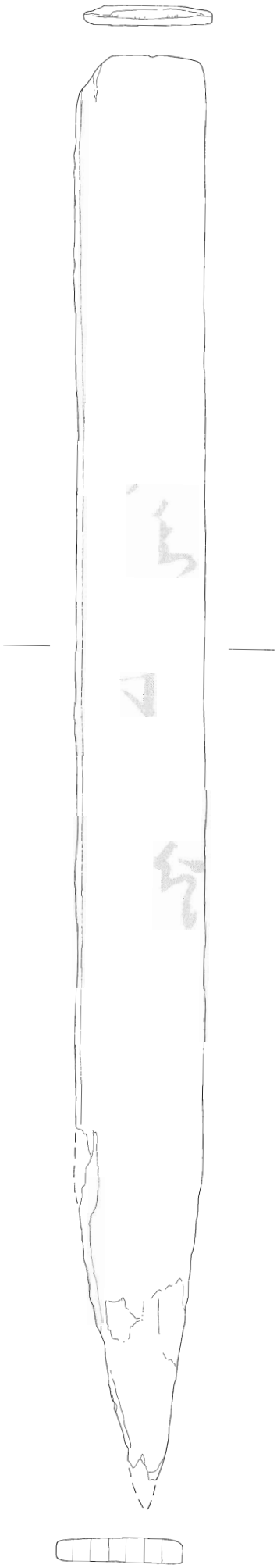


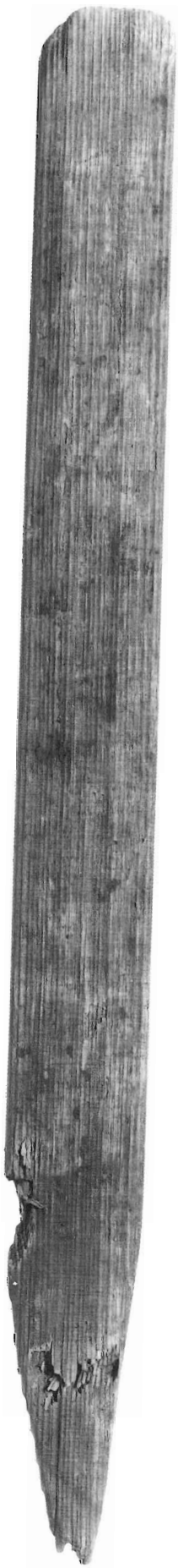
七七号木簡

「　　」

(241)
×
21
×
4

051





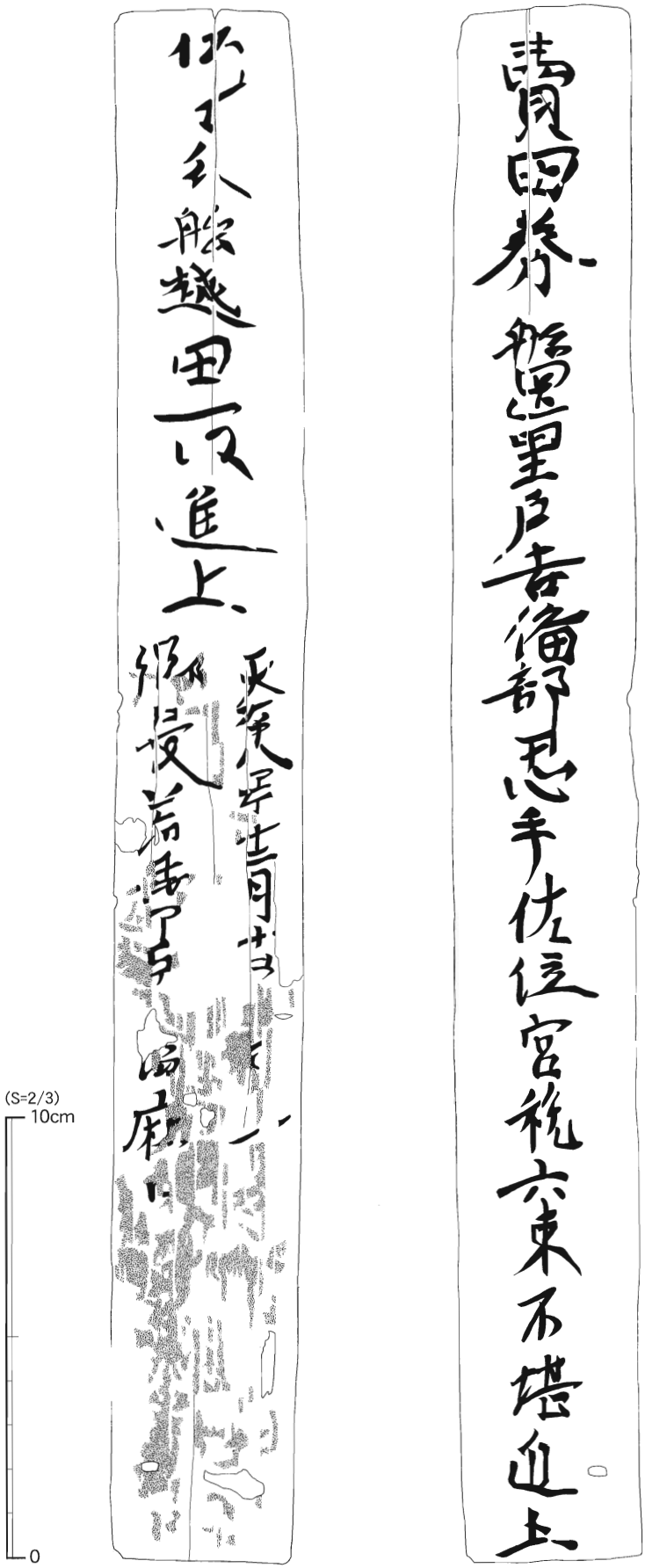
七八号木簡

・「売田券　船岡里戸吉備部手忍手佐位宮税六束不堪進上」

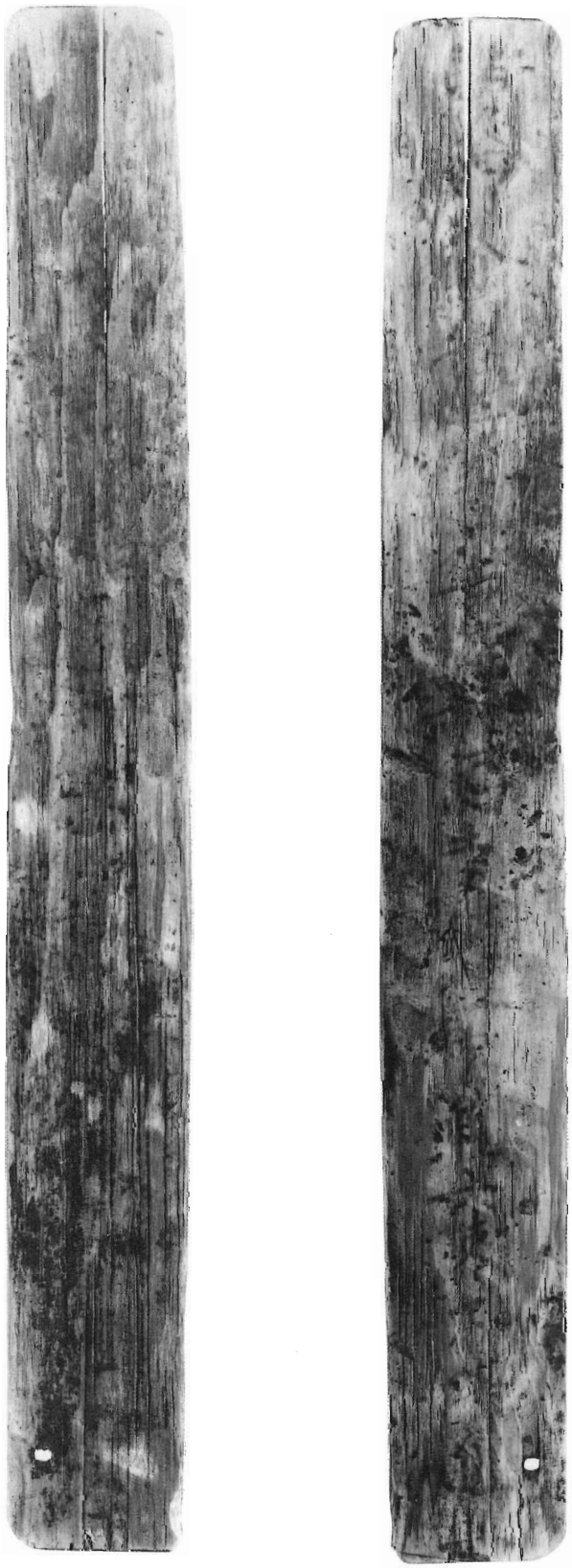
・「仍□□〔口分カ〕船越田一段進上　天平八年十二月十日〔　　〕
□長若倭マ臣□麻□〔郷カ〕〔呂カ〕。〔　　〕」

352
×
42
×
4

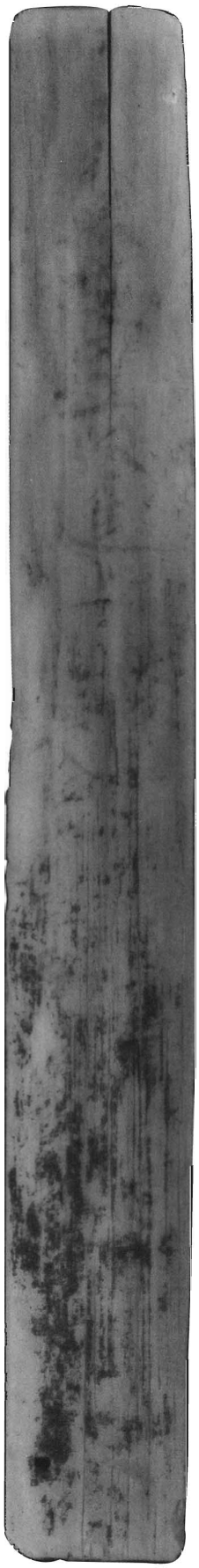
011



七八号木簡



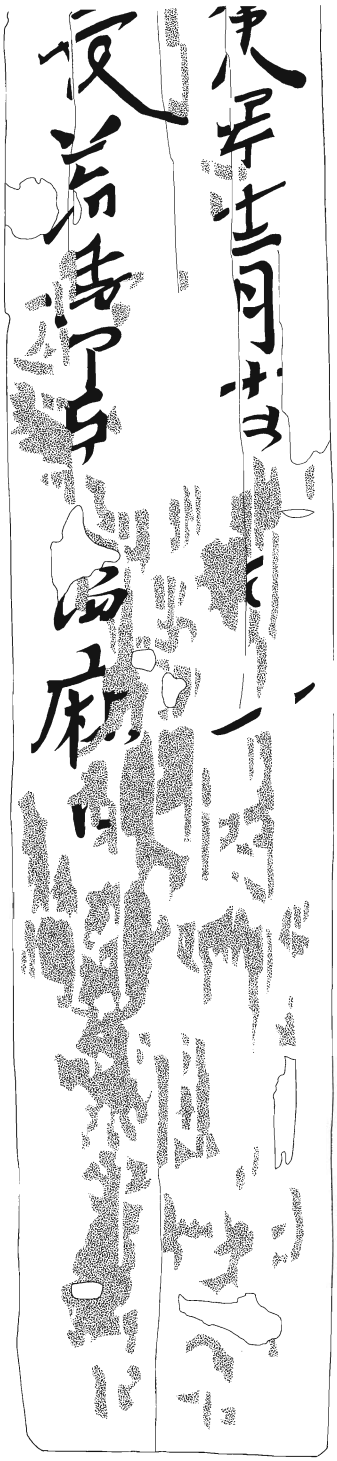
七八号木簡



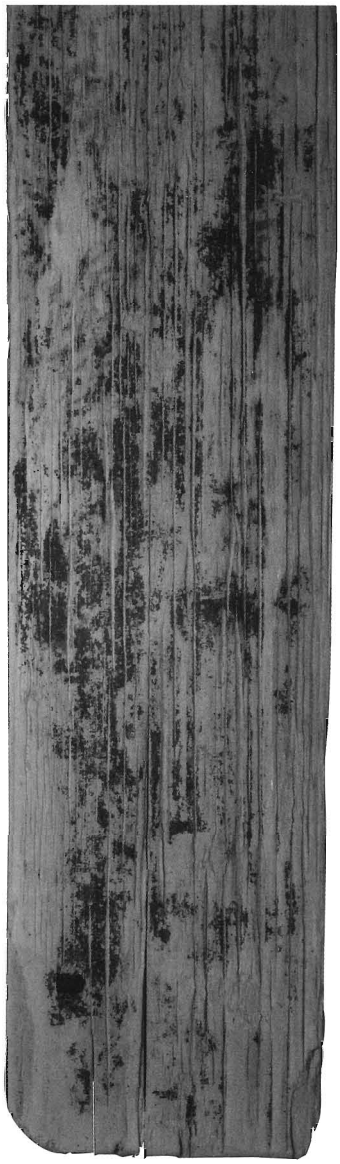
七八号木簡

七八号木簡

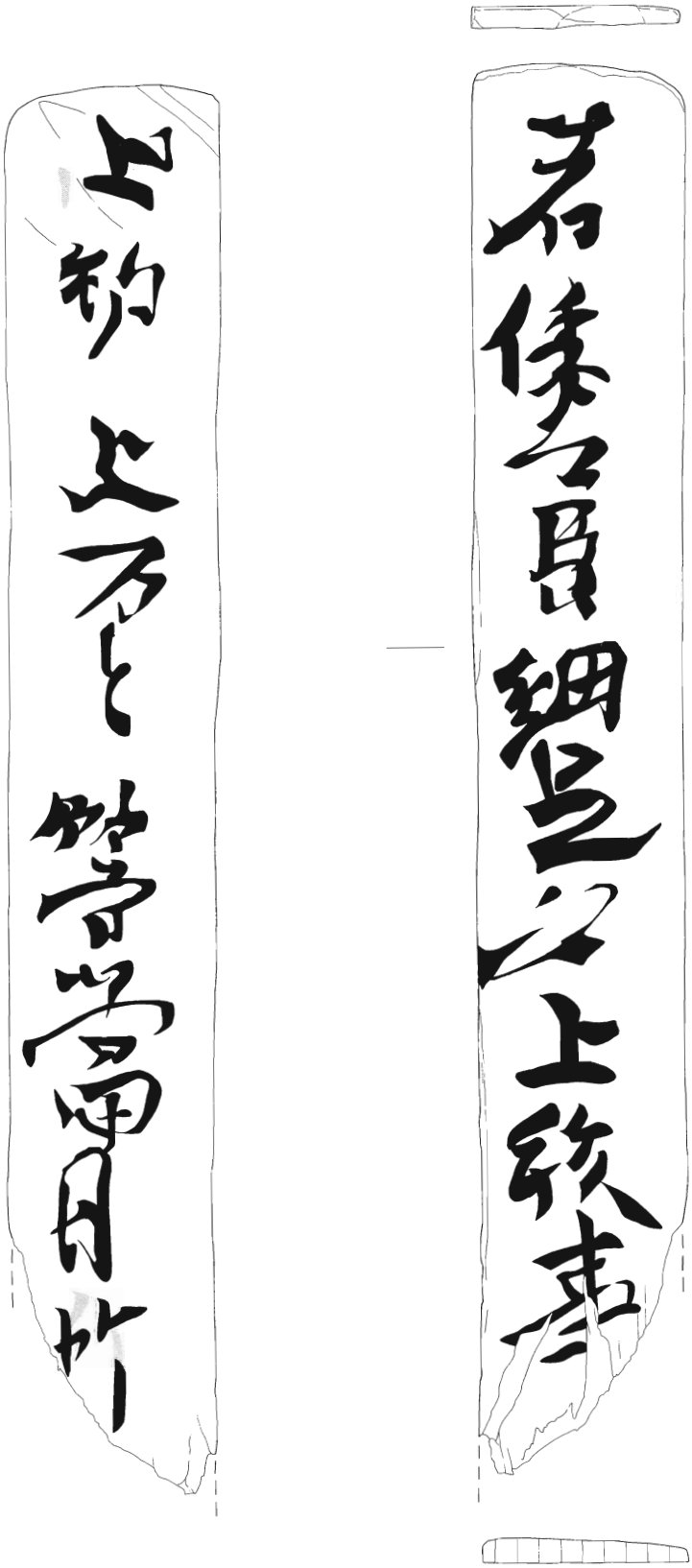
七八号木簡



七八号木簡



七九号木簡

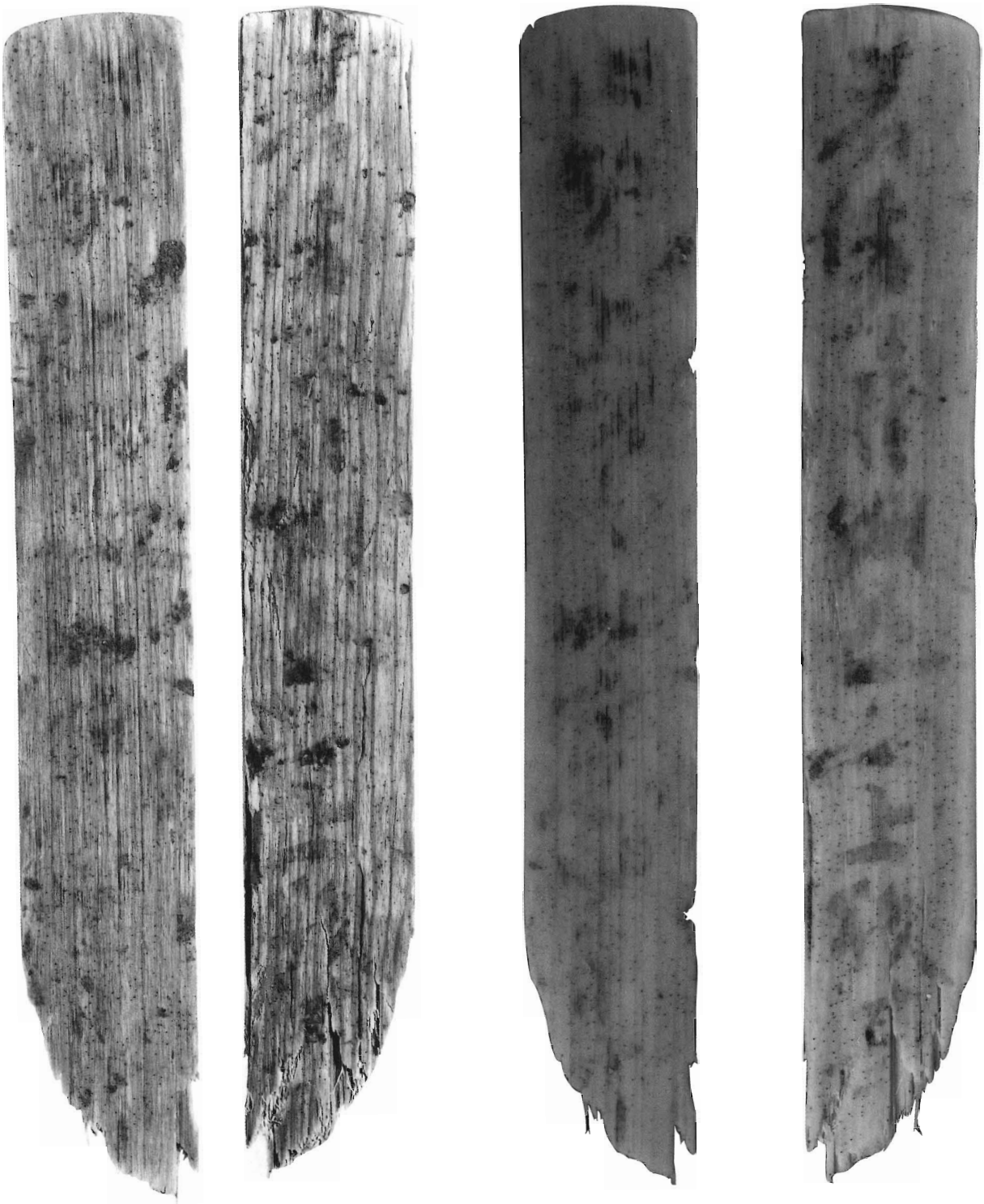


・「若倭マ臣細足以上税事
・「上物上万呂等當月斬

(196)
×
28
×
3

019

七九号木簡

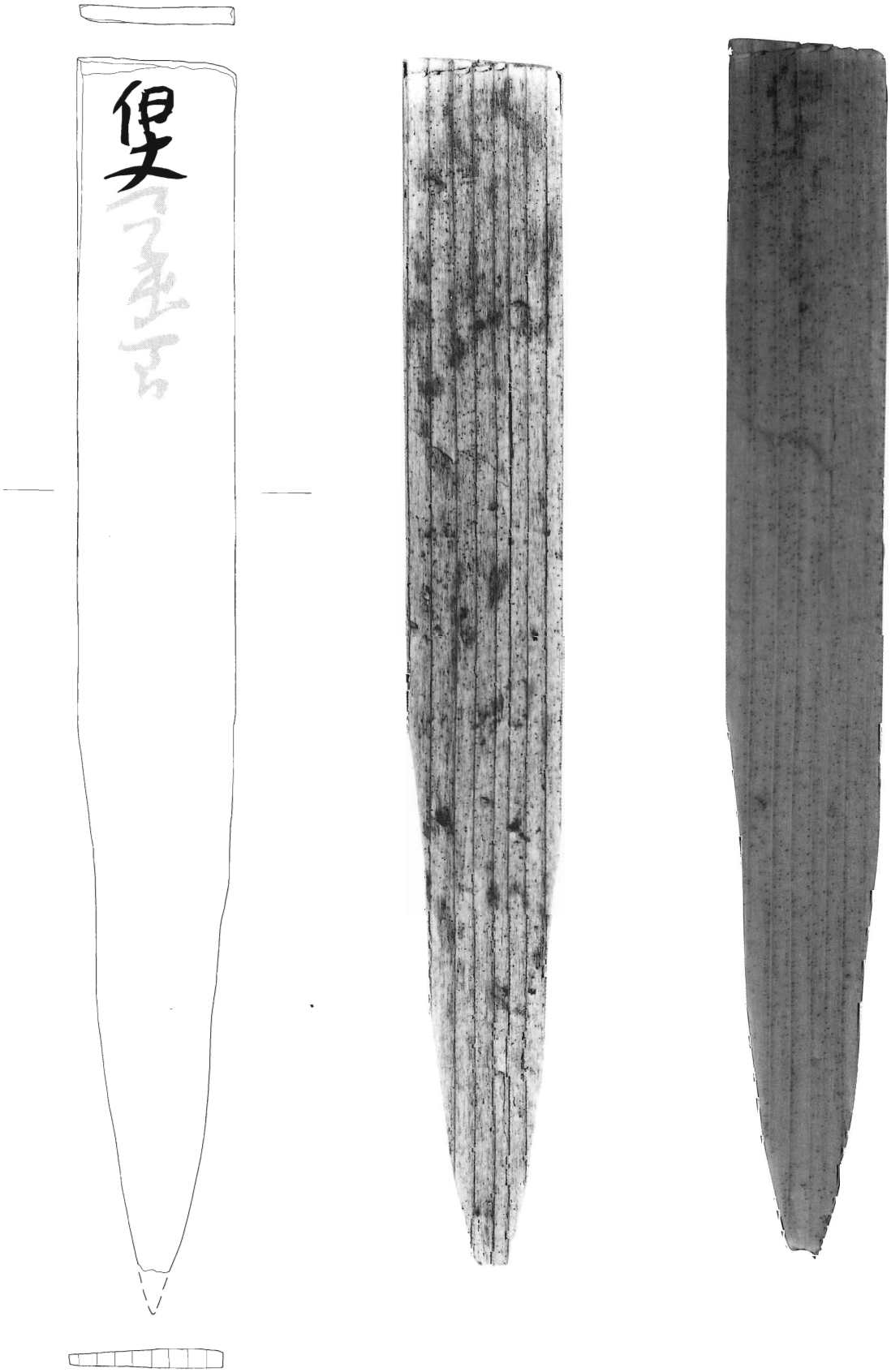


八〇号木簡

「伊丈マ乙虫万呂」

197×28×3

051

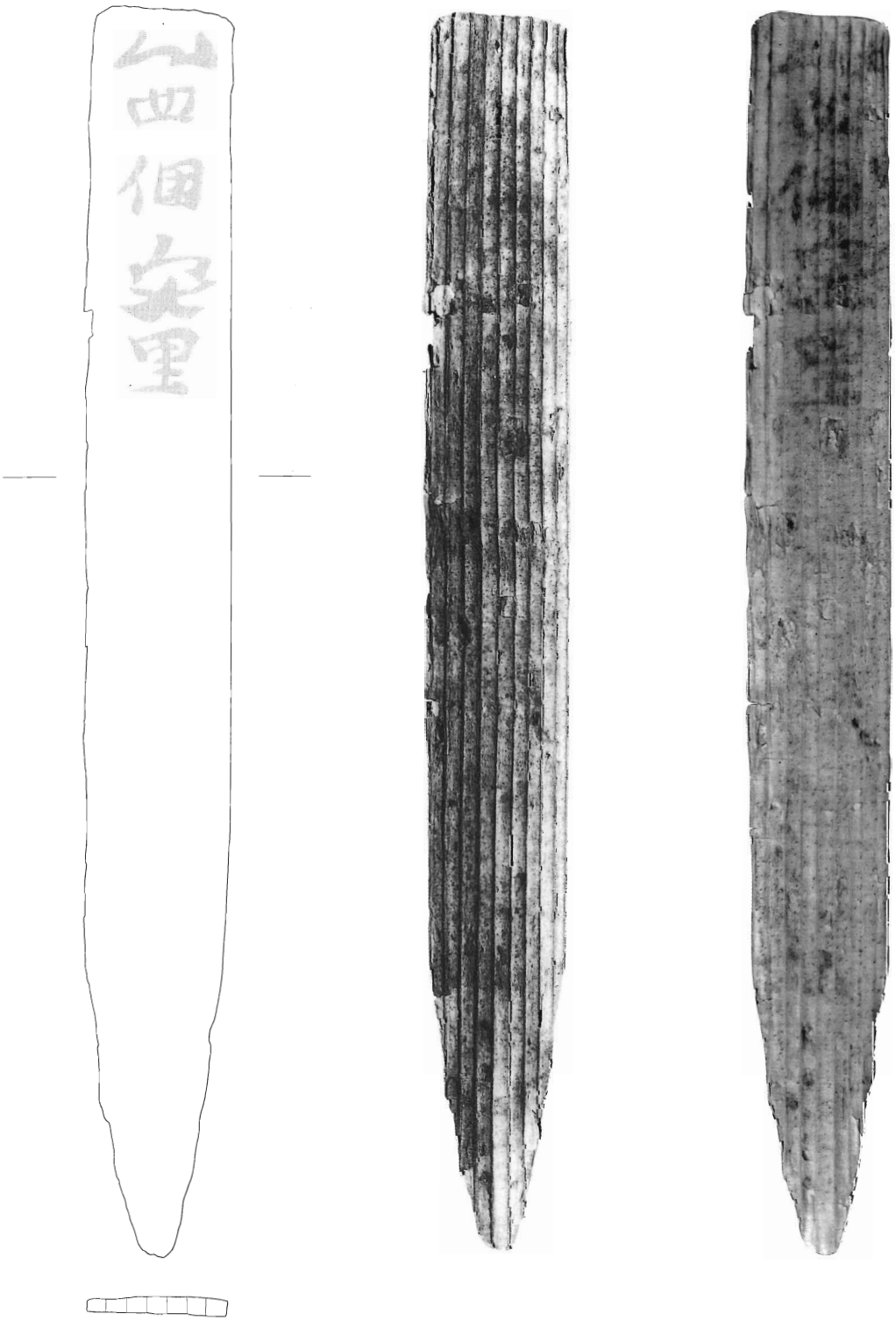


八一号木簡

「□□□安里」

188×22×2

051

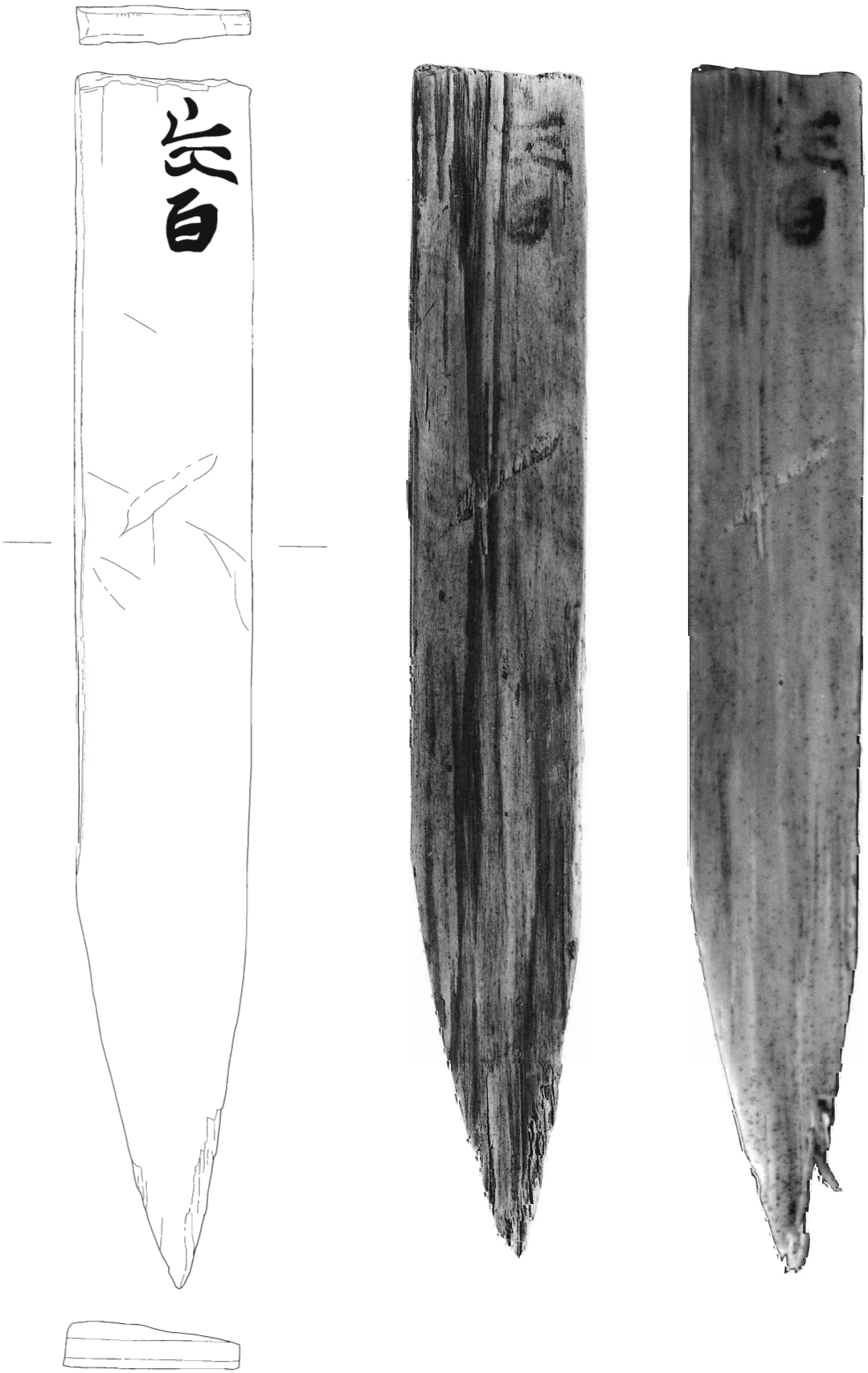


八二号木簡

「宍百」

200×30×5

051



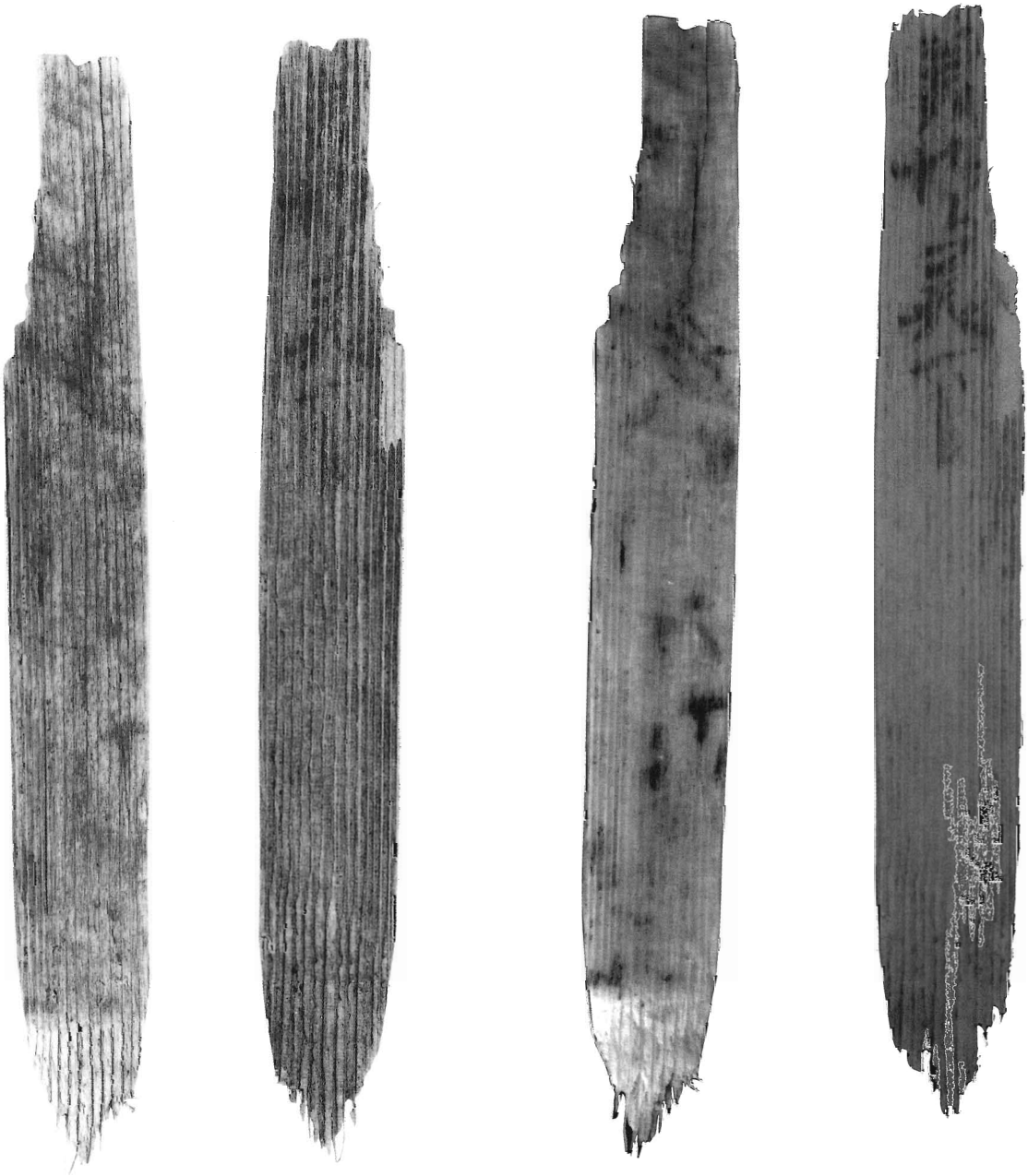
八三号木簡

・「美□マ美万呂」
・「『　』」

162×21×2

051

八三号木簡

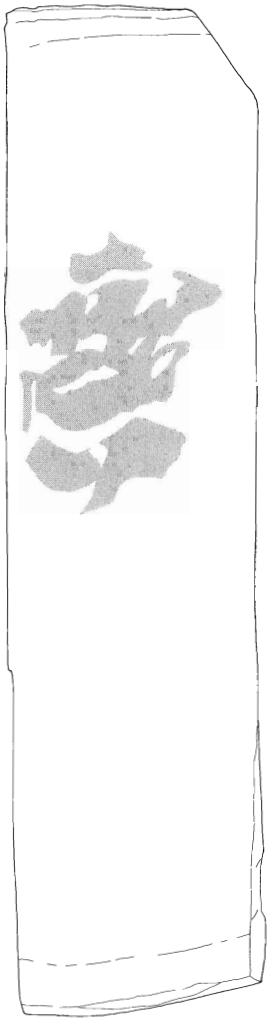


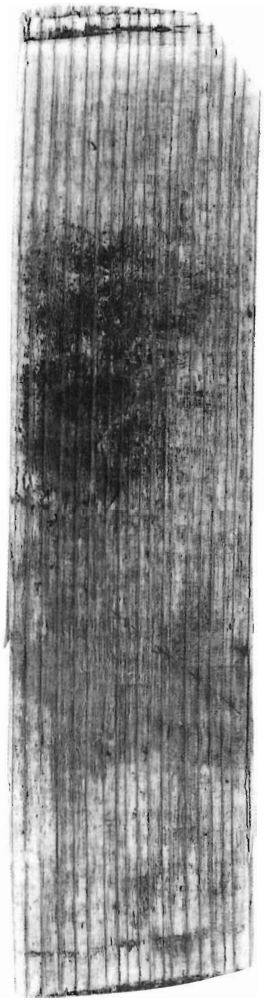
八四号木簡

□（墨痕）

(132)×(33)×5

061





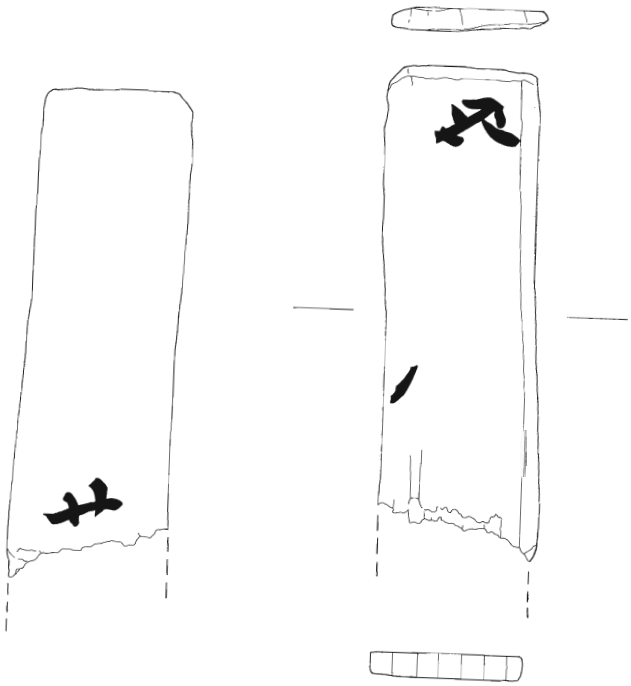
八五号木簡

・「□□

・「□〔廿カ〕

(63)×20×3

019

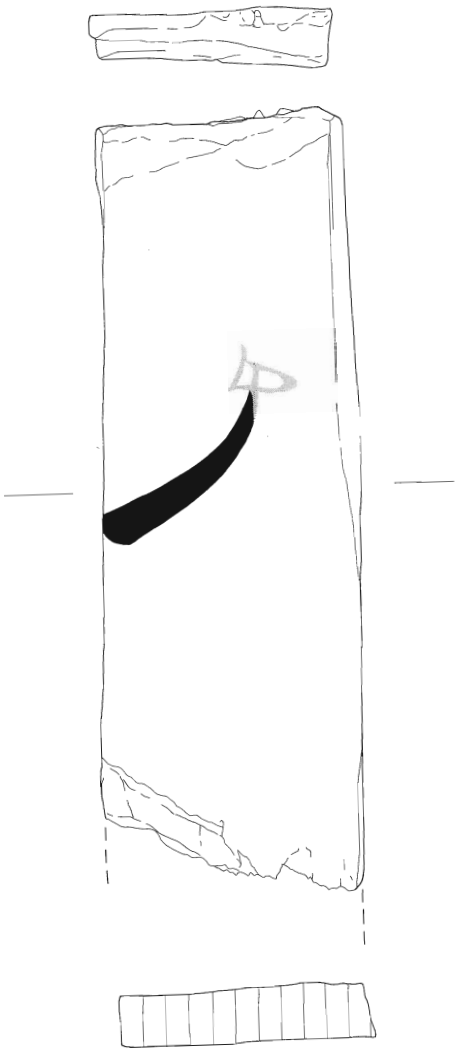


八六号木簡

(103)
×
34
×
7

□
□
□

019



第２節　木簡の詳細

１．はじめに

以下は、青木遺跡出土の古代木簡86点の報告である。平成14年度の発見以来、平成15年度中を通じて木簡が発見され、木簡についても釈文を中心にいくつかの雑誌等で公表がなされているが（今岡2003、今岡･平石2004、平石･松尾2004、榎村2005）、今回の報告が遺跡の発掘調査上得られた知見の最終報告である。
法量・形状は出土時点の記録であり、釈文と観察状況は、断りのない限り保存処理終了後の観察記録である。

また釈文については、基本的に平成17年12月16日に実施した青木遺跡木簡検討会（指導者　佐藤信：東京大学文学部教授、平川南：国立歴史民俗博物館館長、渡辺晃宏：奈良文化財研究所資料調査室長）の結果を受け確定したものであるが、その後の検討による見解については（平石）として明記した。

木簡の出土状況については前章第１節で述べており、特に必要なもの以外は記述していない。遺構外出土木簡については、取り上げグリッド名を木簡番号の後に記載した。なおグリッド出土木簡で「○溝」と記載される溝は、調査にあたって掘られた調査区周囲の排水溝（第４図）である。

２．凡例

木簡の部位と名称

木簡の記載可能な平坦面は、片面のみの記載の場合文字記載がある側をオモテ面、ない側をウラ面とした。両面に記載がある場合も表裏関係がわかる場合はオモテ・ウラで表記し、表裏不明な場合は記載内容の明瞭な側を仮のオモテ面としてＡ面と呼び、不明瞭な面を仮のウラ面としてＢ面と呼称している。

28～120頁の実測図・写真図版では、本来タテ書きの木簡を理解しやすいようにタテ書き書式に準じオモテ面・Ａ面を右側に配置しているので注意されたい。釈文は、縦書き横書きいずれの場合もオモテ面・Ａ面を先に記載している。

木簡の上下左右についての記載は、断りのない限りオモテ面・Ａ面の文字を正位で読める状況を基準に記載している。図・写真の縮尺は実寸で、それ以外のものは特記している。

釈　文

記載様式等は『木簡研究』（木簡学会編）の記載様式に準じている。ただし、本来縦書きの木簡を横書きとしているため、正確な文字の配列関係については木簡図版を参照いただきたい。
釈文の漢字はおおむね現行常用体に改めているが、「廣」「縣」「當」は正字体を使用し、「マ」（部の異体字）はそのまま異体字を使用している。

釈文に用いた符号

本遺跡の木簡釈文については、以下の符号を用いている。※本遺跡出土木簡の表記に必要な記号のみ掲載

「　　」　木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す
＜　　木簡の上端・下端に切り込みのあることを示す。
○　　穿孔のあることを示す。ただし木簡使用と異なる用途による穿孔は省略（木製品使用時の穿孔など）。
□□□　欠損文字のうち字数の確認できるもの。
［　］　欠損文字のうち字数の数えられないもの。
『　　』　異筆、追筆。
・　　木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。
〔　　〕　校訂に関する注で、横組みの場合は釈文の上傍に付す。縦組みの場合は原則として右傍に付すが、

本来の釈文の割付を阻害する場合、左傍に付す。本文に置き換えるべき文字である。

（　　）　上以外の校訂注及び説明注。

カ　　筆者・編者が加えた注で疑問の残るもの。

木簡の法量

釈文の一段下のアラビア数字は木簡の長さ×幅×厚さの表記である。単位は㎜で、いずれの数値も最大値である。() 付の数字は欠損している資料の現存の法量である。

木簡の型式番号と形態

『木簡研究』（木簡学会編）の型式名を、前述法量の後に3桁の数字で記載する。

011型式　短冊型。

019型式　一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。

039型式　長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

041型式　長方形の材の一端を削り、羽子板の柄状に作ったもの。

051型式　長方形の材の一端を尖らせたもの。

059型式　長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

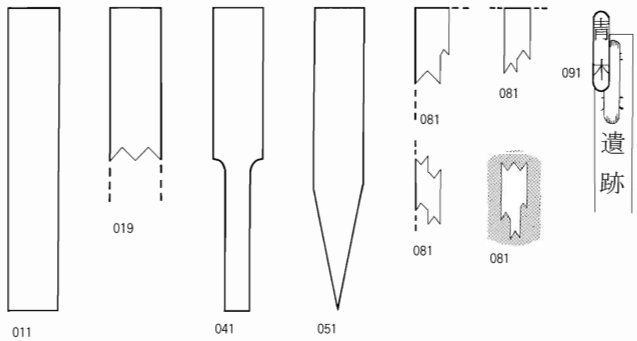
061型式　用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

065型式　用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

081型式　折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

091型式　削屑。

※本遺跡で出土した型式の説明のみ掲載している。



第12図　木簡の型式概念図

木簡の整形・調整の記載について

木簡の加工・調整痕跡については山中章氏の分類によって表記している（山中1993）。

また、樹種鑑定の結果は本書第17章の分析結果によっている。樹種の明記されているものについては、実測図・観察状況記載以外に樹種鑑定のためのサンプル採取痕がある。記載のない木簡については樹種鑑定を行っていない。

引用史料

記載上必要な引用史料は、以下の通り省略して表記している。

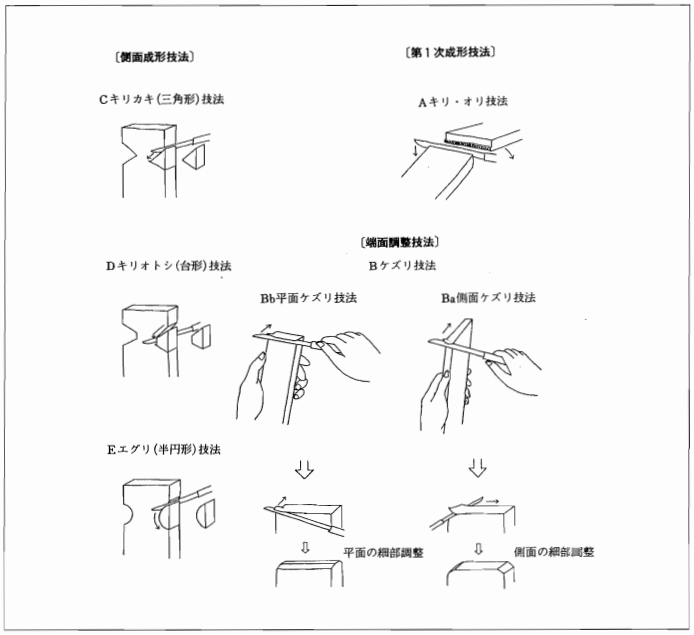
『木研』：『木簡研究』号数。

『大日古』：『大日本古文書　編年文書』巻数ー頁数。

『東南院』：『大日本古文書　家わけ第18 東大寺文書』巻数ー頁数。

『平概』：『平城宮発掘調査出土木簡概報』号数ー頁数。

『藤概』：『藤原宮発掘調査出土木簡概報』号数ー頁数。
『風土記』：『出雲国風土記』。加藤義成氏校訂の『出雲国風土記参究』（松江今井書店1957）のテキストを使用する。
『書紀』：『日本書紀』
『続紀』：『続日本紀』
「歴名帳」：天平11(741)年「出雲国大税賑給歴名帳」(『大日古』2-207-247)



第13図　木簡の成形・調整技法(山中1997より転載)

３．SX01出土木簡

１号木簡

①釈文と法量

□稲祀□□□宅マ

「　　」

〔以ヵ〕〔玉ヵ〕
□祓給造□人

97×41×10 065

②観察状況

枝を落としただけのヤマグワの幹を割った半円形の断面を呈する木材の、皮をはいだ生木の面に墨書した木簡である。上端･下端にはキリ痕跡があり、幹を縦に割り裂いたのち上下を切断して現在の形としたのであろう。２行目付近に平坦な部分があり、部分的にはカットグラス状ケズリによる調整が想定されるが、全体としては皮をはいだ曲面に直接墨書している。上端右側は欠落し墨書が切られているが、これは発掘作業時に生じた傷であり、本来は完形品である。樹種ヤマグワ。

③記載内容と木簡の性格

「稲祀」「祓給」など断片的に釈読できる部分から、また、果実類を納めた土師器甕と同時にSX01に埋納されたことなどから、祭祀に関わる記述と考えられる。土師器甕には果実が納められていたが、神祇令供祭祀条に「祭祀」に供するものとして幣帛・飲食と並んで果実がみえることからこれらは神饌に相当するものにあたり、「稲祀」「祓」に供されたのであろうか。また、直接祓いに関わるものではないが土器による疫神供応に当たっては、饗応の対象となる神、あるいは饗応の主体者が文字によって明示されることが知られており(平川2000)、本木簡も土器に入った果実の饗応対象やその主体者を明示するために作られた付札としての機能持つものと想定しておきたい。本木簡は樹種も含めて非常の特色のある資料であり、型式名が示すように、一般的な木簡の用法には沿わない資料であり、SX01への埋納に規制された特殊な形態であることが予察される。

類似のものとしては、大祓との関係が指摘されている藤原京右京五条四坊出土の呪符木簡に、裏面について木の皮をはいだのみで未調整のものがある。ただし、この事例も墨書されている面は調整が施されている（和田1995)。

4．SX10出土木簡

2号木簡

①釈文と法量

「久戸人否□□若乙女」

218×19×6 051

②観察状況

上端キリ・オリ。オモテ面にはカットグラス状ケズリが施され「若乙女」部分は特に顕著である。全体として保存状況は良好であるが、部分的にオモテ面の剥離する部分があり、特に「否」の下の「□」の部分が著しくオモテ面はほとんど消失しており墨痕も薄い。ウラ面は凹凸が激しく平滑な面を形成していないが、上部にはケズリ痕跡があり、二次的な破損でなく調整されないで使用された状況を示している可能性もある。板目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

051型式と、女性名「若乙女」の記載から、付札木簡と推定される。「久戸人否」の「否」=稲で全体で人名、二名連記の付札木簡であろうか。「□□」は前述のように保存状況が不良で釈文を確定しなかったが、「鳥取」の可能性がある(平石)。固有名詞＋人名の付札木簡の可能性もあるが、「久戸人否」については何を指すのか不明である。

3号木簡

①釈文と法量

「日置永床

(108)×20×3 019

②観察状況

上端器キリ・オリ、下端折損、側面は右上部にのみケズリ痕跡がある。オモテ面はケズリ調整、ウラ面は未調整である。墨書の遺存状況は良好で肉眼で文字を確認できる。板目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

人名の記載のみであるが、本遺跡で多数確認されている固有名詞＋人名記載を持つ付札木簡の上端部分と考えられる。本来は051型式であった可能性が高い。

4号木簡

①釈文と法量

〔財ヵ〕
「伊□マ小椅継」

159×20×4 051

②観察状況

上端キリ・オリのち平面ケズリ。木簡側面のケズリ調整も確認できる。A面のみケズリ調整が施され、B面は割ったまま未調整である。保存状況良好で文字も肉眼で確認できる。板目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「伊」(伊努)＋人名からなる付札木簡。二文字目は文字としては偏は「月」であるが、氏族名財部を意図したものと考えた。ただし、文字通り「財」として、土師部を指すとする考え方もある(舘野和己氏の教示による)。土師部は「出雲国大税賑給」に出雲郡内に一例のみ見える(『大日古』2-246)が、『書紀』垂仁紀の野見宿禰伝承では「土部」として出雲に設置されている。

５号木簡

①釈文と法量

「伊稲置マ自安万」

201×14×4　051

②観察状況

保存状況は悪く、上端加工・表面の調整について不明である。柾目の木目のみが浮かび上がった状態である。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「伊」(伊努)＋人名の051型式付札木簡である。

６号木簡

①釈文と法量

「伊鳥取マ浄

(82)×24×3　019

②観察状況

上端キリ・オリ、下端は文字を切る形で二次的にキリ・オリされている。側面のケズリ調整も明瞭に確認できる。オモテ・ウラ面ともケズリ調整が施される。保存状況は良好で肉眼で文字を確認可能。板目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「伊」＋人名の記載を持つ051型式付札木簡の上端部と考えられる。

７号木簡

①釈文と法量

「美舎人魚當

(111)×20×2　019

②観察状況

上端キリ・オリのち簡易なケズリ、下端は欠損する。右側面下部は側面からのケズリによって若干であるが絞り込まれており、二次的加工と判断したが先端を尖らせる加工の始まり部分である可能性もある。オモテ面は保存状況良好で、ケズリ調整を確認できる。ウラ面は保存状況不良、割ったままで未調整の可能性もある。ウラ面のみ風化する状態で一定時間が経過したか。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「美」＋人名の記載を持つ051型式付札木簡の上端部と考えられる。

８号木簡

①釈文と法量

「美鳥取マ宅次

(130)×(18)×2 081

②観察状況

上端キリ・オリのち簡易なケズリ、下端は破損するが直線的な断面も観察でき、切り落とし痕跡とみるが木簡としての使用に伴う一次的なものであるのかは不明である。オモテ・ウラ面ともケズリ調整が施されるが、ウラ面には多方向からの無数の切痕跡があり、それによって一部表面が剥離している。柾目材・樹種ヒノキ。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「美」＋人名の記載を持つ051型式付札木簡の上端部と考えられる。

9号木簡

①釈文と法量

「美若和マ茎

(94)×20×3　019

②観察状況

上端キリ・オリのち簡易なケズリか。オモテ面ケズリ調整、ウラ面はワリのままの未調整である。下端欠損。保存状況は良好で文字も肉眼で観察できる。負柾目材・樹種ヒノキ。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「美」＋人名の記載を持つ051型式付札木簡の上端部と考えられる。「若和マ」は65号木簡にもみえ若倭部の異表記と思われるが、今のところ本遺跡木簡のほかでは、『類聚国史』巻87の延暦20(801)年6月の流人記事にみえる出雲国の「出雲郡人若和部臣真常」のみに確認される表記で、遺跡の所在する出雲郡人である点が注目される。類例として、大倭宿祢氏については大倭忌寸小東人が大和国号の表記の変化に伴って、大倭忌寸→大養徳宿祢(天平9年に大和国は大養徳国と表記されるようになる。以下同じ。→大倭宿祢(天平19年に大倭国)→大和宿祢(天平宝字元年に大和国)と表記を変えた事例が知られており(以上『続紀』)(東野晴之氏の指摘による)、これと同じ変化と考えれば、本木簡は天平宝字以後の記載と考えることができよう。

10号木簡

①釈文と法量

「美日置□

(65)×(18)×2　081

②観察状況

上端圭頭状で平面ケズリによる調整がなされる。オモテ面は柾目の木目がやや浮き出た状態で調整不明、ウラ面はケズリ調整が施される。下端欠損。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「美」＋人名の記載を持つ051型式付札木簡の上端部と考えられる。

11号木簡

①釈文と法量

暦十十六日

(95)×(17)×3　081

②観察状況

上下端・両側面欠損、オモテ面はケズリを確認できるが、ウラ面は保存状況が悪く調整不明である。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

記載は最後が「六日」であることから、暦十年十月六日を表記したもので、年･月を省略したものと想定される。このような表記は『公卿補任』に見ることができる。「暦十年」は、遺跡・遺物の年代観から延暦10(791)年が想定される。木簡の全体的性格については、断片資料であり不明。

５．SX50出土木簡

12号木簡

①釈文と法量

〔後ヵ〕
・［　　］□□□ □□
　［　　］去年一
　　□□
〔本ヵ〕
・□　□五人中廿

(195)×(49)×4　081

②観察状況

上下端欠損。右側面のみ原形を残す可能性がある。ＡＢ面ともケズリ調整がなされ、Ａ面にはカットグラス状ケズリが確認される。保存状況はＢ面が不良で、そのために墨書が釈読しにくい。Ｂ面のみ風化する状態で一定時間が経過したか。なお、厚さは一定でなく左側が厚く右側が薄いため、現存断面形は三角形状となる。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

幅広の木簡でＡ面で３行の文字記載が確認され、上下で文字がとぎれる部分があることから一続きの文字記載を中心とする文書木簡ではなく、短い文字列が複数記載される記録木簡の一部と考えられる。55号木簡と同じく「年」に関わる記載がある点、注目される。

13号木簡

①釈文と法量

〔一ヵ〕　　〔七ヵ〕
□一二三四五六　七九　一二三四［　］□□□九一二三四　五六七八［　］
・「　一二三四五六七八 一二三四五六九三十一六七八九一二三四五六　」
〔五ヵ〕　　〔六ヵ〕
一二三四□　　□五六［　］四五□□□□□
〔四ヵ〕〔七ヵ〕
五□□　　一二三□五六□
〔六ヵ〕〔八ヵ〕
・「　□七□七□九　［　　］五六七　　」
［　　］

450×（55）×5 081

②観察状況

大きく上片・下片の2片に分かれ、厳密な接点はないが、出土状況・記載内容から上下に接合することは間違いのない資料である。上端は残存部が少なく状況不明。隅を切り落とすが、切り落とし面の保存状況が悪く、ケズリ等の加工痕は不明である。、下端も腐食により調整は不明である。オモテ面でカットグラス状ケズリが確認される。 側面については、左端部は現在の文字記載時の原形を保っている、と思われるが、端面を形成せずテーパー状に薄くなっている。上端左側の切り落としは文字記載の始まりに対応していることから墨書が形状と対応していることは明らかである。

保存状況はＡＢ面とも斑状に良好な部分と不良な部分が混じり合っており、墨書の遺存はこの保存状況によるが、同じ断片でも場所により遺存状況が異なり、上側破片ではウラ面の文字はほとんど確認できない。出土状況

写真よって、上片・下片とも接合する一でウラ面を上にして寝かされた状態で出土したことが確認されるが、この写真でも上記の墨書の濃淡を確認できる。したがって、同一面における墨書の遺存状況の差異も、取上・保存処理の影響によるものではなく、廃棄後のある時点あるいは埋没中に生じた結果と考えるべきであろう。板目材。

③記載内容と木簡の性格

数字を何度も繰り返し列記した木簡で、数字は一から八まで、一から六まで、一から九までが確認され、このほか「十」あるいは「十一」と釈読できる部分もある。極めて乱雑な筆致であり、四以下が連続する数であるので冒頭を「一二三」と釈読したが、字形からは「三三」その他一から三の組み合わせで釈読することも可能である。それぞれ連続する数字は、一度にかかれたと考えられるものが多いが、オモテ面右行のみは、「一二三四」と「五六七八九」の軸がずれており、時間の経過を想定させる。

記載の特徴として①数字のみが順に列記される、②くり返し記載されるの２点が上げられ、後掲14·49号木簡も共通した性格を持つ。この特徴を満たす類似の史料としては、経巻検定のための数字（経巻番号）の注記が、奉写大乗経律論目録（『大日古』21）とその紙背に（同4–99・100）かかれるなどの事例がある。本木簡もこれに準じるものとすれば、数字の割り振られた何か（複数存在する）を検定するため、検定がすんだものの数字を順次記入していった、記録木簡の一部と推定される。ただし、正倉院文書例では数字列を塗りつぶしたり、傍点を付したりすることで複数回の検定をおこなった痕跡があるが、本遺跡出土木簡では、塗りつぶし・傍点等は確認できなかった。

なお、②の観察状況で述べたように、左端部はテーパー状に薄くなっており、下端隅に墨点が確認されることから、別な用途の木簡・木製品を転用した可能性も否定できない。

14号木簡

①釈文と法量

「九□一二三四□

(86)×(25)×3　081

②観察状況

上端キリ・オリ、下端は欠損する。右側面にはケズリ調整が確認される。右下部は、欠損部分が右上がりの直線状を呈しており、二次的な切断が行われた可能性もある。オモテＢ面ともケズリ調整が見られ、Ｂ面ではカットグラス状ケズリが確認される。木取りが異なることから13号木簡とは明らかに別個体である。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

数字を列記した木簡で、「九」を先頭に「一二三」（「二一三」「三三」の可能性もある）が続く。検定のための記載を持つ記録木簡の一部と考えられる。詳細は13号木簡参照。

15号木簡

①釈文と法量

・「了（天地逆）　〔儒ヵ〕□」

・「□（天地逆ヵ）　目　〔々ヵ〕□□」

146×26×3　011

②観察状況

上端はB面からの平面ケズリ、下端はキリ・オリであるが、上端の平面ケズリはB面の文字端まで及んでおり、文字を書いた後の二次的なものである可能性がある。ＡＢ面・左側面にケズリ調整がみられるが、文字との関係

では左側面は二次的加工と考えるべきであろう。木簡・墨書の遺存状況は良好。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

A面は両端の文字が、かかれている端部と逆方向を天として天地逆の関係で記載されている。B面の上端の文字の天地が不明であるが、おそらくA面同様の関係にあると思われる。内容は不明な点が多いが、B面の下部の文字は月偏の文字の習書とも思われることから、全体として習書木簡であったことが想定される。16·17·19号木簡とも雰囲気が類似し、接合を試みたが接点は確認できなかった。

16号木簡

①釈文と法量

〔人人ヵ〕
□□□」

(61)×(15)×2 081

②観察状況

断片で左側面のみ遺存する。オモテ面はケズリ調整が施され、ウラ面は保存状況が不良であるため面の調整など状況は確認できない。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

3文字記載され、2·3字目は同じ「人」の文字が推定されることから、習書木簡の可能性がある。15·17·19号木簡と、文字の様態が類似する。

17号木簡

①釈文と法量

〔弓ヵ〕
□〔々ヵ〕
・「了　事　目　□」
・「　　□　　」

(124)×(17)×2 081

②観察状況

上端は両面からの平面ケズリ、下端はA面からの平面ケズリである。ただし、上端は木目に対し斜行しており、木簡使用時の整形か、二次的な加工の状況を示しているのか明らかでない。左側面は原形を保つ可能性がある。AB面ともケズリ調整が施される。保存状況は良好で文字も明瞭である。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

文字は4〜5文字確認される。3文字目は、行取りが文字ごとに変わっている感があり、連続する文章と考えづらい内容である。性格は断定できないが15·16·19号木簡と木取り・端部形状、部材の木目、文字の雰囲気等が類似する。接合を試みたが接点はなかった。

18号木簡

①釈文と法量

〔生ヵ〕　〔六ヵ〕
□　　□」

(222)×(22)×3 081

②観察状況

上側・下側の破片を接合した資料である。接点は少ないが、墨書のないウラ面にて確認できる。なお、上側の破片の幅がやや大きく若干接合に不安を持つが、これは上片が断面菱形に変形したことに由来すると考えられる。

保存状況は悪く、右側面付近の木簡表面が失われ(上片)、劣化し角が落ちており側面の調整は不明。オモテ・ウラ面ともケズリによる調整が施される。オモテ面には顕著なカットグラス状ケズリがあり、墨書も削り取られている可能性が高い。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

墨書内容は断片的で木簡の性格は不明である。

19号木簡

①釈文と法量

・「　□□

・「『[　　]（天地逆ヵ)』

(117)×(24)×4 081

②観察状況

上端はキリ・オリおよび一部A面からの平面ケズリ。下端・左側面は欠損。右側面にはケズリ調整が確認される。ＡＢ面とも表面はケズリ調整、カットグラス状ケズリが確認される。二次的圧力によって変形する。保存状況はおおむね良好であるが、文字の欠損部分はA面が二次的に剥離している部分である。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

A面の文字は或いは「貸」であろうか。B面は天地も明確でないが、A面と天地逆で考えると文字の据わりがよい。細めの書体であることから別筆と判断した。なお、A面の文字は1字目と2字目が軸をずらしていることから、17号木簡と類似する。木目・上端が斜行することなども類似しており、15～17号木簡と同類の木簡である可能性が高い。接合を試みたが接点はなかった。性格は不明。

20号木簡

①釈文と法量

〔鳥取マヵ〕

□□□」

(151)×14×3 059

②観察状況

上端欠損。右上端部は直線状を呈し、キリカキ痕跡である可能性もある。両側面ともケズリ調整され、オモテ・ウラ面ともハギトリ状ケズリが認められる。形状は良好に残るが、墨書の遺存状況はよくない。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

３文字の墨書が確認され、鳥取部の可能性がある。下端を尖らせた形状(051型式)から、付札木簡と推定される。

21号木簡

①釈文と法量

「海マ豊足」

230×22×6 051

②観察状況

オモテ・ウラ面、両側面ともケズリ調整。上端キリ・オリのち中央部のみ簡易なケズリを施す。表面の状況は

オモテ・ウラ面とも部分的に良好な箇所と、風化して木目の浮き出た箇所が斑状に共存する。墨痕は薄く、部分的に肉眼で確認できる程度である。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

人名のみを記載した付札木簡と推定される。ただし、「海」の上に墨痕か否か判断しかねる黒点がある（釈文には反映させていない）。

22号木簡

①釈文と法量

□　□

(57)×(10)×3　081

②観察状況

四周とも原形を失っている。ＡＢ両面とも表面は荒れており、柾目の繊維が浮き出ている状況である。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

断片資料であり、木簡の性格は不明である。

23号木簡

①釈文と法量

□御□

091

②観察状況

削り屑。柾目材・樹種スギ。木目の間隔など、24～26号木簡に類似する。

③記載内容と木簡の性格

断片資料であり、木簡の性格は不明である。

24号木簡

①釈文と法量

□

091

②観察状況

削り屑。柾目材・樹種スギ。木目の間隔など、23･25･26号木簡に類似する。

③記載内容と木簡の性格

断片資料であり、文字の天地についても実測図・写真は仮置きの状況である。木簡の性格は不明。

25号木簡

①釈文と法量

□□

091

②観察状況

削り屑。柾目材・樹種スギ。木目の間隔など、23･24･26号木簡に類似する。1文字目は偏の部分が残存。右下側は表面が剥離している。

③記載内容と木簡の性格

断片資料であり、木簡の性格は不明である。

26号木簡

①釈文と法量

〔大ヵ〕
□□

091

②観察状況

削り屑。柾目材・樹種スギ。木目の間隔など、23～25号木簡に類似する

③記載内容と木簡の性格

断片資料であり、木簡の性格は不明である。

27号木簡

①釈文と法量

□□

091

②観察状況

削り屑。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

1文字目は「美」の可能性がある。断片資料であり、木簡の性格は不明。

28号木簡

①釈文と法量

□□

091

②観察状況

削り屑。柾目材･樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

断片資料であり、木簡の性格は不明である。

29号木簡

①釈文と法量

□□

091

②観察状況

削り屑。柾目材･樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

文字の端のみ遺存しており、天地については逆転する可能性もある。断片資料であり、木簡の性格は不明。

30号木簡

①釈文と法量

□□

091

②観察状況

削り屑。柾目材·樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

1文字目の旁は「戈」か。断片資料であり、木簡の性格は不明である。

31号木簡

①釈文と法量

[　　]

091

②観察状況

削り屑。板目材·樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

上端は木簡上端の形状を残す、長いハギトリ状ケズリによる削り屑か。墨痕は薄く、木簡の性格は不明。

32号木簡

①釈文と法量

□

091

②観察状況

削り屑。柾目材·樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

断片資料であり、木簡の性格は不明である。

33号木簡

①釈文と法量

□

091

②観察状況

削り屑。柾目材·樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

文字は「具」等の下部分と考えられる。断片資料であり、木簡の性格は不明。

34号木簡

①釈文と法量

□

091

②観察状況

削り屑。柾目材·樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

断片資料であり、木簡の性格は不明。

35号木簡

①釈文と法量

□

091

②観察状況

削り屑。柾目材·樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

断片資料であり、木簡の性格は不明である。

36号木簡

①釈文と法量

□

091

②観察状況

削り屑。柾目材·樹種スギ。

③断片資料であり、木簡の性格は不明である。

37号木簡

①釈文と法量

□

091

②観察状況

削り屑。柾目材·樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

文字は2文字以上の可能性がある。断片資料であり、木簡の性格は不明。

38号木簡

①釈文と法量

□

091

②観察状況

削り屑。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

断片資料であり、木簡の性格は不明。

39号木簡

①釈文と法量

□

091

②観察状況

削り屑。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

断片資料であり、木簡の性格は不明。

６．推定ＳＸ50出土木簡

40号木簡

①釈文と法量

・「部冨自姪冨□者買□

・「莫其故者天宜承知畎目今□

(307) ×38×3 019

②観察状況

上端平面ケズリ、下端欠損 。上端はオモテ・ウラ面に切痕跡がある。端部に近いものもありキリ・オリ時の痕跡か。オモテ面は風化し「部」～「冨」の文字は、墨が飛んでミミズ腫れ状に浮かび上がる部分がある。ウラ面は風化はなく、保存状況は良好でカットグラス状ケズリが確認できる。Ａ面をオモテにしＢ面は何かに接し、かつ下端が風化しない状況で一定時間が経過したと推定される。一義的には表面を上に、裏面が地面に密着した状況が想定されるが、本木簡がＳＸ50出土であれば、遺構に投棄する以前にミミズ腫れが生じていたこと想定され、屋外などに下げられていた可能性もある。追柾目材。

③記載内容と木簡の性格

字体は個性的で、「者」などは鏡文字のようにも見える。裏面「天」は字画では横画が一本文多く、「夫」を書こうとした可能性も否定できない。表裏関係については、上端が生きていることと「莫」の文字から現状のように確定した。表面「部冨自姪」は「部刀自女」の表現であろうか。裏面の「畎」は、字画からは確実に「畎」であると考えられるが、別な字を意図したものである可能性もある。全体に難解な内容であるが「莫其故者天宜承知」の文言から、書状の一部、文書木簡と想定される。

７．SD16出土木簡

41号木簡

①釈文と法量

「□宅三代」

216×26×3 051

②観察状況

上端は損壊しているが、一部は木簡使用時の上端を残している。丁寧なケズリの痕跡はなく、キリ・オリであろうか。オモテ・ウラ面ともケズリ調整が施されているが、保存状態はあまりよくない。発見時は上下２片に割れていたものを接合した。板目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

051型式付札木簡であるが、記載は人名のみで省略固有名詞の記載はない。

42号木簡

①釈文と法量

「伊海マ乙米

(107)×21×4 019

②観察状況

上端キリ・オリ、下端は欠損する。オモテ面はケズリ調整、ウラ面は未調整である。両側面ともに割ったままの可能性が高い。保存状況は良好で、特にウラ面はワリの状況をよく残している。板目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「伊」＋人名の記載を持つ051型式付札木簡の上端部と考えられる。

43号木簡

①釈文と法量

・□夫本家主家主卅卌廿亼合天夫車二」

〔里ヵ〕　　□□

・□自里□子□　矣矣□之之」

(242)×(22)×3 081

②観察状況

上端欠損、下端は全くの平坦面を呈する。平面ケズリであろうか。オモテ面にはカットグラス状ケズリが見える。ウラ面は保存状況不良によって文字の釈読も容易でなく表面調整も不明である。ウラ面の右側にも切られた文字列があり(「□□」)、左右両端も欠損しているものと思われる。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

同じ文字を繰り返す記載や連想される文字の記載から習書木簡であろう。

8．SD23出土木簡

44号木簡

①釈文と法量

「美吉備マ細女」

183×18×4 051

②観察状況

上端平面ケズリ。オモテ・ウラ面ともケズリ調整を施しており、オモテ面文字記載の下には顕著なカットグラス状ケズリが見られる。保存状況も良好で文字も肉眼で確認できるが、二次的圧力により変形する。追柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「美」＋人名(女性名)の記載された051型式付札木簡である。

9．SD28出土木簡

45号木簡

①釈文と法量

・「稲主巳年

・「『古二主祖　　一』（天地逆）

(125)×28×2 019

②観察状況

上端キリ・オリ、下端欠損。ＡＢ両面にカットグラス状ケズリあり。保存状況は良好で墨書も肉眼で確認できる。板目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

Ａ面の「巳年」は「年」の記載で、なおかつ年号ではなく十二支で記載されている。類例には木簡で「午年分直稲」の記載が宮内黒田遺跡出土木簡にみえ（小寺1999）、78号木簡にて後述する「大和国式下郡田地売買券」（『大日古』4-368）にも「来丑年分」の記載があり、ともに再来年の賃祖に関わるものであり、本「巳年」も再来年で、同様の年をまたぐ記載であるために十二支で表記されている可能性が考えられよう。Ｂ面の「二古」は「二籠」と思われ、「一」の記載とともに、Ｂ面には人名と物品数量が記載されていたのであろう。

記載はＡＢ両面で天地逆の関係にある。Ａ面を木簡のオモテ面とした場合、「稲主巳年」が書き出しとなるが、Ｂ面をオモテ面とした場合は、「祖主二古」から「稲主巳年」に連続することとなる。全体としては、Ｂ面の人名＋数量からは記録木簡的要素が読み取れる。

人名についてはＡＢ両面ともウジナを省略し、名前だけの表記でありる。文書・記録のいずれの場合と考えても、限られた狭い範囲での使用が前提の木簡であったと考えられる。

10．SD32出土木簡

46号木簡

①釈文と法量

・「一一卅四八卅三三八廿四三八十六一八□□□九十」
　　［　　］

　［　　］
・「　　［　　］」
　［　　］

(291)×32×7　044

②観察状況

上端、状況不明。下端は平面ケズリ。ＡＢ面とも多くのカットグラス状ケズリが確認できる。Ａ面は墨書が良好に残る。Ｂ面も保存状況は良好であり、墨痕が薄いのはカットグラス状ケズリによって文字が削り取られている状況による。Ａ面のカットグラス状ケズリは、一次的な九九記載次のものと考えられる。

一方、現状は羽子板状を呈し、封緘木簡（041型式）への転用を意図したと考えられる。九九記載の最後の文字が下端平面ケズリによって一部切り取られている点からすると、下端はこの転用意図の元に２次的に整形されたと考えられる。ただし、使用された封緘木簡は、文書を収めた側の平面に調整を施さずワリのままとする事例が多いことからすると（佐藤1997）、封緘木簡として二つに裂く前の状況が想定される。追柾目材。

③記載内容と木簡の性格

九九の記載の一部、確実な部分は「四八卅三」以下であるが、この部分も含め誤りが多い。また、正確には八の段（八四·八三…）になっておらず、四八・三八・二八・一八が記される。続きは「七の段」、「七九」以下が想定されるが、軸部となっており正確な判読はできなかった。下の二文字も「六十」の可能性は否定できないものの、墨痕からは「九十」が第一義的に想定される文字である。Ｂ面の削り取られた記載内容は不明である。

木簡は、一次的には九九の一覧と想定される。古代の九九は九の段から始まるので、長さ、幅とも現状より大

きかったと推定される。封緘木簡への転用を意図したものの、外形の整形が終了した段階（あるいは、B面のカットグラス状ケズリを施した段階）で使用をあきらめたものと推測される。

11．Ⅰ区遺構外出土木簡

47号木簡（E15出土）

①釈文と法量

〔田ヵ〕
□□主　　磯美［　］
「　佐　　□□　　［　］
□

(248)×38×7 019

②観察状況

オモテ・ウラ面ともケズリ調整。オモテ面にはカットグラス状ケズリあり。ウラ面は保存状況が悪く、ケズリも一部でしか確認できない。上端も摩耗しているが、オモテ・ウラ面からの平面ケズリであろうか。墨書は保存状況の悪さから薄くしか確認できない。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

木簡中に2あるいは3行の記載を行う。段を揃えて、数文字からなる記載を並列させ2あるいは3行の記載を行う。記載内容については不明な点が多いが、１行目中段の「磯美」からは、これらの記載が人名で、全体としては歴名を記した木簡と判断される。人名については、ウヂナを記載しない名のみであると想定されるが（平川2003）、磯=磯部、美=名前の先頭の文字の可能性もある。

48号木簡（E15出土）

①釈文と法量

□　六日下田人

(69)×（20）×7 081

②観察状況

上端下端欠損で、右端のみが当初の形状を残す厚手の木簡である。保存状況は良好。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

断片的であるが、大きな文字の（一文字目の□）下に割書的な記載がなされている。「六日下田人」は完結しているので、大文字記載と割書からなるある種の記録と考えられるが、文書記載の一部である可能性もある。なお、「田」部分については従来「卅」と釈読していたが、一の両端は傷であったことから、「田」に改めた（平石）。「田人」は『古事記』応神天皇段や『古語拾遺』にみえ、「耕人」（『古事記』）であり、特に4～5月の田植えに関する史料に見られる田夫などと同義と考えられる水田の耕営労働者である。木簡の事例としては、山形県米沢市古志田東遺跡出土例があり、「田人」を集計したものと考えられている（三上2003）。

49号木簡（F15出土）

①釈文と法量

六七八九十□十一十二
「　［　　］」

(159)×(25)×2　081

②観察状況

上端は丸みをもった圭頭状を呈し、ウラ面からの平面ケズリが施される。下端はキリ・オリ。二行目の文字が一行目より下がった位置から書き出されていることから、上端の形状は現在の記載と対応するものと考えられる。オモテ・ウラ面とも保存状況は悪く、木簡の角も摩耗により丸みを呈している。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

記載内容は、13号木簡同様の数字を列記し繰り返し記載した記録木簡である。木簡自体の木目・保存状況は14号木簡に類似するが、記載内容も異なり、接合できる箇所は確認できなかった。

50号木簡（G15出土）

①釈文と法量

中　寅」

(63)×(26)×4　081

②観察状況

オモテ面ケズリ調整。ウラ面は保存状況が不良であるが、おそらく調整が施されていると考えられる。下端はオモテ面からの平面ケズリ。現状では腐食が進み、左側は薄くなっている。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

「中」の直上にも文字がないことが明らかで、全体に文字間隔をあけて書くことを指向するが、「寅」は木簡下端ぎりぎりに書かれている。この様子からは、「中寅」の記載が連続する文章の一部であることよりも、特定の理由でオモテ面に割り付けられた文字であることを窺わせる。

前後の文字、木簡記載の意味などを考慮せず「中寅」の文字だけを独立させて考えれば、月の中（２回目）の寅の日の意と考えられ、神祇令・『延喜式』等に見える神祇祭祀の式日記載に代表される儀式の式日表現が想起される。『延喜式』巻2四時祭下では11月中寅日に執り行われる神祇祭祀として鎮魂祭がある。

51号木簡（H溝出土）

①釈文と法量

□□
〔伊努ヵ〕
・□□□□」
□□□
男十一
・□十七　　」
□

(110)×(50)×7　081

②観察状況

上端焼損。下端はキリ・オリ。ＡＢ面ともケズリ調整とカットグラス状ケズリが確認される。保存状況は、①良好で表面の木質の残る部分と、②他からの圧力によって表面が破壊されている部分が、ＡＢ面ともに交錯している。板目材。

③記載内容と木簡の性格

記載内容は、Ｂ面に「男十一」と、男性の人数が確認される。隣の行は残画が少ないために確定しなかったが「女十七」の可能性があり、男女の人数の集計となろう。「伊努」は墨書土器に散見されるが木簡では本例のみに見える。『風土記』によれば出雲郡のみならず楯縫郡にもイヌ郷があり、郷名の表記は神亀3(729)年に出雲郡のイヌ郷が「伊農」から「伊努」へ、楯縫郡のイヌ郷が「伊努」から「伊農」へ変わったとされる。ただし、神社

イヌ社には「伊農」「伊努」（出雲郡）、「伊努」（楯縫郡）が引き続き使用されている[1]。同類の木簡には山形県米沢市古志東遺跡2号木簡（米沢市教育委員会2001）があり、同木簡では「□代田人廿九人」の頭書の下に、男女別の人数が割り書きで記される。本木簡も厚さが7㎜と厚いことから原形は大型の木簡と想定され、古志田東遺跡例と同様の人数の集計を書き上げた記録木簡の一部と考えるのが妥当であろう。

52号木簡（C16出土）

①釈文と法量

「伊丈マ奈次丸」

123×23×4　051

②観察状況

上端キリ・オリであろうか、中央部に明瞭なキリ・オリ痕跡を残す。側面のケズリ調整も確認できる。オモテ・ウラ面ともケズリ調整。保存状況は良好で、墨書を肉眼で確認できる。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「伊」＋人名記載を持つ051型式付札木簡。「丸」は人名のマロの一文字表記で、藤原宮跡出土のいわゆる宮処庄の弘仁元（810）年の稲収納木簡が最古の事例であるほか（加藤優1983）、福島県いわき市荒田目条里遺跡出土2号木簡に見え（平川・三上2001）、同木簡の推定年代である9世紀中葉には確認できる。

53号木簡（E14出土）

①釈文と法量

〔束ヵ〕
□五束六束十束＜

(138)×35×6　039

②観察状況

上端下端欠損、オモテ・ウラ面ともケズリによる調整が施される。右下端についてはキリカキ痕跡と判断した。裏面に多数の切り痕跡がある。板目材のこともあり表面は平滑な状況であるが、墨書の遺存状況は悪く、赤外線テレビカメラ・写真でも薄くしか確認できない。板目材・樹種ヒノキ。

③記載内容と木簡の性格

現状では、「○束」という束把単位の数量が連記されている。キリカキの存在からすると、付札木簡が想定される。文字の記載とキリカキの位置関係の矛盾はないが、数量連記は付札にややそぐわないものであり両者が同時に機能したか否かについては不明である。

54号木簡（E14出土）

①釈文と法量

「美若和マ帯取」

185×21×3　051

②観察状況

オモテ面のみケズリ調整で、顕著なカットグラス状ケズリも多数確認できる。ウラ面は保存状況も不良であるが、おそらく未調整と考えられる。上端ウラ面よりの平面ケズリ。オモテ面の保存状況は良好で、墨書も肉眼で確認できる。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「美」＋人名の記載された051型式付札木簡である。「若和マ」は若倭部の異表記である。9号木簡参照。

55号木簡(E14出土)

①釈文と法量

〔鳥取マヵ〕

「美□□□［　］」

(186)×27×3 051

②観察状況

下端先端のみ一部欠損するが、ほぼ完形の木簡。オモテ面のみケズリ調整。ウラ面は保存状況も不良であるが、おそらく未調整と考えられる。上端は摩耗しているが、オモテ面よりの平面ケズリと推定される。全体に右端のみが薄くペーパーナイフ状を呈している部分と、ケズリによって面を呈している部分がある。保存状況は不良で墨書は肉眼ではほとんど確認できない。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「美」＋人名の記載された051型式付札木簡である。

56号木簡(E14出土)

①釈文と法量

日置臣鷹

(79)×21×3 081

②観察状況

上端下端欠損。オモテ面ケズリ調整、ウラ面未調整。表面は荒れて木目が浮き出ているが、墨書の遺存は良好で肉眼で確認できる。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

人名の記載で、「日」の上には空白がある。断片であり全体の性格は不明であるが、051型式付札木簡の一部の可能性もある。

57号木簡(E15出土)

①釈文と法量

「神 鳥取マ主万呂」

(170)×27×4 051

②観察状況

上端キリ・オリ、下端は尖らせてあるが先端が若干欠失するほぼ完形の木簡である。オモテ・ウラ面ともケズリ調整が施される。保存状態は良好で、墨書も肉眼で確認できる。板目材。

③記載内容と木簡の性格

「神」(神戸郷あるいは神代社の略か)＋人名の051型式付札木簡。先頭の「神」については、旁「申」の縦画が割れによって消失していることから従来「社」と釈読していたが、内田律雄氏の指摘により『出雲国風土記』に見える神戸郷・神代社の所在などから「神」に改めた。

58号木簡(E15M溝出土)

①釈文と法量

「伊和文マ浄刀自女

(119)×20×6 019

②観察状況

上端は木簡に厚みがあるため両面からの平面ケズリを行ったうえ、中央部を側面ケズリする。下端は欠損。両側面にもケズリ調整が確認できる。両平面ともケズリ調整、ウラ面にはカットグラス状ケズリが見られる。保存状況は良好で墨書も明瞭であるがあるが、二次的圧力により変形する。負柾目材。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「伊」＋人名の記載を持つ051型式付札木簡の上端部と考えられる。「和文マ」も本遺跡出土木簡の他に知られない表記であるが、倭文部の異表記であると考えられる。倭と和の通用・書き換えについては9号木簡参照。

59号木簡（E16出土）

①釈文と法量

〔美ヵ〕
「□［　　］」

144×28×3　051

②観察状況

オモテ・ウラ面ともケズリ調整。上端キリ・オリであろうか。保存状況は不良で、オモテ・ウラ面とも表面が荒れており、墨書もわずかにしか残存しない。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

形状・「美」の記載から、固有名詞「美」＋人名の記載された051型式付札木簡と推測される。

60号木簡（F15出土）

①釈文と法量

〔財ヵ〕
□マ三上

(75)×20×1　081

②観察状況

上端・下端欠損。全体に保存状況は不良で、柾目の木目が浮き出た状態であり、オモテ・ウラ面、両側面の調整は不明である。柾目材・樹種モミ属。

③記載内容と木簡の性格

断片的な資料であるが、人名記載で終わり、以後文章が続かないことから本来は051型式付札木簡であった可能性がある。

61号木簡（F15出土）

①釈文と法量

子麻呂」

(166)×17×3　059

②観察状況

オモテ・ウラ面ともケズリ調整。保存状況は良好で、墨書も肉眼で確認できる。下端側は一部欠損。板目材・樹種ヒノキ。

③記載内容と木簡の性格

残存する形状と人名の記載から、固有名詞＋人名の記載された051型式付札木簡の一部であると推測される。

62号木簡(G15出土)

①釈文と法量

「生マ□

(65)×24×2 019

②観察状況

上端は摩耗するが平面ケズリであったと推定される。下端欠損。オモテ面はケズリ調整が施されるが、ウラ面は保存状況が悪く不明。墨痕も保存状況により極めて薄い。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

人名記載のみが見えるが、本来は45号木簡同様の051型式付札木簡であろう。

63号木簡(S溝出土)

①釈文と法量

〔美ヵ〕

「□□

(42)×(18)×2　019

②観察状況

オモテ・ウラ面ともケズリ調整。上端圭頭状を呈す。摩滅してるが、側面ケズリが施された可能性がある。木質の保存状況は良好であるが墨の依存状況は悪く、現在は赤外線カメラなどを使ってもほとんど確認できない。実測図の墨書表現は取り上げ直後の観察記録から一部補足している。板目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

先頭の「美」の文字と形状から、「美」(美談)＋人名の051形式付札木簡の一部と推測される。

64号木簡(Ⅰ区出土)

①釈文と法量

〔斗ヵ〕
□四升一」

(52)×(16)×4 059

②観察状況

オモテ・ウラ面ともケズリ調整。上端の欠損部分は、ウラ面からオモテ面に及ぶ平滑な断面を呈しており、人為的な切りと推測される。保存状況は良好で、墨書は肉眼で確認できる。板目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

斗升で計量する物品の数量記載の一部が残り、形状と合わせ付札木簡と推測される。本遺跡出土木簡のうち、下端を尖らせる051型式のもので数量記載がなされるのは本資料のみであり、他の固有名詞＋人名の051型式付札木簡とは異なる内容の資料と考えられる。

65号木簡(F15出土)

①釈文と法量

・□□□□

・　□□□

(95)×(15)×2 081

②観察状況

四周とも欠損する。ＡＢ面ともケズリ調整。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

太めの文字で書かれた軸も木簡の中心軸からずれているようである。A面二文字目は食偏の文字であろうか。木簡の性格は不明。

66号木簡（F15出土）

①釈文と法量

「[　　]」

191×23×4　011

②観察状況

上端下端ともキリ・オリ。オモテ・ウラ面とも保存状況は悪く、柾目の木目が浮き出た状況で、墨痕も極めて薄い状況でしか遺存しない。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

文字はほとんど釈読できないため、性格は不明である。

67号木簡（F16出土）

①釈文と法量

□□

091

②観察状況

削り屑。表面はケズリ調整。墨痕は薄い。板目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

断片的な資料であり、木簡の性格は不明である。

68号木簡（F16出土）

①釈文と法量

□□

□□□

②観察状況

削り屑。表面はケズリ調整。墨痕は薄い。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

断片的な資料であり、木簡の性格は不明である。

69号木簡（M溝出土）

①釈文と法量

〔御取ヵ〕

□□□

(55)×(19)×5　081

②観察状況

オモテ・ウラ面ともケズリ調整。上下端、一部側面にも焼跡がみられる。左側が薄くペーパーナイフ状になっているが、オモテ面の角は摩耗して取れている。保存状況はオモテ・ウラ面とも良好な部分と木質の抜けた部分

が斑状に存在する状況である。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

断片的な資料であり、木簡の性格は不明である。

70号木簡(N溝出土)

①釈文と法量

(符籙・絵画ヵ)

(126)×(19)×4 081

②観察状況

オモテ・ウラ面ともケズリによる調整があり、オモテ面には顕著なカットグラス状ケズリが確認される。上下端・両側面とも欠損しているものと判断しているが、左側面については原形を保っている可能性もある。右側面下端部は原形を保っている可能性もあり、その場合は、欠損はごくわずかと考えることができる。腐食・摩耗によって角が取れている状況であるが墨書の遺存状況は良好。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

文字としての釈読はできず、全体が符号・符籙あるいは絵画などと考えることができる。中央部の「ろ」字状の部分とその下の二段横組みの横線が木簡の中心に位置すると考えると、観察状況で記載したように、右側の欠損部はごく幅の狭いものとなるか。

なお、ウラ面の上端に文字にならない墨痕がある。

71号木簡(C南溝出土)

①釈文と法量

〔合ヵ〕
四合　五□
『不』

直径180・厚7 061(曲物底板)

②観察状況

墨書は曲物底板外面に記載されている。ただし、底板には側板固定の綴紐が残っているものの中央部に穿孔が施されており、軸を差し込み弾み車等に転用された可能性が高い。保存状況はウラ面(底板内面)は外縁部を除き波板状に腐食し、オモテ面(底板外面)は全体に表面が荒れている状況で、1行目部分(五□)は特に荒れの著しい箇所に該当する。柾目材・樹種スギ属。

③記載内容と木簡の性格

記載内容は、「四合」・「不」・「五合」の三箇所で、文字の大きさなどから、最初「五合」が曲物の容量として記載されていたが、それが誤っており(「不」の記載)、改めて大きく「四合」と書いたものと推測される(以上平石の解釈)。いずれも曲物としての使用時の記載であろう。

72号木簡(Ⅰ区出土)

①釈文と法量

・「　知
・「□

(102)×47×6 061

②観察状況

上端は平面・側面ケズリによって若干圭頭状に成形されている。軸下端は欠損するが平面的な断面を持っており、人為的に切り落とされた可能性が高い。題籤部の下部は両側面からの切り込み痕が軸部に深く及んでいるほか、平面・側面ケズリによって丁寧に調整されれている。 二次的圧力によって変形し、厚さは一定でない。ウラ面には付着物がある。オモテ面の文字「知」は右側が切れており、題籤軸としての使用以前、おそらく011型式木簡としての使用時の墨書と思われる。柾目材。

③記載内容と木簡の性格

現在ウラ面としている面の中央の文字が題籤軸としての使用に関わるものである可能性があるが、釈読できず、011型式の木簡としての使用段階のものである可能性も否定できない。形状からは、最終的には題籤軸(061型式)での使用を意図したものと考えられる。なお、オモテ面の文字「知」は題籤軸としての記載としても適当であるが、文字が題籤軸への整形によって切られていることから題籤軸への転用以前の墨書と理解した。

73号木簡(Ⅰ区出土)

①釈文と法量

・「□□□　□□
　　[　　]
・「[　　]

(137)×(16)×4　081

②観察状況

A・B面ともケズリ調整。上端は平面ケズリを中心に四方向からのケズリが施される。保存状況は良好な部分と木質の失われている部分が斑状に存在するが、B面は全体の不良で、赤外線テレビを利用しても墨痕はかすかにしか確認できない。柾目材・樹種カヤ属。

③記載内容と木簡の性格

A面1文字目は金偏・2文字目は虫偏、3·4文字目は禾偏である。B面の内容は不明。習書木簡であろうか。

12. Ⅳ区SB02木簡溜まり出土

74号木簡

①釈文と法量

〔伊海ヵ〕
「□□マ加津女」

240×23×4　051

②観察状況

上端は摩耗のため詳細は不明であるが、丁寧なケズリが施された痕跡はないと思われる。オモテ・ウラ面・左右側面はケズリによる調整が施される。形状は完損するが保存状況は不良で オモテ・ウラ面とも斑状に表面が失われている部分が多くをしめる。墨痕も「加津女」部分をのぞいては大変薄くしか残存せず、実測図はの墨書表現は取り上げ直後の観察記録から一部補足している。板目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「伊」＋人名記載を持つ051型式付札木簡である。

75号木簡

①釈文と法量

〔海若ヵ〕〔マヵ〕
「□□倭□　馬手」

(217)×26×4　051

②観察状況

上端は摩耗するが中間に段を有しており、両面から刃を入れたキリ・オリの痕跡であろうか。下端は一部欠損する。オモテ・ウラ面・左右側面はケズリ調整。形状はほぼ完存するが、保存状況は不良で オモテ・ウラ面とも斑状に表面が失われている部分が多くをしめる。墨痕も「馬手」部分をのぞいては大変薄くしか残存せず、実測図はの墨書表現は取り上げ直後の観察記録から一部補足している。板目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

「海」＋人名記載を持つ051型式付札木簡である。「海」については、本遺跡西側2kmの現出雲市日下町に所在したと考えられる久佐加神社同社海代日子神社・海代日女神社（『延喜式』巻10神名下）の「海」が想定される（第11章参照）。

76号木簡

①釈文と法量

〔美ヵ〕
「□□倭□[　]」

(198)×23×4　051

②観察状況

上端は摩耗･腐食するが、キリ・オリのち左側のみ側面ケズリであろうか。オモテ・ウラ面とも遺存状況は類似することから、ウラ面もケズリ調整が想定される。左側面は若干失われているのか、えぐれた状況を呈している。形状はほぼ完存するが、オモテ・ウラ面とも木簡表面はほぼ失われており、柾目木目が浮き出た状態である。墨痕も「倭」部分をのぞいては大変薄くしか残存せず、実測図の墨書表現は取り上げ直後の観察記録から一部補足している。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

記載内容は不明な点が多いが、おそらく中央以下に人名倭文部某が記載されているものと考えられるが、大変墨痕が薄く「マ」も含め確定できなかった。上の文字は１文字あるいは2文字と推測され、「美」・「日下」などが想定される。木簡全体は固有名詞＋人名記載を持つ051型式付札木簡と判断できるが、最初の文字を「日下」と釈読した場合（平石案）、本木簡のみにみられる記載で、遺跡西側2kmの現出雲市日下町に所在したと考えられる久佐加社・来坂社（『風土記』）、久佐加神社（『延喜式』）の略である可能性がある（第11章参照）。

77号木簡

①釈文と法量

「[　　]」

(241)×21×4　051

②観察状況

上端キリ・オリ。下端はほんのわずか欠損する。オモテ・ウラ面並びに左右側面はケズリ調整を施す。表面木質の保存状況は良好であるが、取上時点から墨書は極めて薄くしか残存せず、文字の存在を推定できる程度である。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

記載内容が不明であることから断定はできないが、形状は051型式であることから付札木簡である可能性は大きい。

13. Ⅳ区遺構外出土木簡

78号木簡（C19出土）

①釈文と法量

・「売田券　舩岡里戸吉備部忍手佐位宮税六束不堪進上」

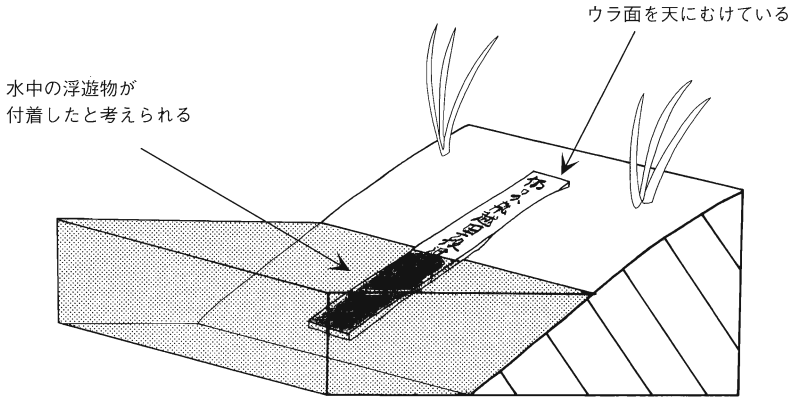
・「仍〔口分ヵ〕□□舩越田一段進上　天平八年十二月十日［　］
〔郷ヵ〕　〔呂ヵ〕○　」
□長若倭マ臣□麻□［　］

352×42×4 011

②観察状況

上端・下端とも平面ケズリ。下端には、キリ・オリ時のものかと思われる切痕跡跡がある。上端・下端とも四隅に丸みを持つが、明瞭な切り落とし痕跡はなく摩耗による丸みとみられる。オモテ・ウラ面ともケズリ調整が施され、特にオモテ面は保存状況良好であることも相まって多数のカットグラス状ケズリが確認できる。また、下端右寄りに、オモテ面よりウラ面に向けて穿孔がなされる（焼痕なし）。裏面は上部の１行書き部分まで、木質の遺存状況はよいものの墨書保存状況が悪く、その一方で下部の割書部の始まり付近から黒色物質が付着しており、釈読を困難にさせている。平成16年度に実施した保存処理（真空凍結乾燥法）によって、このウラ面下部の黒色物質は幾分か除去できたもの、結果として上部の墨痕がいっそう薄くなってしまった。そのため、オモテ面・ウラ面上部についての実測図の墨書記載は、木簡取上時の観察記録から補則修正して作成している。

上述のようオモテ・ウラ面、及び上下における保存状況の差から、木簡が最終的に土中に埋没し比較的安定した状態になる以前に、①木簡はオモテ面のみに物に接し、②ウラ面上部のみ空気に触れ、下部には他起源の黒色物質が付着する状況で、③水分を常時に補給される状況（木簡の木質の保存状況の良さからの推測）で一定時間が経過したと推測される。端的に言えば、全体が湿潤な池・湿地の汀付近で、下端のみが水につかる状況であったと推測される（第14図参照）。なお、出土状況はまさしくこのような状況でウラ面を上に向けて出土しており、上述した一定時間の経過は、出土地点以外の某所でなく出土地点と遠くない場所で生起した、と考えるのが妥当であろう。柾目材・樹種ヒノキ。



第14図　売田券木簡埋没状況概念図
（実際は、汀線付近の傾斜は緩く、水平に近いと考えられる）

③記載内容と木簡の性格

「売田券」見出しを持つ、短冊形（011型式）の木簡である。他に類例のない木簡であることから、以下、若干詳細に記載の様式や内容、推定される木簡の機能にふれることとする。

◇記載の様式

上端「売田券」を見出し風にやや大きめに記して、以下オモテ・ウラ面（下部2行割書）に記載が及ぶ。木簡の

用法を考える上では、下端付近に右に寄せて穿孔がなされている点が注目される。文字との切り合い関係がないため、厳密な文字記載との前後関係、現在の記載内容とのは不明であるが、中央部の記載を避けて（あるいは中央部への記載を予想して）穿孔されたものと考えられ、「売田券」としての使用時のものと考えて矛盾はない。

文字の割付は「船岡戸吉備部忍手里」までがややきつめに書かれており、「佐位宮税六束不堪」は広めの間隔で書いた後、オモテ面下端「進上」のみが左側に詰めて書かれるが、内容と併せてオモテ面に特定の記載内容を押し込んでいる様子は窺えず、表裏一体で機能していたと考えられる。その一方で、ウラ面割り注部分は右行：年紀、左行：署名となっていることから記載には一定の企画性があり、一枚の木簡で内容が完結していることが明らかである。

文字は詳細に見ると、若干の軸のぶれ、濃淡が確認され、以下「売田券」「船岡里戸」「吉備部」「忍手」「佐位宮」「税六束」「不堪」「進上」「仍口分」「船越田」「一段」「進上」の区切りで擱筆しながら書かれたと想定される。これらはそれぞれ意味上のまとまりと考えるべきで、例えば人名を「吉備部忍手·佐位」の２人とし、「宮税六束」などと区切って考察することは難しいと言える。

全体として木簡の記載内容の構成は「売田券」＋事書＋年紀・署名の構成で、事書部分が長短の変化によって伸縮しうる記載様式もち、内容としては完結している。穿孔と紐による連点を考えると、「売田券」木簡は１点のみの出土であるものの、同様式のものが多数用意され、機能していたことが予察される。

◇記載内容

全体としては、「売田券」の見出しに続いて、船岡里の戸吉備部忍手が、佐位宮の税六束を進上できなかったために、船越田一段を進上したというもので、つづいて日付である天平8年12月10日と何らかの文言が記され、最後に郷長若倭部臣の記載がある。

◇売券との関係

木簡記載の詳細について触れる前に、「売田券」から想起される、律令制下における土地売買文書、売券と本木簡の関係についてまず概観する。

律令制下の土地の売買については、律令法上明確な規定はないが、田令に「皆経所部官司申牒、然後聴之」（宅地条）「皆須経所部官司申牒、然後聴」（賃租条）の規定があり、売主による上申文書が作成されたと考えられる。また、宅地条集解朱説所引の先云は「案郡可申国、々乃其書末署名、其所捺国印」とすることや現存する文書から、8世紀においては国司の署名捺印によって効力を発揮したと考えられる（加藤友康1984）。これらの過程は文書中に「立券」とみえ、作成された文書は「〇〇券（文）」（「郡判券文」など。『平遺』1-164）で呼称されている。

結論から先に述べると、本資料は現存する紙の売券に対して以下に挙げるように異なる点が多く、紙の売券と同等の機能を果たしたと考えることは困難である。

①書写材料が木簡（竹木）であること　『令集解』公式令天子神璽条古記では、「注。過所符者。随便用竹木。謂和銅八年五月一日格云。自今以後。諸国過所。宜用国印也」とみえ、竹木（木簡）は国印を押すのに適さないと考えられおり、本資料にも国印はもとより、郡印も確認できない。また国司郡司の署名の有無については、日下に判読不明の部分があるので確認できないが、郷長の書き出し位置から考えて国郡司の署名はなかった可能性が高い。

②「所部官司申牒」のための、上申文言の見えないこと　木簡には上申文言や、差出の記載がなく、文書とするのは不適当であり、記録と考えるのが妥当である。

③記載が簡略であること　紙の売券では「〇〇を△△に売り与えた」、と売買に関わる売主と物件内容、買主が明らかになっており、買主の署名もあるのに対して、本木簡ではこれら基本的な情報について記載がなく、厳密には買主は記載されておらず不明である。これは、最初から記載対象でないか（後述）、当事者間で分かる事柄は記載しないため、とすることもできるが、売買券としてはやはり不適である。

以上のように、公印が押せず（①）、文書の形態をとらず（②）、記載内容が省略されている（③）ことから、本資

料は、紙の売券と同格のものではないことは明らかである。

◇「売田券」

木簡の見出しで、本木簡の性格を示す語であるが、8世紀の史料としては、一般的でない用語である。第７表は宝亀年間までの土地売買にかかる文書における事書や本文中の表記であるが、土地の売買に当たって作成された文書である売券については「売買券」「売買〇〇券」「券」と表記されたことが明らかで、表には示していないが9世紀の売券を見ても「売買墾田券」「売買家地券」が一般的であると言える。つまり「売田券」の語は管見するかぎりの初見となる(2)。

第７表　８世紀売券に見える売券の表記

番号	史料名	年代	事書	本文中	出典
1	山城国宇治郡家地等売買寄進券文	天平12·1·10	家地売買券	券	『東南院』2-389·90
2	同上	天平20·8·16	家地売買券	券	『東南院』2-391·392
3	山城国宇治郡家地等売買寄進券文	天平宝字5·11·2	―	券	『東南院』2-393·394
4	小治田藤麻呂解案	天平20·11·19	売買舎宅并墾田等券	券	『東南院』2-85～88
5	伊賀国阿拝郡柘植郷墾田売券	天平勝宝3·4·12	常地売買墾田立券	券	『東南院』2-90～91
6	伊賀国阿拝郡司解	天平勝宝3·4·13	売買百姓常地墾田立券	券	『東南院』2-88～90
7	近江国甲可郡蔵部郷墾田野地売買券	天平勝宝3·8·20	売買墾田并野地立券	券	『大日古』3-512～514
8	摂津国家地売買公験案	天平勝宝4·1·14	―	―	『東南院』3-13
9	越前国公験	天平勝宝7·3·9	―	公験	『大日古』4-49·50
10	相模国朝集使解	天平勝宝8·2·6	売買地	―	『大日古』4-114·115
11	伊賀国司解	天平宝字2·10·28	売買開田地立券文	券	『東南院』2-91～92
12	大和国城下郡田地売買券	天平宝字3·6·10	売田	―	『大日古』4-368
13	摂津国家地売買公験案	天平宝字4·11·7	―	券文	『東南院』3-14·15
14	摂津国家地売買公験案	天平宝字4·11·18	―	券文	『東南院』3-16·17

「売田券」の表記については、木簡のような一時史料特有の省略表記、「売買〇〇券」の略であるとの考え方がまず成り立つが、先述のように、木簡記載において、本文中に買主の記載がないことが留意される。このような事例としては、次に挙げる売券とされる文書が挙げられる。

参考史料1　大和国城下郡田地売買券（『大日古』4-368）

謹解　申売田事

合壹町肆段捌十歩　在城下郡

右、来丑年分、充銭貳貫文、売与巳訖、仍注状以申送、謹解

天平宝字三年六月十日

専戸主松原王

知御原相坂

往来吉使水通諸国

参考史料2　二条大路木簡（『平概』24-5）

『口』
・式下郡司解「自」申沽口分田立券
『[　　]』　□□□

□□部鳥口
・『□八十田廣□』（天地逆）部
□業業子

160×(19)×3 081

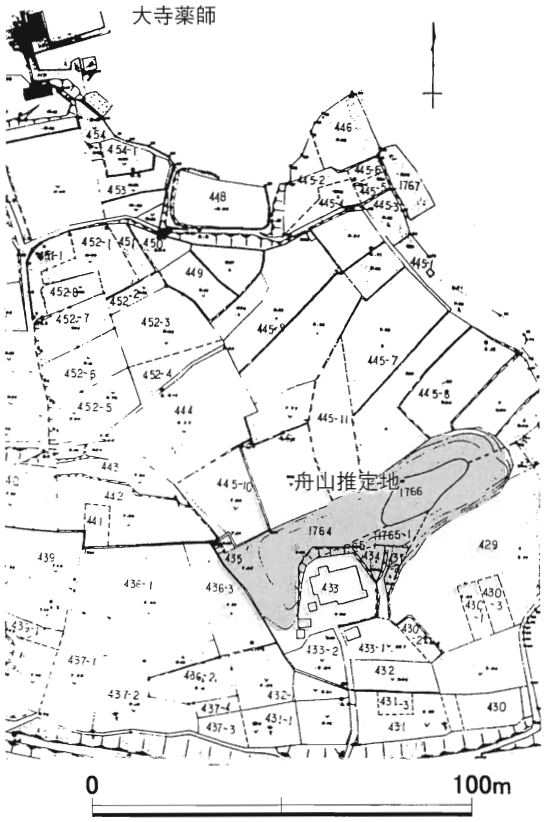
参考史料1は、賃祖に関わる売券と推定されている史料である（小口1987）。「売買田事」とせず、「売田」としており、買主の記載もない。また、参考史料1の紙背は造石山寺所雑材并檜皮及和炭用帳（『大日古』15-370～371）で、本来は越前国田使解（『大日古』4-275）等とともに造石山寺所に持ち込まれ、張り継がれ再利用されたものであり、いわゆる安都雄足関係文書である（小口1987）。従って城下郡での保管は考えられず、安都雄足（買田人）による保管が想定される。『正倉院文書集影』をみる限り、「往来吉使水通諸国」以下に郡判・国判が続いていた痕跡はみられない。文書形態をとる点こそ異なるが、「売田」の表記、郡判国判の見えない点など、76号木簡との類似点は多い。

参考資料2は、二条大路木簡（SD5300出土）中の資料で、第１義的には習書木簡であるが、そのオモテ面の習書内容は沽口分田に関わる、郡司解による立券である。78号木簡同様、口分田に関わるものであることから賃租による「沽田」と考えられるが、やはり「売買田」としていない点が注目される。

なお「売田」については但馬国府に関係するとされる兵庫県祢布ヶ森遺跡出土題籤軸に「二方郡沽田結解」（第19次調査）「養父郡　買田券 寛平九年」（第20次調査）の記載のあるものがあり（加賀見1996）、明らかに「売買田」と異なる「売田」「買田」の語が存在した可能性は高く、「売田券」が「売買田券」より簡易な、売田に関わる記載のみからなる文書である可能性はある。

◇「舩岡里」

既報告では木簡の年紀が不明なため、里制下の里、条里制の里名などの可能性も検討されていたが、「天平八年」の記載から、郷里制下の里名であると考えるのが妥当である。出雲郡の郷里制里名は天平11年「出雲国大税賑給歴名帳」（『大日古』2－201～247）によって、健部郷（波如）・漆治郷（深江・工田・犬上）・出雲郷（朝妻・伊知・多級）・河内郷（伊美・大麻）・杵築郷（因佐）の里名が知られているが、いずれにも該当しない。歴名帳は遺跡周辺部分の伊努・美談・宇賀郷について現存せず、杵築郷の残り2里・神戸郷の里名については不明であるので、これらの郷に属する里に該当すると考えられる[3]。遺称地については明確でないものの、『雲陽誌』（享保2（1717）年成立）には神門郡東林木に「舟山」の項目が見え、現大寺薬師南方、青木遺跡の北東約300m、大寺三蔵遺跡内にかつて所在した小丘陵がそれに当たるとされるので（第15図参照）（原1990）、やはり遺跡の所在地に当たる伊努・美談郷のいずれかの里の可能性が高い[4]。



第15図　舟山推定地位置図
（出雲市教育委員会1989より加筆転載）

◇「佐位宮」

「佐位宮」については、「宮」は皇族・王族の居所を指す語考える理解と、神社・ヤシロを指す語と考える理解が成り立ちうる。結論としては、いずれにも判断しがたい状況である。なお、「佐位」と「宮」を分離して考えることができない点は、記載の様式で述べたとおりである。

まず前者と考えた場合、「佐位」は宮の所在地（榎村2005）、あるいは皇族･王族の名称となる。そこで8世紀前半における佐位の固有名詞を検討すると、橘諸兄の弟の佐為王を挙げることができる。佐為王は狭井王とも表記され（『藤氏家伝』下）、美努王と県犬養宿禰三千代の男で、天平8（736）年11月に葛城王と共に橘宿禰の賜姓を請い許されている（『続紀』）。以後は橘宿禰佐為となり、同９（737）年８月に卒している（同）。なお、「宮」の称号は、東宮職員令･家令職員令皇族の居所としては東宮のみであり、親王や三位以上の貴族の居所は「家」と表記され、六国史などでも、親王・諸王以下の居所は「家」「宅」「第」と表記されるが、「○○親王宮」（例：多治麻内親王宮）「○○王宮」（例：市原王宮･安宿王宮。「王」を欠く事例もある）の表記が木簡や正倉院文書に散見されることは周知の事実である（荒木1985）。橘宿禰賜姓後の諸兄の居所については「相楽別業」（『続紀』天平12年5月乙未条）と表記され「宮」を称さないことから橘賜姓直後の本木簡で「佐位宮」表記はあり得ない、と考えることもできるが、上述のような実態としての「宮」の用法がある以上、賜姓後も連続して「宮」と呼ばれ、木簡のような一次史料に書かれた可能性は完全に否定できるものではない。なお、出雲国における王臣家の私稲の存在については、長屋王家木簡に「出雲税使神戸臣□」（『平概』28-18）があり、神戸臣は遺跡の所在する出雲郡の隣郡神門郡の大領の氏族（『風土記』）であることから、8世紀初頭に出雲西部地域で長屋王の「税」が運用されていたことが確認できる。

なお、佐為王の名は、その養育氏族が狭井宿禰･連などであったことに由来すると考えられるが、狭井連の本拠地は桜井市三輪の北部であり、倭屯田・出雲臣との関係が指摘されている興福寺領出雲庄（岸1988）の東側に近接する。また、同地の狭井社の創始を『書紀』垂仁25年の大倭大神を長岡岬に祀ったことと結びつける伝承もあり（「仁安2年大倭神社注文状」『大和志料』下）、狭井の地が出雲臣と並んで倭屯田伝承に登場する大倭直との関係もあることから、狭井宿禰・佐為王と出雲地域との関係性も指摘できるが、今のところ出雲地域における狭井･佐為姓の人物は見えない。

後者の「宮」とヤシロとの関係については木村徳国氏の研究がある（木村1988）。氏の研究によると、『延喜式』神名帳では宮（神宮）号を有する神社は11社にすぎず、高位性・「称号」としての性格を持つものである。また、ミヤの語源はほぼ「御・屋」と想定され、建造物と見る意識は強く、カミノミヤは、「宮」称号の皇統者による独占、神の人格神化、皇統神話の成立の段階を経て、神の住居として建造物が創設されたことを契機として成立し、その記録の早いものは７世紀後半の事例がある（『書紀』斉明紀の「修厳神之宮」）とする。

ただし、このことは7世紀段階から、一般の神社が社殿を持って、「○○宮」と呼ばれていたことを示すのではない。78号木簡の年代に近い天平5（733）年成立の『出雲国風土記』は、地方の一般的な神社について詳細な記載のある史料として知られているが、神社の記載項目は全て「大社」「社」の表記で、「宮」の表記の事例はなく、その他の記事全般を見ても『出雲国風土記』に見える「社」で「宮」と呼ばれる事例は杵築大社（『風土記』楯縫郡条・出雲郡杵築郷条）と、磐坂日子命が「吾之宮者是処造事者」と述べた事例（同秋鹿郡恵曇郷条。恵曇社に関わる記述とされる）のみで、他はすべて「社」として登場する。

くわえて錦田剛志氏の指摘によれば、『風土記』では祭祀に関わる、あるいは神の居住する建造物は「屋」「高屋」「御厨」「御倉」「酒屋」（いずれも「神宮」である杵築大社に関わる伝承ではない）として表記し、その一方で杵築大社に関わる記述のみ「宮」が登場することから（錦田2004）、少なくとも『風土記』の中では「宮」はほぼ杵築大社に限定され、一般的な神社の建築物の呼称としては使用されていないことは明らかである。また、「社」については建造物を持たない神社が多数含まれている一方で、 建造物の存在を確実に確認できる事例が上記一例のみしかないことは[5]、『風土記』段階では出雲国における社殿の存在する神社は稀であり、一般的な神社が「宮」

と呼ばれる可能性も低かったことになる（錦田2004）。

しかし、諸国正税帳では天平4(732)年の隠伎国大税帳、天平10(738)年の周防国正税帳にはいずれも「神社造用」「改造神社料」の記載が見え、天平9年には「令造諸神社」の指示が出されていることから（『続紀』）、天平期頃を境に神社の建築物（社殿）造営が行われるようになった可能性はある[6]。

以上のように、木簡の天平8年段階で一般の神社に「宮」表記につながる神社の社殿が存在したか否かについては時期的に判断が難しい状況である。ただし、「神宮」の表現は比較的多く見えるものの、管見のかぎり、一般的な○○神社を「○○宮」と呼称した8世紀代の史料は確認できない。したがって現状では、8世紀では「宮」は接頭語「神」をつけ一般の「宮」（皇族の居所）と違うことを明示することによってのみ、神社の意味として捉えられていた段階と考えざるを得ない[7]。また、本遺跡出土の文字資料のなかでも、「美談社」など「社」の墨書・「神」の墨書は見られるが、「宮」の墨書はない点も「宮」を神社と考える上での問題点である。

「佐位宮」を神社名と見た場合、『出雲国風土記』では意宇郡に「狭井社」「狭井高守社」（松江市宍道町白石の佐為神社）がみえるが、いずれも郡が異なることから想定しづらく、牟礼仁氏・関和彦氏は、「佐位」を「狭井」とみて、今回調査した石敷き井戸を含む遺構群を佐位（狭井）宮とする（牟礼2003・関2004）。

第８表　8･9世紀の土地売買における反当たり平均価直と公田地子との関係（吉村1978より一部改変転載）

番号	年　　月	国　名	地　目	反当たり平均価値	負債物件名	公田地子率		出　　典
						上	中	
1	天平神護2年10月	越前	墾田	24.7			1/3	『大日古』5-576
2	天平神護3年2月	越前	墾田(荒)	8.1				『東南院』2-245
3	天平神護3年2月	越前	墾田	29.8		1/3		『東南院』2-246
4	天平神護3年2月	越前	墾田(荒)	20.1		1/2		『東南院』2-250
5	天平神護3年2月	越前	墾田	24			1/3	『東南院』2-251
6	天平神護3年2月①	越前	墾田	23.4			1/3	『東南院』2-249
	天平神護3年2月②	越前	墾田	16.0			1/2	
	天平神護3年2月③	越前	墾田	16			1/2	
	天平神護3年2月④	越前	墾田	24			1/3	
	天平神護3年2月⑤	越前	墾田	24.0			1/3	
7	天平神護3年2月	越前	墾田	23.9			1/3	『東南院』2-247
8	天平神護3年3月	越前	墾田（荒）	20.7		1/2		『大日古』5-656
9	宝亀5年11月	備前	畠	26.7	正税			『大日古』6-577
10	宝亀7年12月①	備前	畠	14.6	庸米			『大日古』6-591
	②	備前	畠	13.3	火頭養			『大日古』6-591
	③	備前	畠	15	直			『大日古』6-591
11	延暦3年6月	長岡京	宅地	22.8				続日本紀
12	延暦10月正月	山城	家地	20	稲代	1/2		『平遺』1-6
13	延暦15年9月	近江	墾田	29.5	正税	1/3		『平遺』1-15
14	延暦15年11月	近江	墾田	30	正税	1/3		『平遺』1-16
15	延暦20年12月	因幡	土地(見)	7.3				『平遺』1-74
16	延暦21年正月	近江	墾田	22.0	正税			『平遺』1-22
17	延暦22年12月	因幡	土地(見)	7.8				『平遺』1-74
18	大同2年正月	大和	墾田	26.3	正税			『平遺』4-4328
19	弘仁2年3月	近江	墾田	42.9				『平遺』1-33
20	弘仁9年3月	近江	墾田	18				『平遺』1-44
21	弘仁10年2月①	近江	墾田	30	官物	1/3		『平遺』8-4421
	弘仁10年2月②	近江	畠	20	官物	1/2		
22	弘仁11年12月	近江	墾田	24	正税		1/3	『平遺』1-47
23	弘仁14年12月	近江	墾田	30	正税	1/3		『平遺』1-48

※１「公田地子率」とは単あたりの公田地子（上田10束、中田8束）を仮に賃租料とみて、それと「反当り平均価直」との割合を示したもの。例えば1では反当たりの平均価直は中田の公田地子の3倍である。

※２地目のうち、土地（見）は土地の一部が見開されていること、墾田（荒）はその中に荒廃地が含まれていることを示す。

◇「税六束」と「口分船越田」一段

「税」は出挙を指す事から、「佐位宮」の出挙の本利稲と考えられる。その代替として口分船越田一段が進上されたことになる。口分田売買については田令賃租条私案の引く戸婚律は「凡過年限賃租田」の罰則を記した後、「謂職田位田賜田及口分田」としていることから複数年にわたる口分田の売買、すなわち永代売は禁止されていたと考えられる。なお、天平8年という時期と永代売については、墾田に関していえば三世一身法以降、伝世可能な功田（上記過年限賃祖田に該当しない）に準じて永代売的現象が認められたと考えられる（吉村1978）。

水田の永代売買価格については、反あたり公田地子（獲稲の二割）の2～3倍程度であること、一方賃租価値は公田地子よりやや高めであることが吉村武彦氏により指摘されている（吉村1978）（第８・９表）。これらを見る限り、段当たり6束は永代売より賃租の価値に関わるものと考える方が可能性は高く、永代売の場合、禁止に反する事例であるか今回提示した〔口分ヵ〕の読みが誤りであるとして墾田と見なす必要があり、かつ穫稲が少ない田品の低い田か[8]、あるいは第８表中2の生江広成の事例のような荒田などを考える必要がある。

第９表　８世紀における賃租の価直（吉村1978より一部改変転載）

番号	史料名	反当たり賃租価	備考	出典
1	天平7年讃岐国弘福寺領田図	上田　9.4～12．2束		
		件数平均 10．5束		
		中田　9～10束		
		平均　9．5束		
2	天平勝宝3年伊賀国墾田売買券	上田　11.4束	(別筆)天平勝宝三年歳次辛卯年始常地作料一年	『東南院』2-90
3	天平勝宝9年讃岐国法隆寺領田文書	3～4.8束		
4	天平宝字3年大和国田地売買券	4．7束	来丑年分，宛直銭	『大日古』4-368
5	天平宝字6年安都雄足用銭注文	少領職田　11．7束	自信濃人進銭	『大日古』16-57

※１(1)は250束代以上の田品が明白な田地を対象に取り上げた。なおそれ以下の田地を含め単純計算すると上田で11.2束となる。
※２(2)(4)(5)は銭により支払いが行われているが、6文を米1升として換算した。
※３の出典は岸俊男1973。

◇日付

12月の日付については一義的には「佐位宮税」の収納、すなわち出挙の収納に関わって本木簡の記載内容が作成されたと考えるべきである。8世紀の正税未納による土地売買の史料として著名な「備前国津高郡菟垣村常地畠売買券」（『大日古』6-577）をはじめとし、同じく正税未納に関わる延暦～弘仁期の近江国大国郷売券などの製作月は（第８表参照）、多くが９月～12月である。また、本木簡を賃租に関わる売田とすると、天平8年の出挙による負債を元に、来る天平9年の賃租関係が決定されたことになる。賃租に関しては先に見たように連年の賃租（永代売に近似する）は禁止されているが、「立今年秋、聴為作来年賃」（『令集解』田令賃租条穴記）として、秋の収穫後に直ちに翌年の賃（価を先払いする方法）を決定することが聴されていた。このことについては従来積極的な評価がなされていなかったが、出挙による負債諸関係がそのまま土地を通した負債関係である賃租に転化する上では、出挙稲収納時の秋時点での翌年の「賃」関係の決定は重要であったはずで、本木簡はその事例と考えてよいと思われる[9]。

◇年紀と製作年代

木簡記載の年紀は天平8(736)年であるが、出土状況からは、9世紀初頭に廃絶したⅣ区SB02･04の遺構廃絶面からの出土である点が問題となる。木簡を他の文書からの抽出などによる記録木簡と考えた場合、必ずしも記載内容と制作年が一致しない。また、土地の売買に関わる記録という性格上、長期にわたって保管される可能性があることは、現存する売券や、売券の保管を示す文書の存在から明らかである。ただし、１年かぎりの賃租の売券は永代売の根拠ともならないことから現存例が少ない と考えられ(佐竹1999)、保管理由を想定しなければならない。

◇署名

郷長がいずれの郷の郷長かは不明であるが、舩岡里は当郷長の郷の下の里名であるとみるのが合理的であるので、舩岡里で説明したように伊努・美談郷の可能性が最も高く、他に杵築郷･宇賀郷の可能性がある。現在のところ、二段割書左側の「郷長若倭部臣□麻呂」のみ確認できるが、日付の下に判読できない文字群があり、ここに墨書があることは確認されているので、他の人物の署名などがある可能性もある。ただし、木簡の記載内容は「舩岡里戸」のように、特定郷内で理解できる範囲で内容の省略が為されており、署名は郷長以下のみで、冒頭に述べたように国司郡司の署名の可能性は低い。なお、若倭部臣は、『風土記』において出雲郡の主帳に確認できるほか、鰐淵寺所蔵の銅像観音菩薩立像銘文(壬辰(692)年)に造像者として「出雲国若倭部臣徳太利」がみえ、出雲郡内の有力氏族であることが知られていた。

◇まとめ

78号木簡の記載内容について総括をすると、紐によって束ねることによって容易に整理作業ができるように作成された記録木簡であると想定され、紙の売券同様の法的効力を持つものではないと考えられる。そして書かれた内容は、各種の売券などとの比較、口分田の表記や土地の価値から判断して口分田賃租の売券と考えられる。

この木簡が製作された契機であるが、A法的効力のある、国司郡司の署名捺印、即ち郡判国判のある紙の売買田券から、整理作業のために必要事項を抽出した記録木簡、B賃租に当たり、売田主から買田人に出された、参考史料1のような簡易な文書から必要事項を抽出した記録木簡、Cこのような記録木簡で第一時的に券を作成しこれを元に後に法的効力のある紙の売買田券を作成した（あるいは賃租であることから紙の売買田券は作成されなかった)[10]、の3様の推定を行っておきたい。

ただし、いずれの場合も、木簡は少なくとも9世紀初頭のⅣ区SB02･04の廃絶以降の遺物包含層から出土している点についての説明が必要となる。Aの場合は法的効力を持つものからの抽出なので、元となる売買田券が長期にわたり保管される可能性はあるが、賃租と考えた場合、紙の売券としては現存例の少ない賃租記録の保管の理由を想定しなければならないであろう。一方、法的効力をもたらす国司郡司の名が見えず郷長以下の名が記載される点は、Aと考えるとやや不審である。

最後に木簡の保管場所であるが、上記A・Bいずれの場合でも、当然紙の売券の保管場所周辺での製作を想定する必要がある。紙の売券の保管、すなわち田地・田作人の掌握は、国･郡であり、既存の紙の売券の製作も国・郡・買人充てに行われていることからすると(加藤友康1984)、これらのいずれかのとなる。遺跡について国との関係を指摘する説もあるが(榎村2005)[11]、この木簡自体については郡あるいは買人の施設での管理に必要なレベルの情報しか記載されておらず(たとえば郡名の省略、郷長の郷名の省略など)、出雲国全体の土地管理の中で直接機能するものではないと考えるべきであろう。このいずれかについて木簡記載から判断することは難しいが、買人についての記載がなされないことは前述参考史料１と類似し、保管者には自明のこと、すなわち買人側で保管された可能性が高いことを指摘しておく[12]。

79号木簡（C19出土）

①釈文と法量

・「若倭マ臣細足以上税事

・「上物上万呂等当月析

(196)×28×3 019

②観察状況

上端はオモテからの平面ケズリ、下端は欠損するが、直線を呈している部分があり右肩上がりで切り折られた可能性が高い。文字は肉眼で確認できるものの、木質の保存状況は不良で表面調整はオモテ・ウラ面とも明確に確認できない。二次的圧力を受けて変形している。板目材・樹種ヒノキ。

③記載内容と木簡の性格

下端が欠損することから、性格を確定することはできないが、若倭部臣細足が税を進上した進上の文書木簡か、進上を記録した記録木簡で、「以上税事」の記載からは記録木簡の可能性が高いか。ウラ面は物(部欠か)上万呂等の月料の記載がみえ、憶測すればオモテ面の「税」がウラ面の「月析」に充当されるなど、両者は何らか相関するものであったと思われる。

80号木簡（B20出土）

①釈文と法量

「伊丈マ乙虫万呂」

(197)×28×3 051

②観察状況

上端キリ・オリ。下端は先端部のみ欠損。オモテ面のみケズリ調整で、ウラ面は未調整である。木質の遺存状況はおおむね良好ながら、墨痕は薄く「伊丈」を除いては肉眼では確認できない。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「伊」＋人名記載の051型式付札木簡である。

81号木簡（B20出土）

①釈文と法量

「□□□安里」

188×22×2 051

②観察状況

非常に保存状況が悪く、オモテ・ウラ面の調整痕跡ともにほとんど判断できない。上端は簡易なケズリであろうか。特にウラ面の腐食が著しく、表面の木質は完全に失われており、ささくれだった状態である。オモテ面の方が若干保存状況は良好で文字は肉眼で確認できる。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

051型式で、「安里」は人名と想定されるが 、ウジ名は判読できなかった。おそらく固有名詞＋人名記載の051型式付札木簡と推測される。

82号木簡（C19出土）

①釈文と法量

「宍百」

200×30×5 051

②観察状況

上端キリ・オリのちウラ面より若干の平面ケズリがおこなわれるが、角を落とす程度で、上端全面には及ばない簡易なケズリである。オモテ面ケズリ調整、ウラ面未調整。保存状況は良好で表面の状況も良く墨書も肉眼にて観察できる。板目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

051型式の付札木簡で、上端右寄りに「宍百」の記載がある。「宍」を記載した木簡としては、新潟県八幡林遺跡24号木簡に、「干宍□串」の記載がある。同木簡は「四月五日」の日付を持ち、他に「赤坏」の記載があることから、「農耕儀礼の饗宴に必要な物品を書き出した木簡」との評価がある(三上2003)。本木簡の宍の数量は「百」点であり、「宍」の大数量の供給、すなわち多数の人数による饗宴のための物資につけられた付札であることが推測される。

83号木簡（Z20出土）

①釈文と法量

・「美□マ美万呂」

・「『[　　]』」

(162)×21×2　051

②観察状況

上端は部分的にのみ残っており、平面ケズリが確認される。下端は先端部のみが木質の保存状況が悪くささくれ立っている。同様に、オモテ面は表面が流出し、柾目材の木目のみが浮かび上がっている。一方ウラ面は保存状況は良好で、ケズリ調整やカットグラス状ケズリも確認できる。このようにウラ面の墨痕の薄さは、保存状況に起因するものではなく、カットグラス状ケズリによる文字の削り取り行為によるものである。柾目材　・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

固有名詞「美」＋人名記載の051型式付札木簡であるが、ウラ面に別筆の削り取られた文字がある点が注目される。なお、「美」の下の文字は「物」の可能性がある。さらにオモテ面は文字が木簡形状内で完結しているものの、ウラ面の文字は明らかに右片を切られており、現況の木簡形状になる以前に記載されたことになる。すなわち、別な木簡から加工・転用した付札木簡と理解できよう。

84号木簡（Z19出土）

①釈文と法量

□(墨痕)

(132)×(33)×5　061

②観察状況

下端に円弧状曲線があること、オモテ面に側板のアタリがあることから、本来は曲げ物の底部であると考えられる。現状では上端キリ・オリ、両側面も割り裂いた状態で、現在の形状に加工されている。保存状況は良好である。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

記載は筆を重要に走らせた筆そろえによる塗りつぶし的状況で、文字として釈読することはできない。また観察状況で記したとおり、人工的に現在の形状に整形されているが、墨書行為との関係は不明である。

85号木簡（Z19出土）

①釈文と数量

〔廿ヵ〕
・「　　□
・「□　□

(63)×20×3　019

②観察状況

上端はＡ面からの平面ケズリ。オモテ・ウラ面の調整は保存状況が不良で確認できない。柾目の木目が浮き上がった状況である。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

断片的な資料であり木簡の性格は不明である。

86号木簡（Z19出土）

①釈文と数量

『□』
□

(103)×(34)×7　019

②観察状況

上端キリ・オリのちオモテ面より平面ケズリ。オモテ・ウラ面とも表面にケズリ調整を施す。また、右側面のみケズリ調整が確認される。柾目材・樹種スギ。

③記載内容と木簡の性格

小さな文字（『□』）と「ノ」の字状の墨痕のみが確認される（平石）。厚めの板材であり、木簡以外の部材を転用したものの可能性もあろう。

【註】

（１）『風土記』のイヌ郷記載をめぐっては関1997を参照。

（２）この点、加藤友康氏より指摘を受けた。

（３）出雲郡の里数は『風土記』に記載があり、郷別3里、神門郷のみ2里の合計34里（天平5（733）年時点）であった。

（４）他に『風土記』には大原郡に「船岡山」の記載があるが、郡も異なり距離も離れた中国山地側の山中にあり、積極的に里名を比定できる根拠はない。

（５）古風土記記載の「立社」に注目し、小規模ではあるが、何らかの建造物があったとする関和彦氏の理解もあるが（関1994）、丸山・錦田氏などが指摘するように、「造」「建」と表記しない点を重視するべきで、少なくとも「宮」とは異なる実態であると考える。

（６）①慶雲3（706）年の仏寺神社掃清の指示（『続紀』）、②神亀2（725）年の神社清浄の詔など（同）、8世紀の初頭の神社関係記事には、修造が見えず、清浄にする点に重きが置かれている。このような清浄の指示は宝亀9（778）年の勅が最後となり、以後は修造に関する指示のみが見えるようになる。丸山茂氏は①②についても社殿のある神社に関する指示と考えているが（丸山2001）、後には「清浄」について指示がなくなることからすると、「清浄」は8世紀前半特有の神社の整備方法と考えることが妥当と思われる。即ち、8世紀をかけて神社を整備することが清掃から修造に移行した、社殿のない状態から社殿のある状態に移行し

たことを反映すると考えるべきではなかろうか。

（7）先述の磐坂日子命の「神宮」のように、「神宮」の記載は他に『播磨国風土記』神埼郡多駝里条があるが、いずれも一般名詞の「神宮」を造ったとの記事であり、その「神宮」を「○○宮」と表現はしていない。「神宮」についてはほかに周防国正税帳の駅使国司の記載部分に「造神宮」が見えるほか（『大日古』2-135）、長野県更埴市屋代遺跡群第114号木簡に「神宮室」（長野県教育委員会1996）、9世紀代の資料であるが墨書土器「神宮」が千葉県佐原市神田台遺跡（千葉県教育委員会1978）から出土している。また、奈良時代のものとされる石川県畝田寺中遺跡11号木簡に「口相宮」が見え、越前国敦賀郡の式内社久豆弥神社に当てる事例があるが、確実に神社名であるとまで断言ができない状況である（『木研』25）。なお、厳密に定義しづらいが、早くから社殿が成立していたと考えられる王権に直結する神社では○○宮の事例はあり、伊勢神宮が「磯宮」「渡遇宮」と呼ばれた事例（『書紀』垂仁25年3月条）、胸形の「奥津宮」「中津宮」「辺津宮」（『古事記』上段）、鹿嶋神宮の別宮を「津宮」と呼ぶ例がある（『常陸国風土記』香嶋郡条）。また、一般の神社と異なる事例であるが、香椎廟を「香椎宮」と呼ぶ例もある（『続紀』天平9年4月乙巳条）。

（8）田品を下田（段当たり穫稲30束）の場合土地の価値段当たり18束（賃租の価値6～9束）、下々田の場合土地の価値9束（賃租の価値3～4.5束）となる。

（9）前述兵庫県宮内黒田遺跡出土木簡が「午年分直稲」について記載した天平勝宝4年10月9日の日付を持つ。詳細内容については釈読できない部分が多いため不明であるが、本木簡同様秋時点で賃関係を結んだ（ただし再来年の分になる）事例となる。

（10）前述参考史料1の他、伊賀国阿拝郡柘植郷墾田売券（『東南院』2―90）も郡判・国判を欠き、郷長・證人・筆取・税長のみの記載となっている。この史料については別筆で「天平勝宝三年歳次辛卯年始常地作料」「一年直米四斛」があり、永代売ではなく賃租の史料ではないかとの指摘があり（吉村1978）、賃租の場合、郡判・国判を欠く事例があったことを窺わせる。ただし、耕作者の把握は租の徴収、青苗簿の作成上必要であり、国郡による掌握がなかったとは想定しづらい。税長の関与もこれによるものか。

（11）出雲国府跡から、三太三（美談の神亀3年以前の表記）と推定される、硯として使用された墨書土器蓋が2点出土している（島根県教育委員会2003）。現時点では、出雲国府跡出土の墨書土器で確実に郷名と同じ墨書はこの2点のみであり、平川南氏の述べるような第二河口として重要な地点であった可能性もある（平川2002）。

（12）買田主についての記載は省略されているにも関わらず「佐位宮税」と税の主体は明示しているので、買田主=佐位宮である可能性は高いものの、買田主＝税の代納者である可能性もあり慎重な検討が必要である。

【参考文献】

荒木敏夫1985『日本古代の皇太子』吉川弘文館
今岡一三2003「島根　青木遺跡」『木簡研究』25
今岡一三・平石充2004「島根　青木遺跡」『木簡研究』26
榎村寛之2005「律令祭祀の地域的展開と地方支配ー島根県青木遺跡の史的展開ー」『祭祀研究』4
小口雅史1987「安都雄足の私田経営」『史学雑誌』96-6
小寺誠1999「兵庫・宮内黒田遺跡」『木簡研究』21
加賀見省一1996「兵庫・祢布ヶ森遺跡」『木簡研究』18
加藤友康1984「8･9世紀における売券について」『奈良平安時代史論集 上』吉川弘文館
加藤優1983「奈良・藤原宮跡」『木簡研究』5
岸俊男「賃租二題」『日本古代籍帳の研究』塙書房（初出1955）
岸俊男1988「『額田部臣』と倭屯田」『日本古代文物の研究』塙書房（初出1985）

木村徳国1988「ヤシロの基礎的考察」『上代語にもとづく日本建築史の研究』中央公論美術出版（初出1982～84）
佐藤信1997「封緘木簡考」『日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館（初出1995）
佐竹昭1995「『郡山城下町遺跡』出土木簡を廻る諸問題」『芸備地域史研究』197
関和彦1994「在地の神祇信仰」『日本古代社会生活史の研究』校倉書房
関和彦1997「二つの『イヌ』郷と多久国」『古代出雲世界の思想と実像』出雲大社文化事業団
関和彦2004「青木遺跡の史的空間と出雲神話」（第15回出雲古代史研究会資料）
錦田剛志2004「覚書『出雲国風土記』に見る神祇祭祀の空間」『古代文化研究』12
原重夫1990『とびす ふるさとの歴史』（私家版）
丸山茂2001「神社建築の形成過程における官社制の意義について」『神社建築史論－古代王権と祭祀－』中央公論美術出版
牟礼仁2003「神社遺構を確認 出雲青木遺跡」読売新聞2003年12月4日夕刊
平石充・松尾充晶「出雲・青木遺跡の祭祀遺構と文字資料」『条里制・古代都市研究』20
平川南2000「“古代人の死”と墨書土器」『墨書土器の研究』吉川弘文館（初出1996）
平川南・三上喜孝2001「文字資料」『荒田目条里遺跡』いわき市教育委員会
平川南2002「古代における地域支配と河川」『国立歴史民俗博物館研究報告96集』
平川南2003「古代における人名の表記」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館　（初出1996）
三上喜孝2003「文献史学からみた墨書土器の機能と役割」『古代官衙・集落と墨書土器』奈良文化財研究所
山中章1997「考古資料としての古代木簡」『日本古代都城の研究』柏書房（初出1992）
和田萃1995「下ツ道と大祓」『日本古代の儀礼と祭祀･信仰　中』塙書房
吉村武彦1978「賃租制再検討の視角」『日本古代の社会と経済（下）』校倉書房
〈報告書〉
出雲市教育委員会1989「大寺三蔵遺跡」『出雲市埋蔵文化財調査報告書』
千葉県文化財センター1978『佐原市神田台遺跡』
長野県教育委員会1996『長野県社遺跡群出土木簡』
島根県教育委員会2003『山陰古代出土文字資料集成Ⅰ』
米沢市教育委員会2001『古志田東遺跡』

第９章　墨書土器・刻書・ヘラ書き土器

第１節　墨書土器の概要

１．概　要

出土総数

墨書土器は総数1105点出土した。調査区ごとの内訳はⅠ区935点、Ⅳ区170点である。これ以外に、焼成後に刻書されたものが2点、焼成前のヘラ書きが2点出土している。筆揃え程度の墨痕が残るもの8点を本章で掲載したが、墨書土器には加えていない。墨痕が面的に付着し、パレット状の使用が継続しておこなわれたとみられるものは、転用硯に含めて第15章第５節で扱った。

墨書土器の比率

墨書されない通有の土器は大量に出土しており、コンテナにして約1000箱におよぶ。このうち、須恵器は破片数にして約50000点であった。墨書された須恵器は計717点あり、土器全体に対する墨書土器の比率は1.4％である。

主要な字形と数量

主要な字形については次節で個別に取り上げ、器種・記載部位・使用痕跡・字形などに関する記述をおこなった。文字が釈読できた資料は1105点中751点あるが、このうち35.1％に及ぶ264点が「伊」で占められており最も多い。これは8点と少ない固有名詞「伊努」を省略したものと考えられる。「伊」には「伊酒坏」「伊本」など「伊＋○」の形をとるものが16点あった。

次いで多い字形が「家永」「秋永」でともに60点、釈読可能なもののそれぞれ8.0％である。両者は記載される土器が須恵器と土師器坏にそれぞれ明確な偏りをみせる。「永」という嘉字を含み、田堵に相当するような集団名を表記したものの可能性がある。「廣方」はこれらに次いで多く27点、3.6％であった。同様に集団名の可能性が考えられる。

そのほかに注意される墨書として、「美談社」「美社」がある。これは『延喜式』にみえる美談神社を指すものであろう。「美」１文字のもの５点については神社名を略したとは限定できないが、あわせて34点出土している。

また、「門」は須恵器坏の底部内外面ともに書くものが9点あり、特色のある一群である。

年代

墨書された土器自身の年代は８世紀中頃～後葉に中心がある。古いもので８世紀前半の資料をわずかに含むが非常に少ない。９世紀中葉に下るものは基本的に含まれない。第３節で検討したように、字形によっては継続する時間幅に長短があり、新旧の関係にあるグループも確認できる。したがって、土器に墨書する行為自体はある程度の時間継続しておこなわれたと考えられる。

遺構との関係

明瞭な遺構との対応関係があるのは、Ⅳ区流路１のみである。ここでは流路埋土中から出土した墨書土器が全体と比べて器形・墨書表記ともに古い傾向にある。木簡が多数出土したⅠ区SX50では少ないながらもやや古いものに限定され、流路１とあわせて建物等の遺構と併行して埋没した可能性がある。その他遺構出土としたものについては、被覆包含層中のものと時期・傾向ともに変わらず有意な関係は見られない。Ⅰ区SD16としたものは多数あるものの、遺構廃絶の契機となった水流によってもたらされたものとみられ、基本的に包含層のものと変わらない。

包含層中の分布状況

第３節で検討したように、ある程度分布に有意なまとまりが認められる。水流によって移動しているものの、本来の廃棄単位を反映しながら散布したとみられる。

墨書土器使用の背景

事実関係に基づけば、土器への墨書行為は8世紀後半～9世紀前葉の間にかけて繰り返しおこなわれ、集団などの固有名詞を示す特定の文字が半数以上を占めることが指摘される。多量の食器を調達し、まとめて墨書したようなグループもみられる。土器自体には高い頻度で使用が認められ、意図的な破砕は少ないことから、備蓄管理される食器に逐次補充されつつ、使用機会がかなりの長期間継続（あるいは定期的に）おこなわれるような状態が想定される。その背景について具体的に言及するのは難しいが、第11章第２節でまとめたように、在地豪族層によって管理された食器が、彼らに主導される水田経営・開発の基盤となった共同体の執り行う農耕儀礼の飲食に使用されたと考えるのが最も妥当であろう。

２．凡　例

掲載の順序

観察表・実測図・写真図版の掲載順は、以下の基準による。まず墨書土器→ヘラ書き・刻書→筆揃えの順。さらにそれぞれの中で、Ⅰ区→Ⅳ区の順。次に、字形ごとにまとめ、出土数の多いものから順とした。同字形がなく1点のみの墨書については字形を「その他」とし、最後にまとめた。

『墨書土器・Ⅰ区・「伊」』や「墨書土器・Ⅰ区・「その他」」という資料は非常に多いため、さらに土器の種別・器種によって分類した。掲載順は須恵器→土師器、さらにそれぞれ蓋→皿→坏→坏または皿、という順である。

出土した遺構・グリッド等ではまとめていない。遺構との関連や、グリッドごとの分布に関しては、次節で検討を加えた。

釈　　文

連続する釈文は、連続する文字の記載を示す。

・で区切られた文字は、同じ記名部位で連続しない、別の文字の記載を示す。

／で区切られた文字は、同じ土器の記名部位が異なる文字の記載を示す。記名部位も同じく／で区分している。

「」　文字の上下に、連続する文字が確認できないことの明らかな事例を示す。

『』　異筆・追筆。

⊿　文字の全体が明瞭に確認できるが、釈読できなかった文字を示す。

□　文字が一部しか残らない、あるいは文字が薄れており、釈読が不可能な文字を示す。

〔〕　一般論的には文字残画のみでは推測できないが、本遺跡の他事例から類推し推測した文字の釈文を示す。

()　釈文ではない説明などの記載である。

ヘラ書き　土器焼成前に刻み込んだ文字である。

線刻　土器焼成後に刻み込んだ文字である。

カ　　編者が加えた注で疑問の残るもの。

記載部位

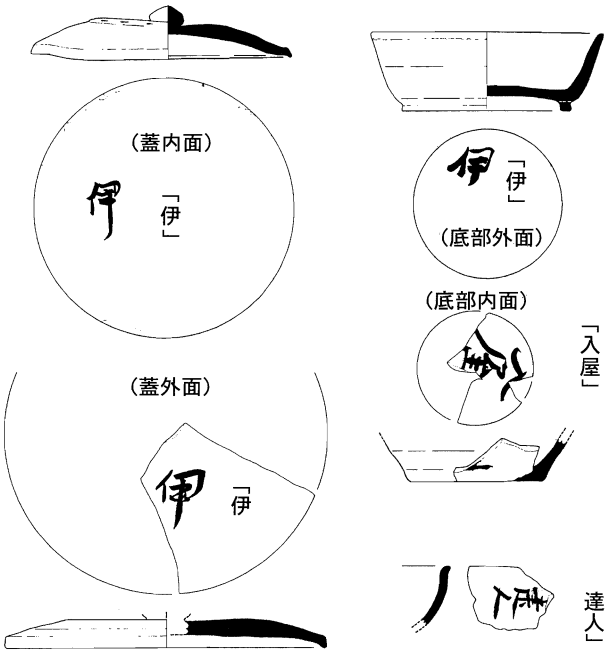
文字の記載された部位についての記載で、複数部位の記載は／で区別する。体部の記載についてのみ、文字の記載方向を記載する。正位は土器使用時の天地方向に準じて書かれているもの、横位は90°振って横書きにされたもの、逆位は天地逆にして書かれたものを示す。

摩　　滅

土器使用面の摩滅状況を示す。この土器使用面とは、坏・皿類では、主として底部内面を指す。蓋類については、基本的には容器ではなく上述と同じ意味での土器使用面は存在しないので、×(確認不能)とする。ただし、内面について摩滅が認められる場合 ×－○として表記した。土師器については、殆どすべてが赤彩を施されて

いるため基本的に平滑な状況であり、須恵器と同様に比較できないため()で参考として記載するにとどめ、各論にて摩耗についての検討は行わない。

摩滅の度合いについては、全点平石が、上述の底部内面と本来の調整が同じである体部外面の遺存状況差から主観的に判断し、表面のざらざら感が失われ平滑になるものほど摩耗が進んでいるとしてランク付けを行った。おおむね同基準であるが、胎土・焼成の異なる個々の土器毎に判断しているため、同じランクでも全く同一の状況を示す訳ではない。なお、須恵器の()付き記載は、土器使用面である底部内面と本来の調整が異なる底部外面しか比較できる部位がなかった資料である。



第16図　墨書の記載部位

A　特に顕著な摩滅痕跡が認められ、摩滅面が光沢を呈するような資料。

B　明確な摩滅痕跡が残る資料。

C　摩滅痕跡の痕跡はあるが不明瞭な資料。

D　摩滅痕跡は認められないと判断される資料。

×　遺存状況その他により、摩滅の有無が判断できない資料。また、須恵器蓋内面も蓋としての利用上、本来は摩滅痕跡があるべきでないので×としている。

破損状況

形1　複数破片同士の接合がある資料について、最大破片の遺存状態を示す。接合が無く１破片のみから成り立つ資料の場合は空欄としている。

形2　破片同士を接合した資料全体の遺存状態を示す。

遺存状態の分類は以下のとおり（316ページ、第94図参照）。

A 完形品。または一部欠損があるものの、形状について完全に復元可能なもの。

B 一部に欠けがあるもの。口縁部などに欠損があるが、全体の75％以上が残存しているもの。

C 全体の50～75％程度残存しているもの。

D 全体の25～50％程度残存しているもの。

E 器形の復元あるいは推定が可能な最低限度遺存しているもの。全体の約20％程度。

F ごく小片で、器種の特定や器形の推定ができないもの。全体の20％以下。

第10表　墨書土器観察表①（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0001	D14	「伊」／「伊」	須恵器	蓋	蓋内面／外面	回転糸切り	灰色1	×	E	B	15.4	—	3.3
0002	D16	「伊」／筆そろえ	須恵器	蓋	蓋内面／外面		灰色1	×-B	E	D	(18.8)	—	2.6
0003	E14	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色1	×－B		A			
0004	D16	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面	回転糸切り	青灰色3	×		A	13.3	—	3.6
0005	E14	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		灰色2	×	C	B	13.7	—	2.6
0006	F17	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色	×		E			
0007		「伊」	須恵器	蓋	蓋内面	回転糸切り	青灰色1	×-B		C	(12.6)	—	2.7
0008	D16	「伊	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×		E			
0009	E17	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色1	×－B		D			
0010	D16	「伊	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×-B		E			
0011	E16	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×	B	B	18.8	—	3.5
0012	G15	「□〔伊ヵ〕	須恵器	蓋	蓋内面		灰色	×－(B)	F	E			
0013	SB05	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色2	×		B			
0014	E16	□〔伊ヵ〕	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×－B		E			
0015	F12	伊」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色1	×		D			
0016	E14	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×	D	C			
0017	SD23	伊	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×－B		F			
0018	G15	「□〔伊ヵ〕	須恵器	蓋	蓋内面		灰褐色	×	F	E			
0019	C16	伊」・『中』	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×		E			
0020	SK03	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×		F			
0021	SD23	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		灰褐色4	×		E			
0022	F13	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×		F			
0023	G15	□〔伊ヵ〕	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×		F			
0024	F14	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×		F			
0025	E16	伊」	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×－B		F			
0026	E14	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面	ヘラ切り	青灰色2	×		F			
0027	F14	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色1	×		F			
0028	G13	伊」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色1	×－B		E			
0029	E15	「伊	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×-C		F			
0030	D17	伊」	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×-C		F			
0031	SD16	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色1	×		F			
0032	S溝	「伊」	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×-C	F	F			
0033	H14	「伊	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×－B		F			
0034	D15	伊」	須恵器	蓋	蓋内面	ヘラ切り	青灰色1	×		F			
0035	SD16	「伊	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×		F			
0036	F15	伊」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色1	×－B		F			
0037	D17	伊	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	B		F			
0038	E15	□〔伊ヵ〕	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×		F			
0039	SD16	□〔伊ヵ〕	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×－B		F			
0040	F16	「伊	須恵器	蓋	蓋内面		灰褐色4	×		F			
0041	SB05	「□〔伊ヵ〕	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色1	D		F			
0042	C南溝	□〔伊ヵ〕」	須恵器	蓋	蓋内面		灰色2	×－B		F			
0043	F17	□〔伊ヵ〕」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色2	×		F			
0044	D15	「□〔伊ヵ〕	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×-B		F			
0045	E溝	□〔伊ヵ〕	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×-C		F			
0046	SE01	「伊	須恵器	蓋	蓋内面		灰褐色4	×		F			
0047	SD16	「伊」	須恵器	蓋	蓋外面		灰色1	×	E	B	18.8	—	3.5
0048	SD16	「伊」	須恵器	坏蓋	蓋外面		灰色1	×		E			
0049	G14	□〔伊ヵ〕	須恵器	蓋	蓋外面		青灰色1	×		F			
0050	D16	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏蓋	蓋外面		青灰色1	×		F			
0051	N溝	「伊」	須恵器	蓋	蓋外面	ヘラ切り	灰色1	×		E			
0052	D15	「伊」	須恵器	蓋	蓋外面	回転糸切り	茶褐色2	×-B		D			
0053	E15	「伊」	須恵器	蓋	蓋外面	回転糸切り	灰色1	×		E			
0054	F17	「伊」	須恵器	蓋	蓋外面		青灰色	×		E			
0055	G14	□〔伊ヵ〕	須恵器	蓋	蓋外面		灰色1	×		F			
0056	G15	□〔伊ヵ〕	須恵器	蓋	蓋外面		灰白色1	×		F			
0057	G15	「伊」	須恵器	高坏	脚部内面		灰色1	×		×	—	13.0	—
0058	G15	「伊」	須恵器	高坏	脚部内面		灰白色	×		×			
0059	G13	「伊」	須恵器	高坏	脚部内面		青灰色	×		×			
0060	F14	「伊	須恵器	高坏	脚部内面		灰白色	×		F			

第11表　墨書土器観察表②（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0061	G15	「伊」	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B	E	B			
0062	G14	「伊	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		C			
0063	F17	伊	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0064	SD23	「伊」	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り後ナデ	灰色1	B	E	C			
0065	SB05	「伊」	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	指頭圧痕後粗い指ナデ	内：灰褐色4 外：灰色1	C		A	18.4	14.5	3.1
0066	E15ｻﾌﾞﾄﾚ	「伊」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C	F	F			
0067	SD16	「伊」	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	A	D	C			
0068	G15	「伊」	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り後指頭圧痕	灰色1	B		C	(19.7)	(14.0)	3.4
0069	D17	□〔伊ｶ〕」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0070	E14	□〔伊ｶ〕」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	C		F			
0071	SD16	□〔伊ｶ〕	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C	F	D			
0072	D16	「伊	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0073	東拡張	「伊」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0074	E17	「伊」	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り後ナデ	灰色1	B	D	B			
0075	SE01	「伊」	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色4	B	E	D			
0076	E14	「伊	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B	E	C			
0077	G13	□〔伊ｶ〕	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		D			
0078	E15	「伊	須恵器	Ⅲ	底部外面	糸切り	青灰色1	C		E			
0079	H溝	「伊」	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B	C	A	13.8	9.7	3.0
0080	D16	「伊」	須恵器	Ⅲ	底部外面	糸切り	灰色1	C	F	E			
0081	SD16	「伊	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		E			
0082	E15	「伊	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	D		C	(12.8)	9.4	3.8
0083	D16	伊」	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色2	D		C			
0084	E15	伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		E			
0085	東拡張区精査	伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色2	B		F			
0086	D15	「伊	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	D		E			
0087	G15	□〔伊ｶ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色	C		F			
0088	C16	□〔伊ｶ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色	B		F			
0089	E14	「伊」	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	青灰色1	C	E	B			
0090	F15	伊」	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0091	F15	「伊	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0092	S溝	□〔伊ｶ〕	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C		F			
0093	SD16	「伊	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り後ナデ	青灰色2	B		F			
0094	SE01	伊」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り後ナデ	灰色2	B		F			
0095	D16	「伊」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		E			
0096	東拡張	「伊」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		E			
0097	C16	伊」	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		E			
0098	E17	「伊」	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り後ナデ	灰色2	C		D			
0099	F17	□〔伊ｶ〕」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	B		F			
0100	E14	「伊	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0101	D16	「□〔伊ｶ〕	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			

第12表　墨書土器観察表③（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0102	E15	「伊	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	静止糸切り	灰色1	B		F			
0103	E14	「伊	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B	F	E			
0104	G15	「伊」	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		D			
0105	G13	伊」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0106	SB05	「伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰褐色5	C		A	11.7	8.3	4.1
0107	SD16	伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	B		C			
0108	G15	「伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰褐色4	C	E	D			
0109	SD16	「伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色1	C		D			
0110	D17	伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		C	(13.0)	(7.6)	4.4
0111	D16	「伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	D		B	11.4	7.6	4.4
0112	D15	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0113	S壁	「伊」	須恵器	甕	底部外面	回転糸切り	青灰色1	×		E			
0114	D16	「伊	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰白色1	C	F	F			
0115	S溝	「伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0116	F14	「伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B	F	E			
0117	SX50	「伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C	F	E			
0118	SD16	「伊	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	B		E			
0119	G15	「伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		E			
0120	SX50	□〔伊ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色	C		F			
0121	SD16	「伊	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	B		F			
0122	G17	「伊	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色	C		F			
0123	SD16	「伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	A		F			
0124	SX50	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C	F	F			
0125	SD16	「□〔伊ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0126	E15	「□〔伊ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	C	F	E			
0127	D15	「伊	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0128	SX50	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0129	F15	「伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り後ナデ	灰色1	B		F			
0130	G14	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色	D		F			
0131	F17	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰白色	D		F			
0132	SB05	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0133	南拡張区	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0134	D16	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B	F	F			
0135	D16	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	D		F			
0136		伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0137	E15	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0138	南拡張区	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0139	D15	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0140	SX10	伊	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0141	D15	「伊	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0142	E14	「伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C	F	F			
0143	E15	「伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	糸切り	青灰色1	B		F			
0144	E16	「伊	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	D		F			
0145	E14	「伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0146		伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0147	東拡張	⊿・『伊』	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0148	F16	伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り後ナデ	灰色1	C		F			
0149	SD16	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0150	D16	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	B	F	F			
0151	SD16	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0152	C南溝	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0153	E17	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色3	B		F			
0154	G14	□〔伊ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	C		F			
0155	G15	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0156	S溝	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0157	SX50	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0158	SD16	「□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色4	B		F			
0159	D16	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0160	G13	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0161	D16	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C		F			

第13表　墨書土器観察表④（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0162	G15	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C		F			
0163	G15	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色	C		F			
0164	SD16	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色4	B		F			
0165	E15	「□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色3	B		F			
0166	F15	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0167	E14	「□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0168	SD16	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0169	SD34	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色3	C		F			
0170	E16	□〔伊ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0171	E14	「□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0172	G15	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	(B)		F			
0173	F17	「□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色	C		F			
0174	F15	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0175	SD16	「伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0176	E14	□〔伊ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色1	C		F			
0177	D15	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色	C		F			
0178	G15	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0179	N溝	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0180	SD16	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り　ナデ	灰色2	B		F			
0181	D16	「伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0182	E16	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0183	D14	□〔伊ヵ〕・「□」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C		F			
0184	F15	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0185	F14	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0186	G15	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0187	H溝	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色2	B		F			
0188	SD16	伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0189	G15	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色	C		F			
0190	G15	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0191	東拡張	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	B		F			
0192	G15	□〔伊ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り後ナデ	灰色1	B		F			
0193	SD16	「□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	C		F			
0194	G15	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色	C		F			
0195	SD23	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0196	SD16	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0197	F17	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色	B		F			
0198	G16	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り後ナデ	灰色1	B		F			
0199	G16	「□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色1	B		F			
0200	C15	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0201	G13	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り後指頭圧痕	青灰色1	B		F			
0202	SD16	伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0203	F15	伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0204	G15	伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り後ナデ	灰色1	C		F			
0205	E溝	□〔伊ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0206	F13	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0207	G16	「伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0208	E15	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色	C		F			
0209	D16	「□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	内面：青灰色2 外面：灰褐色4	(B)		F			
0210	G16	「伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	糸切り	灰色2	B		F			
0211	SB04	□〔伊ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0212	E15	伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	糸切り	灰色1	B		F			
0213	SD16	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0214	SD16	伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0215	F14	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C		F			
0216	F14	「伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			

第14表　墨書土器観察表⑤（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／ グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0217	G15	「伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0218	M溝	□〔伊ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0219	M溝	伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B	F	F			
0220	SD16	「伊	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り後ナデ	灰白色	C		F			
0221	F15	□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0222	D15	伊」	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0223	F16	□〔伊ヵ〕	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部内面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0224	SD16	「伊	土師器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	C		E			
0225	D16	「伊	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(C)		F			
0226	G14	□〔伊ヵ〕」	土師器	坏	底部外面	指頭圧痕 ヘラケズリ	灰褐色2	(B)		D			
0227	D15	「伊	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色2	(B)		F			
0228	SD23	「伊」	土師器	坏	底部外面	指頭圧痕	橙褐色1	(B)	F	B	11.6	8.0	3.5
0229	D16	「伊	土師器	坏	底部外面		灰褐色1	C		E			
0230	D16精査土	「伊」	土師器	坏	底部外面		灰褐色2	B		F			
0231	F17	「伊」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0232	G14	□〔伊ヵ〕	土師器	坏	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	灰褐色1	(C)		F			
0233	SD16	「伊」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色2	(C)		F			
0234	F15	伊	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	橙褐色1	(B)		F			
0235	北壁	伊	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	灰白色1	(B)		F			
0236	東拡張	「伊	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色2	(C)		F			
0237	SD16	「伊	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0238	G15	「伊	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0239		□〔伊ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(C)		F			
0240	D15	伊	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(C)		F			
0241	D16	伊	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	C	F	F			
0242	F15	伊」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り 指頭圧痕	橙褐色1	(C)		F			
0243	G15	伊	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	灰褐色1	(C)		F			
0244	SD31	伊」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色3	(B)		F			
0245	F15	「□〔伊ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	橙褐色1	B		F			
0246	SD16	□〔伊ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 後指頭圧痕	灰白色	(B)		F			
0247	D16	「□〔伊ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色3	(B)		F			
0248	SD16	「伊」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色	(D)		F			
0249	G15	□〔伊ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 後指頭圧痕	灰褐色1	(B)		F			
0250	東拡張区	□〔伊ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ナデ	橙褐色1	(B)		F			
0251	G14	□〔伊ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		乳白色	×		F			
0252	F17	□〔伊ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0253	D15	□〔伊ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色	(B)		F			
0254	SB05	□〔伊ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色2	(C)		F			
0255	F17	□〔伊ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	C		F			
0256	SD16	伊」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0257	G15	□〔伊ヵ〕」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0258	F16	伊努	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色2	C		F			
0259	D14	「伊□〔努ヵ〕	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色2	C	F	D			
0260	E溝	伊□〔努ヵ〕	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰白色	C	F	F			
0261	SD16	「伊□〔努ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色	B		F			
0262	SD31	□〔伊ヵ〕努	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0263	D16精査土	□〔努ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0264	SD16	□〔努ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色2	C		F			
0265	F17	「伊本」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		灰色2	B		E			
0266	D14	「伊本」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰白色	B	F	E			
0267	D15	「伊本」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	C		E			

第15表　墨書土器観察表⑥（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0268	F15	「伊本	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	内：茶褐色1 外：青灰色2	C	F	E			
0269	S溝	「伊本」	土師器	Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	橙褐色2	C	D	B	14.0	10.4	2.5
0270	E15	伊大	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	A		F			
0271	E14	「伊大」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	A		F			
0272	東拡張	伊□〔太ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	B		F			
0273	G15	□〔伊ヵ〕酒」	須恵器	坏蓋	蓋内面		灰色1	×-C		E			
0274	S溝	「『伊』酒坏」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	×	F	E			
0275	E14	伊□〔加ヵ〕□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0276	E溝	□〔伊ヵ〕□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		青灰色1	C		F			
0277	D15	□□〔伊賀ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(C)		F			
0278	D16	「伊□〔瀧ヵ〕」	須恵器	高台付坏	底部外面		灰褐色4	B		D			
0279	E16	「伊□」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		D			
0280	E15	「家永」	須恵器	蓋	蓋外面		青灰色1	B		D			
0281	C16	「家永」	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	D	C	B	17.2	13.5	2.2
0282	SD13	「家永」	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	ナデ	灰色2	C	D	C			
0283	D15	家永」	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	C		E			
0284	E15	「家永」	須恵器	Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	青灰色1	C	F	E			
0285	D16	「家永」	須恵器	Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰色1	D	D	D			
0286	F16	「家永」	須恵器	Ⅲ	底部外面		灰色2	B		C			
0287	E溝	「家永	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	D		F			
0288	F13	「家永」	須恵器	Ⅲ	底部外面		灰色1	B	E	C			
0289	SD16	「家永」	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り後ナデ	青灰色1	C	D	C			
0290	F17	「家永」	須恵器	碗	底部外面	ヘラおこし	青灰色2	C	D	C			
0291	G15	「家永」	須恵器	碗	底部外面	回転ナデ	青灰色1	C	C	A	19.0	11.8	6.3
0292	SD16	「家永」	須恵器	坏	底部外面	ヘラおこし	灰色1	D		B	12.5	7.8	3.8
0293	D15	「家永」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		E			
0294	N溝	「家永」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰白色	B		E			
0295	D15	「家永	須恵器	Ⅲ	底部外面		灰白色	B		E			
0296	D15	家永	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色1	C		F			
0297	S壁	家永」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C		F			
0298	SD16	「家□〔永ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	ヘラ切り後ナデ	灰色1	B		D			
0299	D15	「家永	須恵器	高坏	坏部内面		青灰色2	C		×	—	(10.5)	—
0300	E14	「家□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0301	F15	「家□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0302	F16	「家□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0303	E14	「家□〔永ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0304	F15	「家□〔永ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色2	B		F			
0305	F14	□〔家ヵ〕永」	須恵器	高台付坏	底部外面	ヘラおこし後ナデ	灰色2	B		D			
0306	E16	□〔家ヵ〕永」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C	F	F			
0307	F16	□〔家ヵ〕永	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		青灰色1	B		F			
0308	表採	□〔家ヵ〕永	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色1	D		F			
0309	SD16	□永」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色4	B	F	F			
0310	F16	□永」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0311	F15	□□〔家永ヵ〕」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色1	×	F	F			
0312	G16	□□〔家永ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色	D		E			
0313	D15	□□〔家永ヵ〕	須恵器	坏	底部外面		灰白色	C	E	D			

第16表　墨書土器観察表⑦（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0314	G15	□□〔永ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色1	B		E			
0315	F17	「家	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	青灰色1	C	F	F			
0316	F15	「家	須恵器	高台付坏	底部外面	ヘラおこし 後ナデ	青灰色1	B		F			
0317	SD16	「家	須恵器	Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	青灰色1	B	E	C	15.6	12.2	1.7
0318	SD16	「家	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り 後ナデ	灰色1	B	D	C	14.7	11.7	1.7
0319	F17	「家	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り 後ナデ	灰色1	B	F	D			
0320	F17	「家	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色1	B		F			
0321	F17	「家	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0322	北壁	家	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰白色	C		F			
0323	G15	家	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0324	G15	家	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		F			
0325	G15	□〔家ヵ〕	須恵器	高台付坏	底部外面		灰色	D		F			
0326	F14	「□〔家ヵ〕	須恵器	壺蓋	蓋内面		青灰色2	×	F	F			
0327	F16	□〔家ヵ〕	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×-B		F			
0328	F17	「□〔家ヵ〕	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面		灰色1	B		E			
0329	S溝	「□〔家ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	青灰色1	C		F			
0330	北壁	「□〔家ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰白色	D		E			
0331	F14	□〔家ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0332	SD16	「□〔家ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		青灰色2	B		F			
0333	表採	「□〔家ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		青灰色2	C		F			
0334	E16	「□	須恵器	Ⅲ	底部内面		青灰色1	C	F	F			
0335	S溝	永	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰色1	B		F			
0336	G13	□〔永ヵ〕	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		D			
0337	E14	□〔永ヵ〕」	須恵器	坏	底部外面	糸切り	灰白色	D		F			
0338	SD16	□〔永ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	ナデ	灰色1	C		F			
0339	E溝	家」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		青灰色1	B		F			
0340	F16	□〔家ヵ〕」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0341	SD16	家」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	灰色1	(B)		F			
0342	D15	家」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)	F	F			
0343	S溝	□〔本ヵ〕家	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0344	F14	「秋永」	土師器	坏	底部外面	ヘラおこし	灰褐色2	(E)	D	C			
0345	E16	「秋永」	土師器	坏	底部外面		桃褐色1	D	F	C	(11.8)	7.2	3.5
0346	SD13	「秋永	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り 指頭圧痕	灰褐色2	(B)	F	E			
0347	D15	秋永	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0348	D16	「秋永	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	(B)		F			
0349	SD16	秋永」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0350	F13	「秋□〔永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0351	D15	「秋永	土師器	Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	D	F	E			
0352	E16	「秋永」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)	F	E			
0353	F14	「秋永	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰白色1	(B)		F			
0354	D16	「秋□〔永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0355	G16	秋□〔永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0356	E溝	秋□〔永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(C)		F			
0357	E溝	秋□〔永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色2	(B)		F			
0358	SD16	秋□〔永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0359	F14	「秋□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	橙褐色1	(B)		E			
0360	D15	□〔秋ヵ〕永	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	橙褐色4	(C)		F			
0361	SD16	□〔秋ヵ〕永	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	灰褐色1	(B)	F	F			
0362	SD16	□〔秋ヵ〕永」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0363	G15	□□〔秋永ヵ〕	土師器	坏	底部外面	ヘラおこし 後ナデ	灰褐色2	(C)		E			
0364	F17	□□〔秋永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0365	E15	□□〔秋永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			

第17表　墨書土器観察表⑧（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0366	F16	□□〔秋永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	橙褐色1	(C)		F			
0367	D16	□□〔秋永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0368	G16	□□〔秋永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0369	G14	□〔秋ヵ〕□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色1	(C)		F			
0370	N溝	□〔秋ヵ〕□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		乳白色	(B)		F			
0371	G16	□□〔永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0372	E溝	「秋	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0373	F17	「秋	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0374	F14	「秋	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0375	G16	秋	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0376	F17	□〔秋ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0377	SD29	「□〔秋ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(D)		F			
0378	F15	□〔秋ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	橙褐色1	B		F			
0379	F14	□〔秋ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色1	(B)		F			
0380	SD16	□〔秋ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	灰褐色1	(B)		F			
0381	SD30	□〔秋ヵ〕」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰色2	(B)		F			
0382	SD16	「□〔秋ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	橙褐色1	(B)		F			
0383	SD16	「□〔秋ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	灰白色	(B)		F			
0384	SD13	□〔秋ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0385	M溝	□〔秋ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0386	F14	□〔秋ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0387	SD16	□〔秋ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	灰褐色1	B		F			
0388	G15	□〔秋ヵ〕・□	土師器	坏	底部外面	指頭圧痕	橙褐色2	(C)		F			
0389	F14	永」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	灰褐色2	(B)		F			
0390	F15	永」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	灰褐色1	(B)		F			
0391	G14	永」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色1	(B)		F			
0392	G16	永」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0393	F16	□〔永ヵ〕」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0394	SD16	□〔永ヵ〕」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0395	F14	□〔永ヵ〕」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0396	G16	□〔永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	B		F			
0397	SD16	□〔永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色1	(B)		F			
0398	SD16	□〔永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0399	G14	□〔永ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		乳白色	(B)		F			
0400	E15	「秋	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色2	C		E			
0401	G13	「□〔秋ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0402		「廣方」	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	D		D	(12.0)	(7.8)	3.9
0403	D15精査土	「廣方」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色4	C	F	E			
0404	F17	廣方」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色	C		D			
0405	C16	廣方」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色2	C		F			
0406	SD31	廣方	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		茶褐色2	C		F			
0407	E15	廣方	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色1	C		F			
0408	D15	廣方	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0409	北東溜枡	「廣□〔方ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0410	S溝	「廣□〔方ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		青灰色2	D		F			
0411	SB04	廣「□〔方ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		F			
0412	G14	□〔廣ヵ〕方」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色	C		F			
0413	D15	「□□〔廣方ヵ〕」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		B	12.0	9.1	4.3

第18表　墨書土器観察表⑨（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0414	D16	□□〔廣方ヵ〕	須恵器	坏蓋	蓋内面		灰色1	×		F			
0415	D16	「⊿□〔廣方ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色2	D		F			
0416	C15	「廣	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰褐色4	C		D	(14.1)	(10.0)	2.9
0417	D16	「廣	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色	D		F			
0418	E15	「廣	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		F			
0419	東拡張	「廣	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0420	D15	「廣	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0421	D15	「□〔廣ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰褐色3	D		F			
0422	東拡張	□〔廣ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		青灰色1	C		F			
0423	E15	「美談□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0424	S溝	美談社・『門』	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0425	SD16	「美社」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		A	11.9	7.4	3.7
0426	G13	「美社」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	C	E	D			
0427	SD16	「美社	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	灰白色1	(B)		F			
0428	C16	□〔美ヵ〕 社・『門』	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0429	G15	□〔美ヵ〕社」	土師器	Ⅲ	底部外面		乳白色	D	E	C			
0430	精査土中	□□〔美社ヵ〕	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	C		F			
0431	F17	「美	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		D			
0432	北壁	「□〔美ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	A		E			
0433	東側拡張区	□〔美ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0434	C16	□〔美ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色	B		F			
0435	SD16	美	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(C)		F			
0436	D16精査土	□〔美ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0437	G15	「美」	須恵器	蓋	蓋外面		灰白色	×		F			
0438	C16	「美」	須恵器	坏	底部外面		青灰色4	C		F			
0439	G15	「美」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C	E	D			
0440	E14	□〔美ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	A		D			
0441	F17	□〔伊ヵ〕・『□』〔美ヵ〕	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	青灰色	B		F			
0442	SB05	「□〔美ヵ〕主」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C	F	F			
0443	G13	「田日	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0444	SD16	田□〔日ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(C)	F	F			
0445	F17	「田□	土師器	坏	底部外面	指頭圧痕	灰褐色1	(B)		F			
0446	F16	「田□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	橙褐色1	C		F			
0447	SD16	毘(或いは田北)	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	橙褐色1	(C)		F			
0448	精査中	「田□〔伊ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0449	G16	「田□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0450	F14	「田□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色2	B		F			
0451	SD16	「田□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰色1	(B)	F	E			
0452	D15	「田□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		F			
0453	SD31	「□〔田ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色2	(B)		F			
0454	SB05	「□〔田ヵ〕	土師器	坏	底部外面		橙褐色1	B	E	E			
0455	E16	「□〔田ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0456	F17	□〔田ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色	D		F			
0457	G16	□〔田ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0458	C16	□〔田ヵ〕	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0459	SD16	□〔田ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色1	(C)		F			
0460	D16	□〔田ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	橙褐色4	C		F			
0461	E溝	□〔田ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0462	SB04	田」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色2	×		F			
0463	F14	田」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		F			
0464	F13	田」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(C)		F			

第19表　墨書土器観察表⑩（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	胎　土	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0465	C15	「三」	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B	E	C			
0466	D16	「三・『十』」	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B	F	E	(13.7)	(9.5)	2.2
0467	F14	「三」	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り 回転ナデ	内：灰色1 外：灰白色	B	F	D			
0468	表採	「三」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色3	×-B		E			
0469	G16	「三」	土師器	坏	底部外面	ヘラおこし	灰褐色2	(B)	F	E			
0470	F17	「三」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	B		F			
0471	SE01	「□〔三ヵ〕	土師器	坏	底部外面		橙褐色1	D	F	E			
0472	SB05	「□〔三ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0473	D15	「□〔三ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0474	E15	三」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0475	SD16	□〔三ヵ〕」	土師器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		青灰色1	(B)	F	E			
0476	SD16	三	土師器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(C)	F	F			
0477	D16	□〔三ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0478	D15	□〔三ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	(B)		F			
0479	S溝	□〔三ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	橙褐色1	(B)		F			
0480	D15	「門」／「門」	須恵器	坏	底部内面／外面		灰色1	C	D	C	(11.4)	6.9	5.2
0481	F16	門」／「門	須恵器	坏	底部内面／外面	回転糸切り後ナデ	灰色1	D	F	D			
0482	SB05	「門」／「門」	須恵器	坏	底部内面／外面	回転糸切り	灰色1	D		D			
0483	F16	「門／門」	須恵器	坏	底部内面／外面	回転糸切り	灰褐色4	C		D			
0484	F17	「門／「門」	須恵器	坏	底部内面／外面	回転糸切り	灰色1	C		E			
0485	F17	□〔門ヵ〕／□〔門ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面／外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0486	E15	□〔門ヵ〕／□〔門ヵ〕	須恵器	坏	底部内面／外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0487	C東溝	「□／□〔門ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面／外面	回転糸切り	灰白色1	B		F			
0488	G16	□〔門ヵ〕／□〔門ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面／外面	回転糸切り	青灰色1	×		F			
0489	F13	「門	須恵器	蓋	蓋外面		灰色2	×		F			
0490	D15	□〔門ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0491	E14	□」〔門ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0492	SB04	「門」	土師器	Ⅲ	底部内面		灰白色	D	D	C			
0493	SD25	「中」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	(C)		F			
0494	G14	「中	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色	B		F			
0495	F16	「中	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色2	B		F			
0496	H13	中	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色2	B		F			
0497	G13	中	須恵器	高台付坏	底部外面		茶褐色1	C		F			
0498	SD16	□〔中ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(C)		F			
0499	F16	□〔中ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0500	F13	「中北」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面～体部外面	指頭圧痕	灰褐色1	(B)	F	F			
0501	F15	「中□〔北ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色1	(B)		F			
0502	SD16	「□□〔中北ヵ〕	土師器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0503	E溝	「中	土師器	坏	底部外面	ヘラ切り	灰褐色2	D		F			
0504	E14	「□〔中ヵ〕	土師器	坏	底部外面		灰褐色2	C		F			
0505	SD16	□中	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り後ナデ	青灰色1	B		F			
0506	N溝	□〔中ヵ〕」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		E			
0507	D15	本」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	D		E			
0508	SD16	本」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0509	G14	□〔本ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	(B)		F			

第20表　墨書土器観察表⑪（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0510	G16	□〔本ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0511	F17	□本	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0512	F17	□□〔本ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色2	(B)		F			
0513	F17	□本□〔中ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0514	E15	「西子」	土師器	高台付Ⅲ	底部外面		橙褐色1	D	C	A	16.5	12.2	2.6
0515	SD16	西上	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		F			
0516	G16	□〔西ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色1	(C)		F			
0517	F15	□〔西ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色2	(B)		F			
0518	東拡張	⊿〔西ヵ〕」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0519	F15	西」	須恵器	坏	体部外面	回転糸切り	灰褐色3	B		F			
0520	E16	「厨」	土師器	坏	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0521	SD16	「厨	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	灰色1	(B)		F			
0522	S溝ﾍﾞﾙﾄ	「厨	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色	(B)		F			
0523	G14	厨」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし後ナデ 指頭圧痕	灰褐色1	(B)	F	F			
0524	N溝	「和世」	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		C	(14.4)	8.6	3.3
0525	G13	和世」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	茶褐色1	C		F			
0526	E17	□〔和ヵ〕世	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	茶褐色1	C	F	F			
0527	H13	□〔和ヵ〕世」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0528	D17	「酒	土師器	坏・Ⅲ	底部内面	ヘラ切り	灰褐色1	(C)		F			
0529	E15	□〔酒ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0530	SB04	⊿〔酒ヵ〕□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		F			
0531	F17	「酒」／□ □〔来ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部内面 ／外面		灰褐色1	(C)		F			
0532	F16	「川北」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り後ナデ	灰色1	C		E			
0533	F17	「川北	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		E			
0534	SB05	「川北	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色2	C		F			
0535		⊿〔神ヵ〕財」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	B		F			
0536	E14	⊿〔神ヵ〕□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0537	G16	□〔神ヵ〕□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色3	(C)		F			
0538	SD12	⊿〔祝ヵ〕□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0539	E17	「三鮒」	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B	D	B			
0540	F16	三鮒	須恵器	蓋	蓋外面		青灰色3	×-B		F			
0541	E17	「美鮒」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色3	A		D			
0542	C南溝	「飯石」	須恵器	壺・甕	底部外面	回転糸切り	灰色1	×		E			
0543	D16	「飯	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0544	東拡張	「邑	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0545	F16	邑	土師器	坏	底部外面	指頭圧痕	橙褐色3	(B)	F	E			
0546	C16	「石	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C	F	F			
0547	D15	「石□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C		F			
0548	北東溜枡	「殿」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	C	E	C			
0549	D15	□久殿・□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C	F	F			
0550	D16	「十」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		E			
0551	S溝	十	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0552	E15	⊿寺」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		C	(14.1)	(9.4)	4.3
0553	D16	「寺」	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色3	C	E	C			
0554	G17	□〔呂ヵ〕」	須恵器	蓋	蓋内面		灰色	×		E			
0555	D16	良成」	須恵器	蓋	蓋内面		灰色2	×		E			
0556	E14	□	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色1	×		F			
0557	SD16	□	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×		C	(19.0)	—	—
0558	E15	□」	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色1	×		E			
0559	E17	□」	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	C		F			
0560	E14	□	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×		F			
0561	SD16	□	須恵器	蓋	蓋内面ヵ		灰色1	B		F			
0562	D15	□	須恵器	蓋	蓋内面	回転糸切り	灰色1	C		F			

第21表　墨書土器観察表⑫（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0563	D16	□	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×-B		F			
0564	SD16	□	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×-C		F			
0565	D15	□	須恵器	蓋	蓋内面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0566	F13	□	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色2	C		F			
0567	F15	□	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×		F			
0568	D16	□(筆そろえか)	須恵器	蓋	蓋内面		灰色2	×		F			
0569	SD16	□	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×		F			
0570	F15	□□	須恵器	蓋	蓋内面		灰色1	×-B		F			
0571	E15精査土	「四官」	須恵器	蓋	蓋外面		灰色2	×		F			
0572	SB05	□〔努ヵ〕□」	須恵器	蓋	蓋外面		青灰色3	×		E			
0573	SB05	□(筆そろえか)	須恵器	蓋	蓋外面		青灰色	C		E			
0574	E15	⊿万呂」	須恵器	蓋	蓋外面		灰色1	×		F			
0575	G15	□	須恵器	蓋	蓋外面		灰色	×		F			
0576	M溝	□	須恵器	蓋	蓋外面		灰色1	B		F			
0577	D15精査土	□□	須恵器	蓋	蓋外面		灰色1	Dヵ		F			
0578	G16	「畠」	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り後ナデ	灰色2	A		C	(18.2)	13.2	3.3
0579	E13	否・『一』	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色2	A	B	B	18.6	13.5	3.1
0580	F15	□	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	ヘラおこし後ナデ	灰色2	B		E			
0581	SD16	「父」	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	ナデ	青灰色1	B		F			
0582	D15	「會」	須恵器	高台付Ⅲ	底部内面	回転糸切り	灰白色	B	E	D			
0583	S溝	□	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		E			
0584	SD16	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		F			
0585	SD16	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		青灰色1	B		F			
0586	SD16	「⊿	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		青灰色1	B		F			
0587	E16	「天□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色5	B	F	F			
0588	G14	□〔門ヵ〕女	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色2	B		E			
0589	G14	「里⊿〔申ヵ〕	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り後ナデ	灰色1	B		F			
0590	SD16	「藤」	須恵器	Ⅲ	体部内面	回転糸切り	灰色1	B	E	C			
0591	E17	□	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		D			
0592		「千□	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色1	B		D	(12.6)	(8.2)	2.6
0593	G17	「㊙」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色2	B	F	E			
0594	D15	□	須恵器	Ⅲ	底部外面		灰色1	C		F			
0595	S溝	□	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C	F	D			
0596	G15	□	須恵器	高台付坏	底部外面		灰白色	D		F			
0597	SB04	⊿〔成ヵ〕	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	C		F			
0598	SD16	「□〔土ヵ〕屋」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C	F	F			
0599	D15	「縣」	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	青灰色1	C		E			
0600	D16	□□	須恵器	高台付坏	底部外面	糸切り	茶褐色2	B		F			
0601	D16	「□	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0602	D16	□	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	茶褐色2	C		F			
0603	D16	「訓」	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	C		E			
0604	D16	□□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		F			
0605	SD16	「庭足	須恵器	高台付坏	底部外面	ヘラおこし	青灰色2	C		F			
0606	東拡張区	□□〔御ヵ〕」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0607	F16	□	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0608	F13	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		灰白色1	D	F	D			

第22表　墨書土器観察表⑬（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／ グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0609	E16	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0610	E17	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0611	F17	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	C		F			
0612	E14	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0613	G15	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色2	B		F			
0614	SD16	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		E			
0615	SD16	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		F			
0616	東拡張区精査	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	B		F			
0617	G16	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		青灰色2	C	F	F			
0618	G13	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0619	G15	□	須恵器	高台付坏	底部外面		灰色	B		F			
0620	F15	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0621	E15	⊿」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0622	D16	「□〔宮ヵ〕」 ・『□』	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	B		F			
0623	D16	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		F			
0624	G15	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0625	F15	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り 回転ナデ	灰色1	B		F			
0626	F13	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部内面		灰白色1	B		F			
0627	E14	□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C	F	D			
0628	SD16	□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C	F	D			
0629	D16	□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C	E	D	(12.6)	(9.0)	4.4
0630	D16	□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0631	E14	□	須恵器	壺か	底部外面	回転糸切り	青灰色2	×		F			
0632	E14	□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0633	D15	□」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色1	(B)		F			
0634	F17	□」	須恵器	坏	底部外面		灰白色1	C		F			
0635	C16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0636	E15	□□」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0637	N溝	□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰白色	B		F			
0638	精査土中	□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色3	C		F			
0639	D16精査土	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色	B		F			
0640	F14	⊿	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰鴇色3	C		F			
0641	G14	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色	D		F			
0642	E15	「益□〔女ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	C		F			
0643	G15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	乳白色	C		F			
0644	SD16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B	F	F			
0645	SD16	「□〔長ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	(B)		F			
0646	E13	「成」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色1	C		F			
0647	E16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0648	F15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0649	D15精査土	□」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色＋黒	B		F			
0650	F17	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0651	F17	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色1	D		F			

第23表　墨書土器観察表⑭（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0652	G13	「川井」・「井」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色1	B		E			
0653	D14	⊿	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0654	D15	□〔実ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		青灰色3	C		F			
0655	北壁	「玉□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	C		F			
0656	南拡張区	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0657	S溝	□〔鳩ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B	F	F			
0658	E15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色1	B		F			
0659	D15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0660	F16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0661	D15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C		F			
0662	S溝	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0663	F17	「□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色	D		F			
0664	K溝	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		青灰色1	C		F			
0665	D16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	C		F			
0666	E14	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0667	E17	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0668	N溝	□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色	C		F			
0669	C16	□〔真ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色1	B		F			
0670	D15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0671	C16	□□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	ナデ	茶褐色2	A		F			
0672	SD16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色4	(C)		F			
0673	SD16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		青灰色2	(B)		F			
0674	F15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0675	F16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色2	B		F			
0676	D15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色1	C		F			
0677	D16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0678	D16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0679	D16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C	F	F			
0680	G15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		F			
0681	北壁	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0682	F14	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	B		F			
0683	南拡張	□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0684		□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0685	D15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0686	E14	□□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0687	E15ｻﾌﾞﾄﾚ	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色2	C		F			
0688	E15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	C		F			
0689	東拡張	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0690	S溝	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0691	D16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0692	F14	□」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0693	SD26	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0694	東拡張区	□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0695	F14	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0696	H溝	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0697	D15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰色1	B		F			
0698	E16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0699	F17	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C		F			
0700	D15	⊿□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0701	SB04	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0702	SE01	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色4	B		F			
0703	F15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0704	E15精査土	□⊿〔所ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0705	G15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0706	E14	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0707	SD16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0708	F17	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	不明		F			
0709	E14	□」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0710	D15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色2	B		F			
0711	SE01	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0712	SD16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色4	C		F			

第24表　墨書土器観察表⑮（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／ グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0713	SD16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色	C		F			
0714	SE01	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0715	G15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0716	S溝ﾍﾞﾙﾄ	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C		F			
0717	SD16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	C		F			
0718	F14	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0719	SD16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色1	C		F			
0720	F17	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0721	C16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0722	E16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0723	F17	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色1	C		F			
0724	G16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0725	G15	□」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	C		F			
0726	F16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0727	F17	「桑	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	(B)		F			
0728		□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0729	D15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	糸切り	灰色1	B		F			
0730	C南溝	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色4	C		F			
0731	D15	□〔貫ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色1	C		F			
0732	SD16	⊿〔勝ヵ〕・「□」(重ね書き)	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0733	F15	□〔日ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色1	B		F			
0734	G13	□□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0735	F17	「□□〔大東ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色1	B		F			
0736	SB04	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色2	B		F			
0737	G16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	C		F			
0738	E16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0739	G15	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色	C		F			
0740	SD16	□」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0741	F16	⊿	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色2	B		F			
0742	E14	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0743	D15	⊿⊿〔立ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色	A		F			
0744	SD16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色	B		F			
0745	SD16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	灰色1	B		F			
0746	SB04	□」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0747	SD16	⊿／□	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面／外面	回転糸切り	灰色	C		F			
0748	E14	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0749	SD16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面	回転糸切り	灰色1	C		F			
0750	G16	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面	回転糸切り	灰色1	B		F			
0751	F17	□	須恵器	坏	底部内面		灰白色1	D		F			
0752	E14	□	須恵器	坏・Ⅲ	体部内面		灰白色	×		F			
0753	D15精査土	□	須恵器	Ⅲ	体部外面		青灰色1	D		F			
0754	SD16	□	土師器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	ナデ	橙褐色1	(B)		F			
0755	G14	□	土師器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		乳白色	(C)		F			
0756	S溝ﾍﾞﾙﾄ	□	土師器	高台付坏	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	(B)		F			
0757	E15	□	土師器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	ヨコナデ	灰褐色1	(B)		F			
0758	F17	□	土師器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	C		F			
0759	G13	上松	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰白色	(B)		F			
0760	E14	「通志」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)	F	F			
0761	H溝	南」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0762	F17	□」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	D		F			
0763	C16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		乳白色	C		F			
0764	E14	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色1	(B)		F			
0765	E14	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(C)		F			
0766	F15	□	土師器	坏	底部外面	ヘラ切り 指頭圧痕	橙褐色1	(E)		F			
0767	SB05	「□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	B	F	F			
0768	F17	□	土師器	坏	底部外面		灰褐色2	A		F			
0769	F15	□	土師器	坏	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	灰褐色1	(B)		F			

第25表　墨書土器観察表⑯（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0770	D15	□	土師器	坏	底部外面	ヘラ切り	灰白色	(B)		F			
0771	D15	「⊿」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色2	(B)		F			
0772	E14	「⊿〔酉ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色2	(B)		F			
0773	D15	⊿	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0774	SD31	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	B		F			
0775	SD16	□	土師器	坏	底部外面		橙褐色1	D		F			
0776	G16	「八	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	D		F			
0777	D16	□〔宅ヵ〕」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	橙褐色1	B	F	F			
0778	E15	久」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(C)		F			
0779	南拡張	浄□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0780	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)	F	F			
0781	F16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	C		F			
0782	F14	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0783	G15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0784	SE01	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0785	F15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	B		F			
0786	S溝	□」	土師器	坏	底部外面	ヘラ切り	灰褐色2	C		F			
0787	F14	□□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰白色	B		F			
0788	SE01	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	橙褐色2	(B)		F			
0789	F15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	灰褐色1	B		F			
0790	東拡張	□」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	B		F			
0791	G15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし後指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0792	G16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0793	E14	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ナデ	灰褐色1	C		F			
0794	D16精査土	□□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0795	G14	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		乳白色	D		F			
0796	F16	「□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0797	F15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	橙褐色1	B		F			
0798	G16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし後ナデ	橙褐色1	(B)		F			
0799	G13	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		乳白色	(B)		F			
0800	F13	□」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0801	SX50	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0802	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色3	(B)		F			
0803	F17	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(C)		F			
0804	F17	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色1	(B)		F			
0805	E14	□	土師器	坏	底部外面	ヘラケズリ	橙褐色4	(B)		F			
0806	S溝	宇	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	橙褐色4	C		F			
0807	H14	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0808	G13	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし後ナデ	灰褐色1	(C)		F			
0809	E15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0810	SE01	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0811	SE01	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0812	D16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	橙褐色1	(C)		F			
0813	E15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	(B)		F			
0814	D15	□」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	(B)		F			
0815	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色1	(B)		F			
0816	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0817	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0818	E16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	(C)		F			
0819	E15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰白色1	(B)		F			
0820	F15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(C)		F			
0821	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0822	SD33	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰白色	B		F			
0823	E15	□・⊿〔旅ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕後粗いナデ	橙褐色1	(B)		F			
0824	F14	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0825	東拡張区精査	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色	B		F			
0826	F14	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	B		F			

第26表　墨書土器観察表⑰（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0827	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし ナデ	橙褐色1	(B)		F			
0828	N溝	糸」	土師器	坏	底部外面	静止糸切り	桃褐色1	(B)		F			
0829	D15	来	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0830	D15	□〔内ヵ〕」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0831	SE01	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(C)		F			
0832	E16	⊿〔菊ヵ〕□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	灰褐色2	(B)		F			
0833	SD31	「□□〔成月ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	―	灰褐色2	(C)		F			
0834	SD31	□□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(C)		F			
0835	C南溝	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色2	(B)		F			
0836	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		桃褐色1	(B)	F	F			
0837	F17	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0838	E溝ﾍﾞﾙﾄ	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	(B)		F			
0839	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		桃褐色1	(C)		F			
0840	F16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色2	(B)		F			
0841	F15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	橙褐色1	(B)		F			
0842	F16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0843	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	橙褐色2	(B)		F			
0844	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0845	E15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(C)		F			
0846	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		桃褐色2	(B)		F			
0847	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0848	F14	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0849	E14	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色1	(C)		F			
0850	F17	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0851	SE01	□」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0852	S溝	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0853	SD16	□」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0854	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0855	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色4	(B)		F			
0856	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ナデ	灰褐色1	(B)		F			
0857	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0858	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色2	(B)		F			
0859	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕後ナデ	灰褐色1	(B)		F			
0860	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色2	不明		F			
0861	F16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		桃褐色1	C		F			
0862	F17	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		桃褐色1	(C)		F			
0863	F17	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0864	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0865	F17	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0866	SB05	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(C)		F			
0867	F16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0868	G16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色2	(B)		F			
0869	SE01	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0870	SE01	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(C)		F			
0871	F15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	灰白色1	(B)		F			
0872	F17	□」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0873	D17	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0874	F16	⊿□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色2	(B)		F			
0875	SE01	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0876	G16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0877	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	灰白色	(C)		F			
0878	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0879	SD29	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0880	S溝ﾍﾞﾙﾄ	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰白色1	(B)		F			
0881	SD23	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0882	D15	□」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0883	F14	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色1	(B)		F			

第27表　墨書土器観察表⑱（Ⅰ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0884	SD29	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(D)		F			
0885	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし後ナデ	灰褐色1	(B)		F			
0886	E15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(C)		F			
0887	N溝	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色2	(B)		F			
0888	F17	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0889	F17	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕 粗いナデ	橙褐色1	(B)		F			
0890	E14	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(C)		F			
0891	F15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(C)		F			
0892	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0893	SB05	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	橙褐色1	(C)		F			
0894	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし	橙褐色2	(B)		F			
0895	E15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		桃褐色1	(B)		F			
0896	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		桃褐色1	(B)		F			
0897	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色1	(B)		F			
0898	F16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0899	H13	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色2	(B)		F			
0900	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色	(C)		F			
0901	G13	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		乳白色	×		F			
0902	G15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0903	SE01	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		桃褐色1	(B)		F			
0904	G16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色1	(C)		F			
0905	F16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0906	SE01	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色2	C		F			
0907	C南溝	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕	灰褐色1	(B)		F			
0908	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰色1	(C)		F			
0909	D16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0910	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色4	(B)		F			
0911	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0912	SE01	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0913	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0914	E16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	D		F			
0915	G15	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(C)		F			
0916	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(C)		F			
0917	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0918	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)		F			
0919	F16	□□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色1	(B)		F			
0920	SD31	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		桃褐色1	(B)		F			
0921	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0922	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色	(B)		F			
0923	F13	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(C)		F			
0924	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラおこし 指頭圧痕	灰白色	(C)		F			
0925	SD16	⊿十五」	土師器	坏・Ⅲ	底部内面		灰褐色2	(B)		F			
0926	G14	□	土師器	坏・Ⅲ	底部内面	指頭圧痕	橙褐色1	(B)		F			
0927	SD16	□〔川ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部内面	指頭圧痕	灰褐色2	(B)		F			
0928	F13	□	土師器	坏・Ⅲ	底部内面	ヘラおこし 指頭圧痕	灰褐色1	(B)		F			
0929	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	底部内面		橙褐色	(B)		F			
0930	N溝	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色	(B)		F			
0931	G13	□	土師器	坏・Ⅲ	底部内面		乳白色	(B)		F			
0932	SE01	(筆そろえか)／□	土師器	坏・Ⅲ	体部内面／外面		灰褐色1	D		F			
0933	D16	⊿□	土師器	坏・Ⅲ	体部内面		灰褐色2	(B)		F			
0934	SD16	□	土師器	坏・Ⅲ	体部外面		灰褐色2	C		F			
0935	C16	「□」(記号か)	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		乳白色	B	F	E			

第28表　墨書土器観察表⑲（Ⅳ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0936	流路1	「伊努」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色１	C	C	C	12.8	6.6	4.1
0937	流路1	「伊努」	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	青灰色１	C		D			
0938	流路1	「伊努	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ	灰褐色２	C	F	F			
0939	流路1	「伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		A	11.8	8.4	3.8
0940	流路1	「伊」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	D		D			
0941	A18	「伊	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰色１	B		F			
0942	C19	「□〔伊ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色２	(B)	F	F			
0943	B17	□〔伊ヵ〕/伊」	須恵器	蓋	蓋内面／外面	回転糸切り	灰色１	×		E			
0944	Z20	「□〔伊ヵ〕	土師器	坏	底部外面	ナデ	橙褐色１	(C)		F			
0945	Z20	□〔伊ヵ〕」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ナデ	橙褐色１	×		F			
0946	B17	「伊本」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	B	F	F			
0947	流路1	「□□〔家永ヵ〕」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	C	D	C			
0948	Z20	「秋永」	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面	回転糸切り	青灰色１	D		F			
0949	A19	「秋永」	土師器	坏	底部内面	ヘラ切り	灰褐色1	D?	F	E			
0950	A20	「□〔秋ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部内面	ナデ	灰褐色２	(B)		F			
0951	北壁溝	「廣方」	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	B		D			
0952	D20	「廣方」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色１＋茶褐色2	C		E			
0953	流路1	廣方」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰褐色２	B	F	E			
0954	Z20	□□〔廣方ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面	回転糸切り	灰色１	C		F			
0955	東壁溝	「廣	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	B		F			
0956	B19	美社」	須恵器	蓋	蓋内面	ヘラ切り	灰色１	×		F			
0957	B19	美社」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色２	(C)		F			
0958	A20	美社」	土師器	坏・Ⅲ	底部内面		灰褐色1	(C)		F			
0959	ﾄﾚﾝﾁ1	「美□〔社ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		F			
0960	Z21	「美	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	D		D	(12.9)	(8.9)	4.3
0961	A19	「美	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色２	(B)		F			
0962	B19	「美	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色２	(B)		F			
0963	東壁溝	美	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面	ヘラ切り	灰色１	D		F			
0964	C19	「□〔美ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	B		F			
0965	Z19	□〔美ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
0966	B17	□〔美ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色１	(C)		F			
0967	Y20	□〔社ヵ〕」	須恵器	Ⅲ	底部内面	回転糸切り	灰白色	A		F			
0968	B19	□〔社ヵ〕」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰白色	(B)		F			
0969	A19	社」	土師器	坏	底部外面	ナデ	橙褐色１	(C)		F			
0970	B21	「長田」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	D		E			
0971	C19	「□〔長ヵ〕田」	須恵器	Ⅲ	底部外面		灰色１	D		F			
0972	A19	長田	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		F			
0973	C19	□□〔長田ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	D		F			
0974	B19	長□〔田ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	D		F			
0975	B21	□〔長ヵ〕田」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	D		D	(14.6)	(8.6)	2.7
0976	C19	□〔長ヵ〕田」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	B		F			
0977	B20	長田」	須恵器	蓋	蓋部内面	回転糸切り	灰色１	×		F			
0978	B19	「長	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色2	D		F			
0979	C19	「□〔長ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	D		F			
0980	D19	「長	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色１	C		E			
0981	C19	長	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色1	C		F			
0982	C19	長」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色3	D		F			
0983	C20	□〔長ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		F			
0984	流路1	「宅田」	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	×	D	B	(17.9)	12.0	7.0
0985	Y21	□〔老ヵ〕田」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色３	D		F			

第29表　墨書土器観察表⑳（Ⅳ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
0986	C20	田」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色１	D		F			
0987	Z19	田『宅』	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	B		F			
0988	B17	「田□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色１	(B)		F			
0989	B20	田□	土師器	坏・Ⅲ	底部内面		灰褐色２	(C)		F			
0990	Z20	□□〔田日ヵ〕	土師器	坏	底部外面		橙褐色１	(C)		F			
0991	A21	「田	土師器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	桃褐色1	C		F			
0992	Z20	「□〔田ヵ〕	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色２	(C)		F			
0993	C18	「縣」	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面	回転糸切り	灰色１	B		F			
0994	Z21	「縣	須恵器	坏	底部内面	回転糸切り	灰色１	B		F			
0995	A19	「縣	須恵器	坏	底部内面	回転糸切り	灰色１	B	F	F			
0996	Z20	「縣」／「三内」	須恵器	蓋	蓋内面／外面	ヘラ切り	灰褐色３	×		C	(16.8)	—	2.4
0997	B19	「縣」	土師器	坏・Ⅲ	底部内面	ナデ	灰褐色1	(B)	F	F			
0998	C19	縣」	土師器	坏・Ⅲ	底部内面	ヘラ切り	橙褐色１	(C)		F			
0999	Z20	「縣」	土師器	坏	底部内面	静止糸切り	灰褐色	(B)	D	C	13.0	8.8	2.7
1000	B18	「物爪」	土師器	坏	底部外面	ヘラ切り	橙褐色6	(C)		F			
1001	Z19	「物□〔爪ヵ〕	土師器	坏	底部外面	ヘラ切り	桃褐色2	C		E			
1002	Z20	□□「物爪ヵ」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰色１	C		F			
1003	Z20	「物	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	C		F			
1004	Z19	「物	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	D		F			
1005	Z20	「□〔物ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		F			
1006	Y20	爪」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	橙褐色2	C		F			
1007	Z20	□〔爪ヵ〕」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	D		F			
1008	B17	中北」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ナデ	灰褐色２	(C)		F			
1009	流路1	「中□〔北ヵ〕」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ナデ	灰褐色1	(B)		F			
1010	Z21	#(記号・線刻)／□〔井ヵ〕手	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面／外面	回転糸切り	灰白色	B	F	F			
1011	Z21	「井手	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色４	C		F			
1012	Y21	「益女」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色１	C		C			
1013	B20	「益女	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色4	D		F			
1014	C20	「上家」	須恵器	蓋	蓋部内面		青灰色１	×-C		C	13.8	—	3.8
1015	Y21	「本」	須恵器	蓋	蓋外面	回転糸切り	灰色１	×-B		F			
1016	A21	「和多	須恵器	蓋	蓋外面	回転糸切り	灰色１	×-B		F			
1017	Y21	□	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	B		D			
1018	A21	□	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	B	D	C	19.6	13.9	4.2
1019	B21	「真	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面		灰色１	C		F			
1020	A20	「新岡」	須恵器	Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰色１	(B)		E			
1021	流路1	「勝兄」	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	A		B			
1022	A19	「□〔家ヵ〕」	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	青灰色１	A	D	C	(14.1)	9.9	2.0
1023	A21	「小山	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		F			
1024	D20	「妖人」	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	B	D	B	14.2	10.0	2.3
1025	C19	「中」	須恵器	Ⅲ	底部外面	静止糸切り後ナデ	灰褐色４	D	D	C	(15.1)	10.1	2.6
1026	A20	□	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	B		E			
1027	C20	「納」	須恵器	Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色4	B		C	13.8	10.0	2.6
1028	B19	「大」	須恵器	高台付坏	底部外面		灰色１	D	D	C			
1029	Z21	「⊿都目」	須恵器	高台付坏	底部外面		灰色１	C		F			
1030	Z21	「中」	須恵器	高台付坏	底部外面	回転糸切り	灰色2	D		C	(13.5)	8.8	4.7
1031	Z19	□	須恵器	高台付坏	底部外面		灰色１	C	F	F			
1032	C19	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面		灰色１	C		F			
1033	C19	□	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色3	D		F			
1034	B18	「安人」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	D	D	C	(13.0)	7.0	4.1
1035	流路1	「⊿」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰褐色２	C	D	B	17.2	11.8	6.9
1036	X21	宅女」	須恵器	坏	底部外面	静止糸切り	青灰色１	D		C	(14.0)	9.0	4.4
1037	B20	家」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色2	D		D			
1038	B21	「⊿〔牟ヵ〕」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	D	E	C	(12.2)	8.2	4.1

第30表　墨書土器観察表㉑（Ⅳ区）

番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
1039	A21	桙	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	B	F	F			
1040	C19	「十	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色3	D		F			
1041	Z21	□□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	B		F			
1042	Z21	「糸□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色2	D		F			
1043	Z20	「□〔主ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		F			
1044	流路1	「□〔中ヵ〕」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色１	C		F			
1045	B18	□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	青灰色１	D		F			
1046	SD01	□·□/□/□	須恵器	坏・Ⅲ	底部内面／外面／　体部外面正位	回転糸切り	灰白色1	C	F	F			
1047	B17	本」	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		E			
1048	B21	王」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		F			
1049	南壁溝	「⊿〔竹ヵ〕」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	静止糸切り	青灰色2	B		F			
1050	A19	□〔千ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色1	B		F			
1051	B20	□□□〔万呂ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		F			
1052	C19	□·□〔中ヵ〕	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色2	D		F			
1053	A19	「□〔糸ヵ〕	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	茶褐色2	D		F			
1054	A20	□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		F			
1055	Z20	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		F			
1056	C19	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色1	D		F			
1057	A19	□	須恵器	坏	底部外面	回転糸切り	灰色１	B		F			
1058	Z21	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	B		F			
1059	X21	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		F			
1060	A20	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	B		F			
1061	Z21	川#(記号)	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		F			
1062	Y21	「神□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	D		F			
1063	Y21	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰白色	C		F			
1064	Z20	□・『中』	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	B		F			
1065	C19	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	C		F			
1066	C19	□	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	茶褐色1			F			
1067	A19	「新	須恵器	坏	底部内面	回転糸切り	灰色2	C	F	E			
1068	B19	「入屋／□」	須恵器	坏	底部内面／体部外面	回転糸切り	灰色１	D	F	E			
1069	C20	□北」	須恵器	坏	底部内面	回転糸切り	灰色１	C		F			
1070	A21	建人」	須恵器	坏	体部外面		灰色2	D		F			
1071	流路1	「十(記号ヵ)」	須恵器	高台付Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	A		C	(18.6)	14.0	3.8
1072	Z20	□(記号ヵ)	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	B		F			
1073	D20	東」	土師器	坏	底部外面		灰褐色1	C		E			
1074	Z20	□〔厨ヵ〕」	土師器	坏	底部外面		橙褐色１	C	E	C	12.0	7.8	3.6
1075	Z20	「□〔日ヵ〕	土師器	坏	底部外面		橙褐色１	(C)		F			
1076	Y20	「□□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		橙褐色１	(B)		F			
1077	Z20	「□	土師器	坏	底部外面		灰褐色２	(C)		F			
1078	A19	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	指頭圧痕後粗いナデ	灰褐色２	(C)		F			
1079	Z20	⊿」	土師器	坏	底部外面		橙褐色１	(C)		F			
1080	流路1	□〔乙ヵ〕□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ナデ	橙褐色2	(C)		F			
1081	Z20	廻	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色1	(C)		F			
1082	A20	「寺坏」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	橙褐色１	(C)	F	F			
1083	Z20	大(篆書体)	土師器	坏	底部外面	ヘラ切り	橙褐色１	(C)		F			
1084	北壁溝	X(線刻)／□	土師器	坏・Ⅲ	底部内面／外面		橙褐色１	(C)		F			
1085	Z20	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	橙褐色2	(C)		F			
1086	B18	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	(C)		F			
1087	Z20	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色２	(C)		F			
1088	A19	□	土師器	坏	底部外面	静止糸切り	灰褐色３	(D)		F			
1089	A19	□」	土師器	坏	底部外面		灰褐色３	(B)		F			

第31表　墨書土器観察表㉒（Ⅳ区）

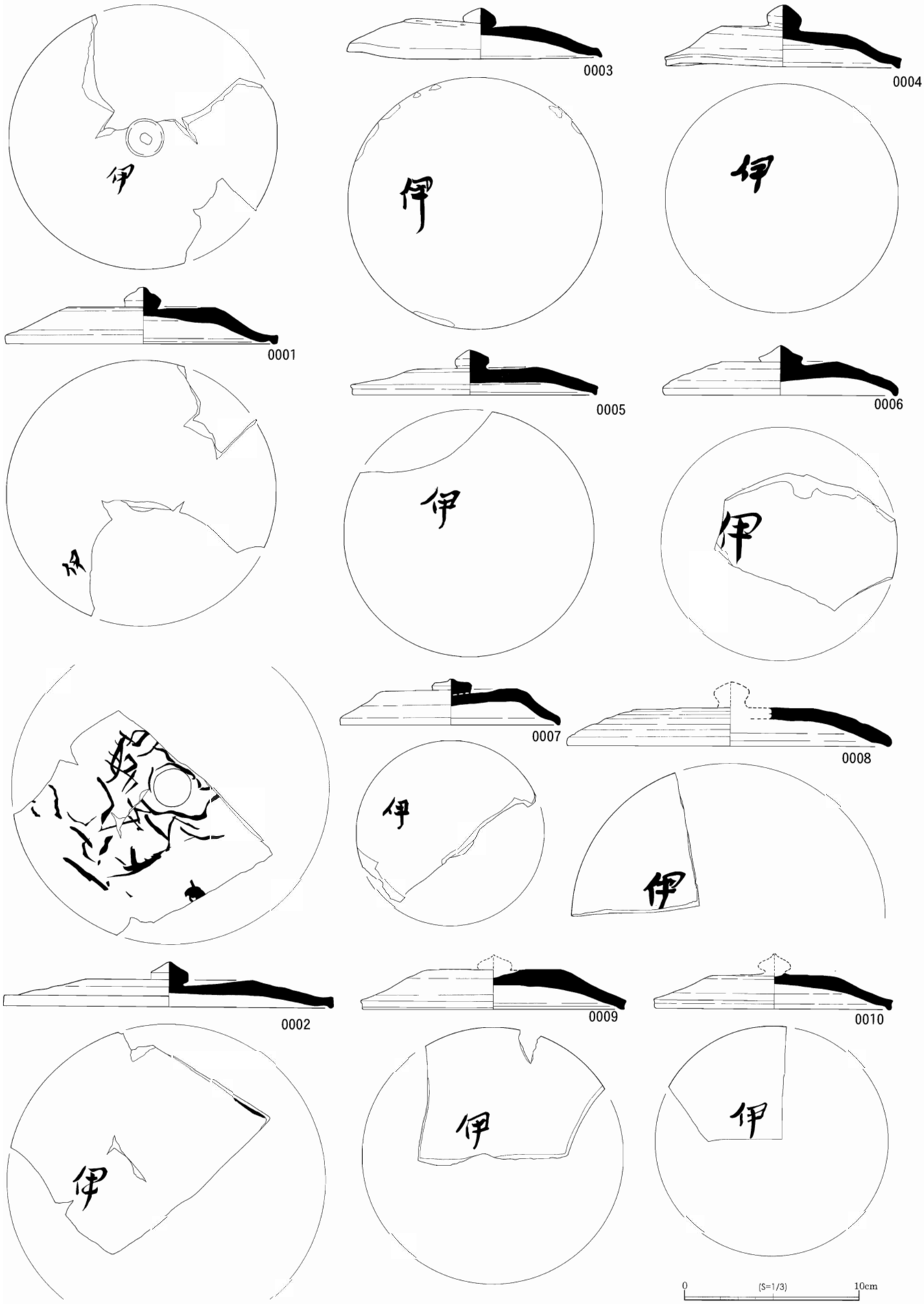
番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
1090	B19	□	土師器	坏	底部外面		灰褐色２	(B)	F	F			
1091	Z20	□	土師器	坏	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	C		F			
1092	B17	□」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ナデ	灰褐色1	(B)		F			
1093	D20	「□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色1	(B)		F			
1094	B19	岡」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色２	(C)		F			
1095	D19	□」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	(B)		F			
1096	C20	□	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ナデ	灰褐色1	(B)		F			
1097	C19	「庭足」	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ナデ	橙褐色１	(D)		F			
1098	A19	「□	土師器	坏	底部内面	ナデ	灰褐色２	D	F	F			
1099	C20	□	土師器	坏・Ⅲ	底部内面	ナデ	灰褐色1	(B)		F			
1100	Z20	家	土師器	坏・Ⅲ	底部内面	ヘラ切り	灰褐色３	D		F			
1101	C20	□	土師器	坏・Ⅲ	底部内面	ナデ	灰褐色1	(B)		F			
1102	Z20	「川」	土師器	坏	体部外面		橙褐色３	D		F			
1103	B18	「十(記号ヵ)」／□」	土師器	坏	底部外面／体部外面正位		桃褐色1	D		D	(11.0)	(6.3)	3.8
1104	B20	十・□・下(記号ヵ)	土師器	坏・Ⅲ	底部外面		灰褐色2	(B)	F	F			
1105	D19	⊂(記号)	土師器	坏・Ⅲ	底部外面	ヘラ切り	灰褐色1	C		F			

第32表　刻書・ヘラ書き土器観察表

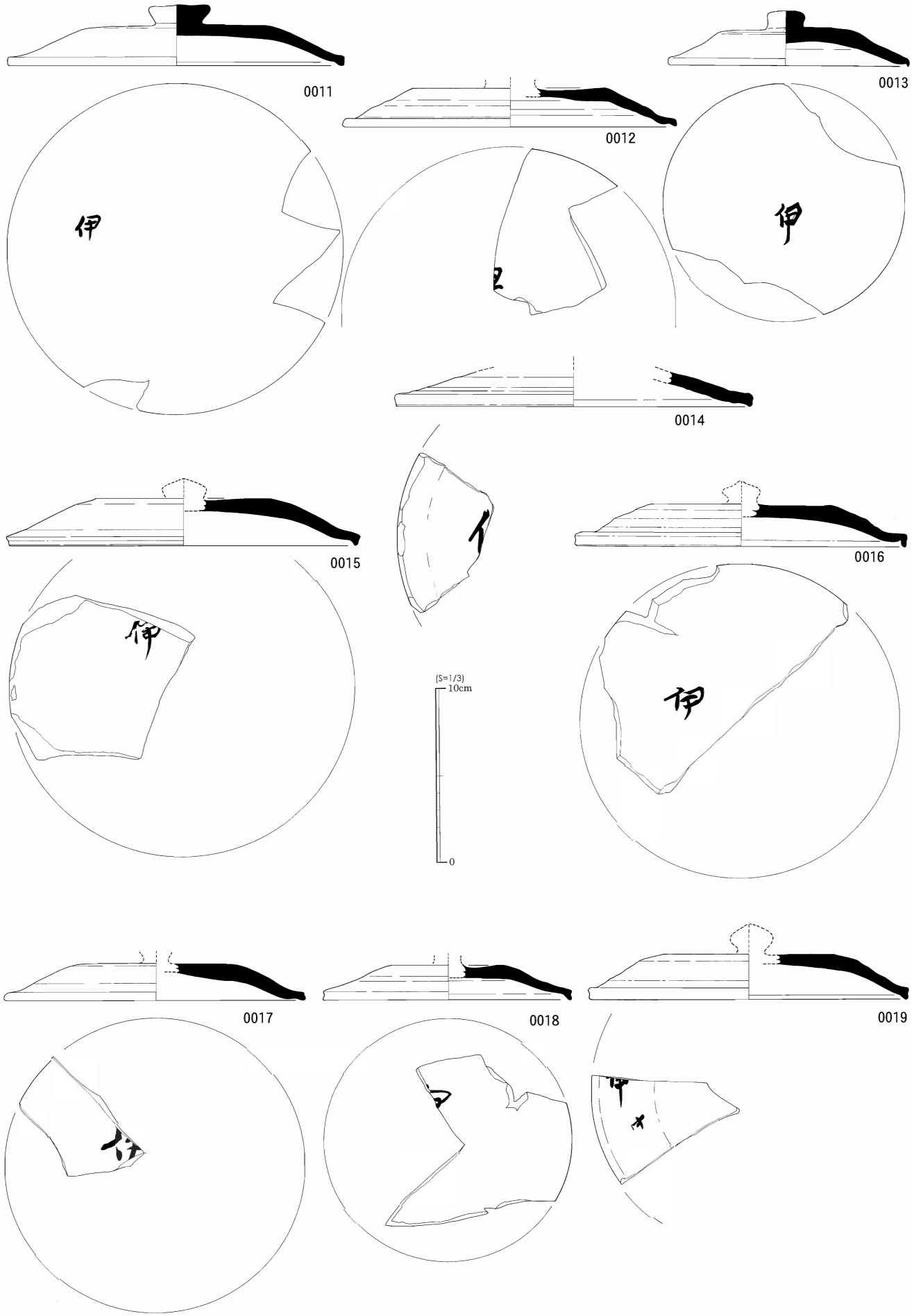
番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
Ⅰ区													
1106	G13	「奈」	須恵器	碗か鉢	底部外面	回転糸切り	灰色１	D		F			
1107	G13	「大」	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	×		F			
1108	F17	伊□〔トヵ〕マ□〔馬ヵ〕手」	土師器	坏	底部外面		灰褐色2	D	D	B			
Ⅳ区													
1109	A21	△・王(記号ヵ)	須恵器	灯明Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色１	D	D	B	(11.9)	8.4	4.7

第33表　筆そろえ土器観察表

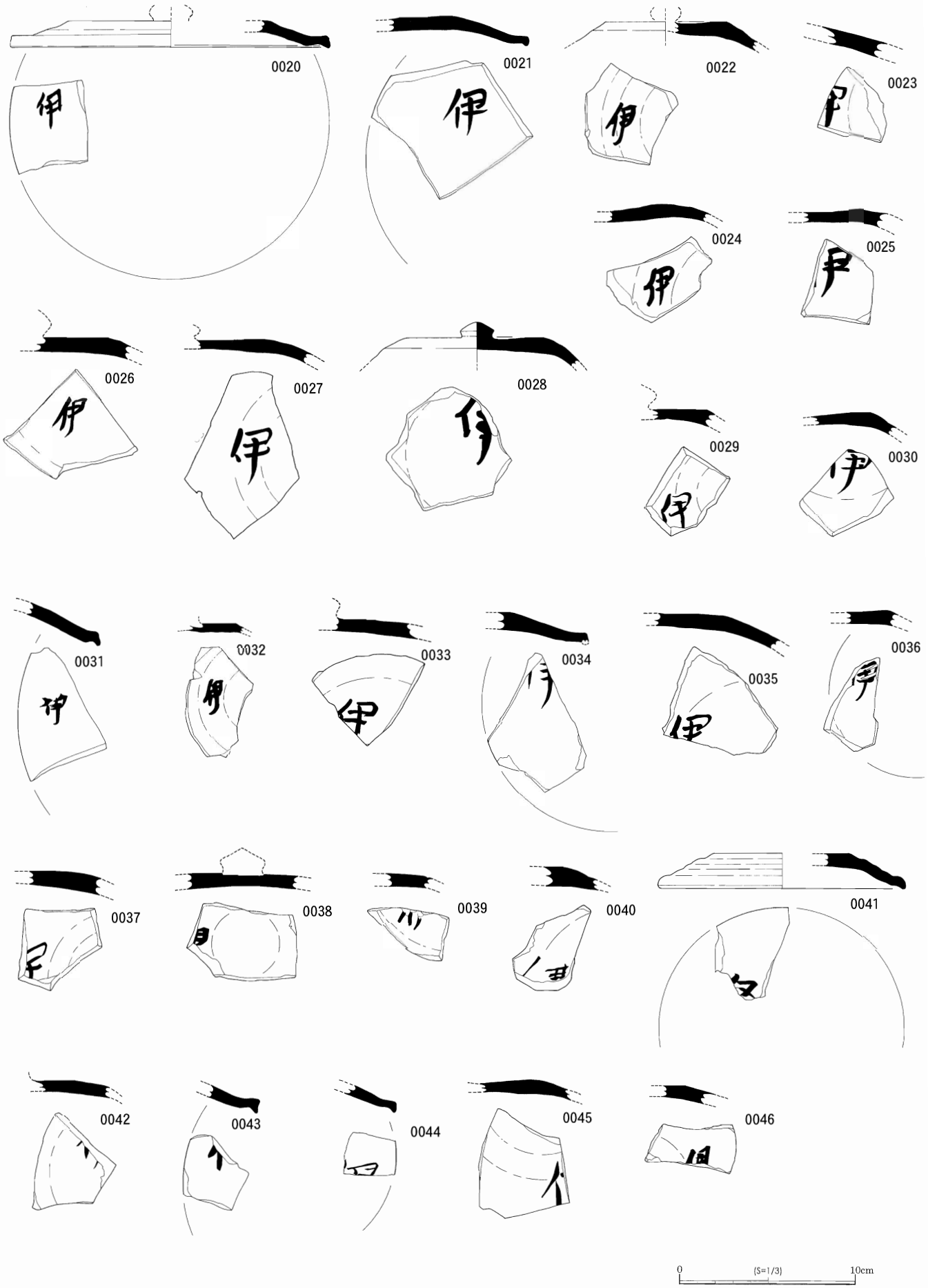
番号	出土地点 遺構名／グリッド	釈　文	種別	器　種	記名部位	底部調整	色　調	摩滅	破損状況		法　量		
									形１	形２	口径	底径	器高
Ⅰ区													
1110	F17	□(筆そろえか)	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面		青灰色1	B		F			
1111	G15	(筆そろえ)	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色2	A	F	F			
1112	C16	(筆そろえ)	須恵器	高台付坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰色1	C		F			
1113	D16	□・□(筆そろえか)	須恵器	蓋	蓋外面		灰色１	×		F			
1114	SD16	(筆そろえ)	土師器	坏・Ⅲ	体部外面		橙褐色１	D		F			
Ⅳ区													
1115	A19	(筆そろえ)	須恵器	蓋	蓋内面		青灰色2	×-B		E			
1116	B18	□(筆そろえか)	須恵器	高台付坏	底部外面		灰色１	D		C	(13.2)	8.4	4.5
1117	C20	⊿(筆そろえか)	須恵器	坏・Ⅲ	底部外面	回転糸切り	灰褐色4	C		F			



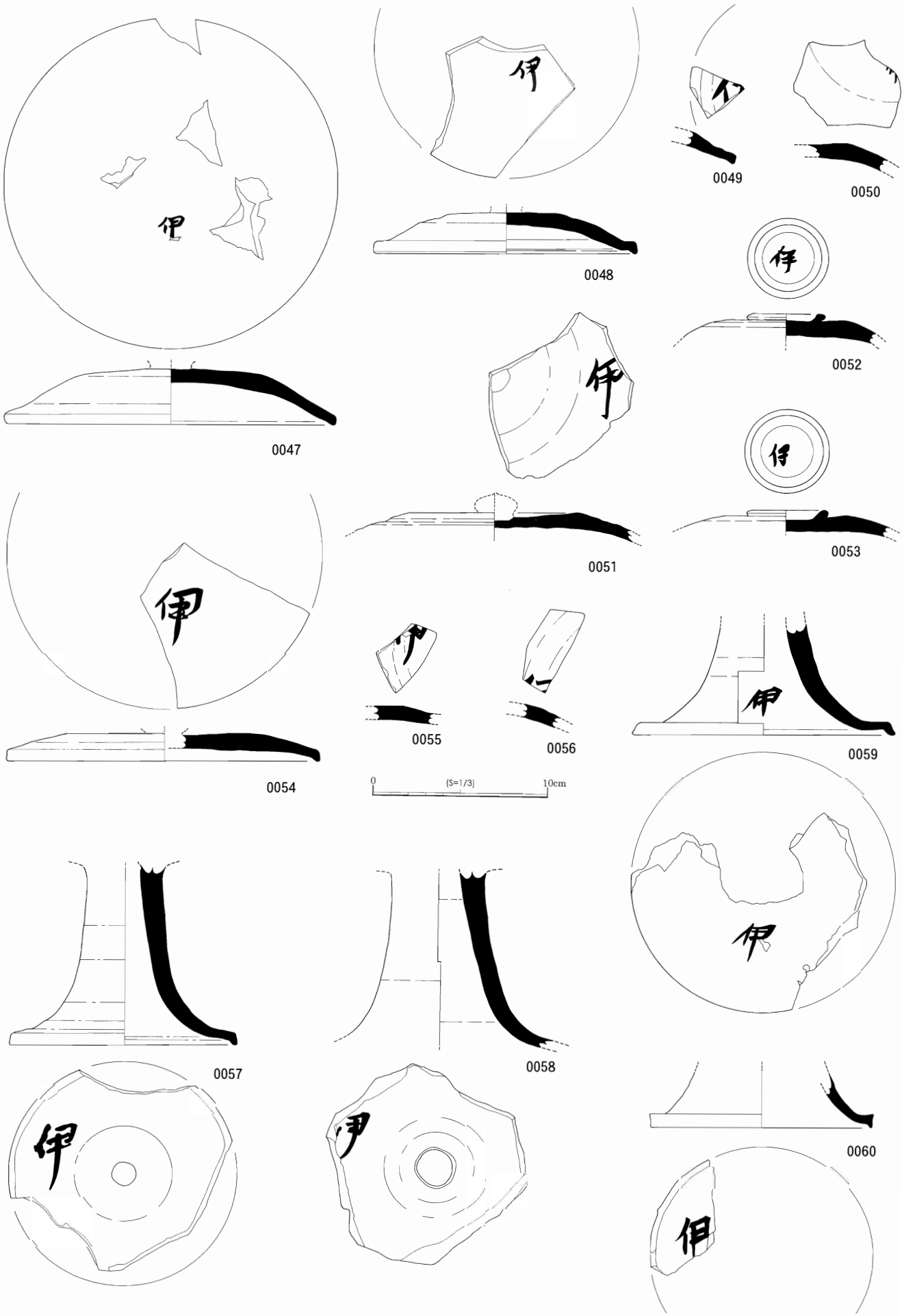
第17図　墨書土器実測図１　Ⅰ区「伊」／須恵器蓋



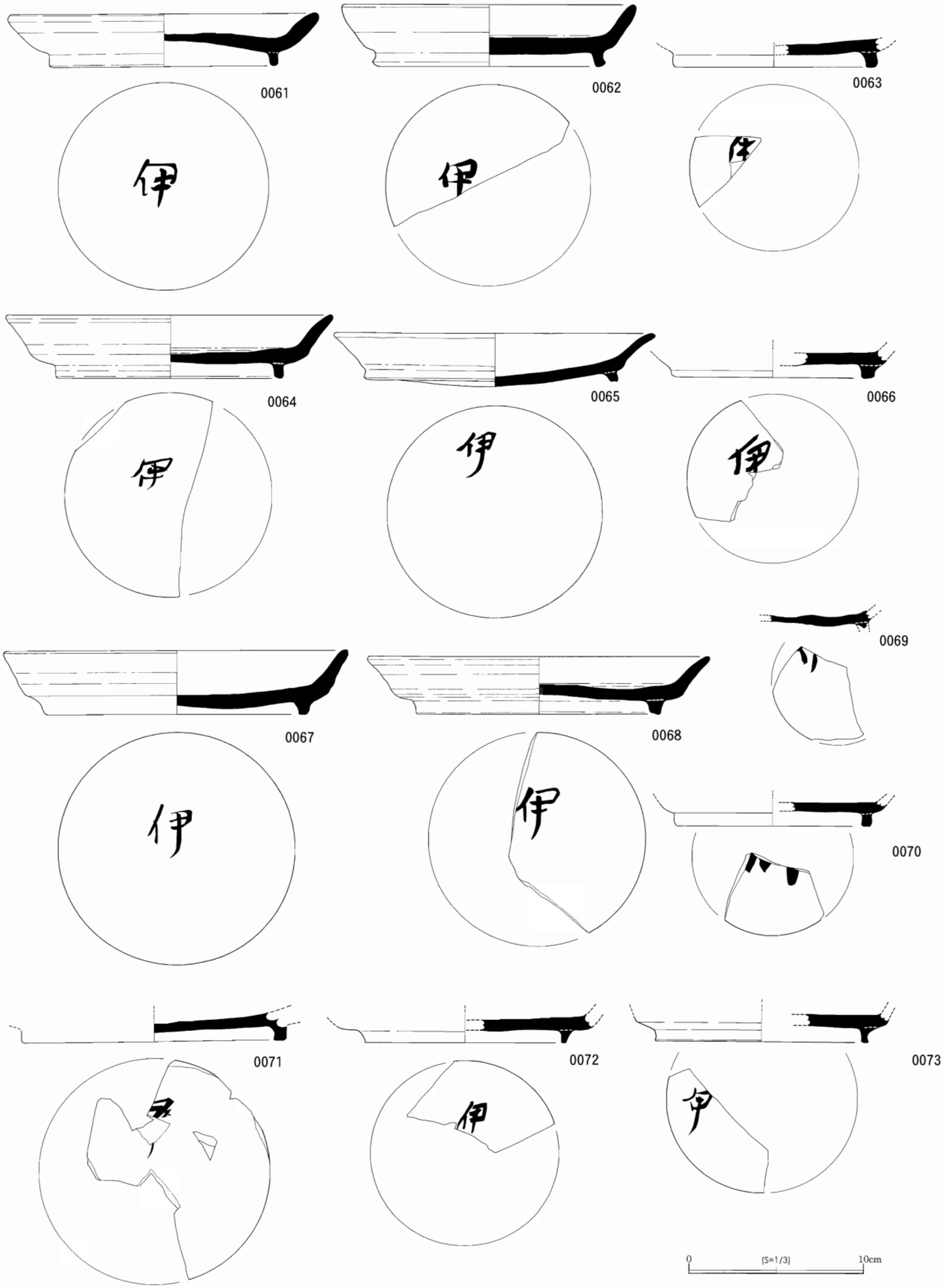
第18図　墨書土器実測図２　Ⅰ区「伊」／須恵器蓋



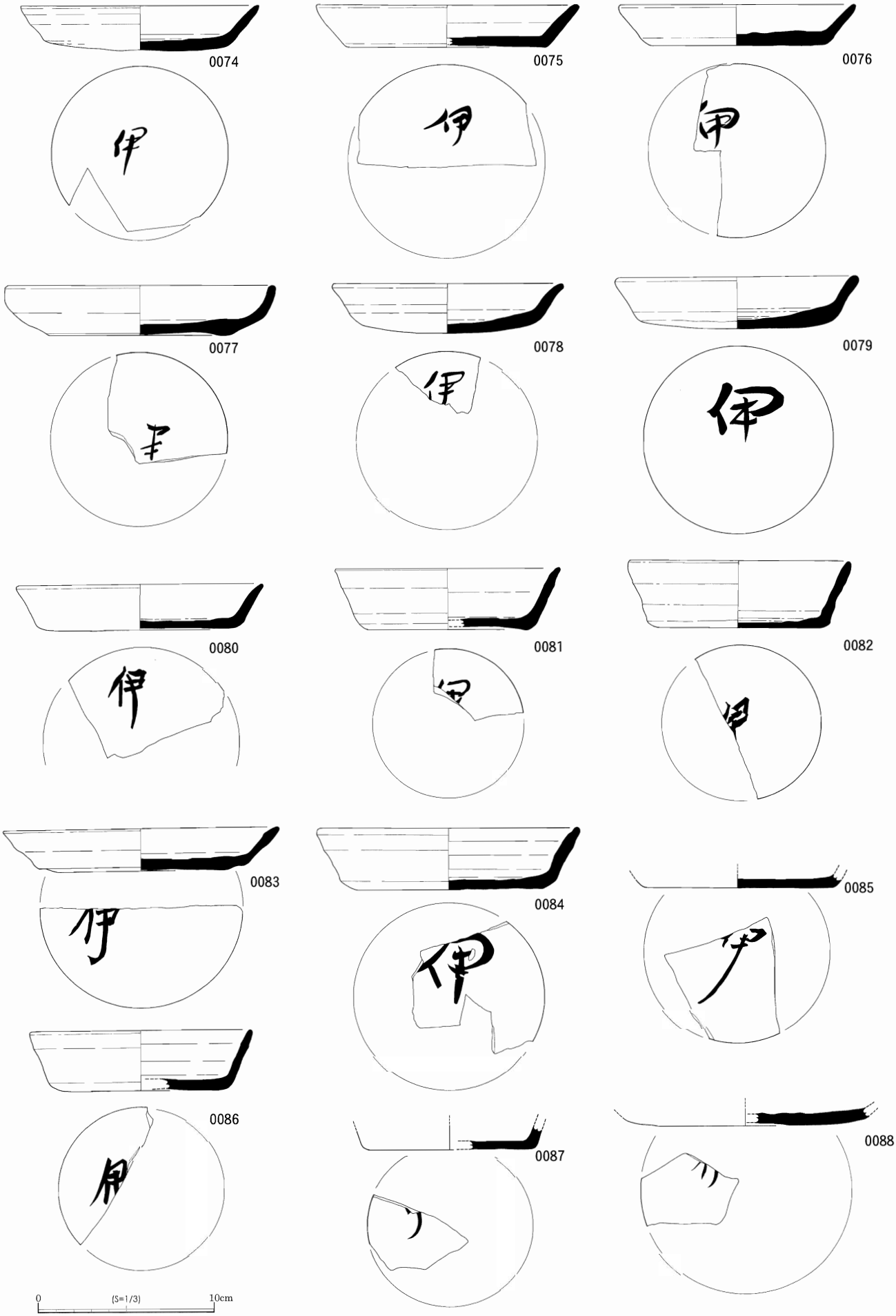
第19図　墨書土器実測図３　Ⅰ区「伊」／須恵器蓋



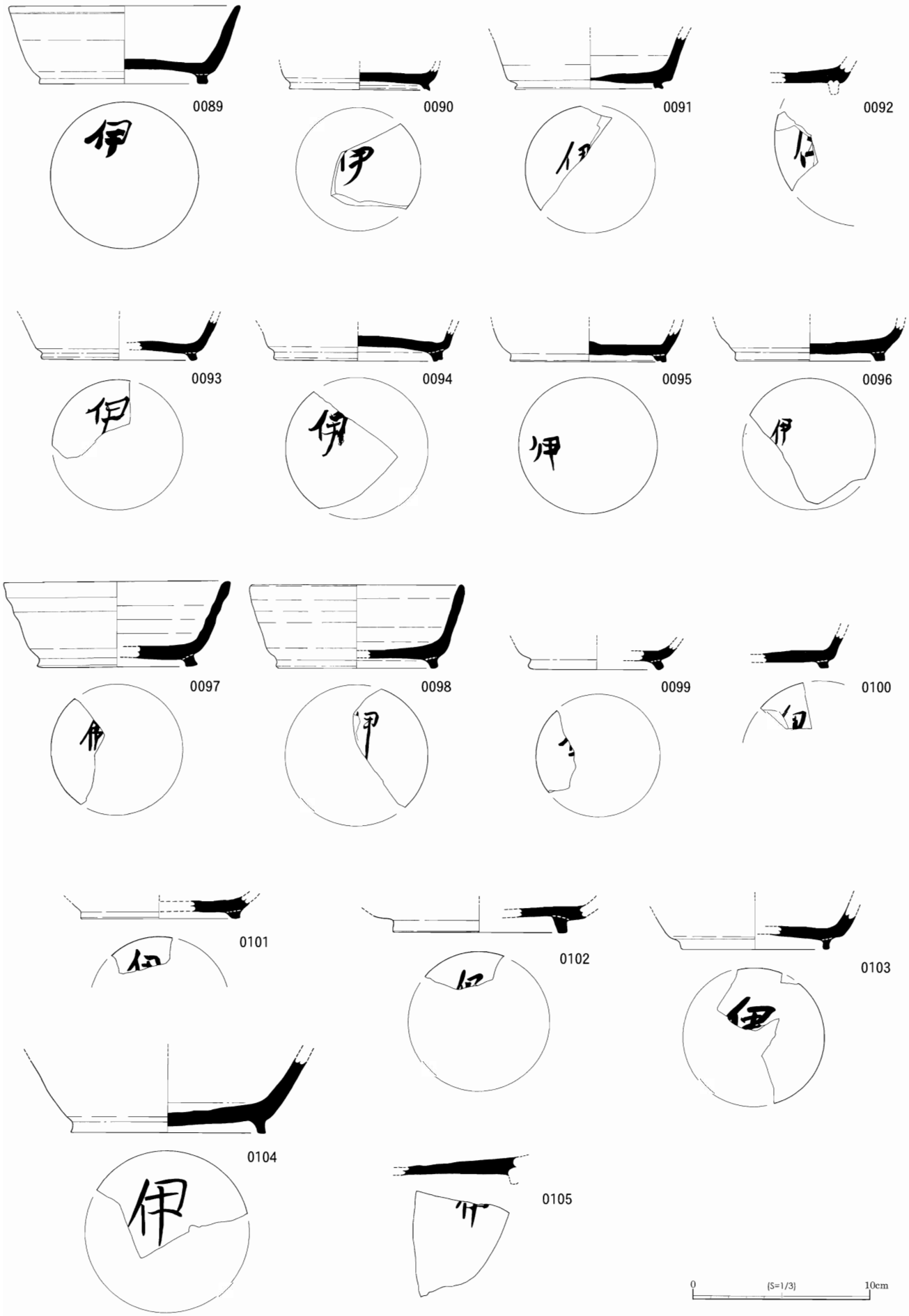
第20図　墨書土器実測図４　Ⅰ区「伊」／須恵器蓋・高坏



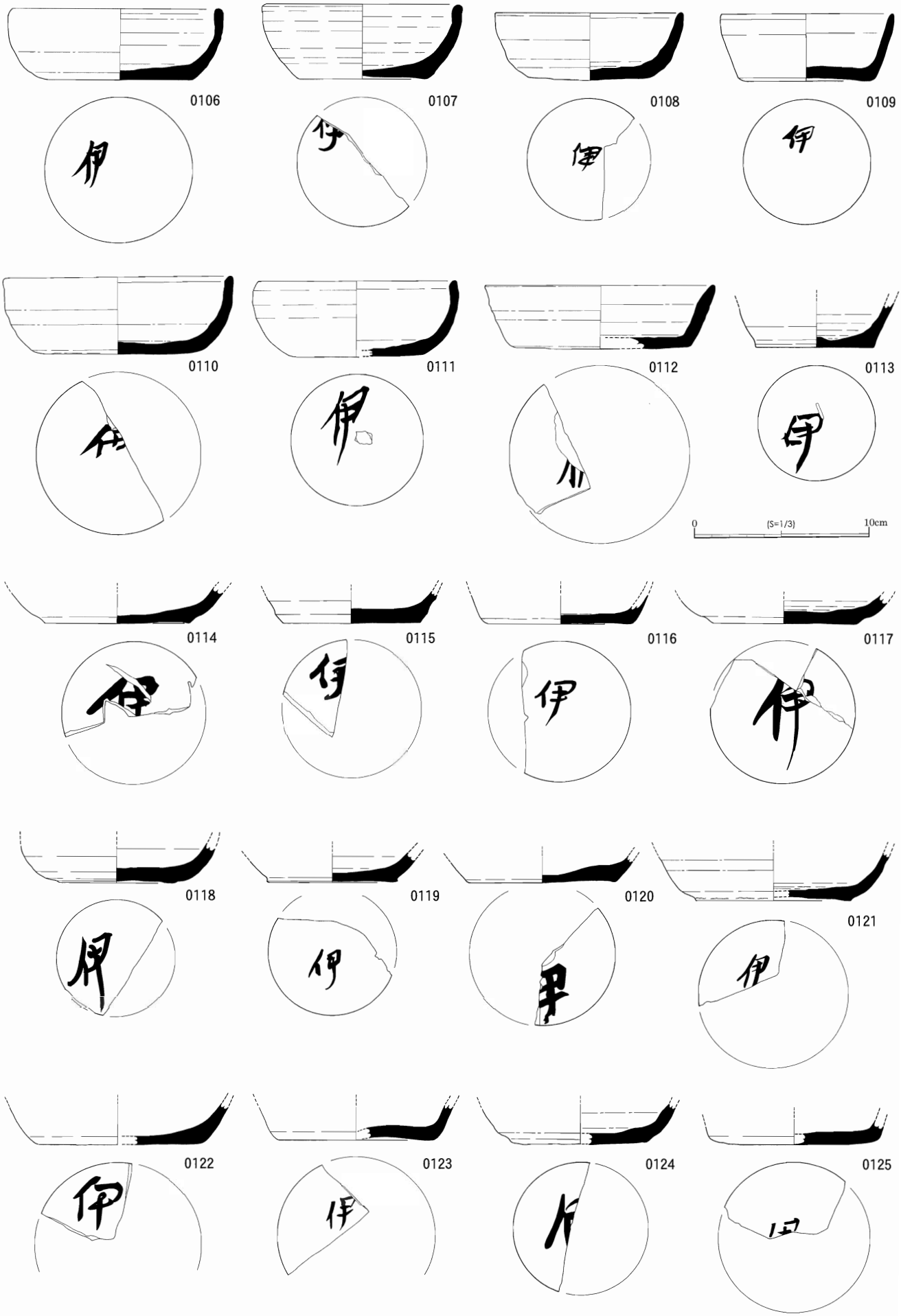
第21図　墨書土器実測図５　Ⅰ区「伊」／須恵器皿（高台付）



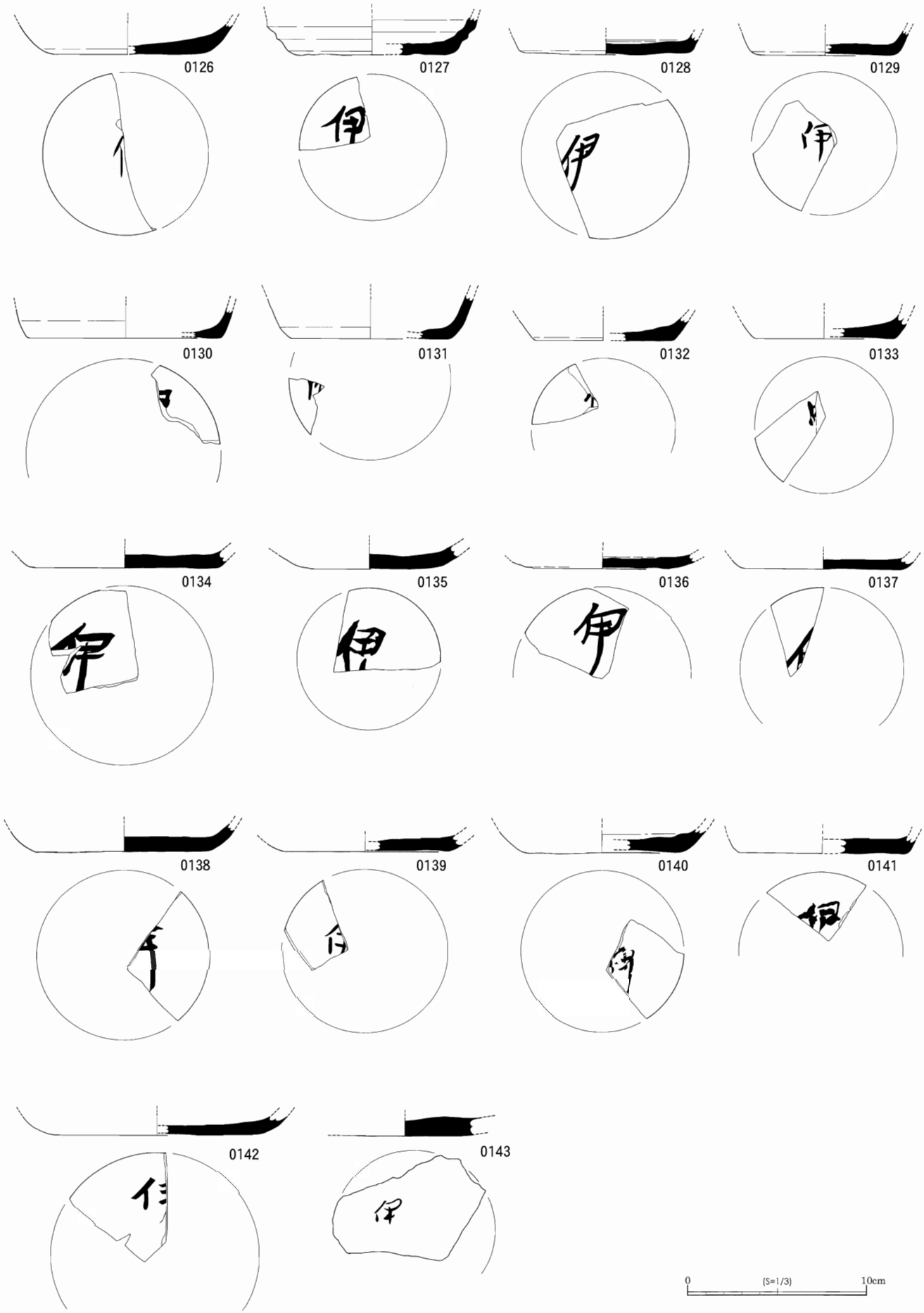
第22図　墨書土器実測図６　Ⅰ区「伊」／須恵器皿



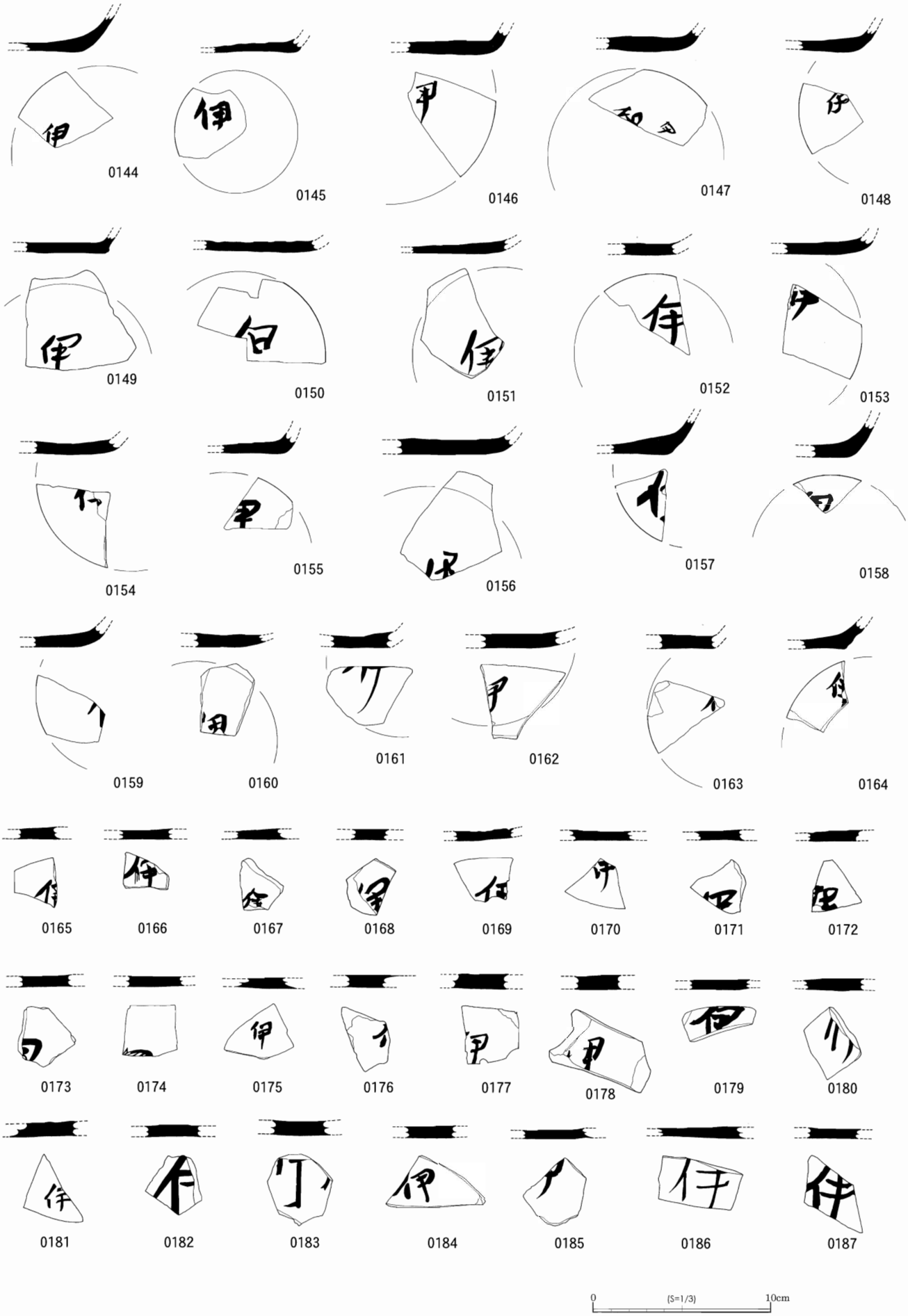
第23図　墨書土器実測図７　Ⅰ区「伊」／須恵器坏（高台付）



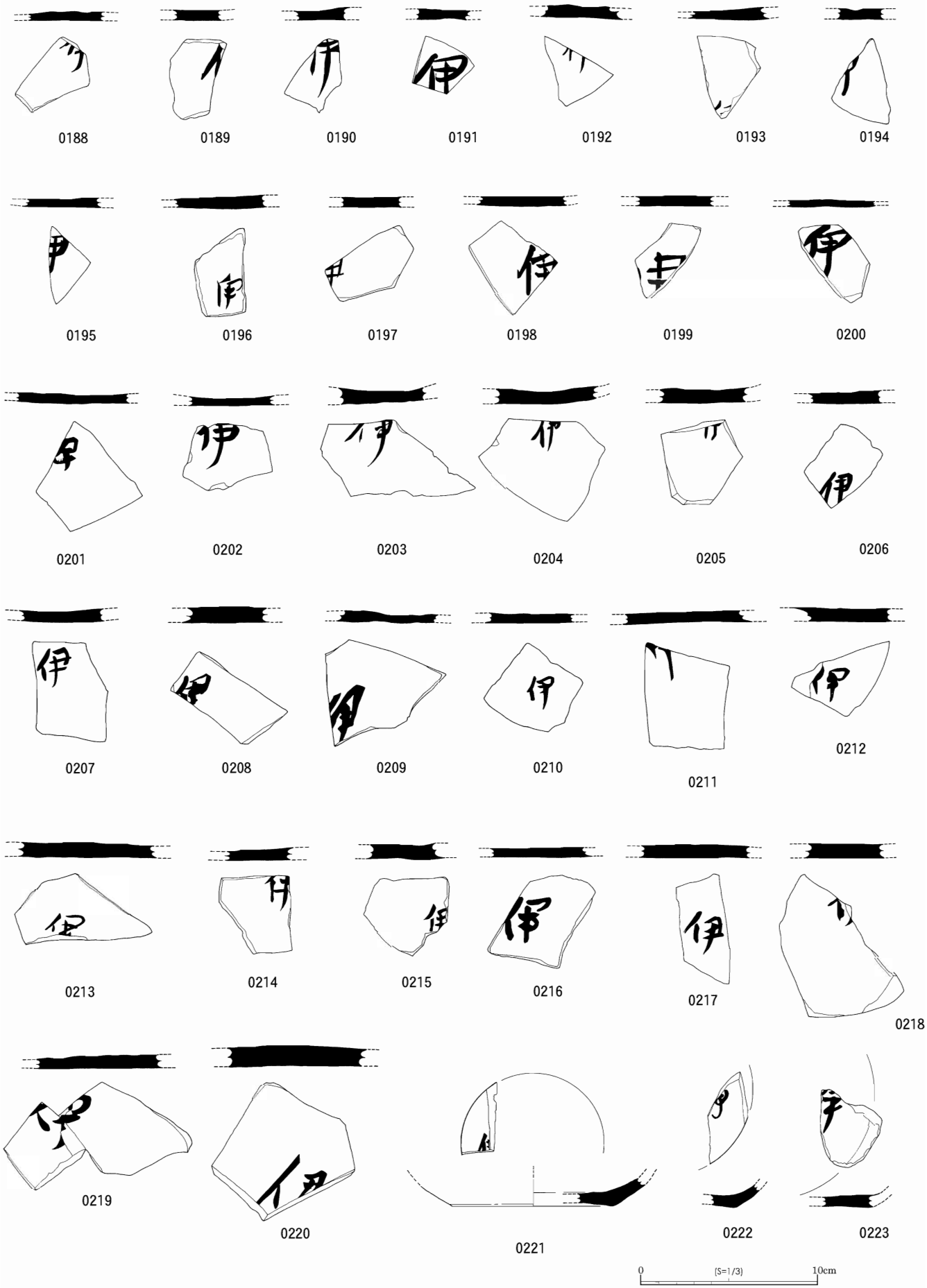
第24図　墨書土器実測図８　Ⅰ区「伊」／須恵器坏



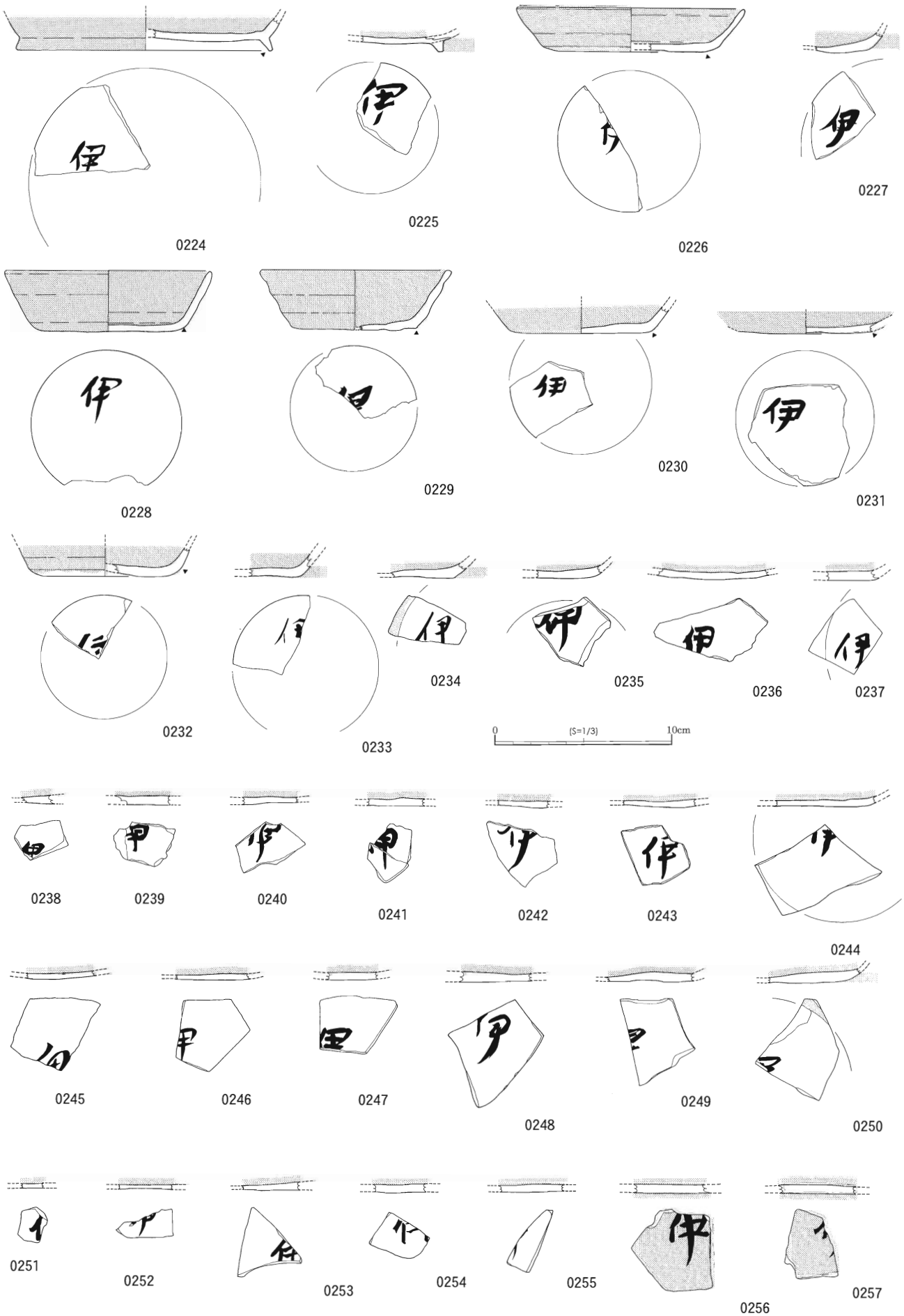
第25図　墨書土器実測図９　Ⅰ区「伊」／須恵器坏



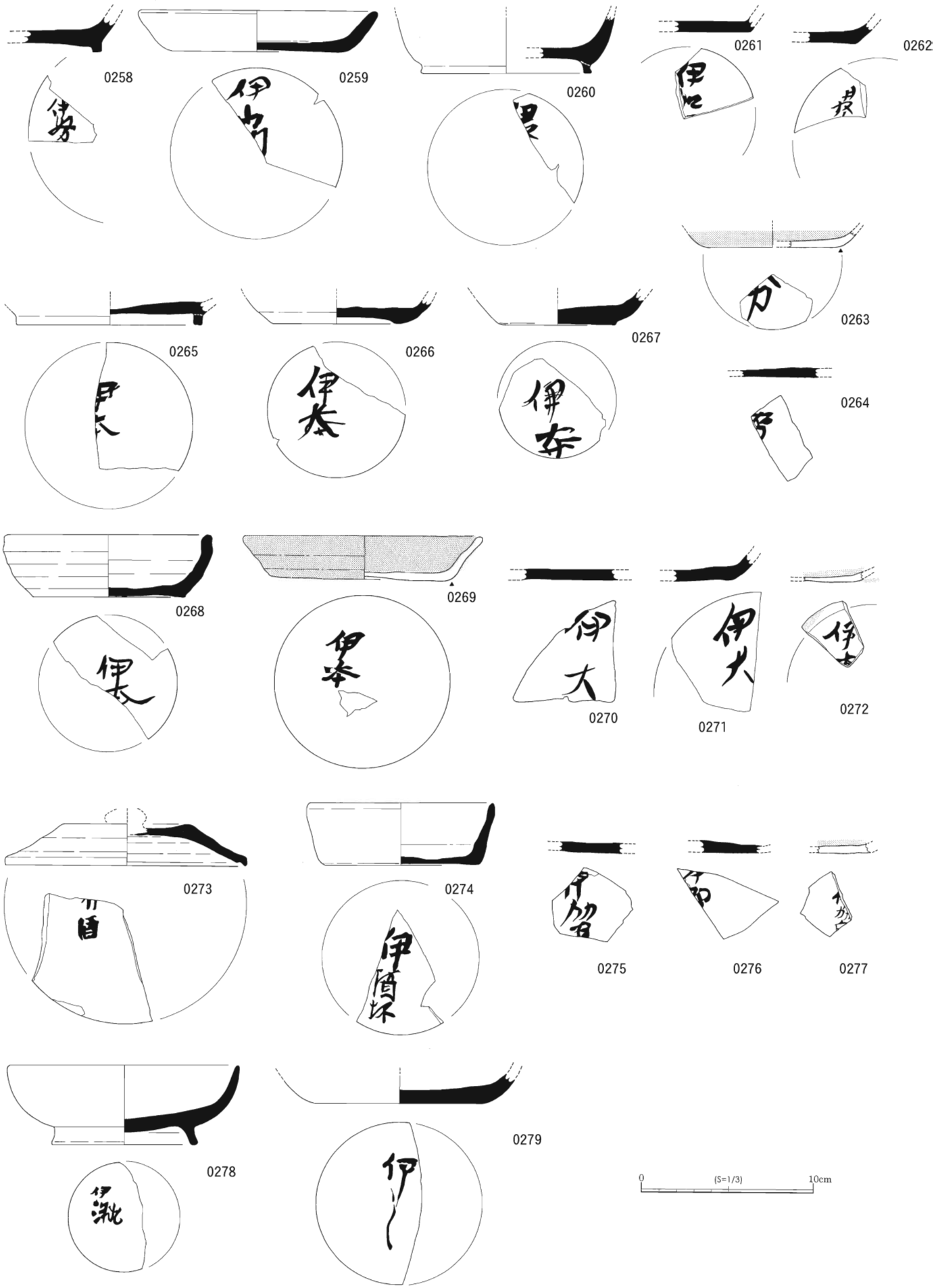
第26図　墨書土器実測図10　Ⅰ区「伊」／須恵器坏・皿



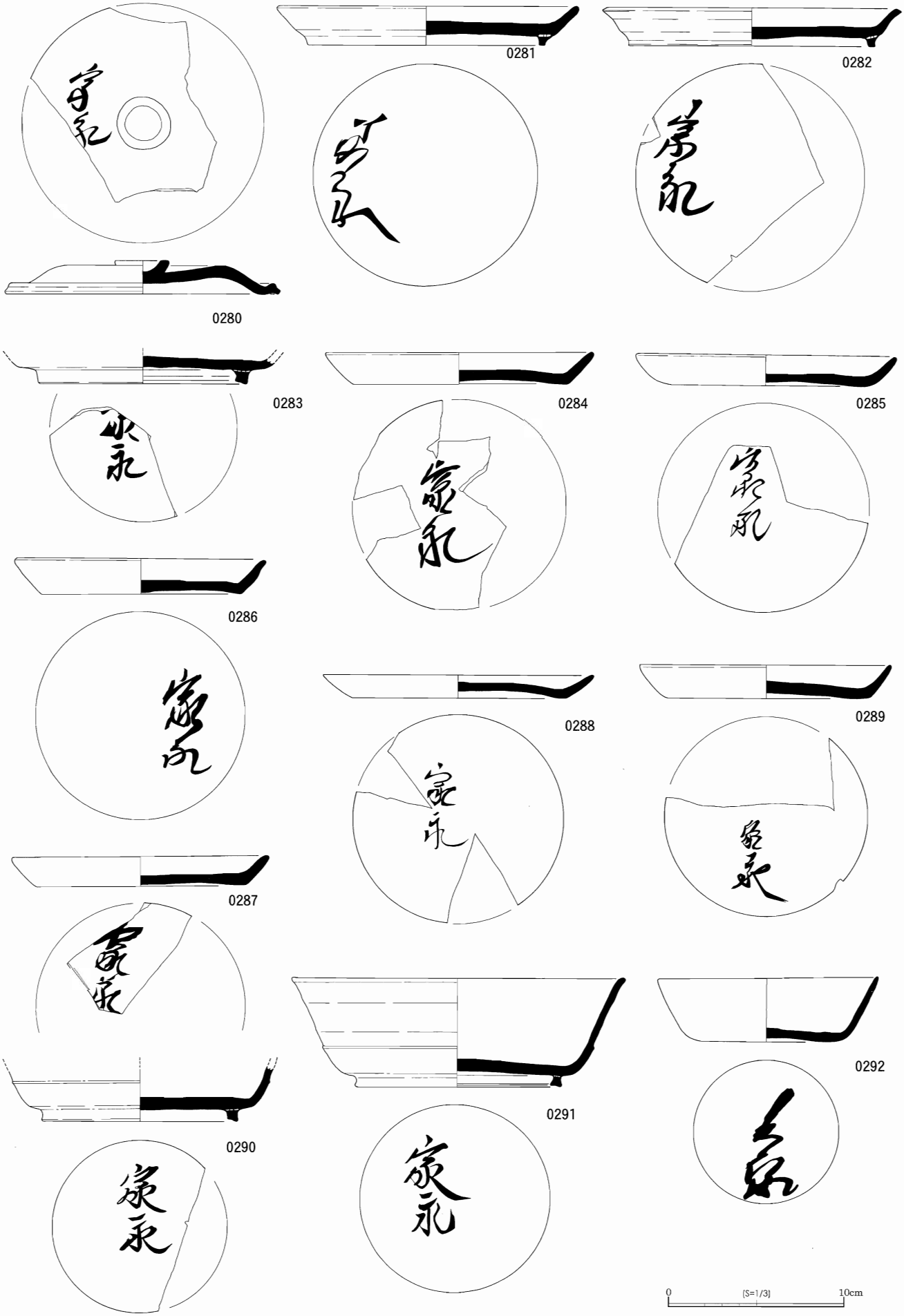
第27図　墨書土器実測図11　Ⅰ区「伊」／須恵器坏・皿



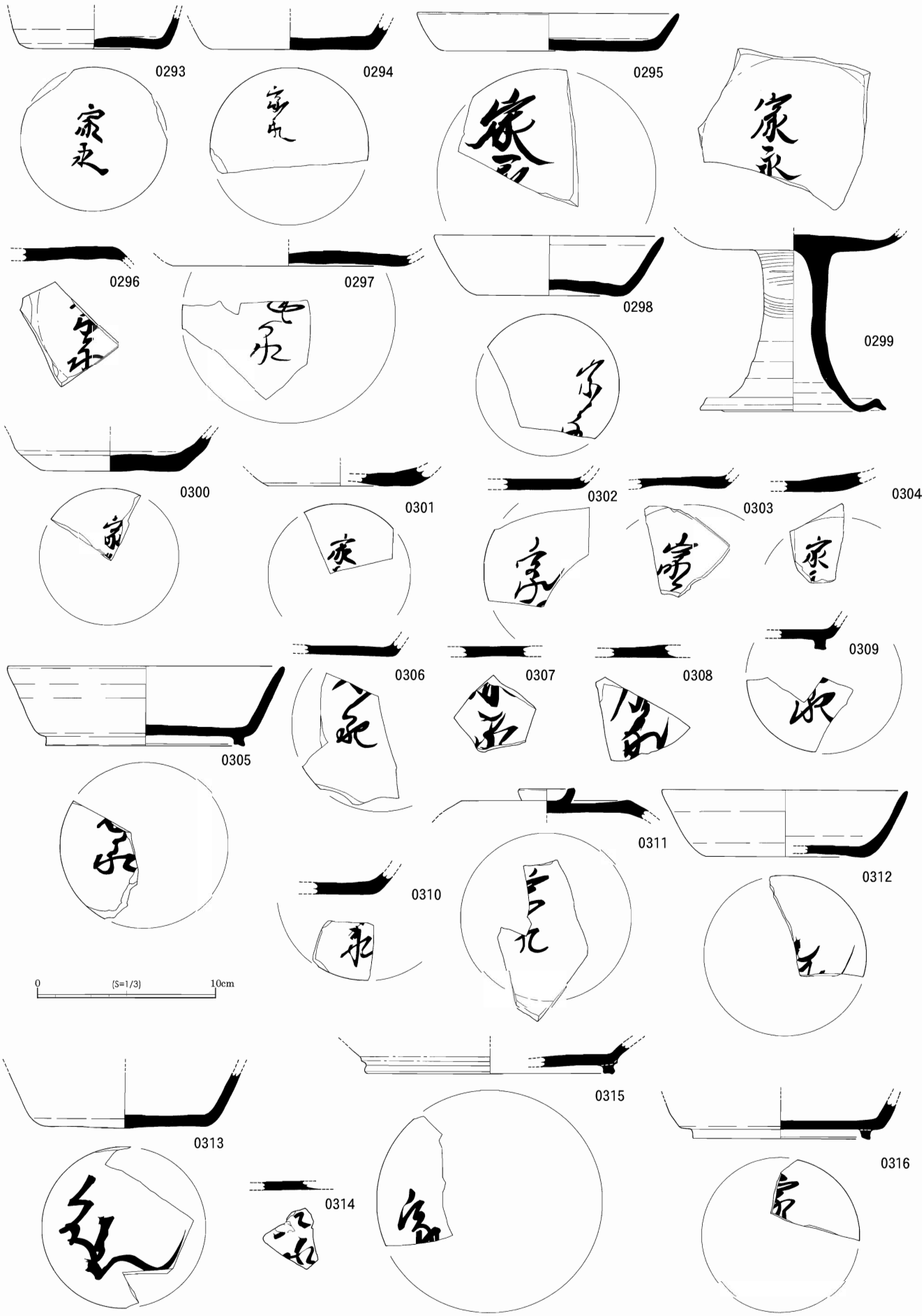
第28図　墨書土器実測図12　Ⅰ区「伊」／土師器坏・皿



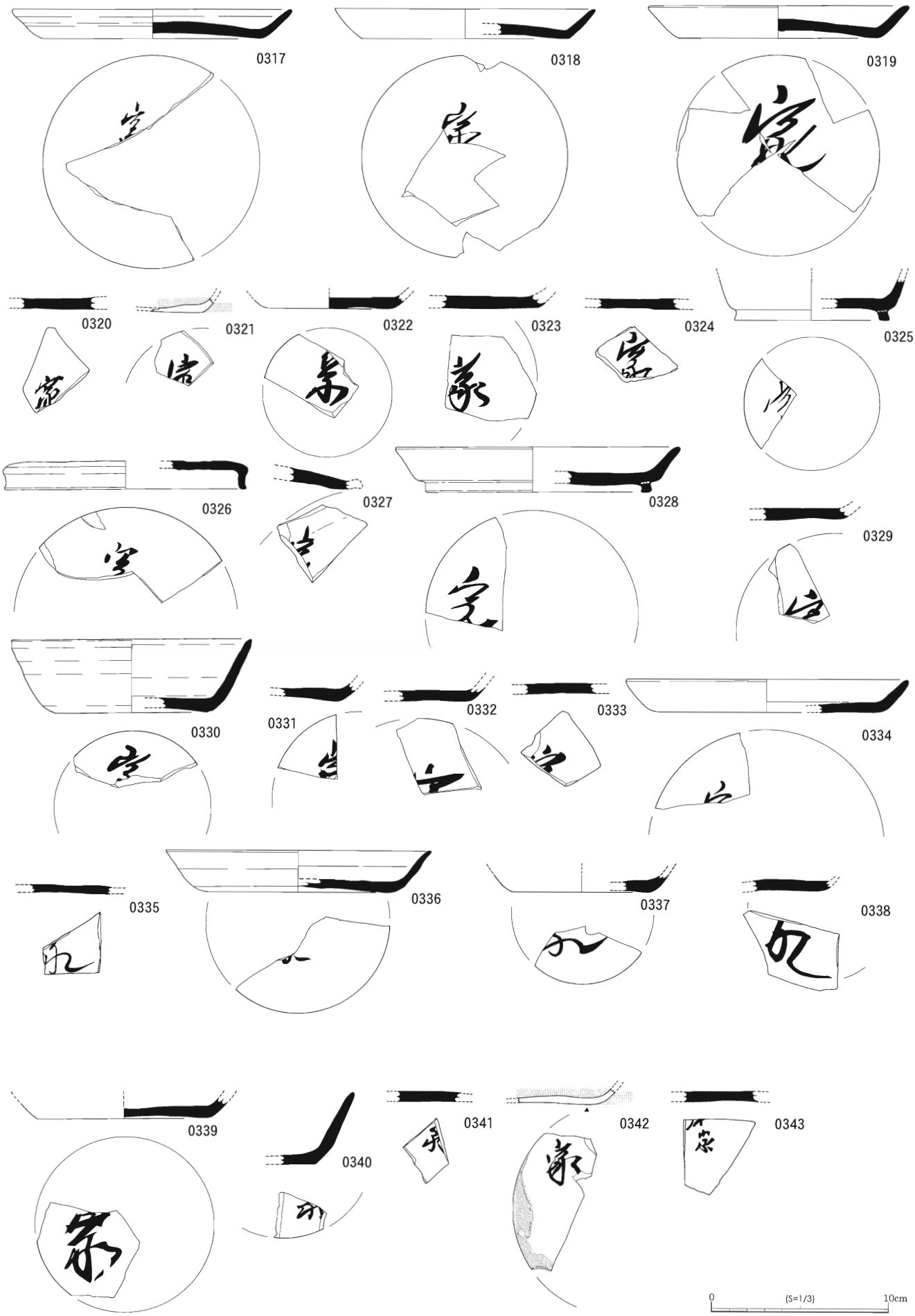
第29図　墨書土器実測図13　Ⅰ区「伊努」・「伊＋○」



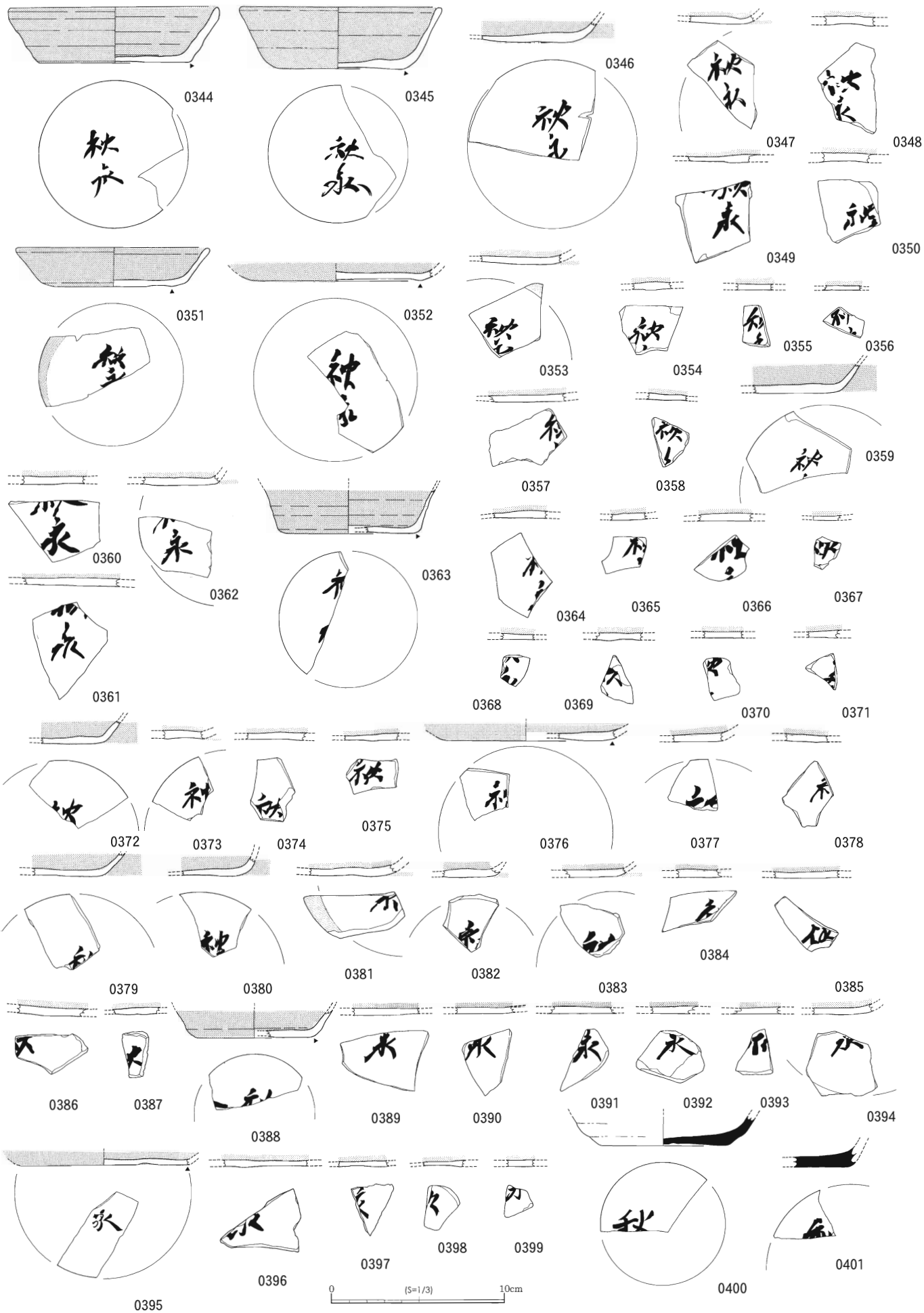
第30図　墨書土器実測図14　Ⅰ区「家永」



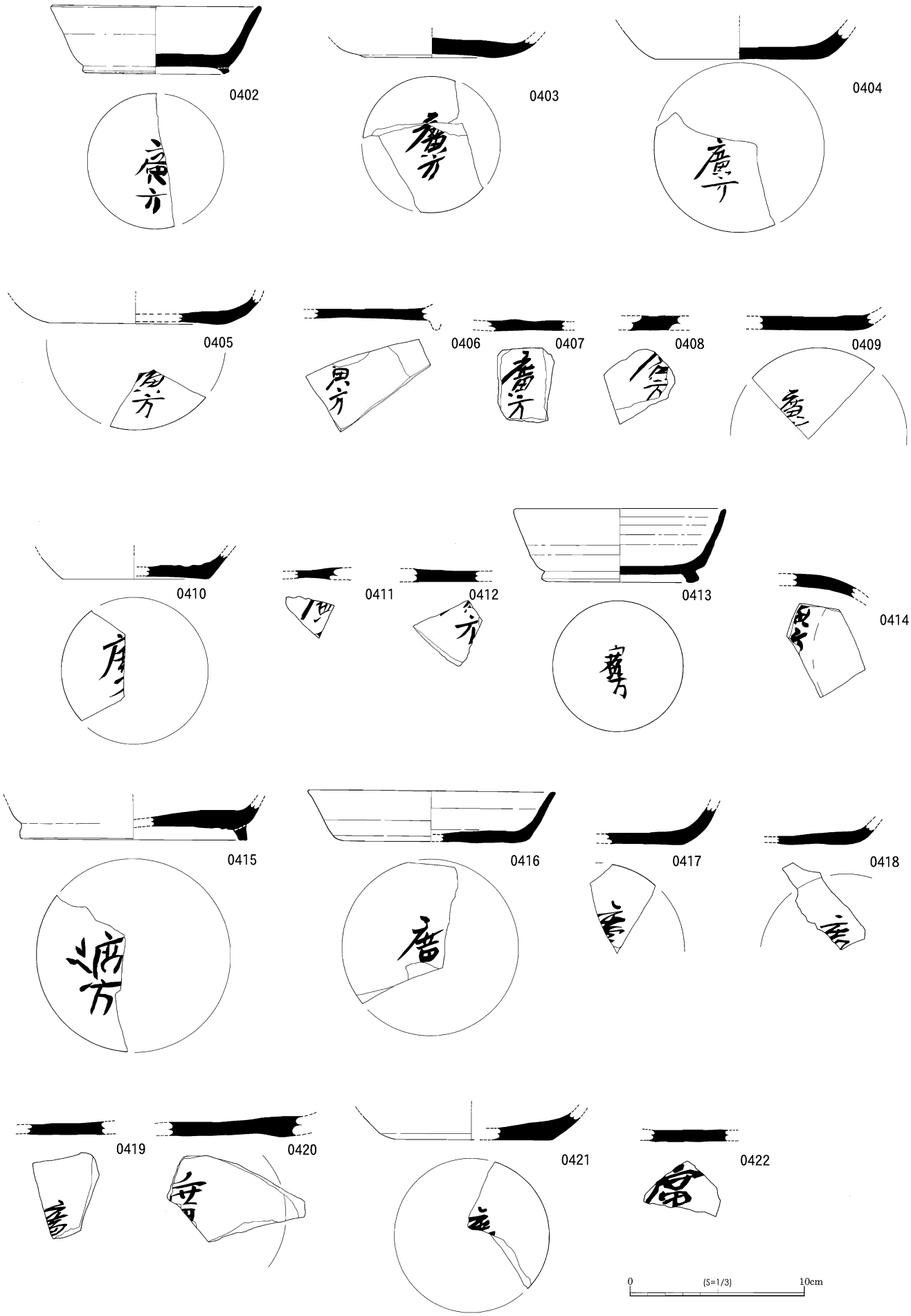
第31図　墨書土器実測図15　Ⅰ区「家永」



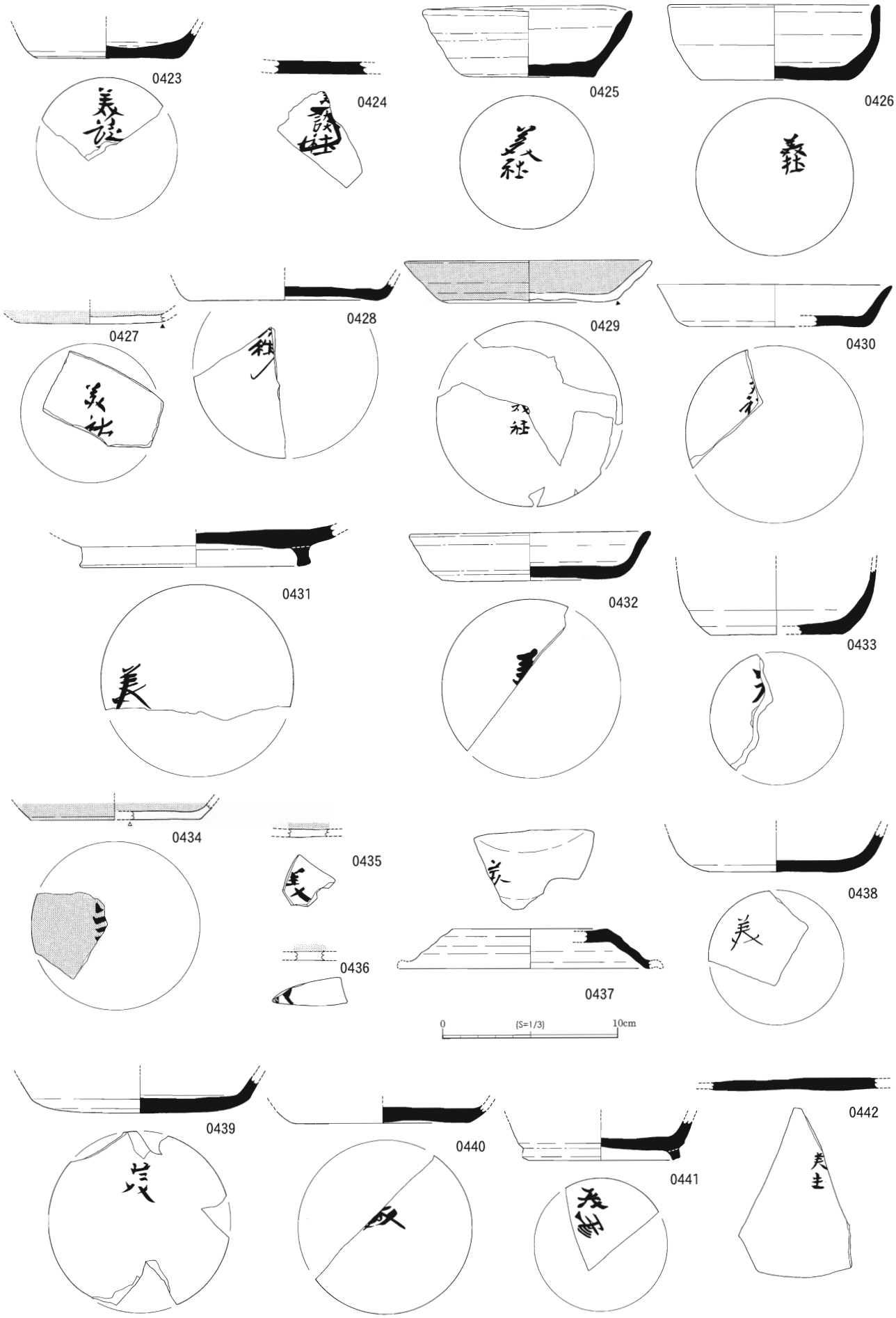
第32図　墨書土器実測図16　Ⅰ区「家永」



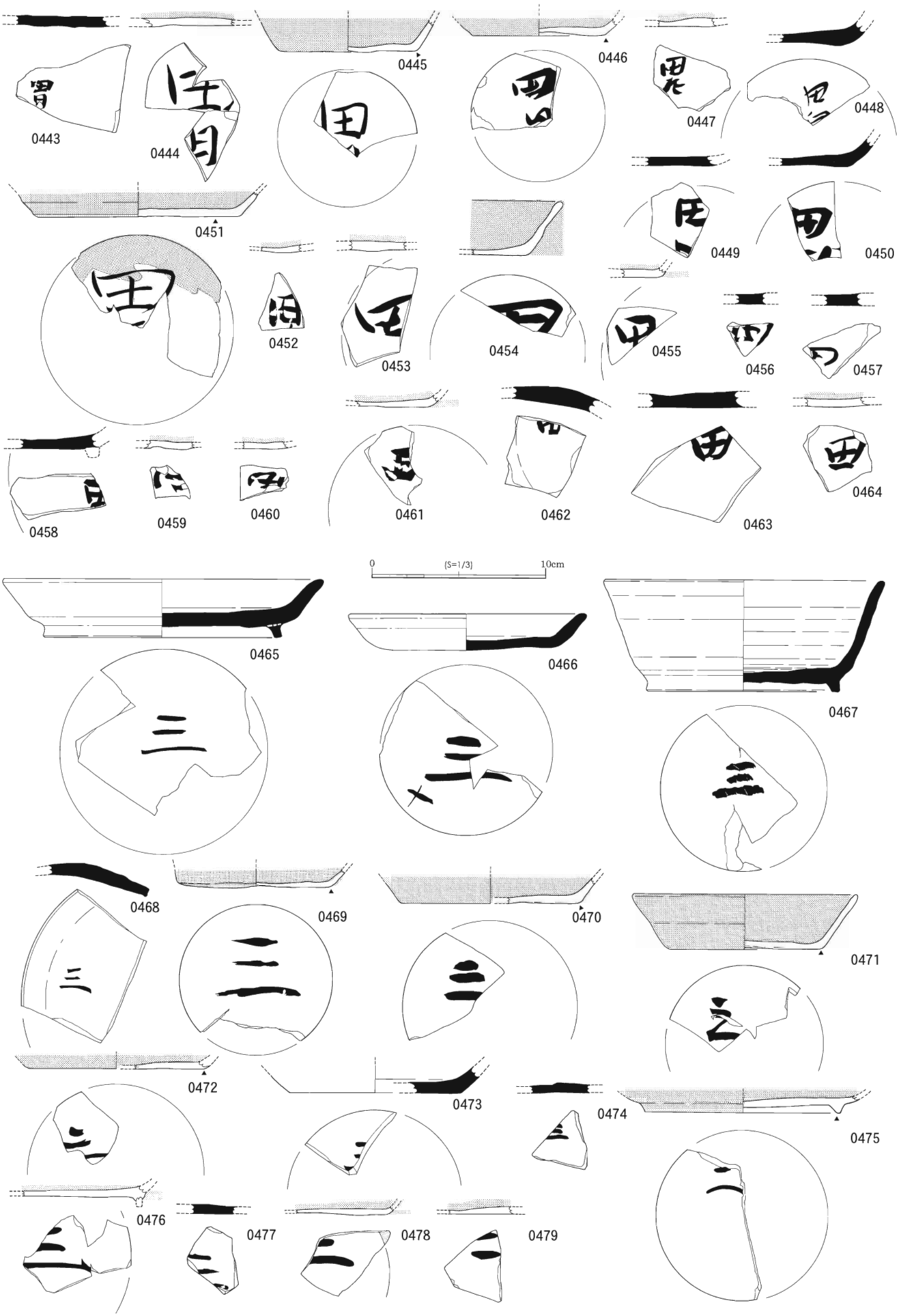
第33図　墨書土器実測図17　Ⅰ区「秋永」



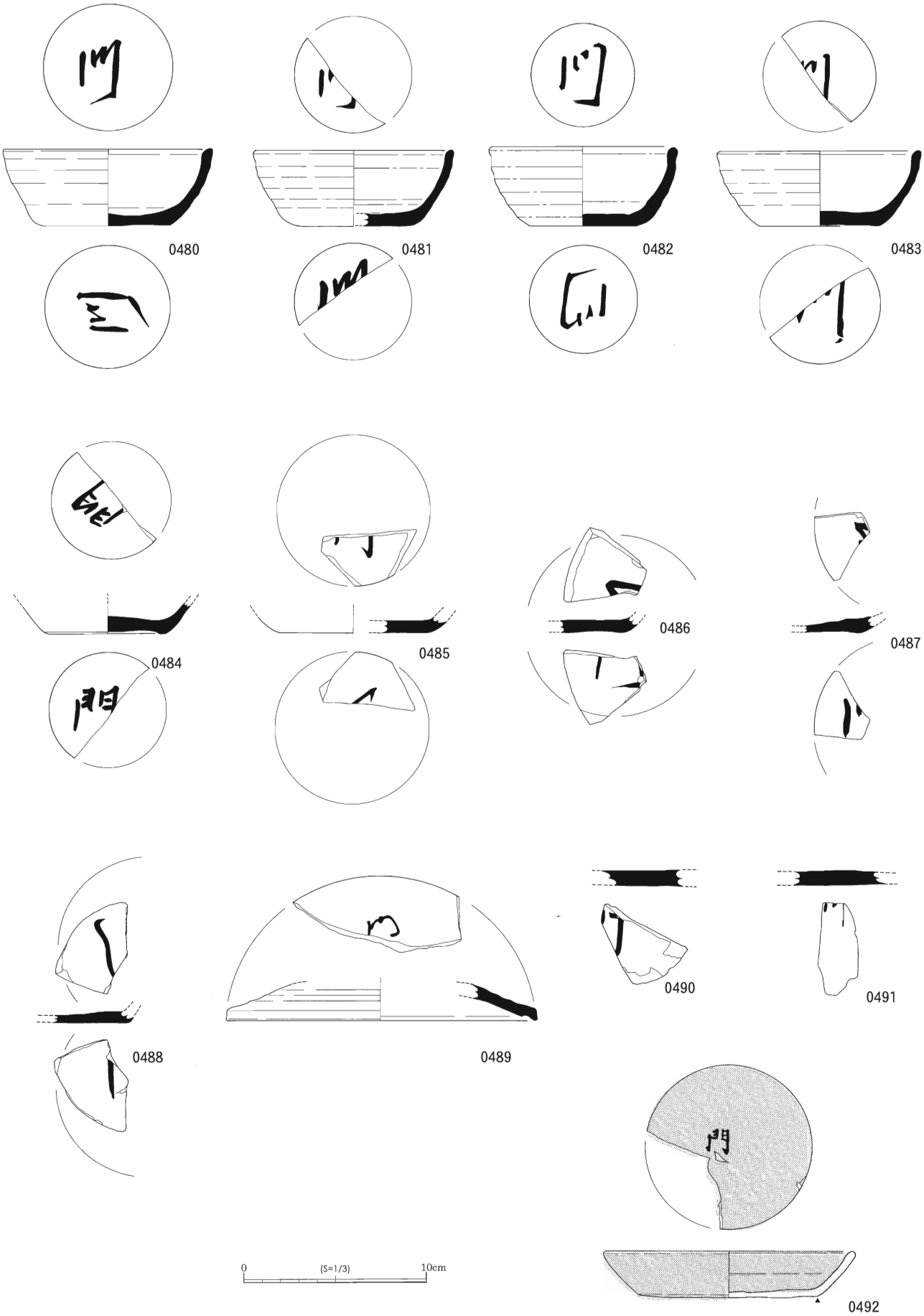
第34図　墨書土器実測図18　Ⅰ区「廣方」



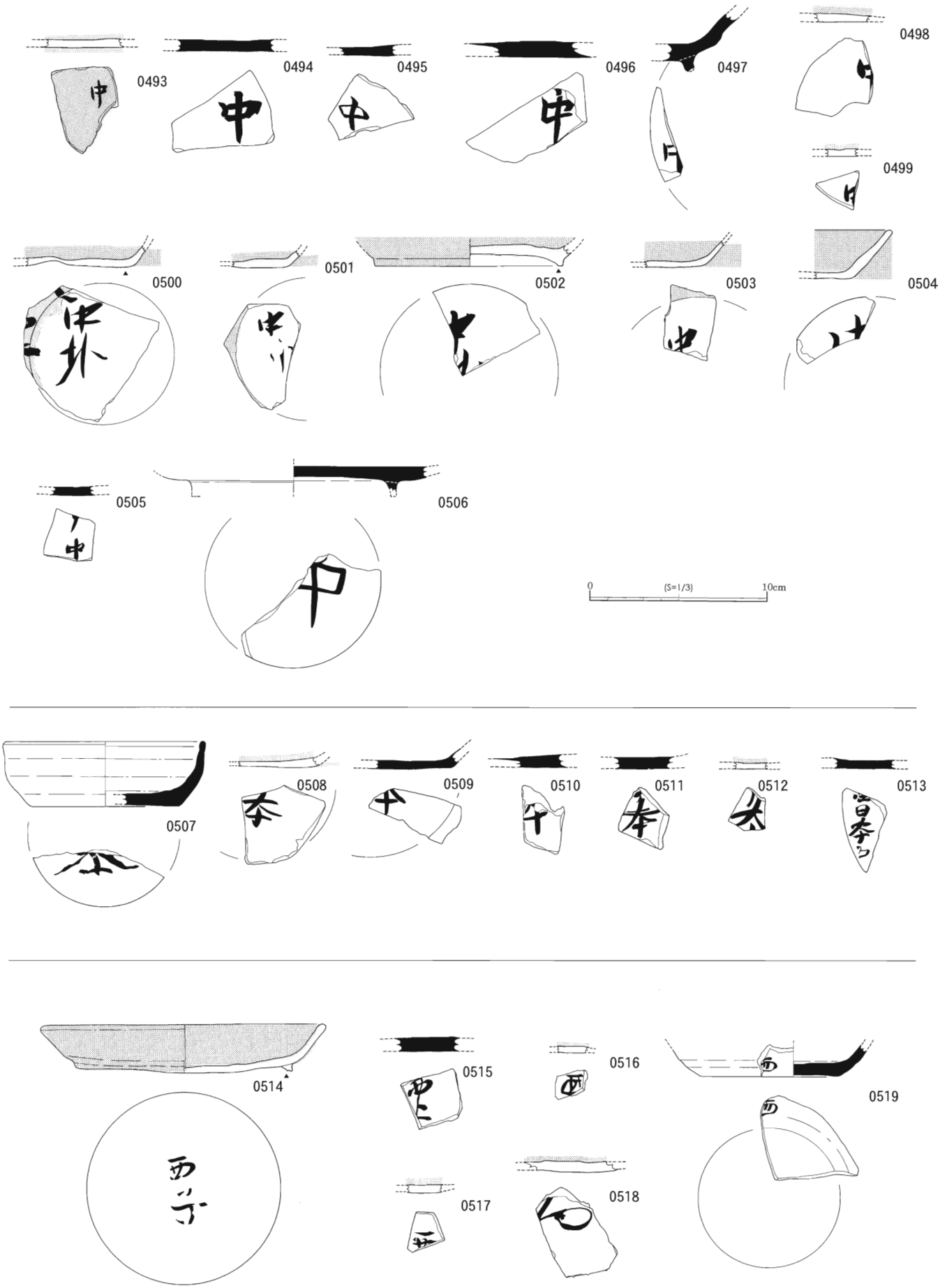
第35図　墨書土器実測図19　Ⅰ区「美社」・「美」



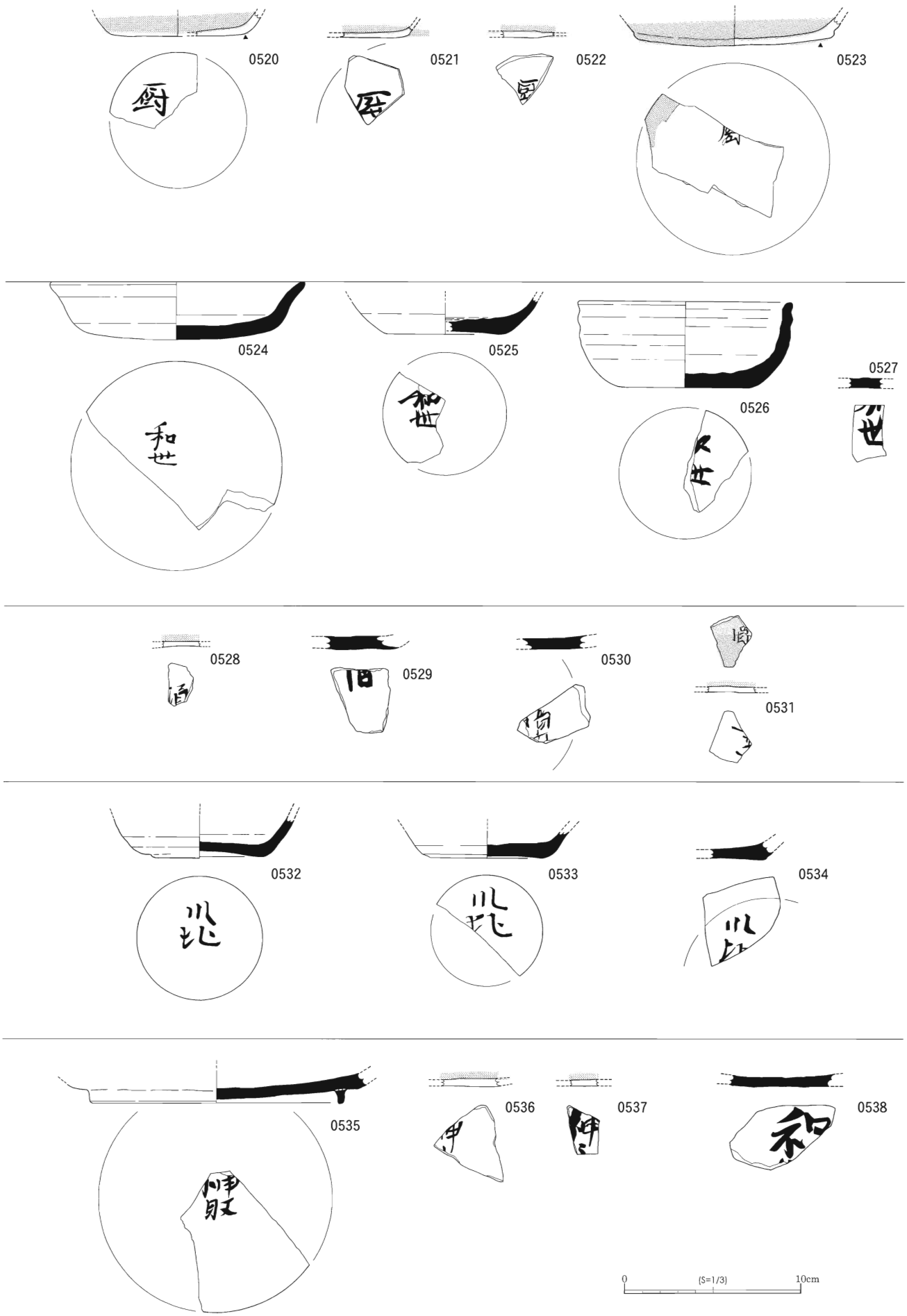
第36図　墨書土器実測図20　Ⅰ区「田〇」・「三」



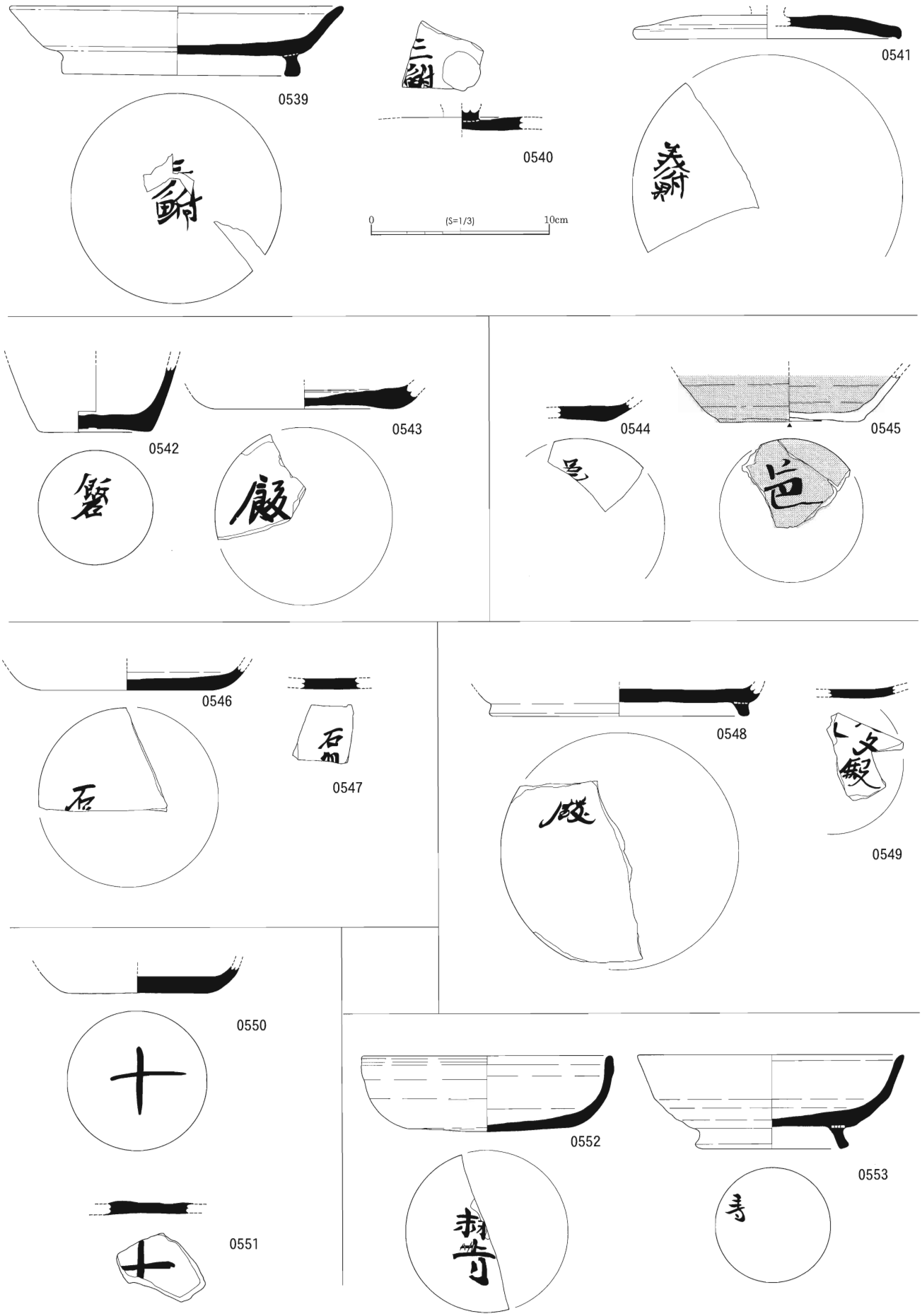
第37図　墨書土器実測図21　Ⅰ区「門」



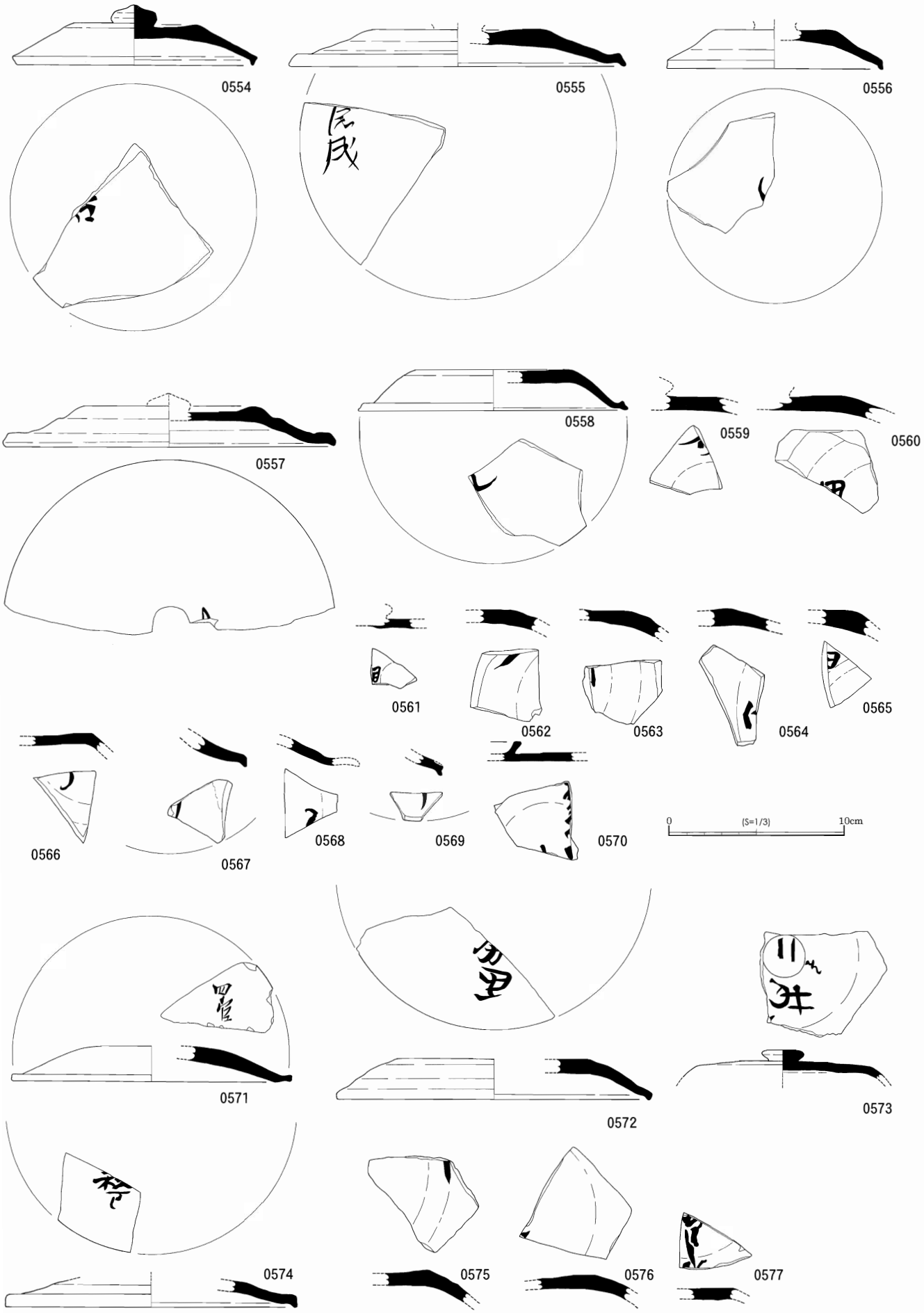
第38図　墨書土器実測図22　Ⅰ区「中」「中北」・「〇本」・「西〇」



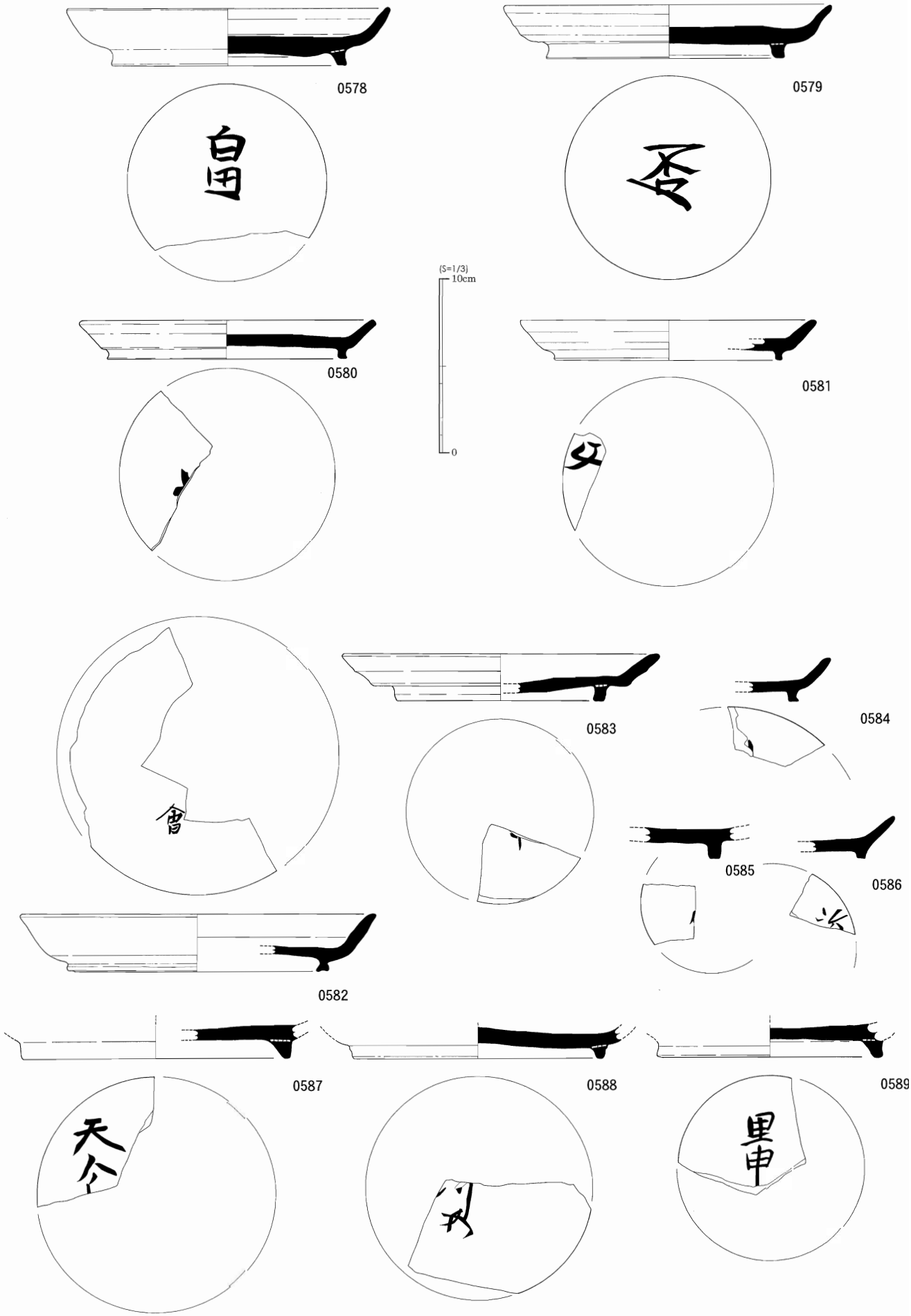
第39図　墨書土器実測図23　Ⅰ区「厨」・「和世」・「酒」・「川北」・「神○」「祝」



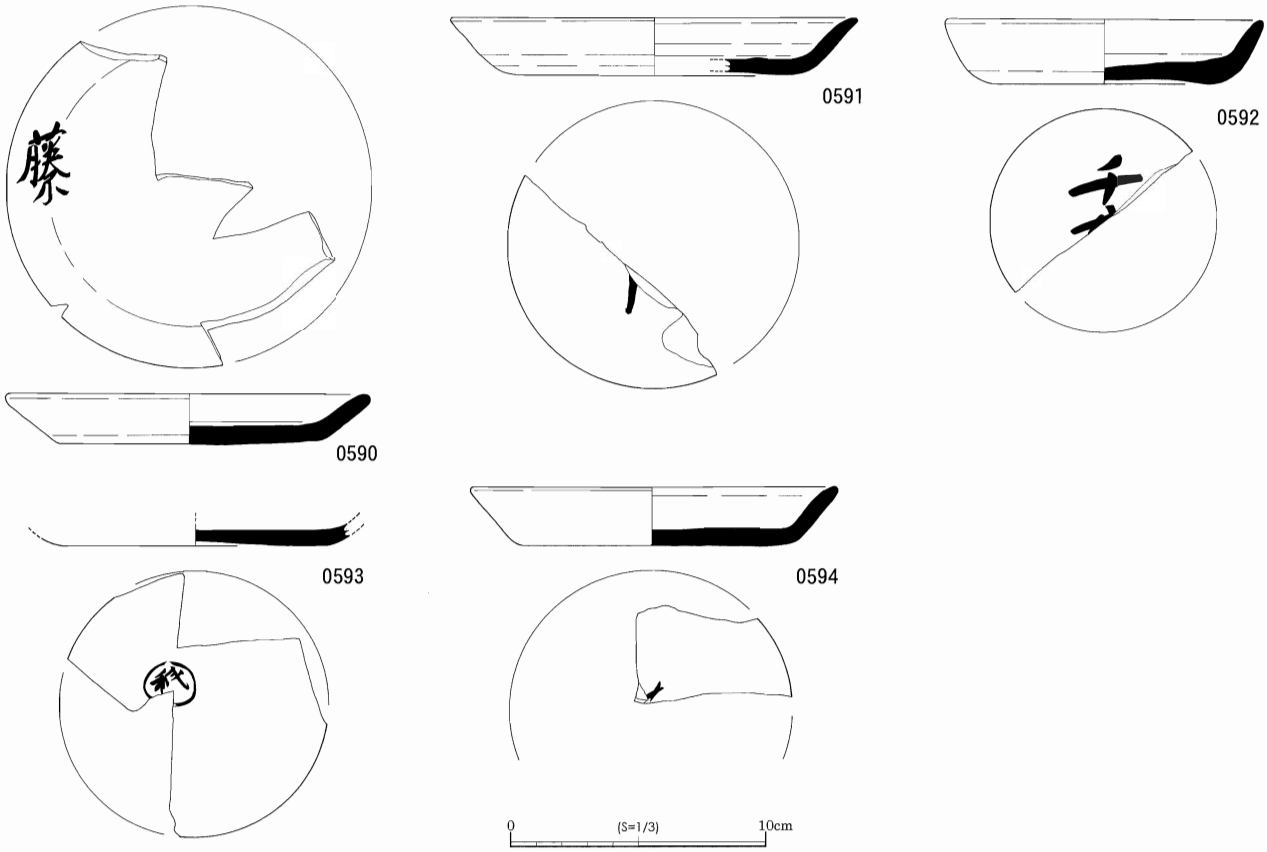
第40図　墨書土器実測図24　Ⅰ区「三鮒」・「飯石」・「邑」・「石〇」・「殿」・「十」・「寺」



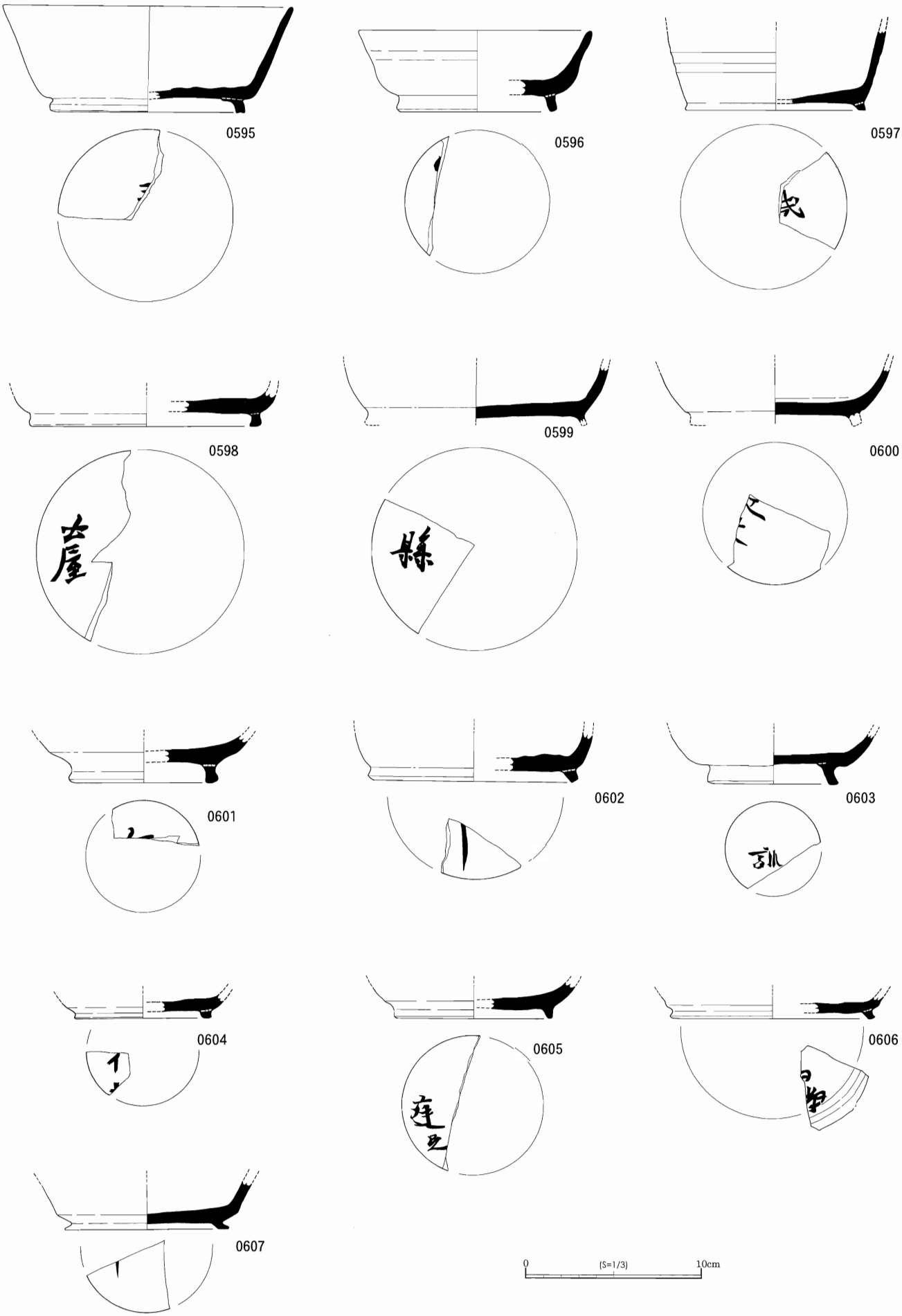
第41図　墨書土器実測図25　Ⅰ区その他／須恵器蓋



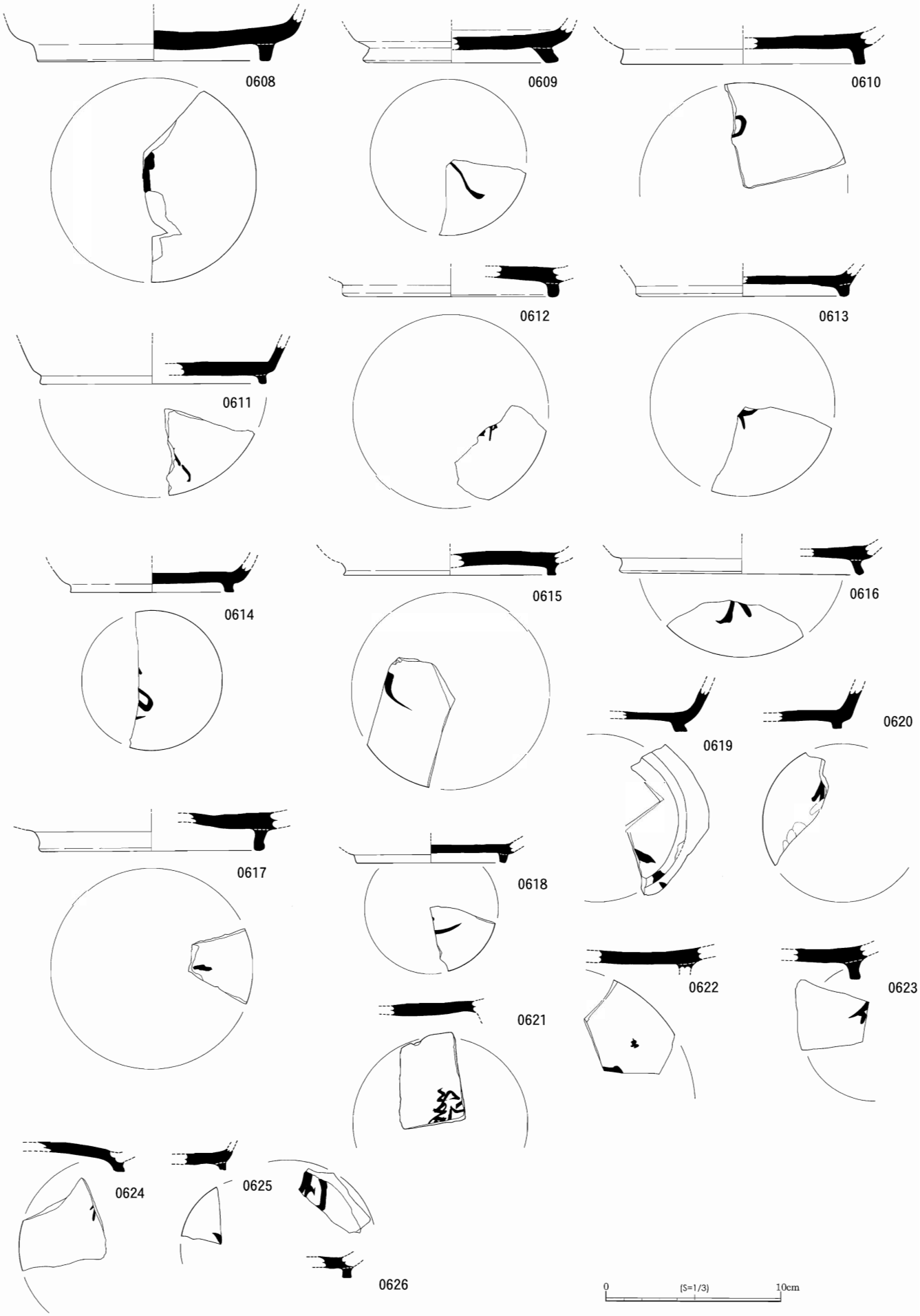
第42図　墨書土器実測図26　Ⅰ区その他／須恵器皿（高台付）



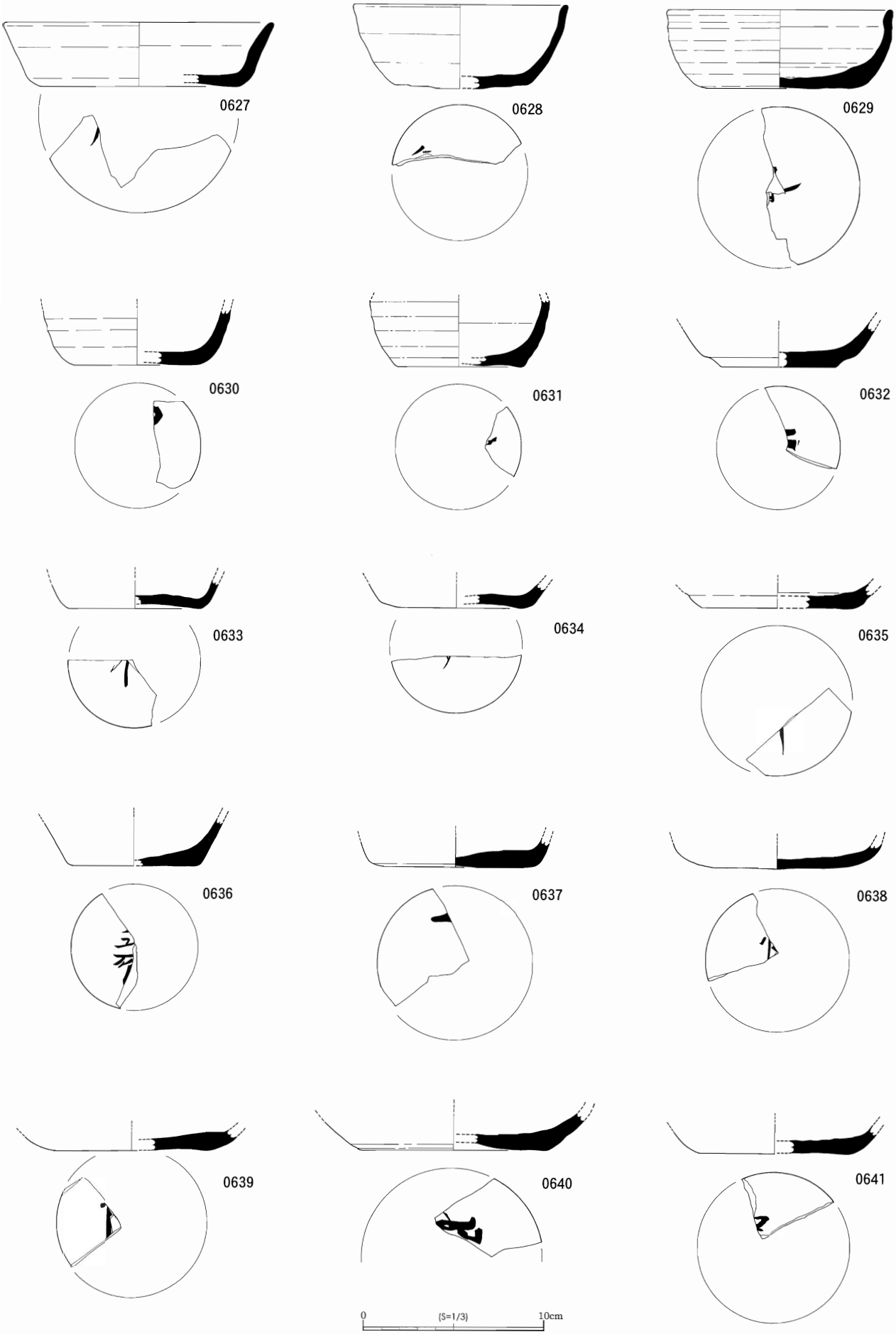
第43図　墨書土器実測図27　Ⅰ区その他／須恵器皿



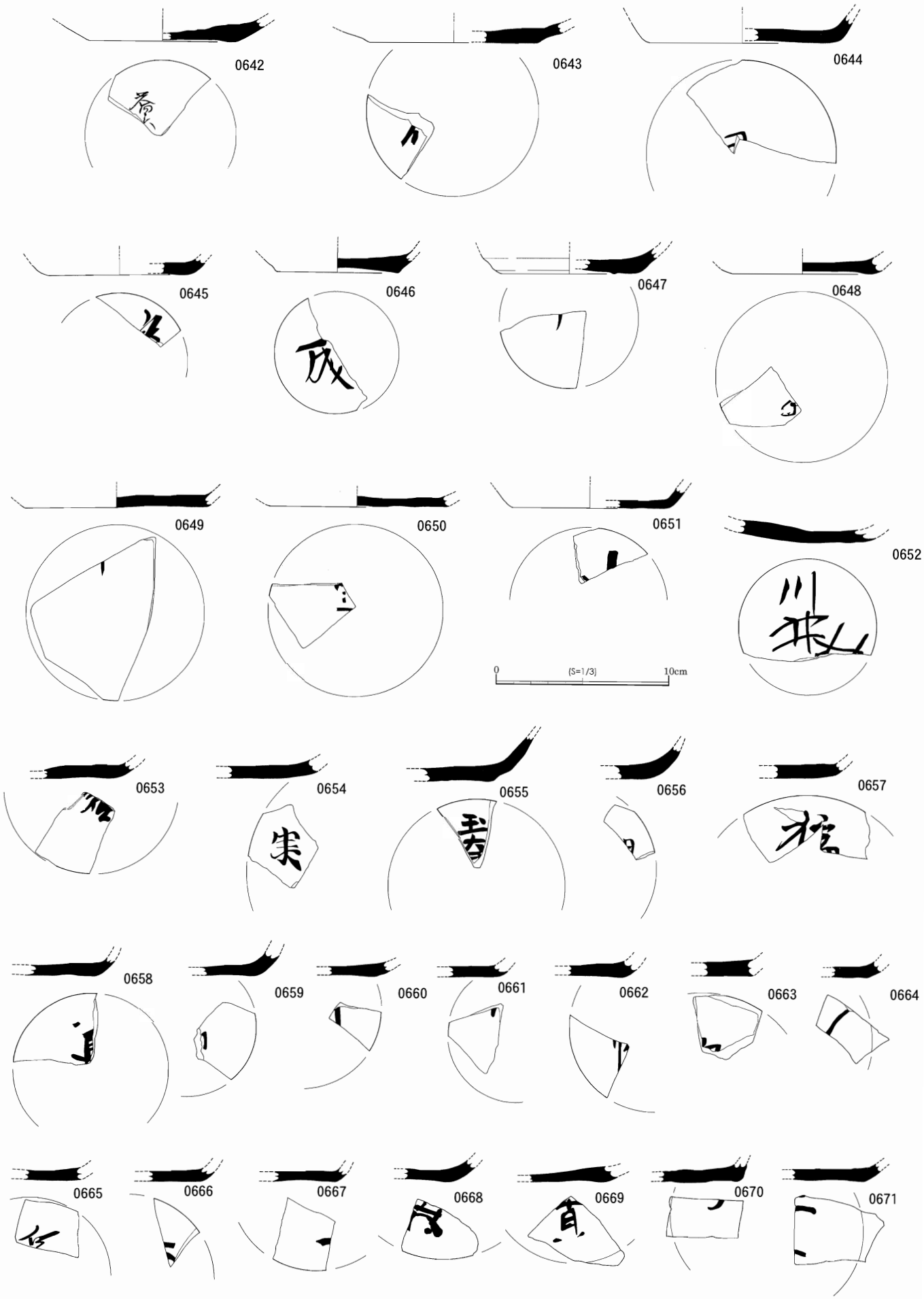
第44図　墨書土器実測図28　Ⅰ区その他／須恵器坏（高台付）



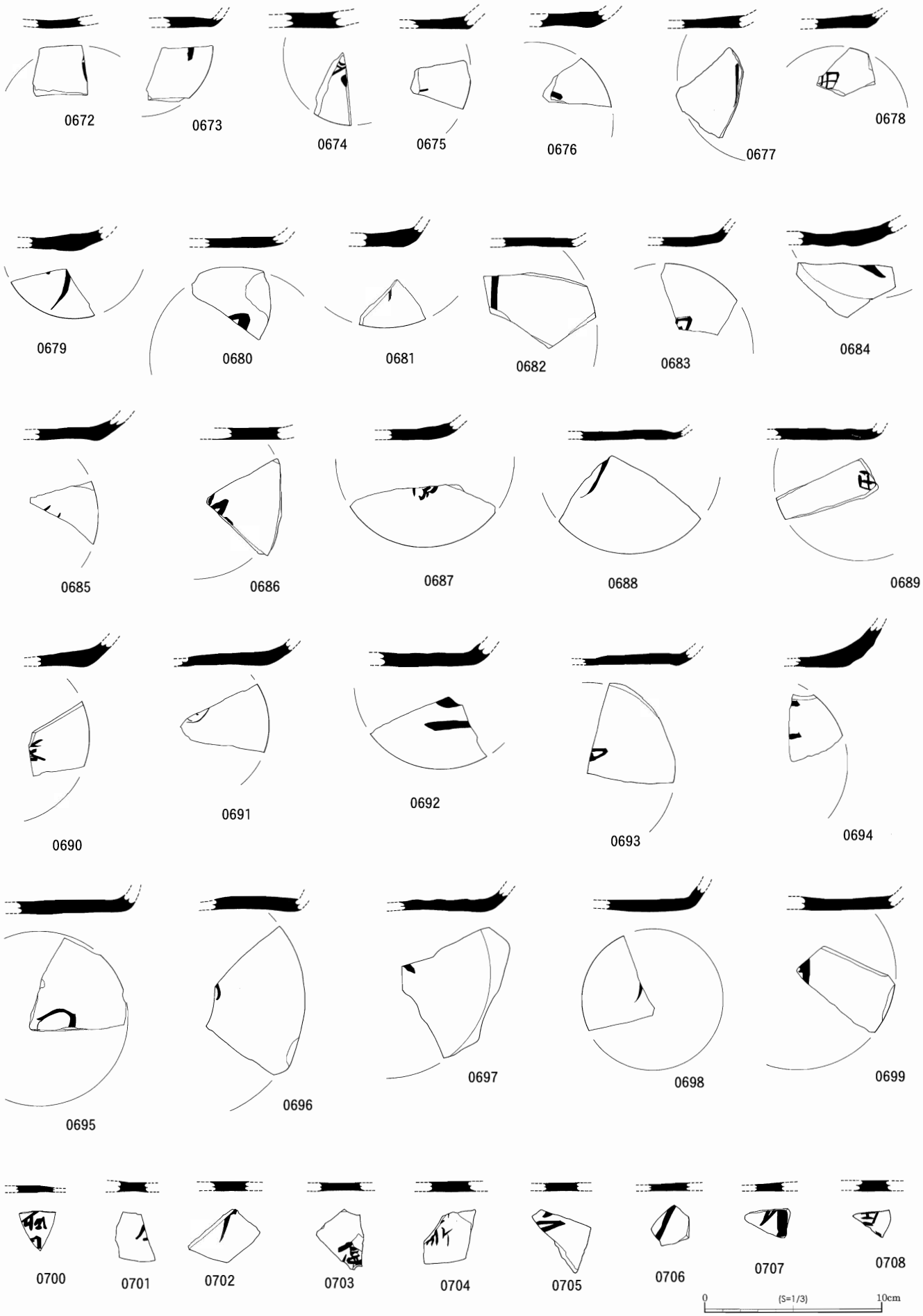
第45図　墨書土器実測図29　Ⅰ区その他／須恵器坏・皿（高台付）



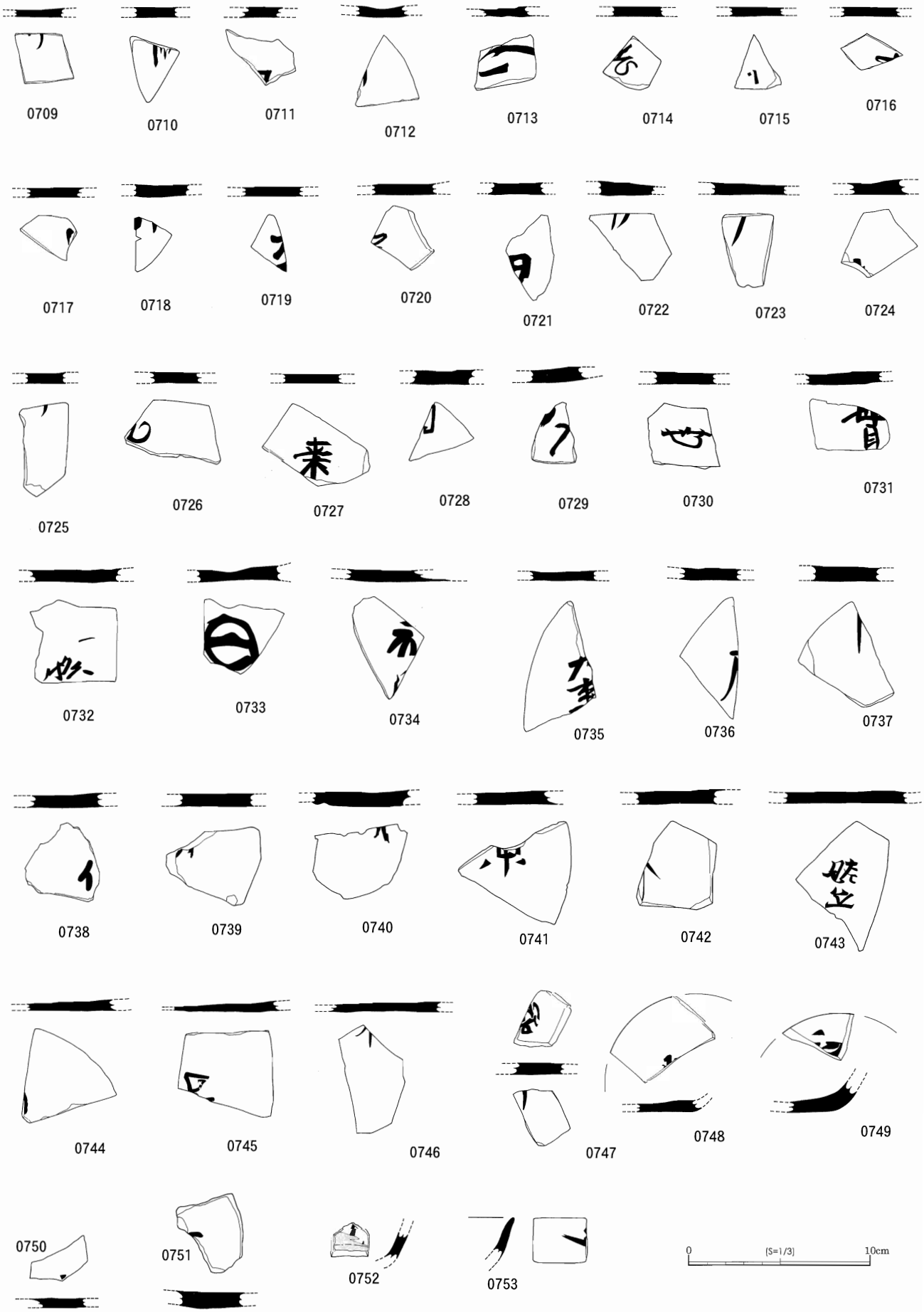
第46図　墨書土器実測図30　Ⅰ区その他／須恵器坏



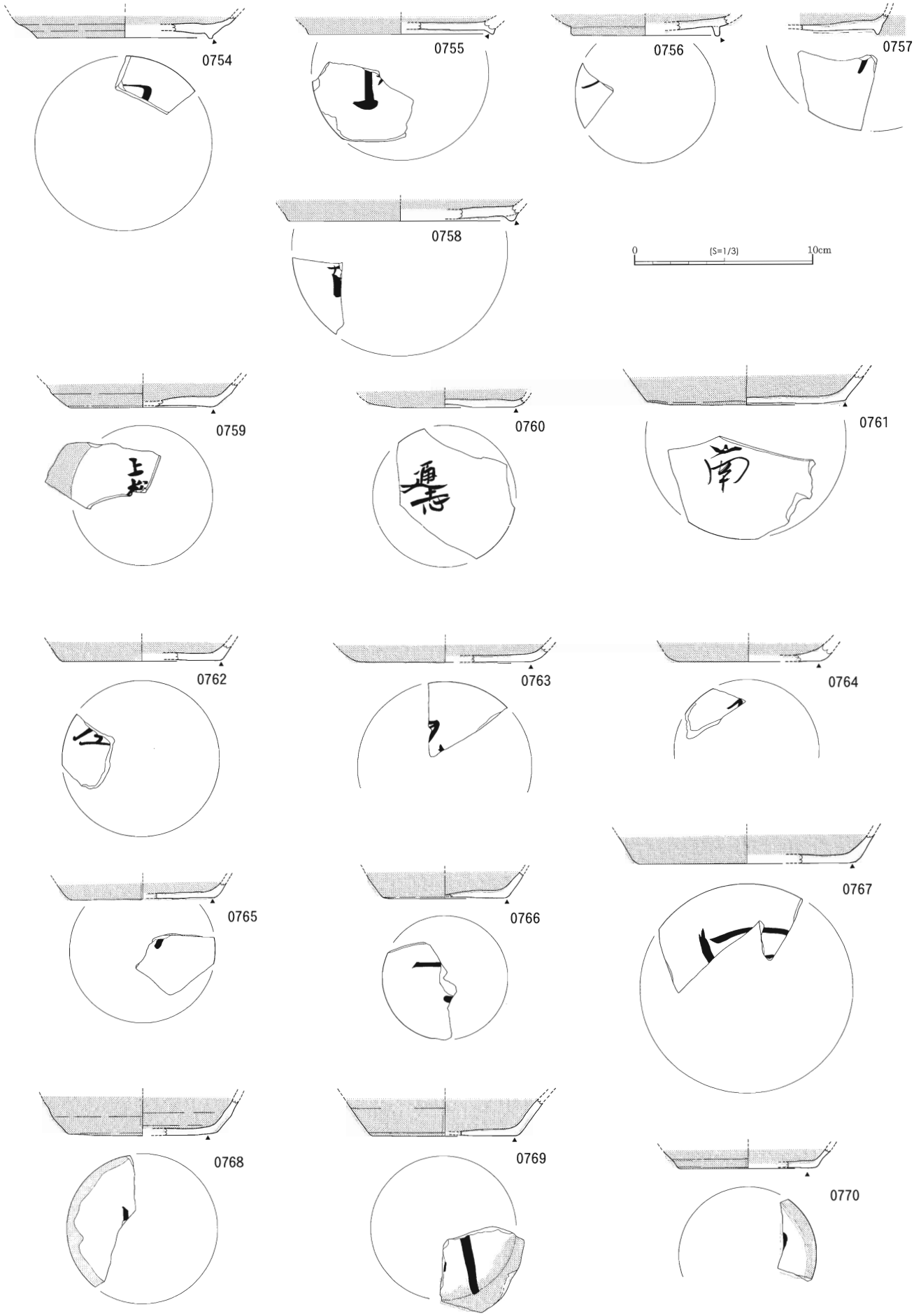
第47図　墨書土器実測図31　Ⅰ区その他／須恵器坏



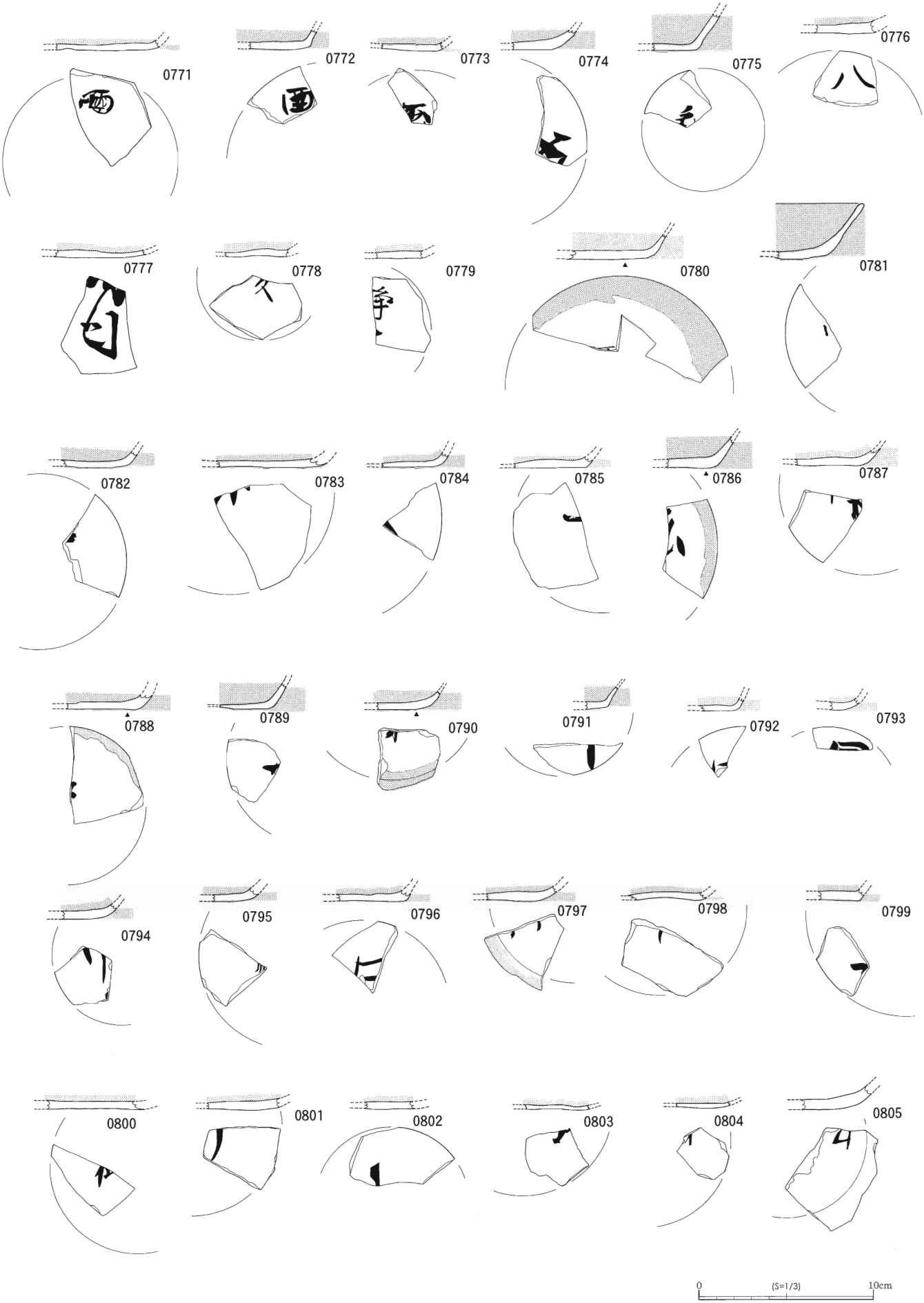
第48図　墨書土器実測図32　Ⅰ区その他／須恵器坏・皿



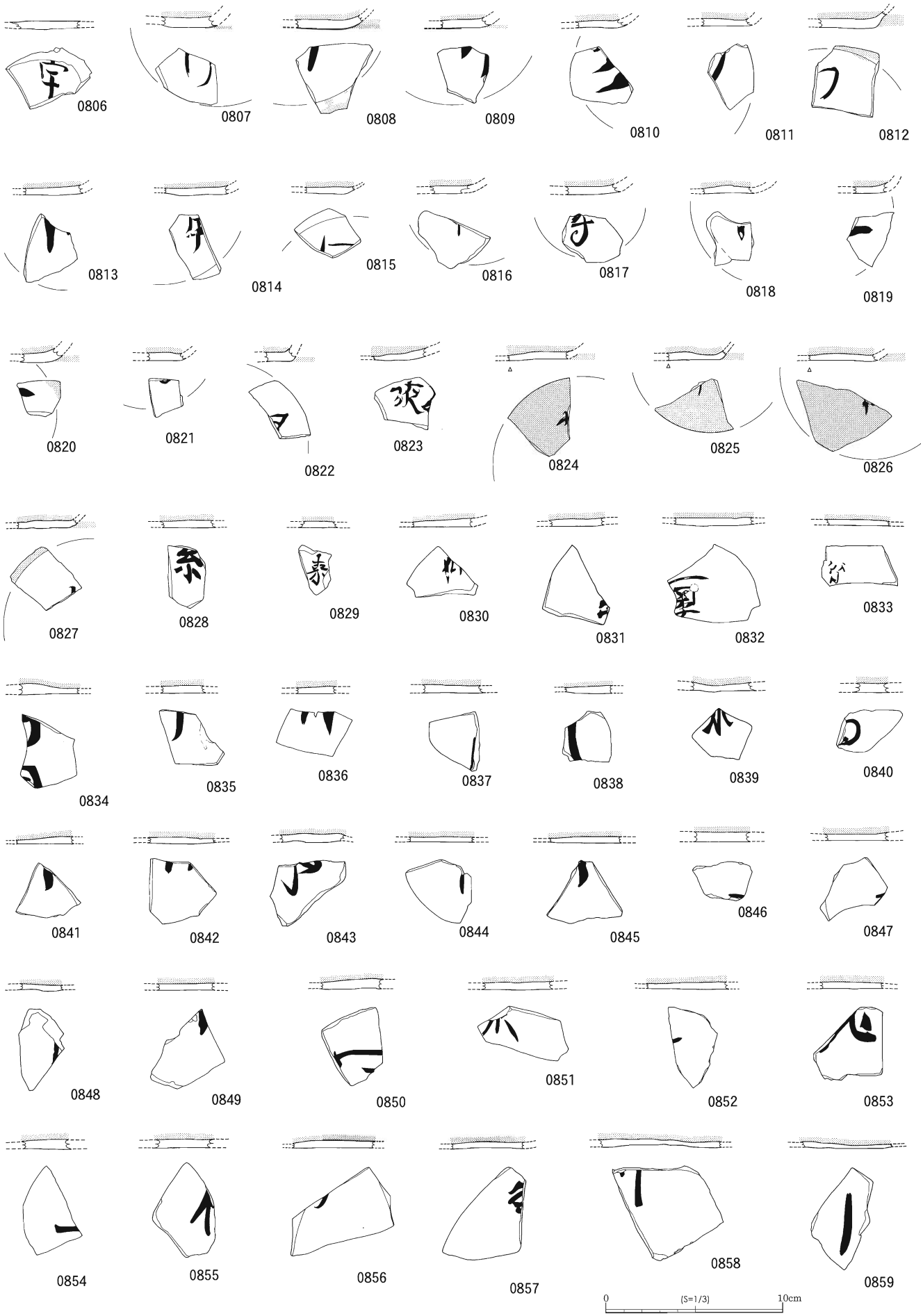
第49図　墨書土器実測図33　Ⅰ区その他／須恵器坏・皿



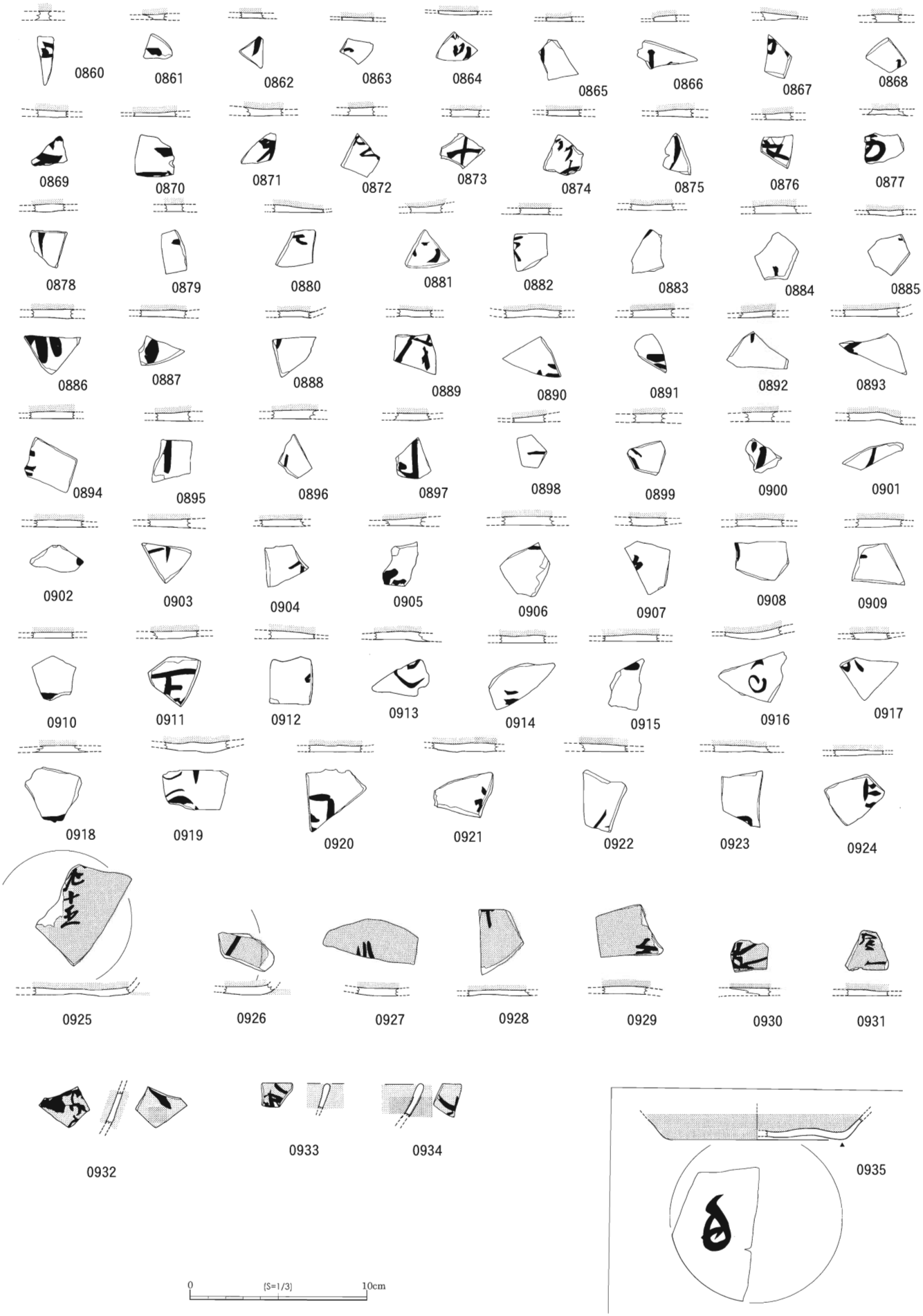
第50図　墨書土器実測図34　Ⅰ区その他／土師器坏・皿



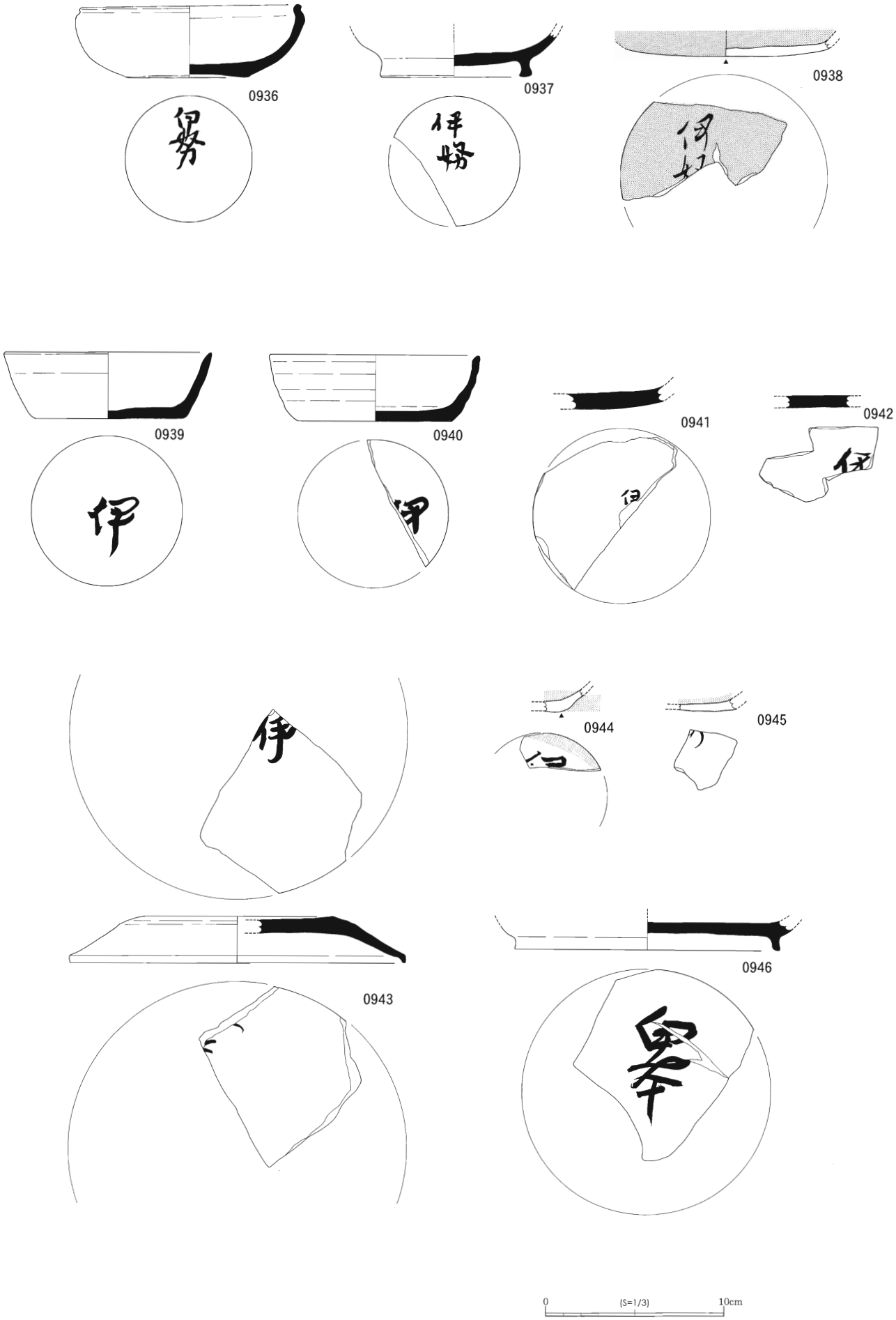
第51図　墨書土器実測図35　Ⅰ区その他／土師器坏・皿



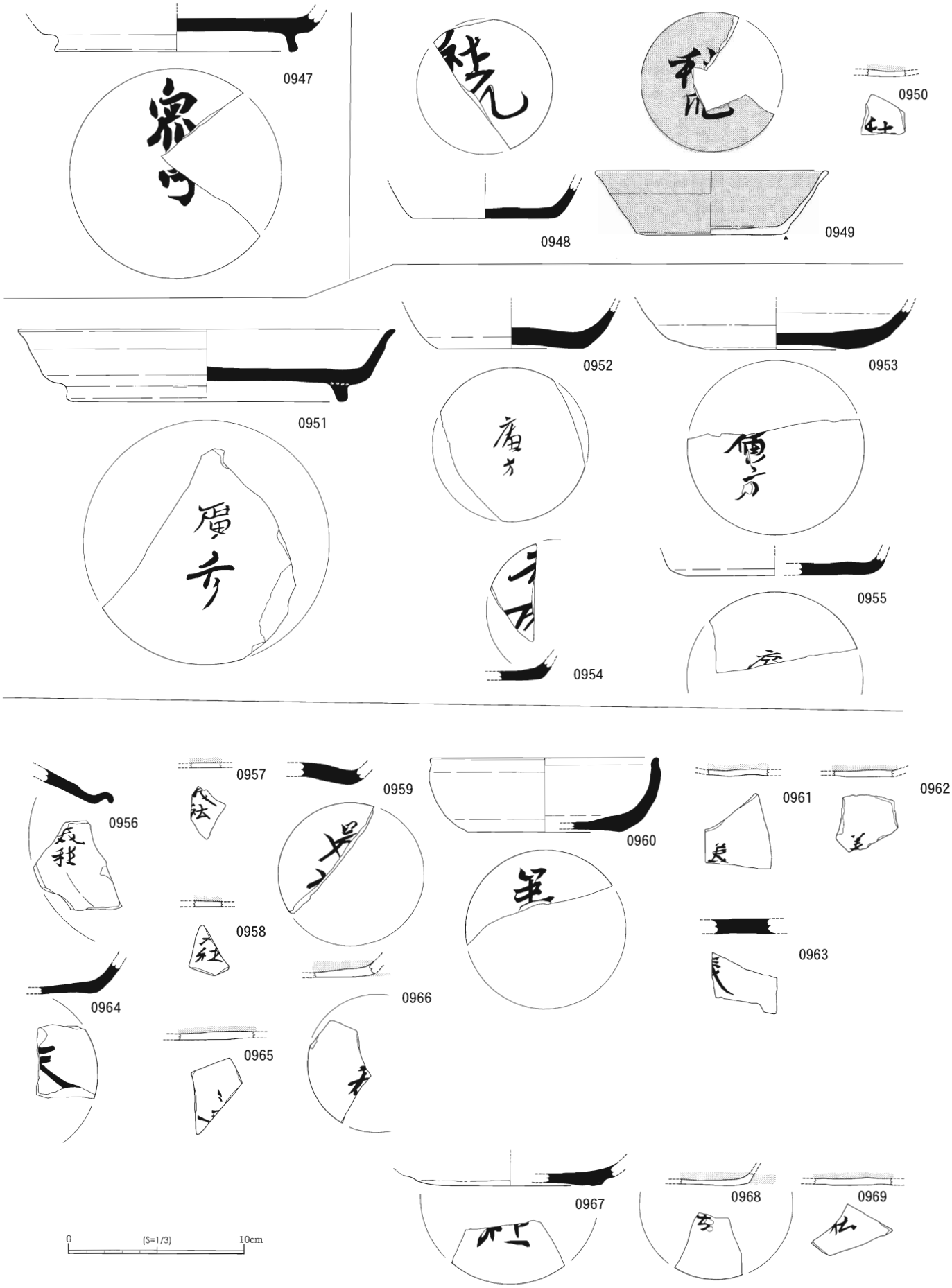
第52図　墨書土器実測図36　Ⅰ区その他／土師器坏・皿



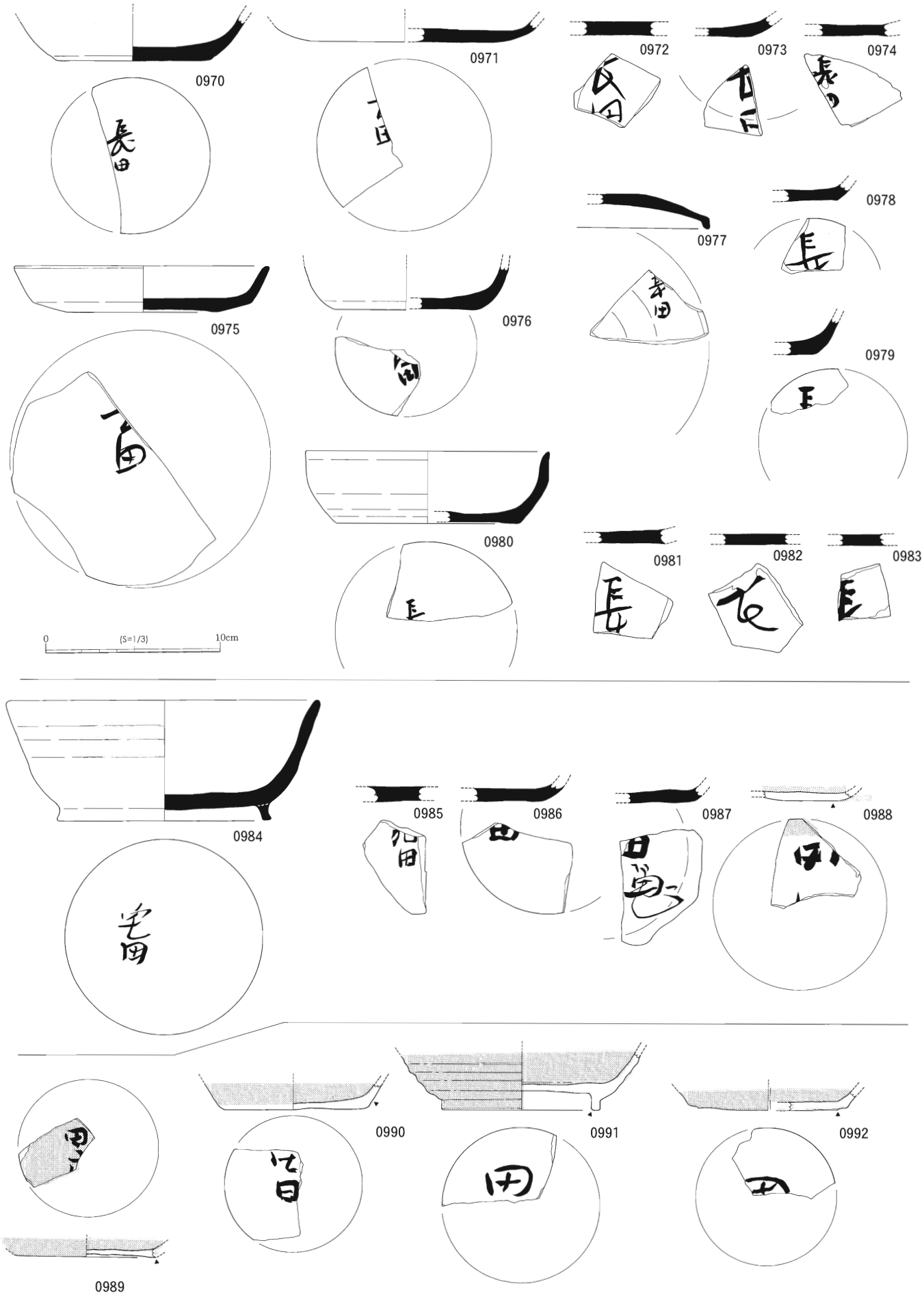
第53図　墨書土器実測図37　Ⅰ区その他／土師器坏・皿



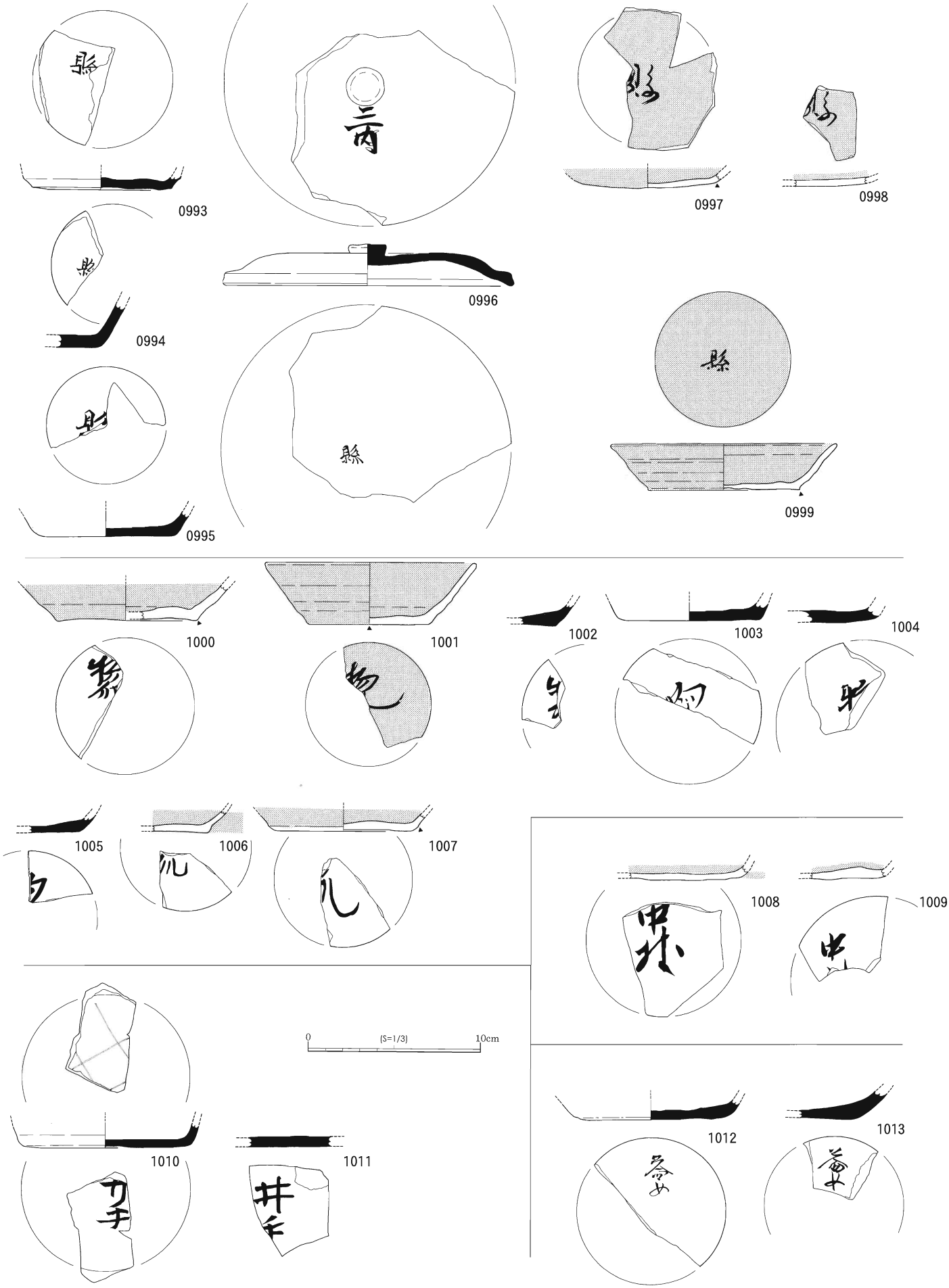
第54図　墨書土器実測図38　Ⅳ区「伊努」「伊」「伊本」



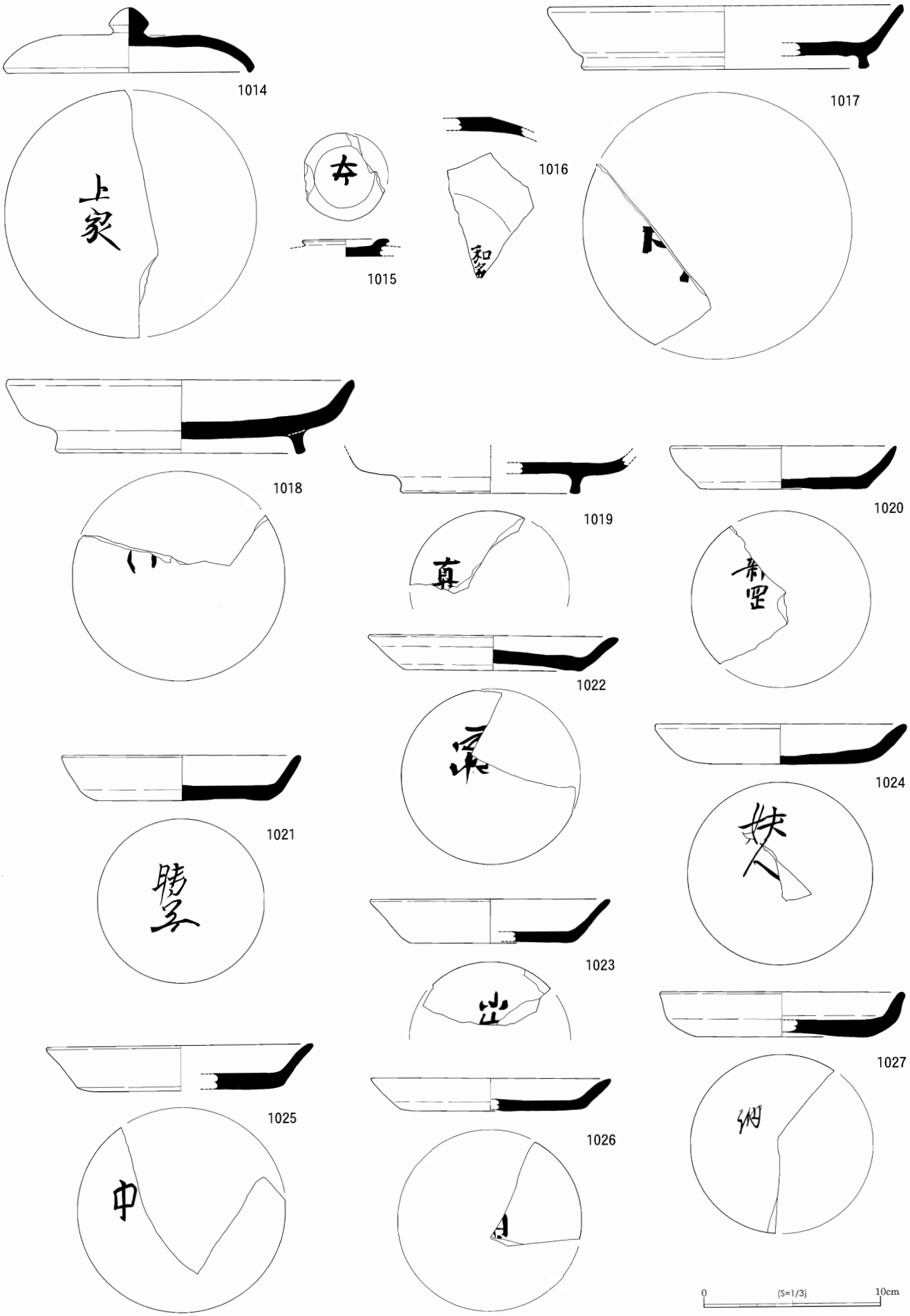
第55図　墨書土器実測図39　Ⅳ区「家永」・「秋永」・「廣方」・「美社」



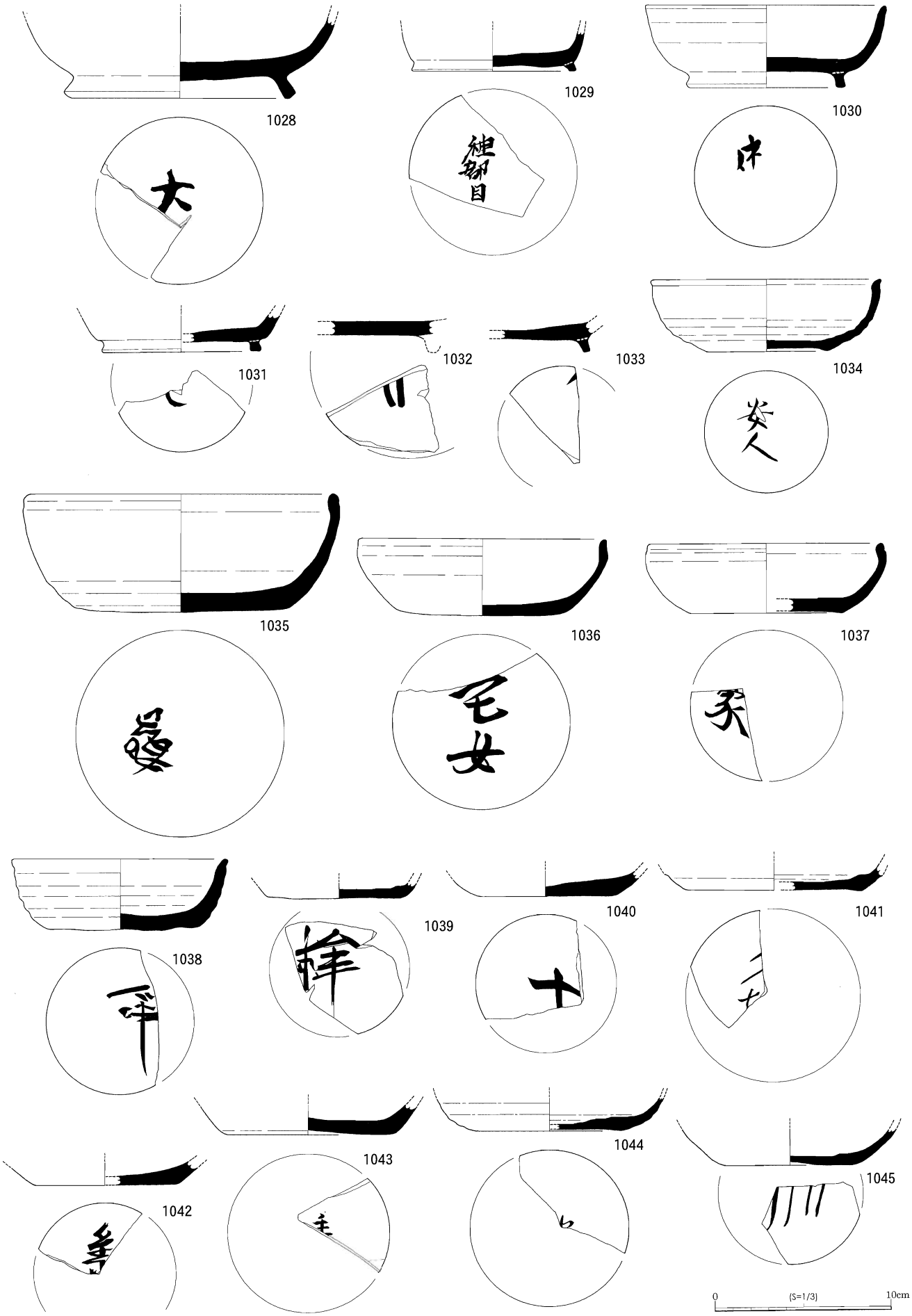
第56図　墨書土器実測図40　Ⅳ区「長田」・「宅田」・「田○」



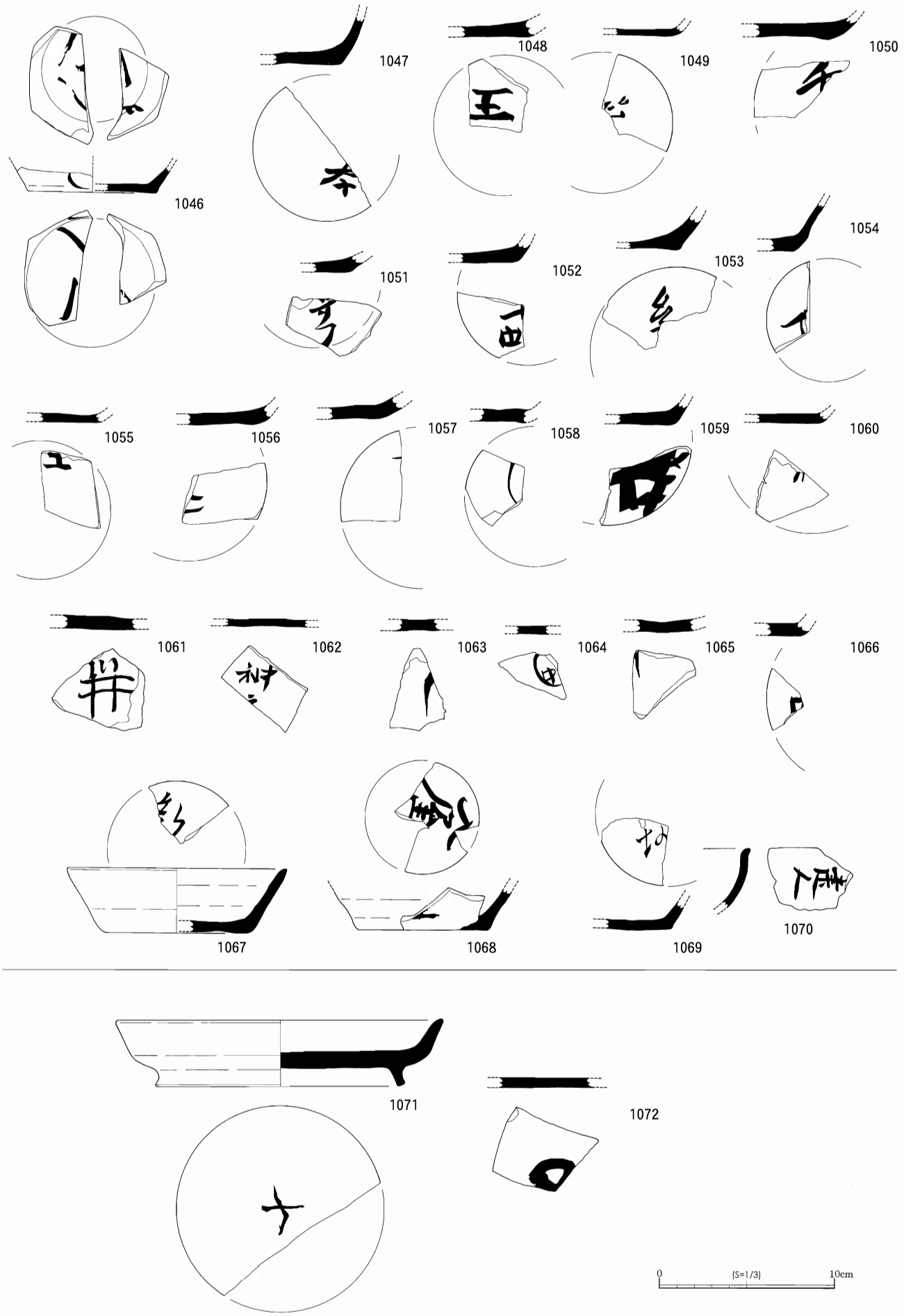
第57図　墨書土器実測図41　Ⅳ区　「縣」・「物爪」・「中北」・「井手」・「益女」



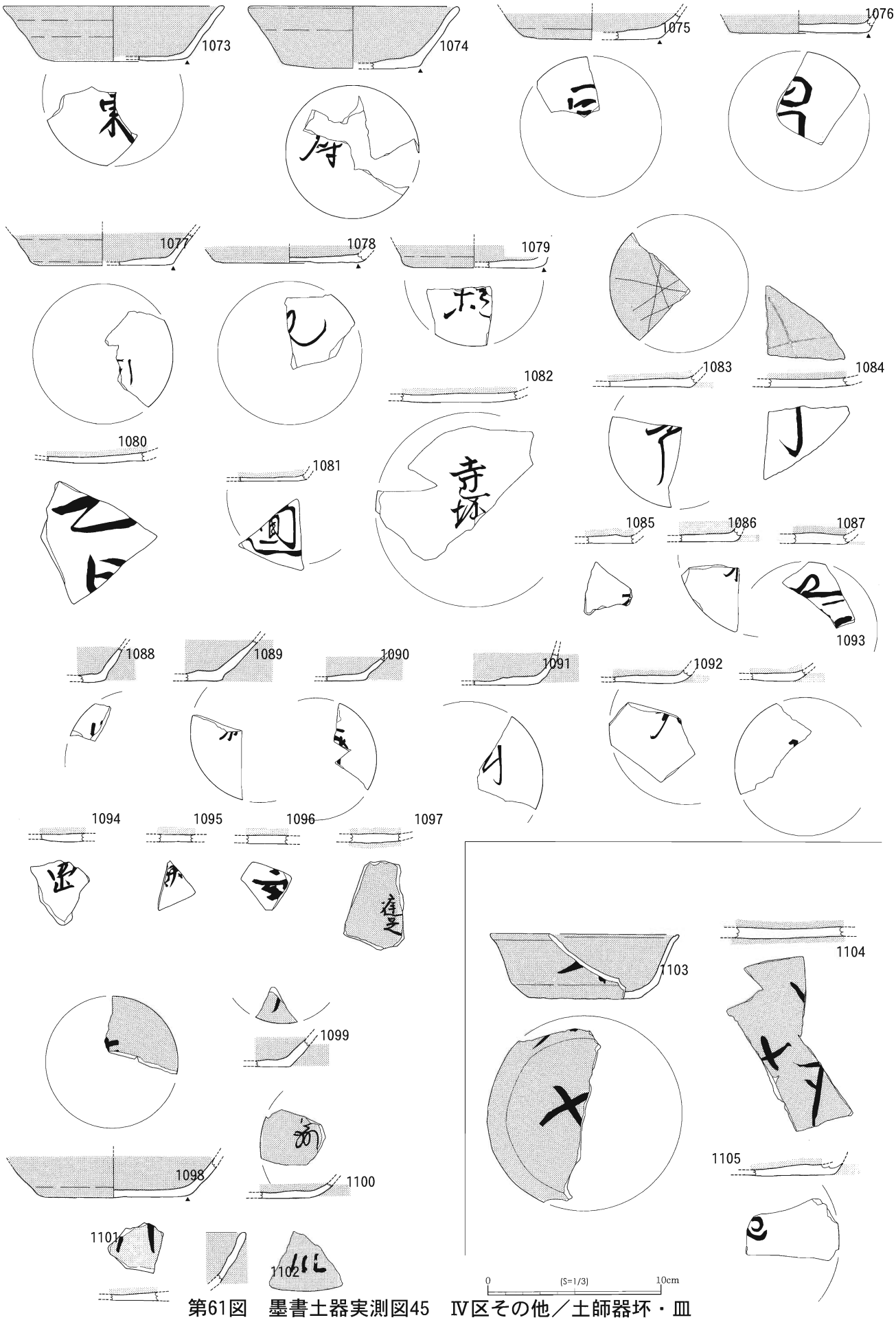
第58図　墨書土器実測図42　Ⅳ区その他／須恵器蓋・皿



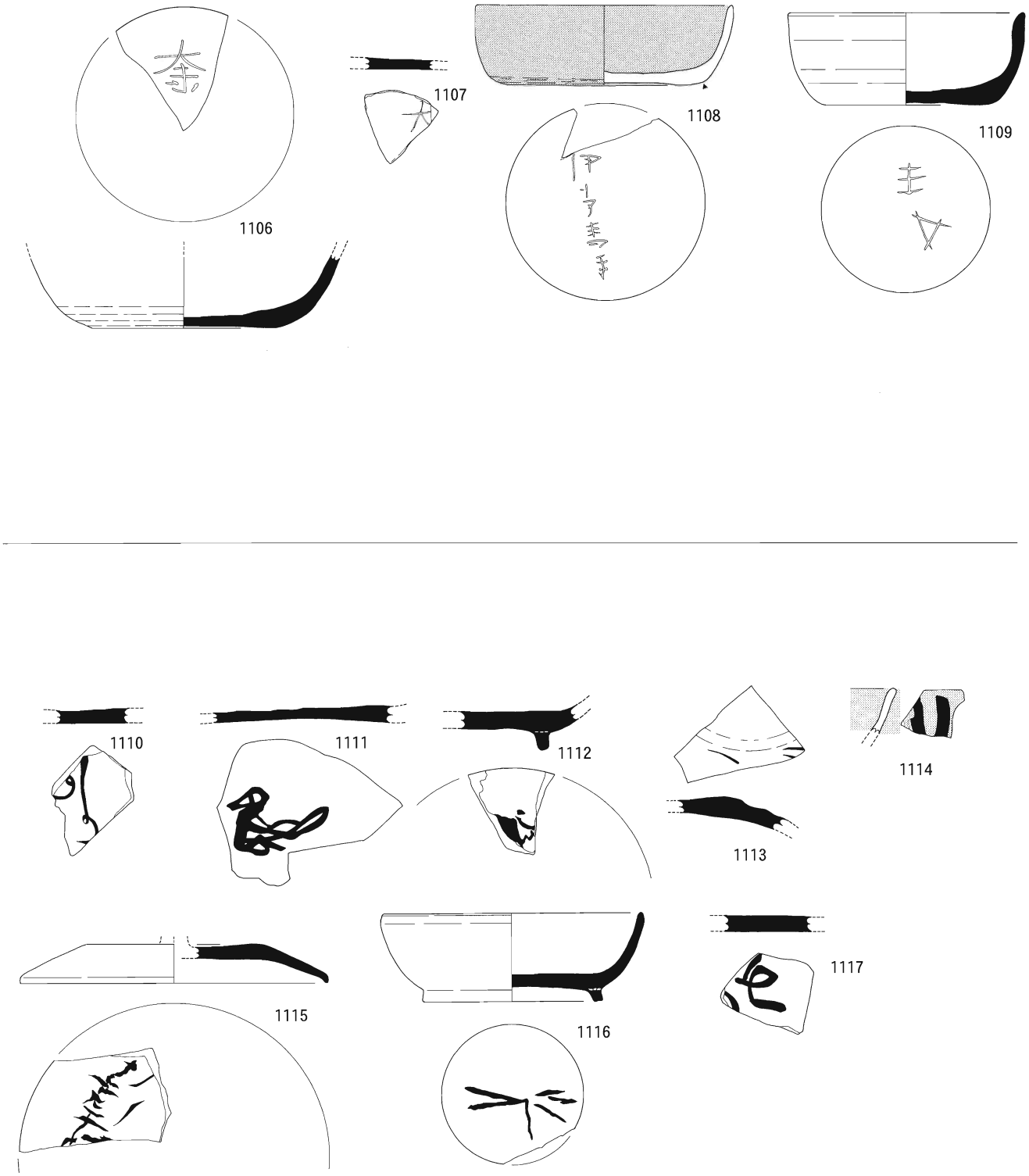
第59図　墨書土器実測図43　Ⅳ区その他／須恵器坏



第60図　墨書土器実測図44　Ⅳ区その他／須恵器坏

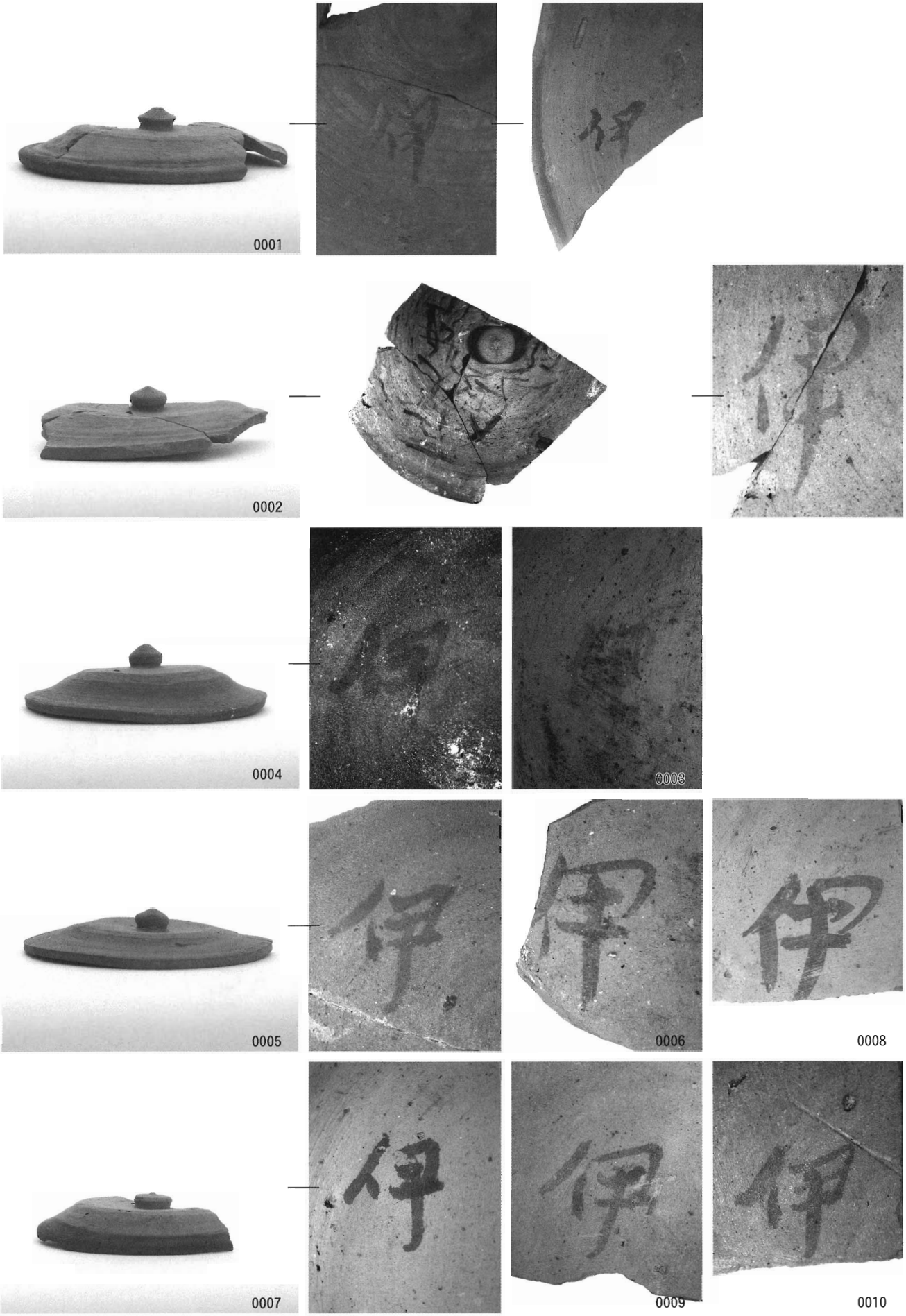


第61図　墨書土器実測図45　Ⅳ区その他／土師器坏・皿



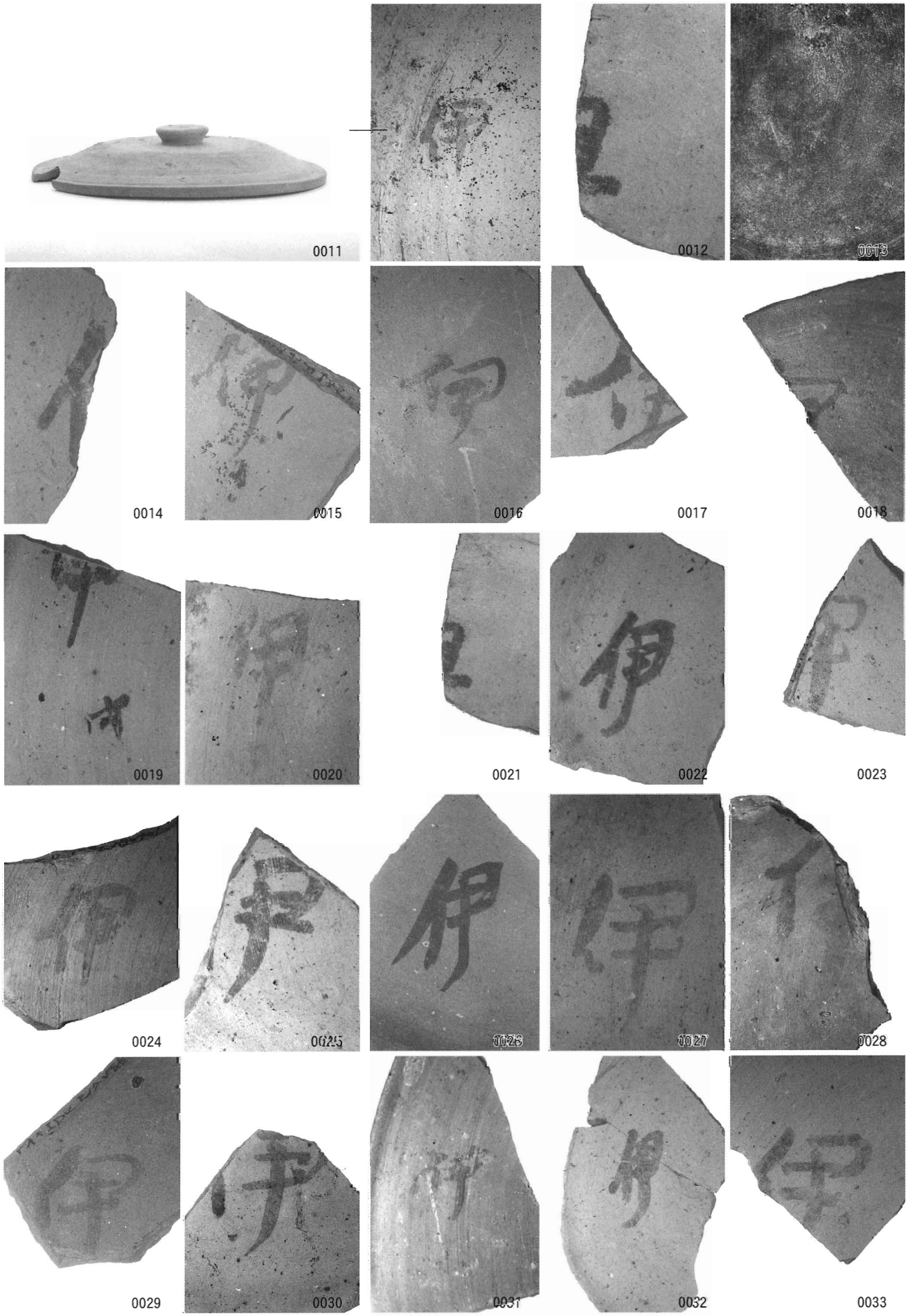
第62図　墨書土器実測図46　ヘラ書き・刻書・筆そろえ

墨書土器　赤外線写真図版 0001～0010



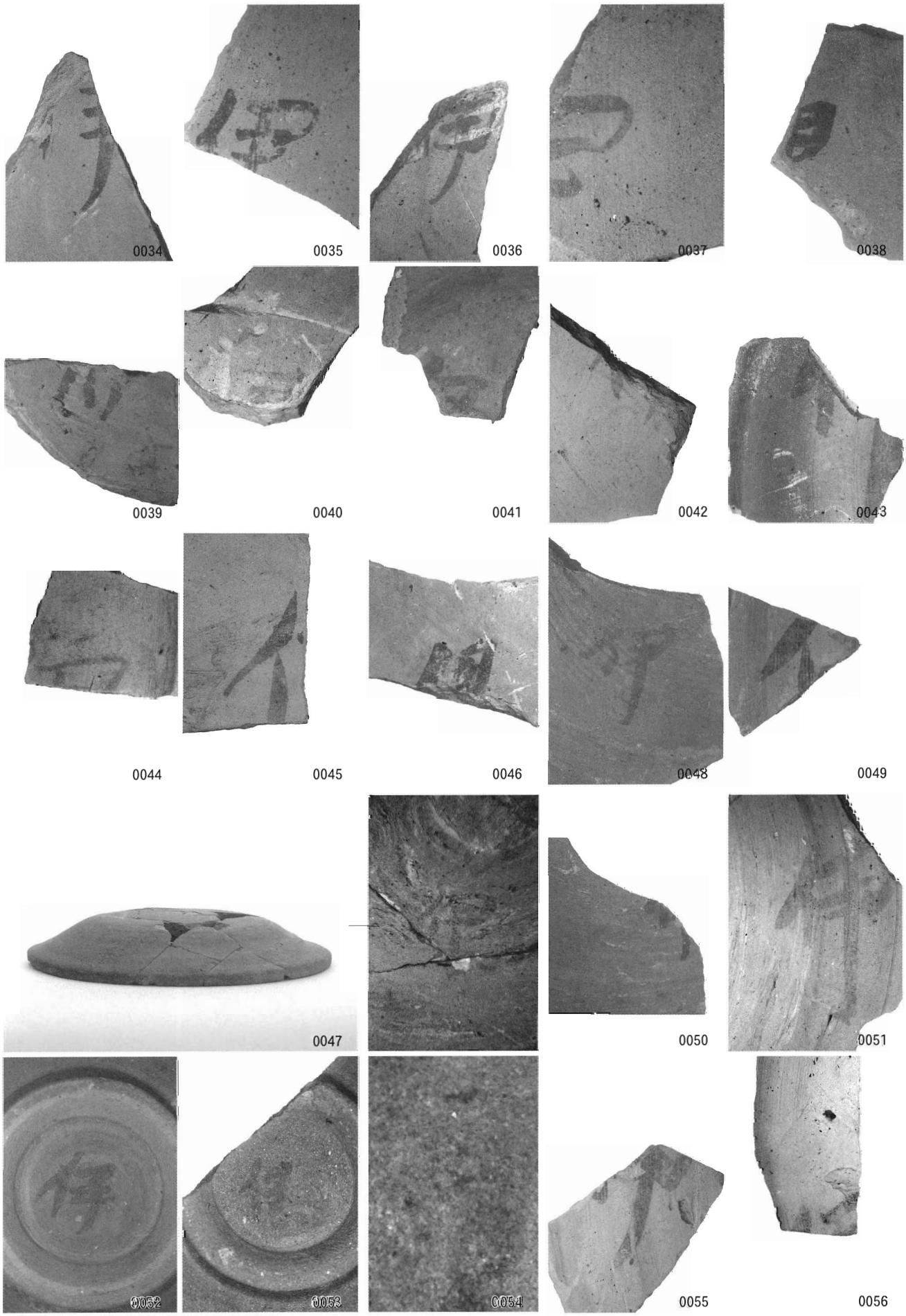
Ⅰ区「伊」

墨書土器　赤外線写真図版0011～0033



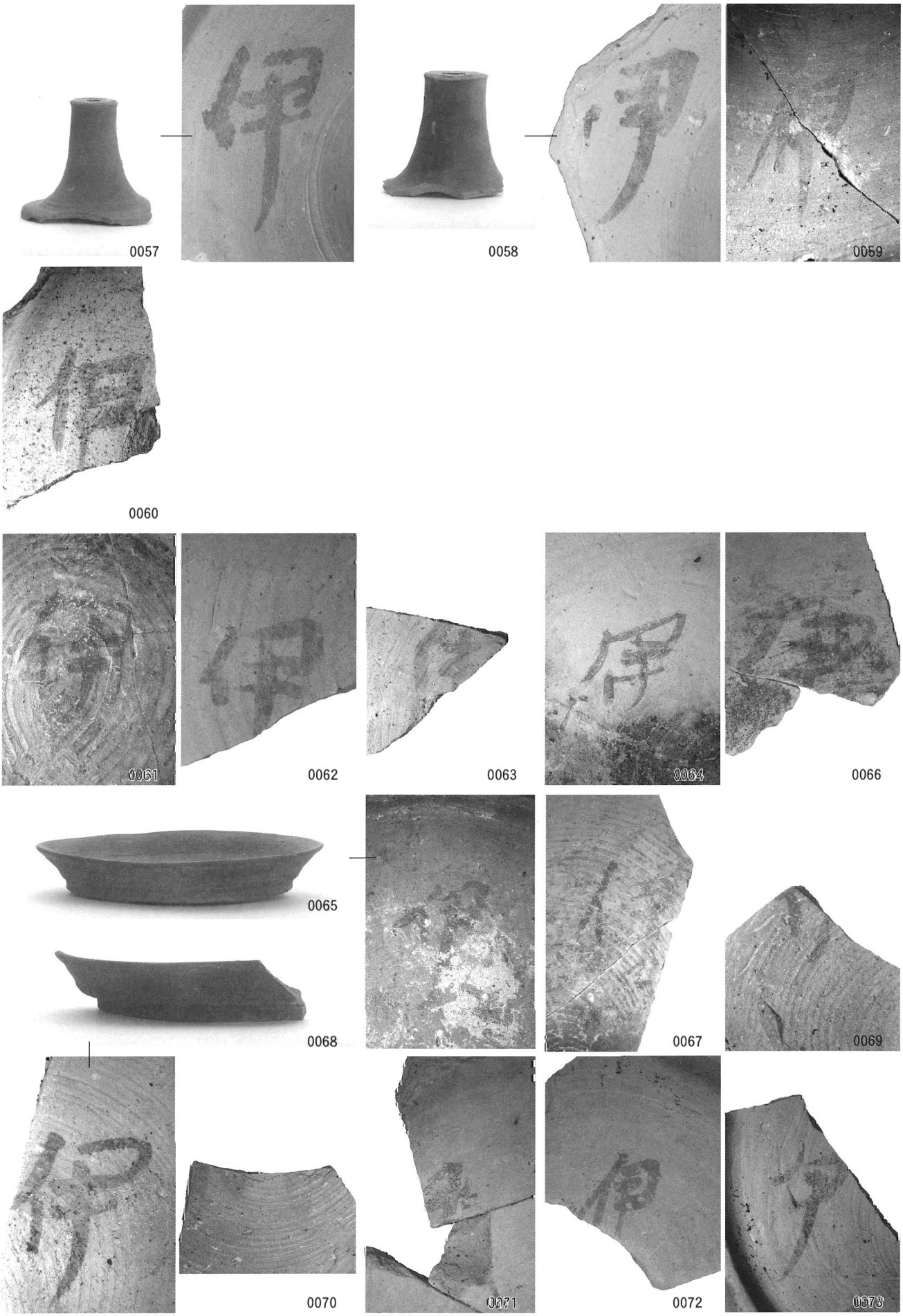
Ⅰ区「伊」

墨書土器　赤外線写真図版 0034～0056



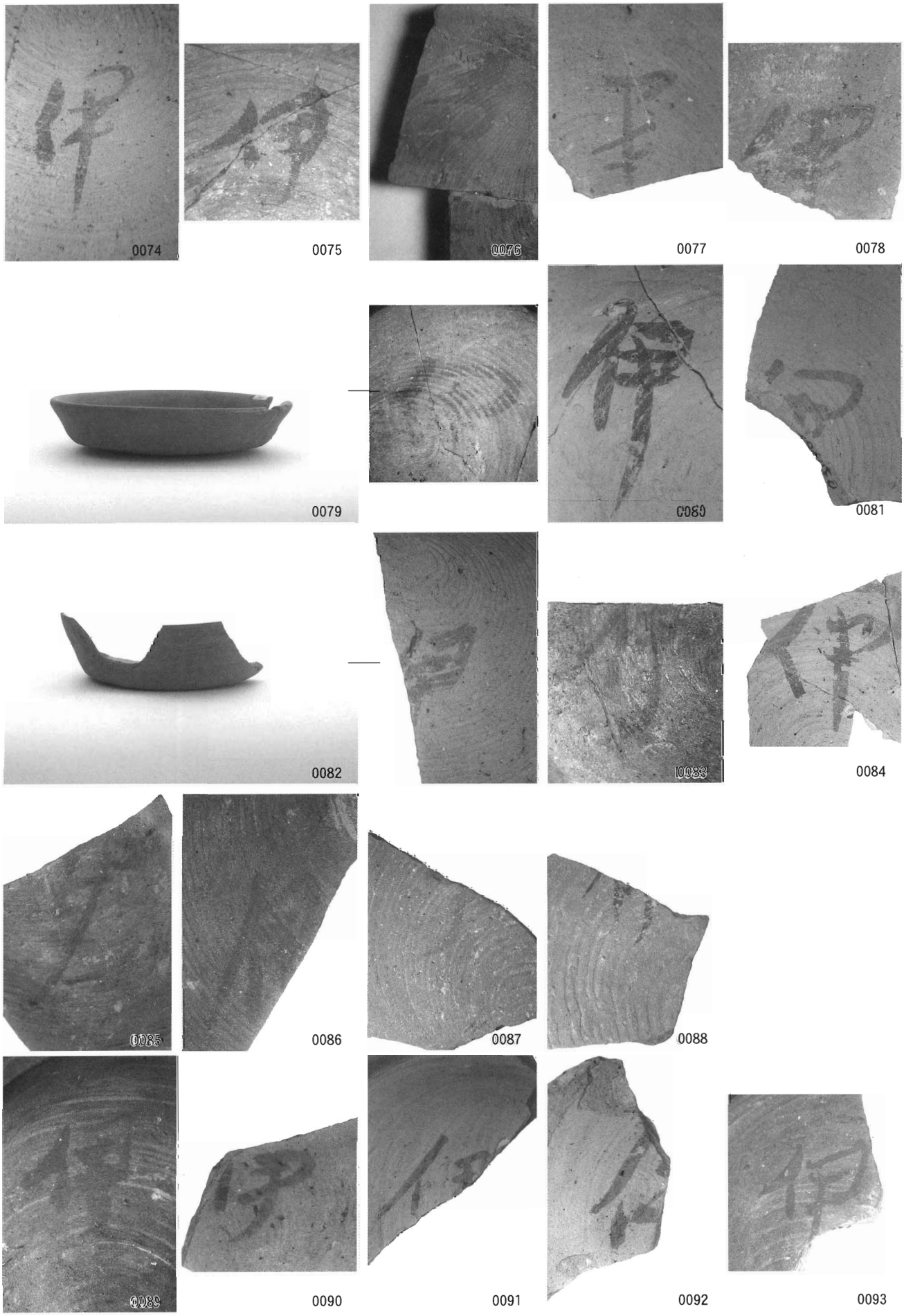
Ⅰ区「伊」

墨書土器　赤外線写真図版 0057〜0073



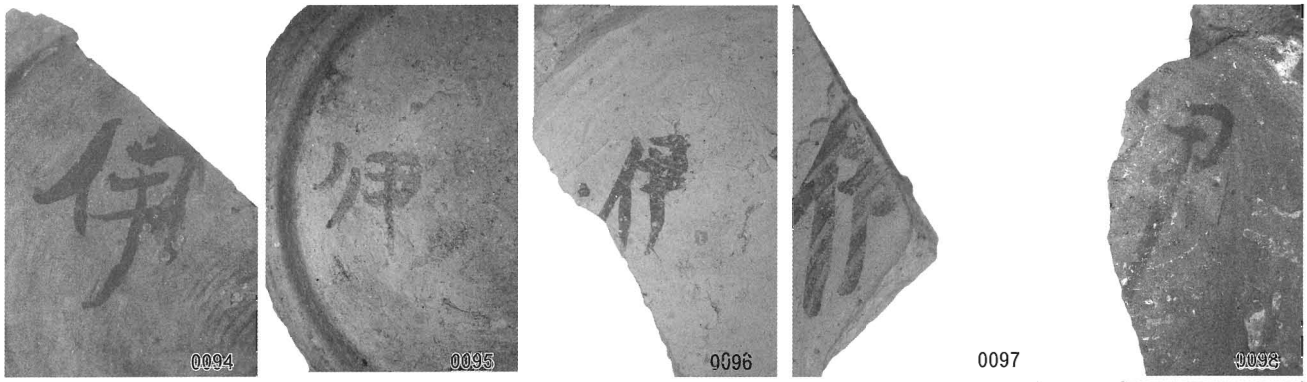
Ⅰ区「伊」

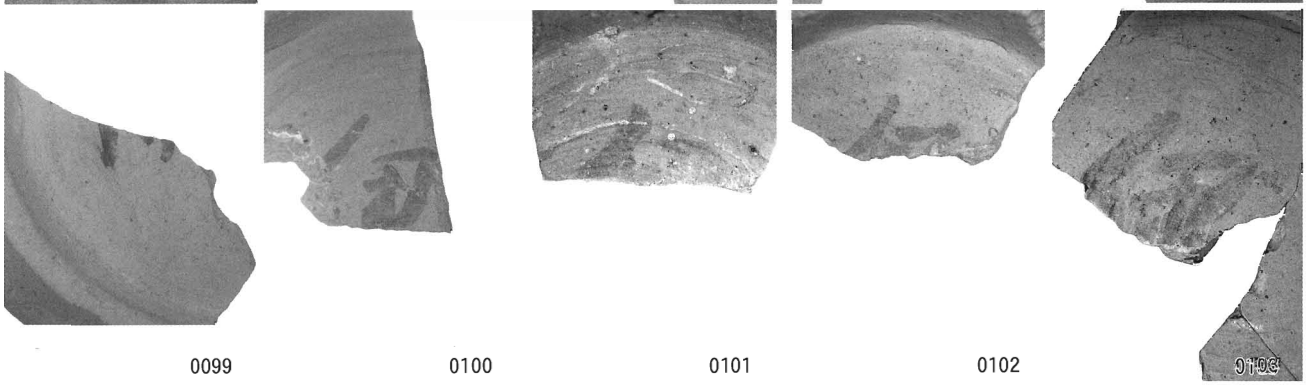
墨書土器　赤外線写真図版
0074
～
0093

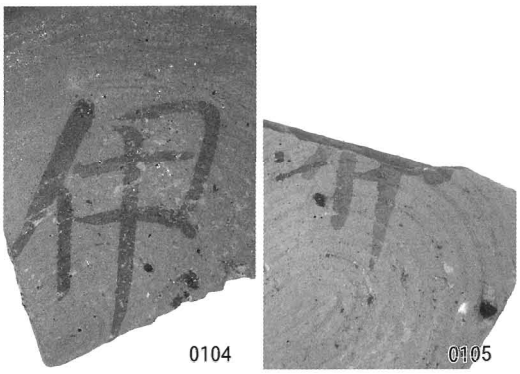


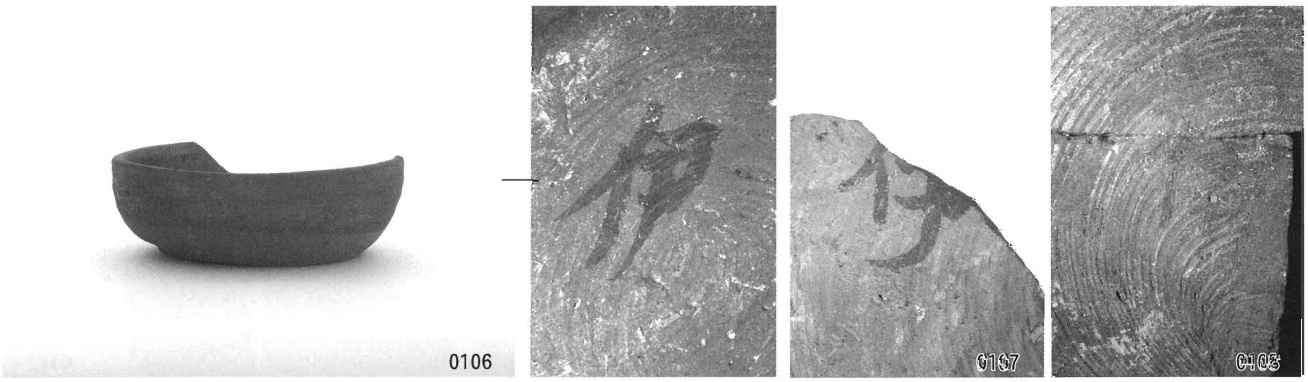
Ⅰ区「伊」

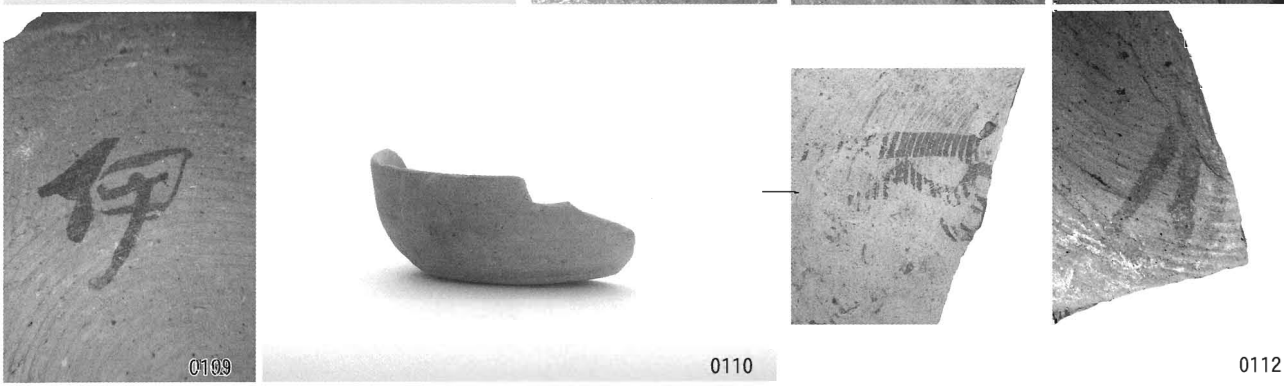
墨書土器　赤外線写真図版 0094～0112





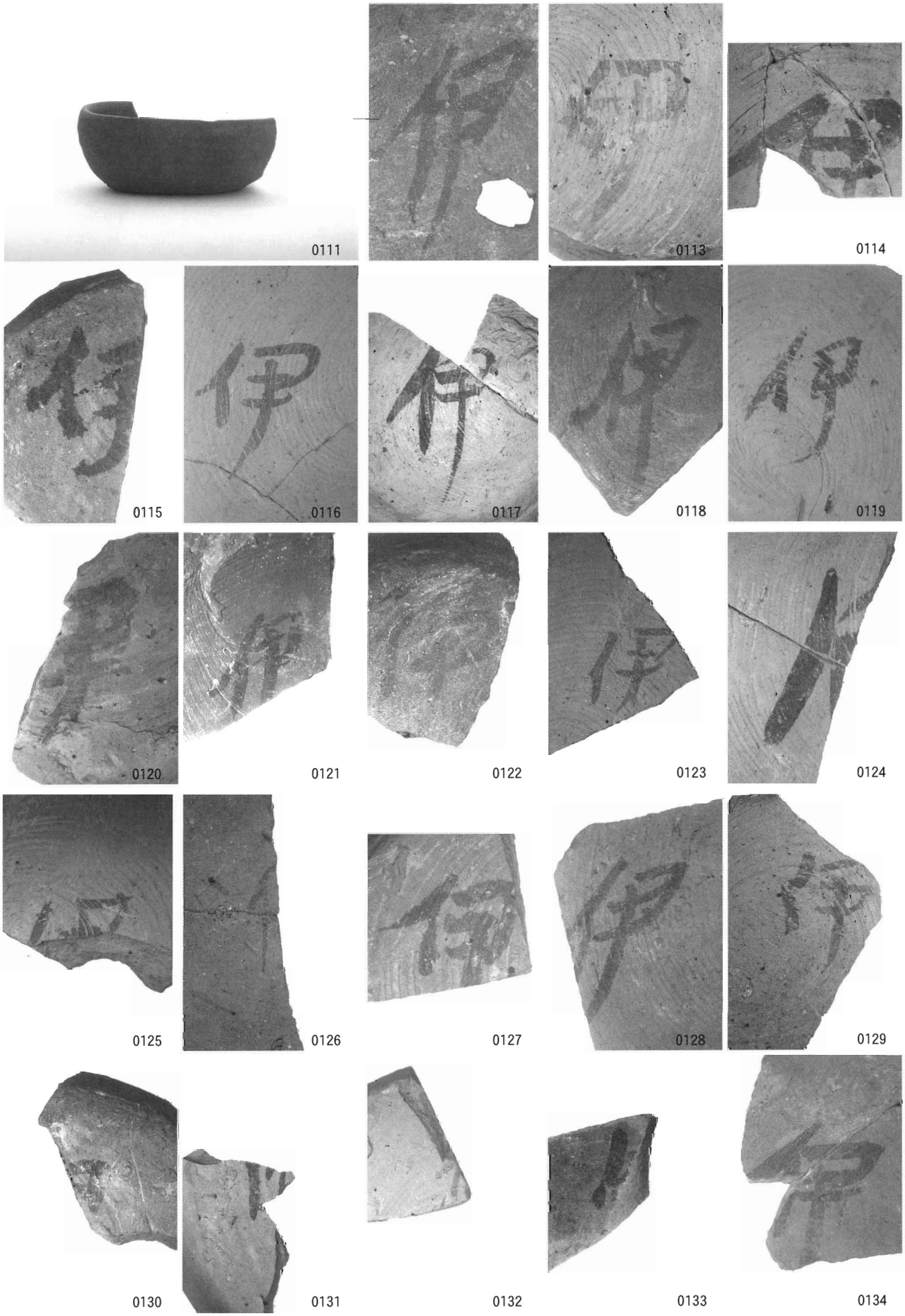






Ⅰ区「伊」

墨書土器　赤外線写真図版
0113～0134



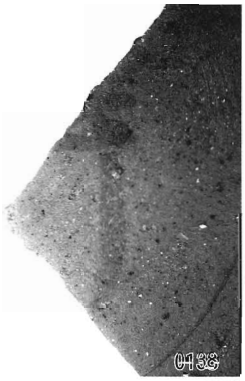
Ⅰ区「伊」

墨書土器　赤外線写真図版 0135～0159

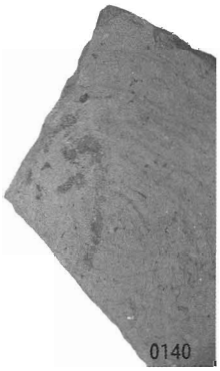
0135

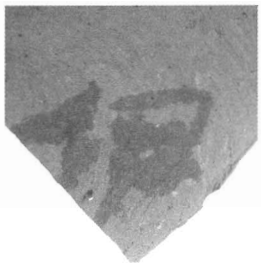
0136

0137


0138

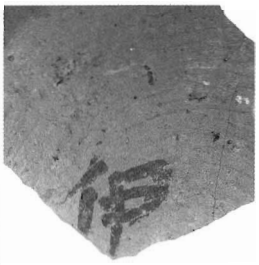
0139

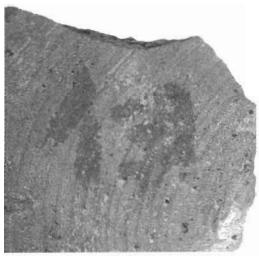

0140


0141

0142

0143


0144

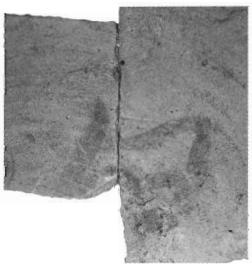

0145

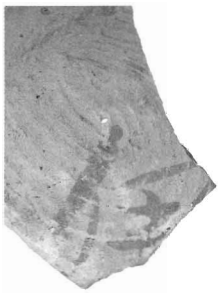
0146

0147

0148

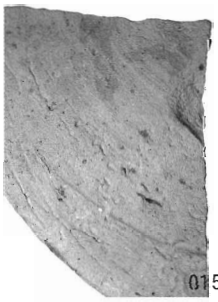
0149

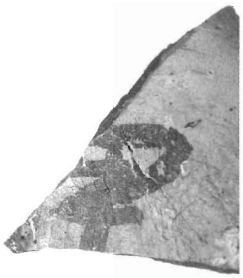

0150

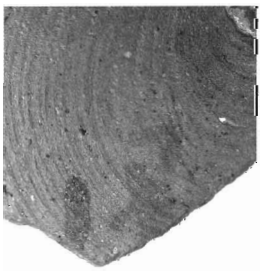

0151

0152

0153

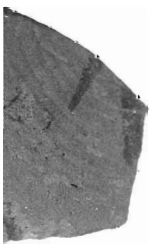

0154


0155


0156

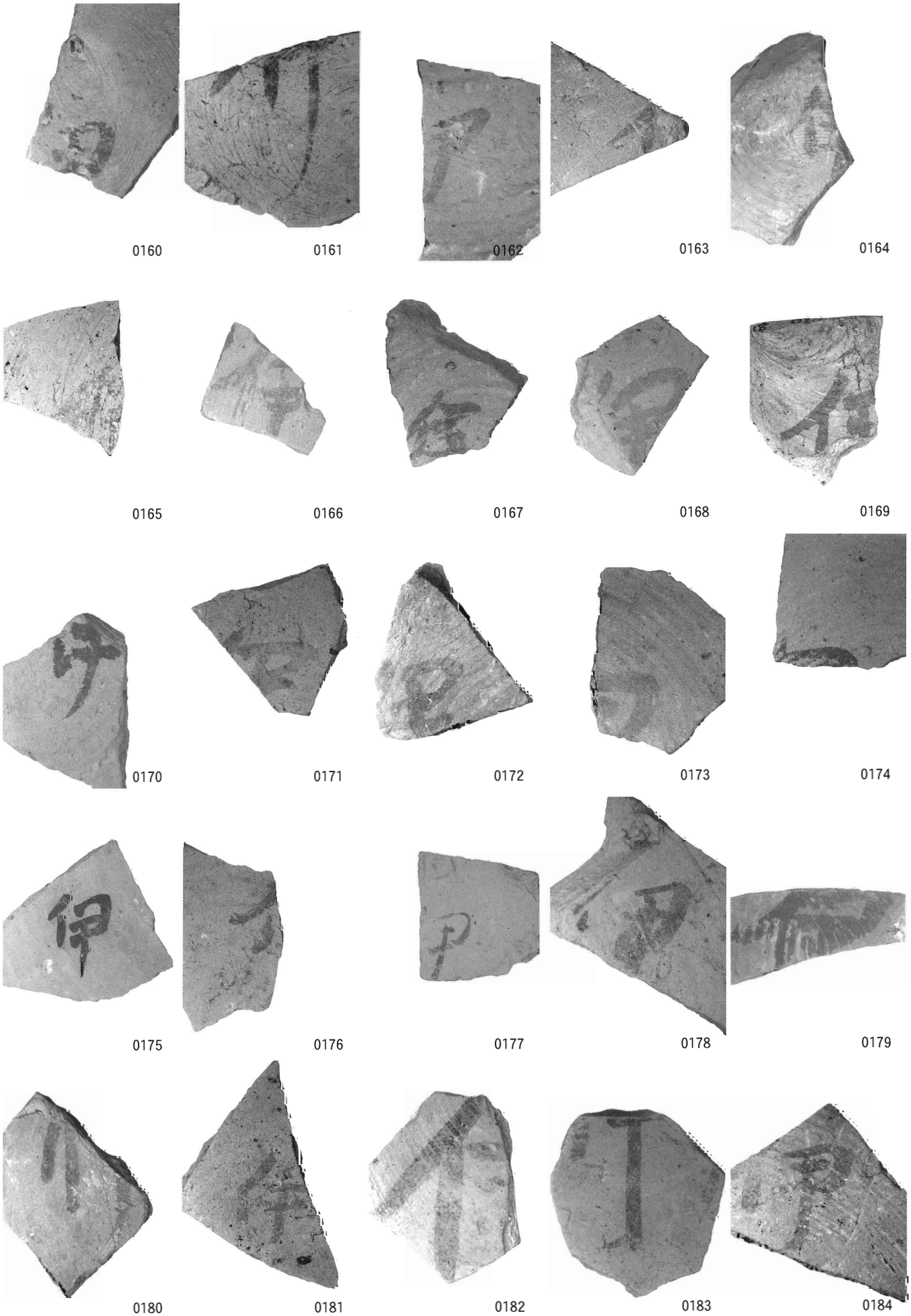
0157

0158


0159

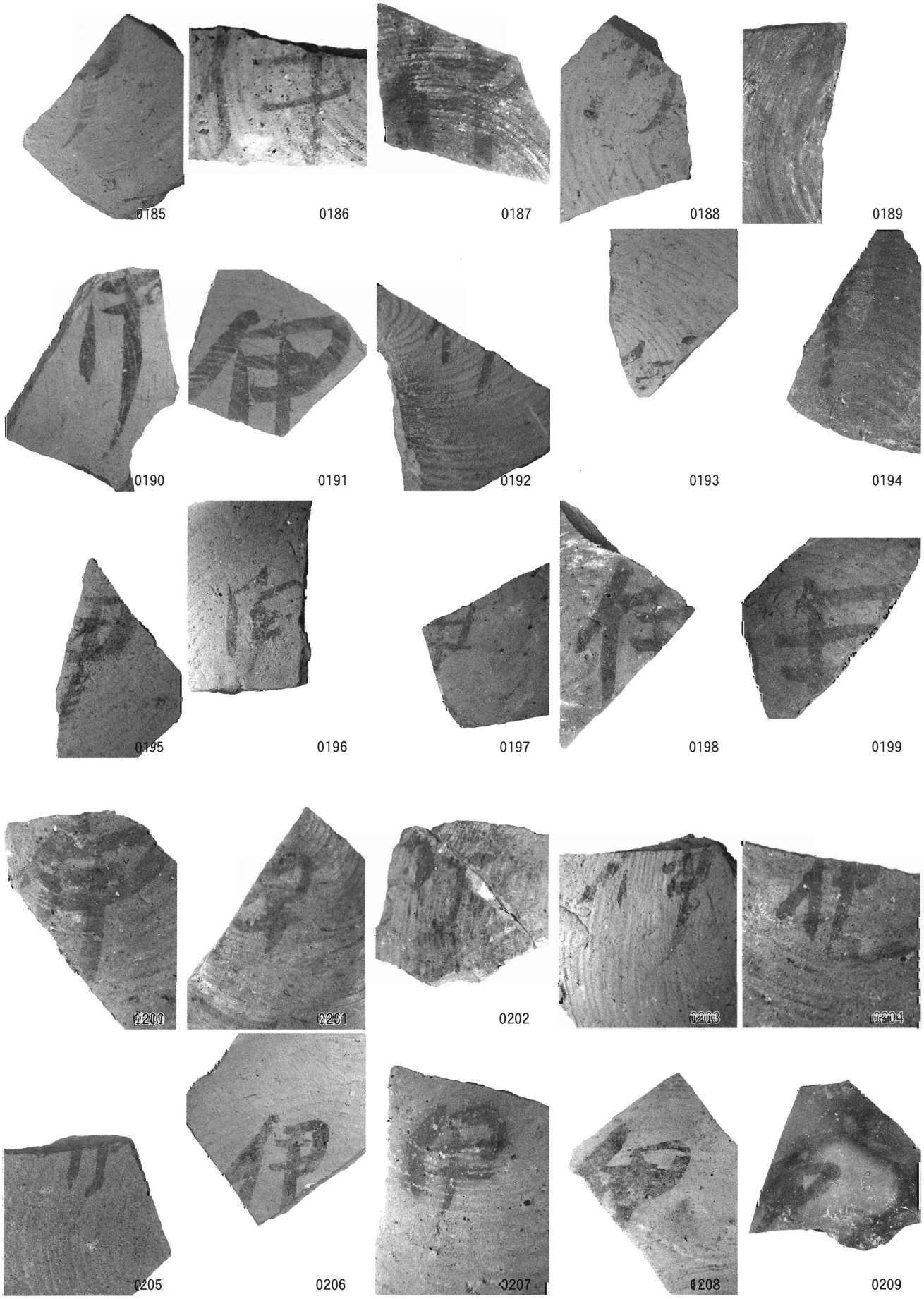
Ⅰ区「伊」

墨書土器　赤外線写真図版
0160～0184



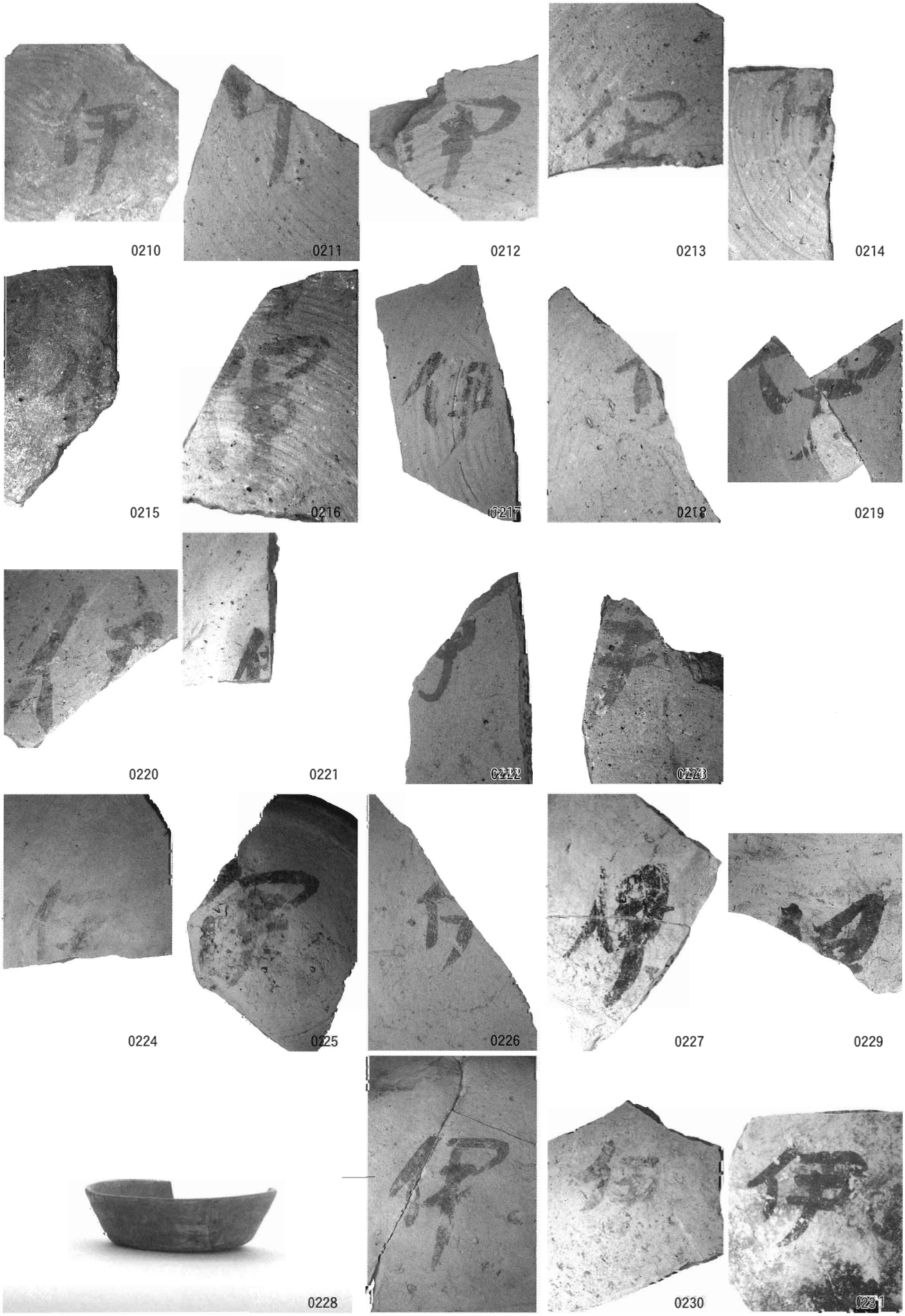
Ⅰ区「伊」

墨書土器　赤外線写真図版 0185～0209



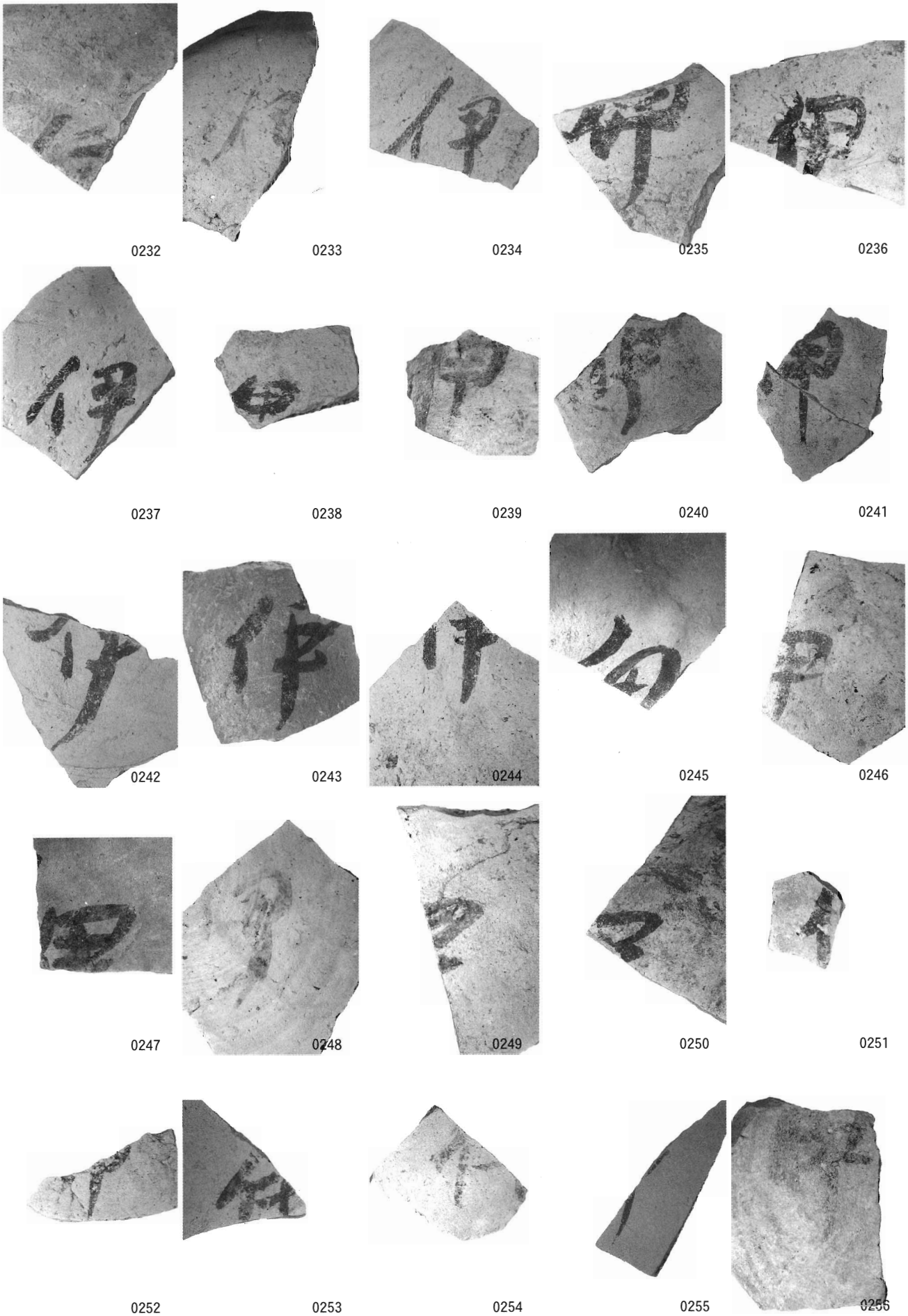
Ⅰ区「伊」

墨書土器　赤外線写真図版
0210～0231



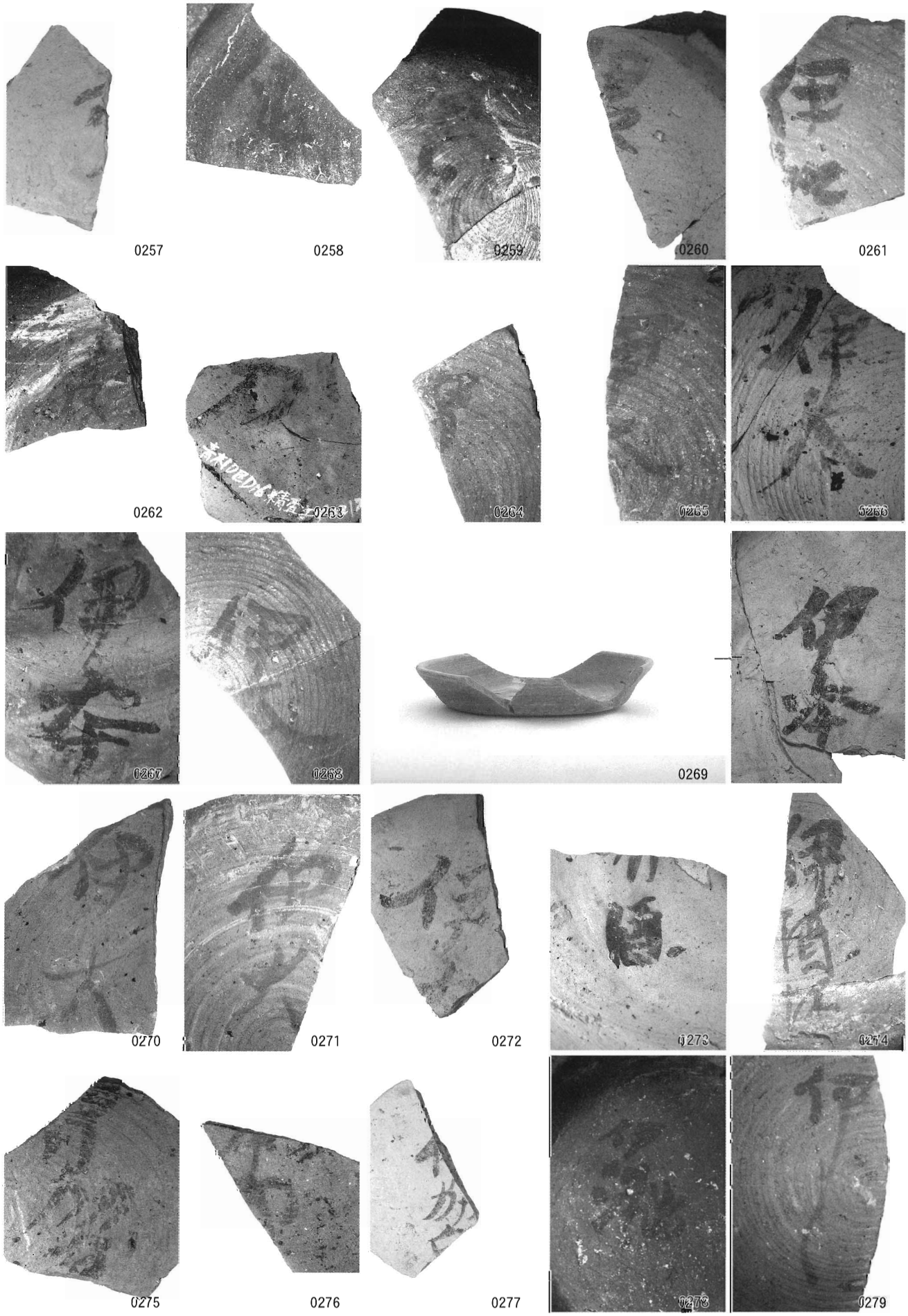
Ⅰ区「伊」

墨書土器　赤外線写真図版 0232〜0256



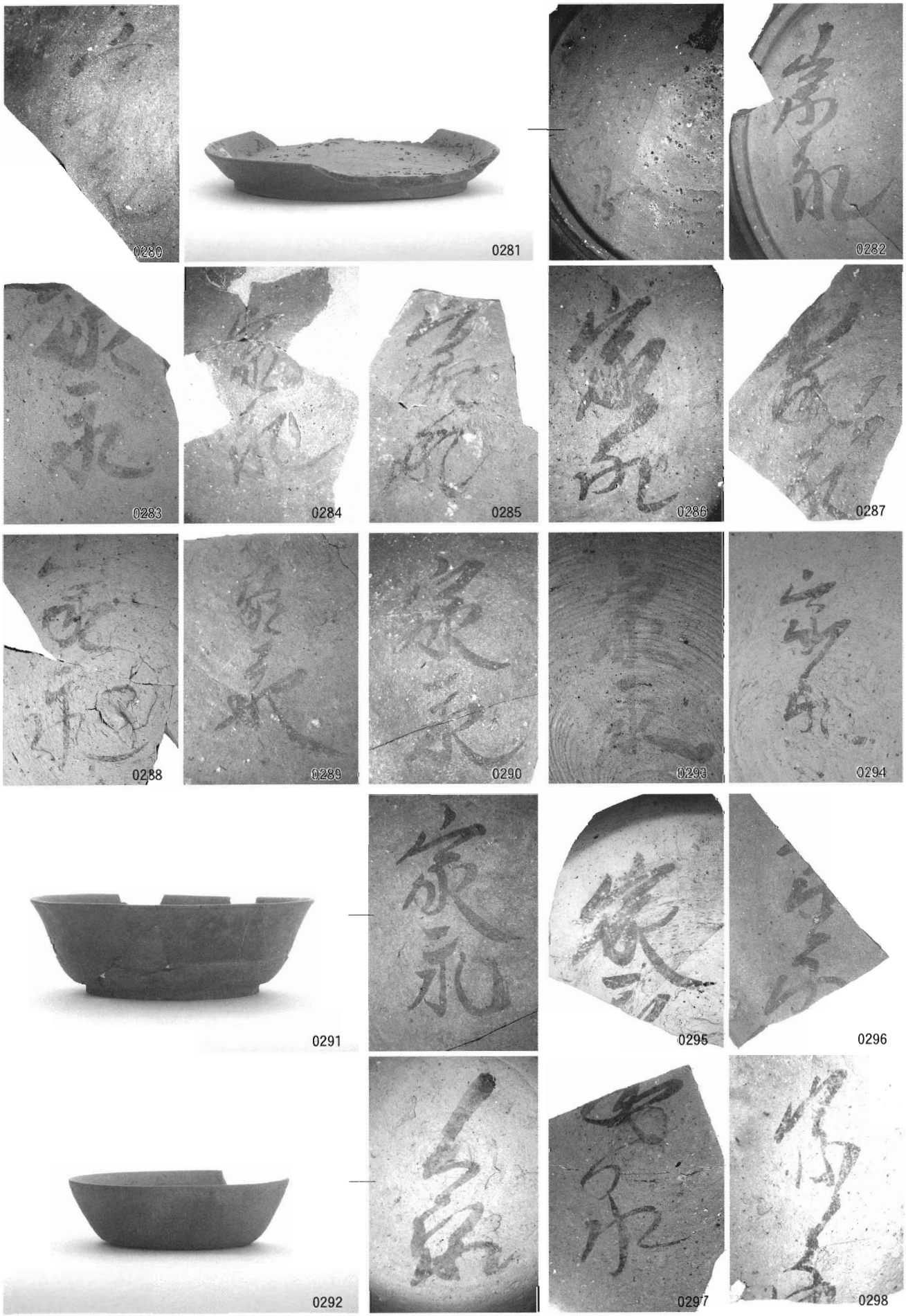
Ⅰ区「伊」

墨書土器　赤外線写真図版
0257
〜
0279



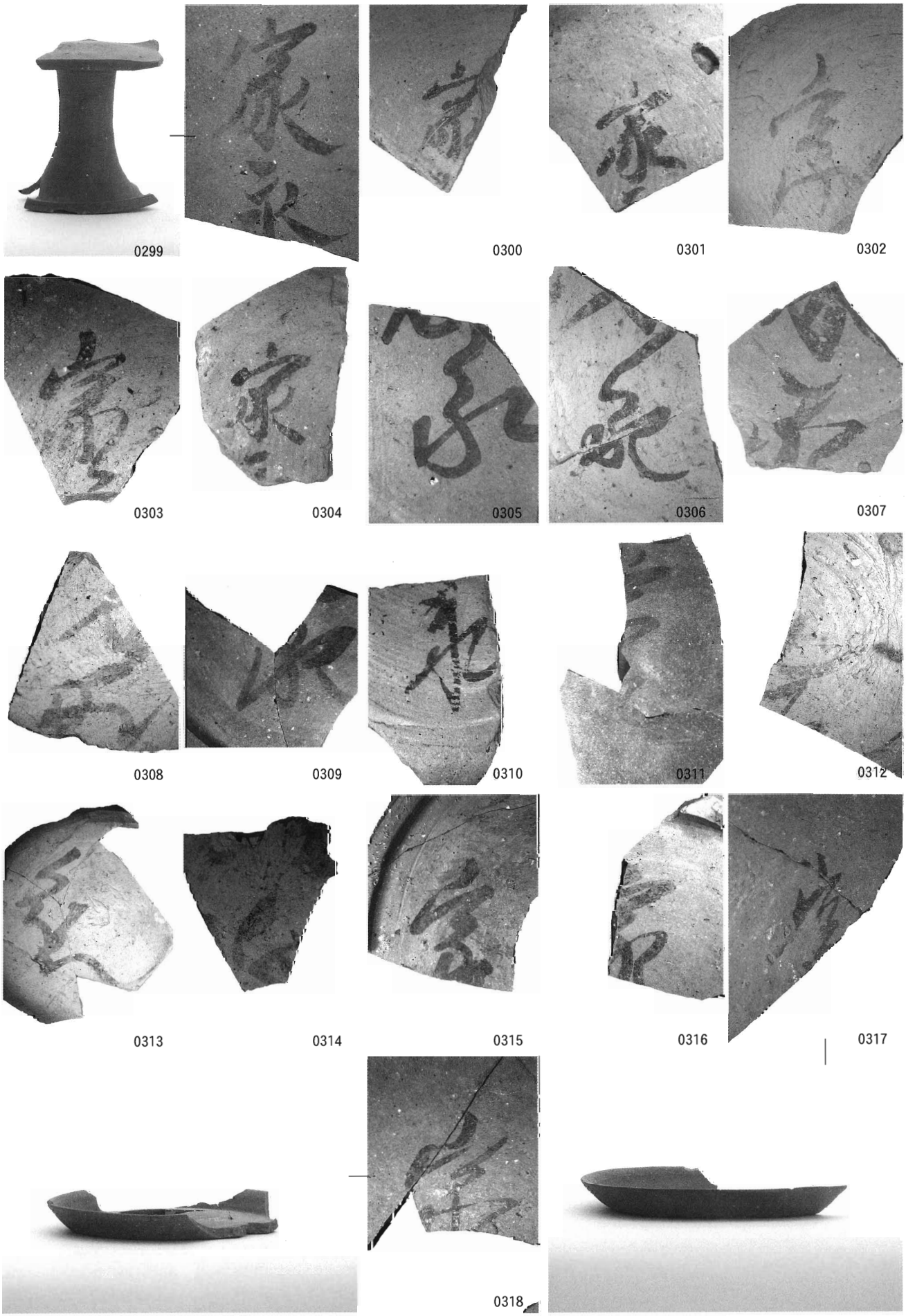
Ⅰ区「伊」

墨書土器　赤外線写真図版
0280～0298



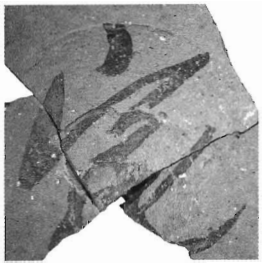
Ⅰ区「伊努」・「伊＋○」

墨書土器　赤外線写真図版 0299～0318



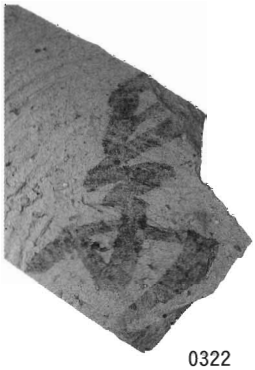
Ⅰ区「家永」

墨書土器　赤外線写真図版 0319～0343


0319

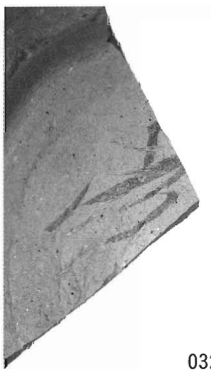
0320

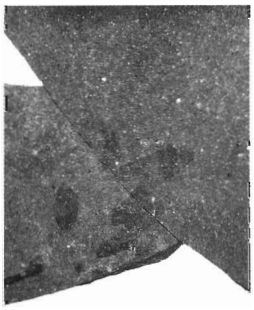
0321

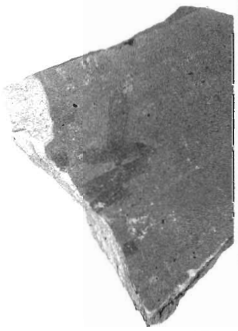

0322

0323

0324

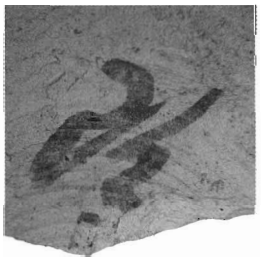

0325

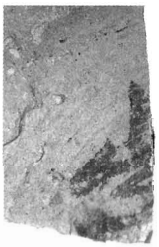

0326

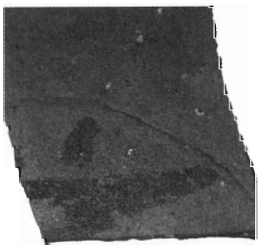

0327

0328

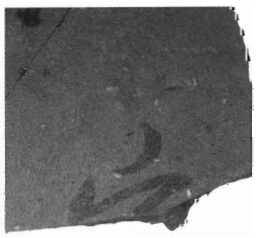
0329


0330

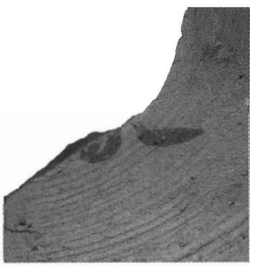

0331


0332

0333


0334

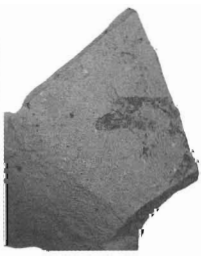
0335


0336

0337

0338

0339


0340

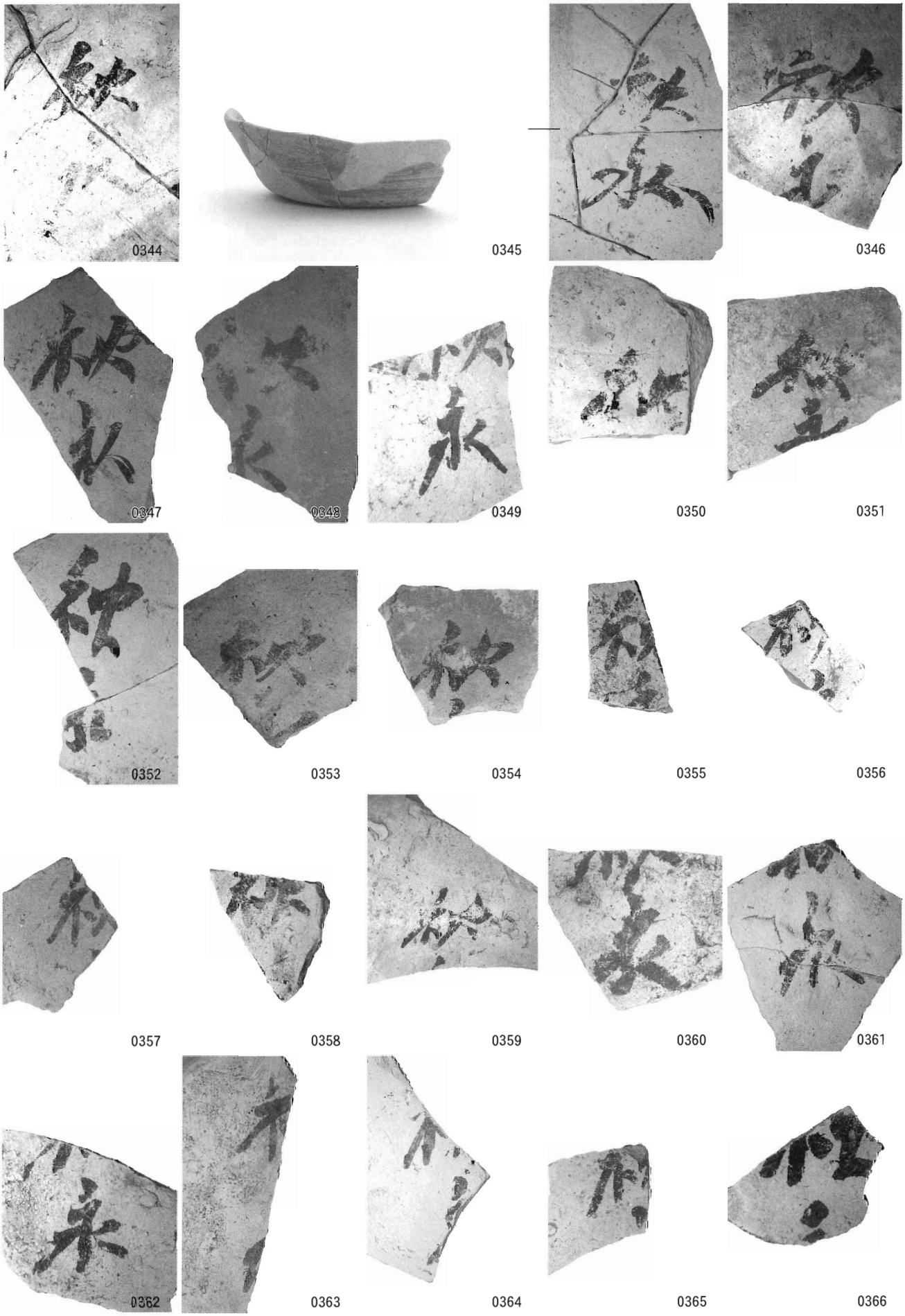
0341

0342

0343

Ⅰ区「家永」

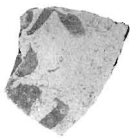
墨書土器　赤外線写真図版
0344～0366



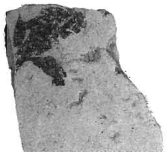
Ⅰ区「秋永」

墨書土器　赤外線写真図版 0367～0391

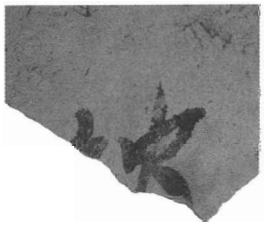
0367


0368

0369


0370

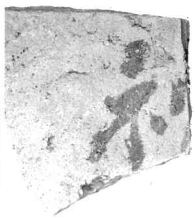
0371


0372

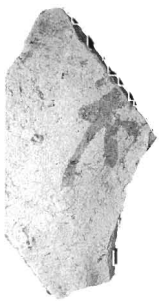
0373

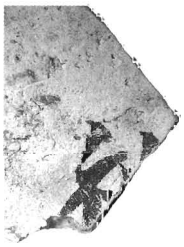
0374

0375


0376

0377


0378


0379

0380

0381

0382

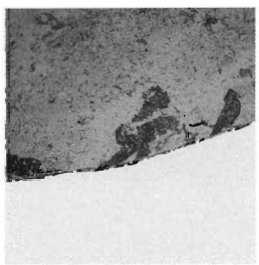
0383

0384

0385

0386

0387


0388

0389

0390

0391

Ⅰ区「秋永」